宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第166集

Fudenashi

筆　無　遺　跡

都城東環状線　今町工区　地域連携推進事業（地方道）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００８年

宮崎県埋蔵文化財センター

筆無遺跡遠景

遙か後方に霧島連山を望む。写真中央を左から右へ向かい北流する大淀川の流域には豊かな水田地帯が広がっている。

B区　１号土坑墓副葬品

B区　出土陶磁器（緑釉陶器・越州窯系青磁・白磁碗Ⅰ類）

序

宮崎県教育委員会では、都城東環状線　今町工区　地域連携推進事業に伴い都城土木事務所長の依頼を受け、平成15年度から同17年度の３か年度にわたり筆無遺跡の発掘調査を実施しました。

その結果、縄文時代後期から近世後半に至るまでの数多くの遺構や遺物を確認するに至り、この地において連綿として続いてきた人々の営みを垣間見ることができました。なかでも、平安時代末期から中世初頭の掘立柱建物跡や周溝墓等の遺構、「宋」等の文字が残る墨書土器、中国から輸入された白磁・青磁を中心とした貿易陶磁などの遺物の存在は、国内最大の規模を誇った荘園である島津荘が成立する前後の地域的様相を研究する上で貴重な資料を提供するものです。

また、現在の地形からは想像しがたい尾根や谷が複雑に入り込んだ旧地形を検出し、遺構等の配置がその地形的制約を受けていたことも明らかになりました。この事実は周辺地形等も考慮に入れながら、大淀川中流域の集落展開および土地利用の在り方を考え、往時の景観復元を試みる上でも有用な情報となるものです。

本書が学術資料として、あるいは学校教育や生涯学習の資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する認識や理解を深めるための一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた関係諸機関をはじめ、地元の皆様方に心より厚くお礼申し上げます。

平成20年２月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　清野　勉

例　　言

1　本書は、都城東環状線　今町工区　地域連携推進事業に伴う事前調査として、宮崎県教育委員会が実施した笔無遺跡の発掘調査報告書である。調査は、都城土木事務所の依頼を受け宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

2　調査は工事計画との関係で、調査区をＡ地点からＤ２地点に分けて３か年度にわたり実施した。
なお、各地点の調査期間は次のとおりである。

Ａ	区	平成15年11月15日 ～ 平成16年 3月25日	（Ａ地点）
Ｂ	区	平成16年 1月 7日 ～ 平成16年 3月25日	（Ｂ地点）
		平成16年 7月21日 ～ 平成16年12月22日	（Ｃ地点）
		平成16年 6月 7日 ～ 平成17年 2月25日	（Ｄ１地点）
		平成17年 6月13日 ～ 平成17年12月20日	（Ｄ２地点）

また、都城市遺跡詳細分布調査報告書の中では、Ａ地点からＤ２地点は総じて笔無遺跡となっているが、Ａ地点とＢ～Ｄ２地点は谷地形を挟んでその様相に相異が見られた。そこで、本報告書では都城市教育委員会の了承を得て、Ａ地点をＡ区、Ｂ～Ｄ２地点をＢ区として報告する。
なお、年次ごとの調査地点の区分については10頁の第３図を参照されたい。

3　本書で使用した位置図および地形図はそれぞれ次の地図を基に作成した。
周辺遺跡位置図　→　国土地理院発行の２万５千分の１図　『都城』・『山王原』
周辺地形図　→　都城土木事務所作成の５百分の１図

4　現地における遺構等の実測図の作成は、Ａ区を田中光、重留康宏が、Ｂ区を福田泰典、丹俊詞、柳田裕三、古屋美樹、岸田裕一、日高優子が担当し、甲斐貴充がこれを補助した。

5　空中写真撮影および自然科学分析は次の業者に委託した。
・空中写真撮影　㈱スカイサーベイ九州　　・自然科学分析　㈱古環境研究所

6　遺物・図面の整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、図面作成、遺物実測およびトレースを福田、丹、柳田が整理作業員の補助を得て行った。

7　本書の執筆は、縄文時代を柳田、弥生時代を丹、古代から近世を福田が担当し、編集は福田が行った。また、使用した写真については、Ａ区の現地における遺構等の写真は田中・重留が、Ｂ区については福田、丹、柳田、古屋、日高、岸田が撮影した。
なお、遺物写真については福田・柳田が撮影した。

8　調査に際しては国土座標第Ⅱ系（旧座標系）に準拠した10mグリッドを設定した。調査では、その座標杭にアルファベットと整数で名称を与え、それを基準として遺構等の図化作業を行った。また、本書中の座標値についても国土座標第Ⅱ系をそのまま使用した。

9　本書で使用した方位は座標北『G.N.』が主であるが、磁北を用いた場合には図中に『M.N.』と明記し区別した。
なお、笔無遺跡が位置する宮崎県都城市今町付近の磁針方位は西偏約5°20′、レベル(L)表示には海抜絶対高を使用した。

10　遺物観察表中の土器等の色調および土層注記内の土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の「新版　標準土色帖」に準拠した。

11　本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。
ＳＡ：竪穴住居跡　　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＣ：土坑　　ＳＤ：土坑墓
ＳＥ：溝状遺構　　ＳＧ：道状遺構　　ＳＬ：周溝状遺構　　ＳＭ：周溝墓

12　貿易陶磁の分類は、「大宰府条坊跡ⅩⅤ　陶磁器分類編」（太宰府市教育委員会 2000）に準拠した。

13　笔無遺跡Ａ区・Ｂ区に関する遺物および実測図等は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに
第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　調査の組織 …… 1

第Ⅱ章　筆無遺跡の調査
第1節　遺跡の位置と環境 …… 3
第2節　調査の経過 …… 11
第3節　基本層序 …… 15

第Ⅲ章　A区の調査
第1節　縄文時代の遺物 …… 17
第2節　古代から中世の遺構と遺物 …… 29
1　遺構 …… 30
土坑墓 …… 30
道状遺構 …… 31
畝状遺構 …… 31
2　遺物 …… 34

第Ⅳ章　B区の調査
序　説　B区の地形的概要 …… 45
第1節　縄文時代の遺構と遺物 …… 46
1　遺構 …… 46
土坑 …… 46
2　遺物 …… 47
第2節　弥生時代の遺構と遺物 …… 64
1　遺構 …… 64
竪穴住居跡 …… 64
土坑 …… 68
2　遺物 …… 68
第3節　古代から中世の遺構と遺物 …… 73
1　遺構 …… 73
掘立柱建物跡 …… 73
溝状遺構 …… 80
道状遺構 …… 87
周溝墓 …… 88
周溝状遺構 …… 91
土坑墓 …… 92
土坑 …… 94
2　遺物 …… 97
第4節　近世の遺構と遺物 …… 136
1　遺構 …… 136
掘立柱建物跡 …… 136
溝状遺構 …… 139
土坑 …… 140
2　遺物 …… 146

第Ⅴ章　自然科学分析 …… 161
第1節　土器圧痕について …… 161
第2節　筆無遺跡B区におけるテフラおよび植物遺存体分析 …… 164

第Ⅵ章　まとめ …… 181
図版 …… 193
報告書抄録 …… 229

挿 図 目 次

第Ⅱ章　調査の概要

第１図　筆無遺跡および周辺遺跡位置図（S=1/25000）…… 8
第２図　周辺地形図（S=1/2000）…… 9
第３図　A区・B区グリッド配置図（上段：A区 S=1/800、下段：B区 S=1/1500、1grid=10m×10m）…… 10
第４図　B区土層堆積状況（E11 grid 北壁、S=1/30）…… 15

第Ⅲ章　A区の調査

第１図　A区包含層出土遺物実測図１（縄文土器、S=1/3、炭化物付着状況：S=1/6）…… 20
第２図　A区包含層出土遺物実測図２（縄文土器、S=1/3）…… 21
第３図　A区包含層出土遺物実測図３（縄文土器、S=1/3、炭化物付着状況：S=1/6）…… 22
第４図　A区包含層出土遺物実測図４（縄文土器、S=1/3、炭化物付着状況：S=1/6）…… 23
第５図　A区包含層出土遺物実測図５（縄文土器、S=1/3、炭化物付着状況：S=1/6）…… 24
第６図　A区包含層出土遺物実測図６（石器、S=1/2）…… 25
第７図　A区包含層出土遺物実測図７（石器、S=1/2）…… 26
第８図　A区石器組成…… 26
第９図　A区使用石材組成…… 26
第10図　A区遺構分布図（第Ⅴ層上面、S=1/400）…… 27
第11図　A区遺構分布図（古代・中世、S=1/400、等高線は第Ⅳ層上面）…… 29
第12図　A区１号土坑墓（SD1、S=1/20）及び遺構内出土遺物（S=1/3）…… 30
第13図　A区１号道状遺構出土遺物（S=1/3）…… 31
第14図　A区畝状遺構実測図（中世、S=1/400）…… 33
第15図　A区遺物分布図（部分、古代・中世、S=1/400）…… 34
第16図　A区包含層出土遺物実測図８（土師皿・坏・高台付塊、S=1/3）…… 37
第17図　A区包含層出土遺物実測図９（黒色土器・墨書土器・鉢・甕、S=1/3）…… 38
第18図　A区包含層出土遺物実測図10（土師器甕・須恵器・青磁、S=1/3、金属製品、S=1/2）…… 39

第Ⅳ章　B区の調査

第１図　B区遺構分布図（第Ⅳ層上面、S=1/600）…… 41
第２図　B区遺物分布図（S=1/600）…… 43
第３図　B区１～３号土坑実測図（縄文、SC1：S=1/20、SC2・SC3：S=1/40）…… 46
第４図　B区１号土坑出土遺物実測図（縄文土器・石器、S=1/3）…… 47
第５図　B区包含層出土遺物実測図１（縄文土器、S=1/3）…… 50
第６図　B区包含層出土遺物実測図２（縄文土器、S=1/3）…… 51
第７図　B区包含層出土遺物実測図３（縄文土器、S=1/3）…… 52
第８図　B区包含層出土遺物実測図４（縄文土器、S=1/3）…… 53
第９図　B区包含層出土遺物実測図５（縄文土器、S=1/3）…… 54
第10図　B区石器の器種別構成比較…… 56
第11図　B区使用石材比較…… 56
第12図　B区包含層出土遺物実測図６（石器、S=2/3）…… 59
第13図　B区包含層出土遺物実測図７（石器、S=2/3、101はS=1/2）…… 60
第14図　B区包含層出土遺物実測図８（石器、109～111はS=1/2、112・113はS=2/3）…… 61
第15図　B区包含層出土遺物実測図９（石器、114・115はS=1/2、116～125はS=1/3）…… 62
第16図　B区包含層出土遺物実測図10（石器、S=1/3）…… 63
第17図　B区１号竪穴住居跡実測図（弥生、S=1/60）…… 64
第18図　B区１号竪穴住居跡出土遺物実測図（弥生土器、S=1/3、石器、S=1/2）…… 65
第19図　B区２号竪穴住居跡実測図（弥生、S=1/60）…… 66
第20図　B区３号竪穴住居跡実測図（弥生、S=1/60）…… 67
第21図　B区３号竪穴住居跡出土遺物実測図（弥生土器、S=1/3）…… 67
第22図　B区１号土坑実測図（弥生、S=1/20）…… 68
第23図　B区包含層出土遺物実測図11（弥生土器、S=1/3）…… 69
第24図　B区包含層出土遺物実測図12（弥生土器、S=1/3）…… 70
第25図　B区包含層出土遺物13（弥生土器、S=1/3）…… 71
第26図　B区包含層出土遺物実測図14（弥生土器、S=1/3）…… 72
第27図　B区古代・中世主要遺構分布図（部分、S=1/400）…… 75
第28図　B区１号掘立柱建物跡実測図（中世、S=1/80、柱穴埋土状況断面図はS=1/40）…… 76
第29図　B区２号掘立柱建物跡実測図（中世、S=1/80）…… 77
第30図　B区３号掘立柱建物跡実測図（中世、S=1/80）…… 78
第31図　B区４号・５号掘立柱建物跡実測図（４号：中世、５号：古代、S=1/80）…… 79
第32図　B区４号溝状遺構実測図（部分、S=1/40）…… 81
第33図　B区溝状遺構埋土状況実測図（古代・中世、S=1/40）…… 83
第34図　B区２号溝状遺構出土遺物実測図１（古代、S=1/3、183～185はS=1/5）…… 84
第35図　B区２号溝状遺構出土遺物実測図２（古代、186はS=1/5、187～192は1/3）…… 85
第36図　B区４号溝状遺構出土遺物実測図（古代、S=1/3、206～208はS=1/5）…… 86
第37図　B区１号・２号道状遺構実測図（古代・中世、S=1/30）…… 87
第38図　B区１号周溝墓実測図（古代、S=1/40）…… 88
第39図　B区２号周溝墓実測図（古代、S=1/40）…… 89
第40図　B区３号周溝墓実測図（古代、S=1/40）…… 90
第41図　B区周溝墓出土遺物実測図（SM1：214、SM3：215・216、古代、S=1/3）…… 91

第42図　B区１号周溝状遺構実測図（古代、S=1/40）……91
第43図　B区１号土坑墓（S=1/20）及び遺構内出土遺物実測図（217～219はS=1/3、220・221はS=1/2、中世）……93
第44図　B区土坑実測図（SC７・26・27・29・30・41・51・56・57、古代・中世、S=1/30）……95
第45図　B区土坑内出土遺物実測図（古代・中世、S=１/3）……96
第46図　B区古代・中世の主要遺物分布状況１（部分、S=1/200、1grid⇒10m×10m）……98
第47図　B区古代・中世の主要遺物分布状況２（部分、S=1/200、1grid⇒10m×10m）……99
第48図　B区古代・中世の主要遺物分布状況３（部分、S=1/200、1grid⇒10m×10m）……100
第49図　B区古代・中世の主要遺物分布状況４（部分、S=1/200、1grid⇒10m×10m）……101
第50図　B区主要遺構・遺物分布図（部分、古代・中世、S=1/400）……102
第51図　B区包含層出土遺物実測図15（古代・中世、S=1/3）……104
第52図　B区包含層出土遺物実測図16（古代・中世、S=1/3）……105
第53図　B区包含層出土遺物実測図17（古代・中世、S=1/3）……106
第54図　B区包含層出土遺物実測図18（古代・中世、S=1/3）……107
第55図　B区包含層出土遺物実測図19（古代・中世、S=1/3）……108
第56図　B区包含層出土遺物実測図20（古代・中世、S=1/3）……110
第57図　B区包含層出土遺物実測図21（古代・中世、S=1/3）……111
第58図　B区包含層出土遺物実測図22（古代・中世、S=1/3）……112
第59図　B区包含層出土遺物実測図23（古代・中世、S=1/3）……113
第60図　B区包含層出土遺物実測図24（古代・中世、S=1/3）……114
第61図　B区包含層出土遺物実測図25（古代・中世、S=1/3）……116
第62図　B区包含層出土遺物実測図26（古代・中世、S=1/3）……117
第63図　B区包含層出土遺物実測図27（古代・中世、S=1/3）……118
第64図　B区包含層出土遺物実測図28（古代・中世、S=1/3）……120
第65図　B区包含層出土遺物実測図29（古代・中世、S=1/3）……121
第66図　B区包含層出土遺物実測図30（古代・中世、S=1/3）……122
第67図　B区包含層出土遺物実測図31（古代・中世、S=1/3）……123
第68図　B区包含層出土遺物実測図32（古代・中世、S=1/3）……126
第69図　B区包含層出土遺物実測図33（古代・中世、S=1/3）……128
第70図　B区包含層出土遺物実測図34（古代・中世、S=1/3）……129
第71図　B区包含層出土遺物実測図35（中世、S=1/3）……131
第72図　B区包含層出土遺物実測図36（古代・中世、S=1/3）……131
第73図　B区包含層出土遺物実測図37（石製錘具・滑石製品、古代・中世、S=1/3）……134
第74図　B区包含層出土遺物実測図38（砥石・刀子、古代・中世、S=1/3）……135
第75図　B区近世遺構分布図（S=1/250）……137
第76図　B区１号掘立柱建物跡実測図（近世、S=1/80）……138
第77図　B区２号掘立柱建物跡実測図（近世、S=1/80）……139
第78図　B区１号・２号溝状遺構埋土状況実測図（近世、S=1/40）……140
第79図　B区１号・２号土坑跡実測図（近世、S=1/80）……142
第80図　B区３号・４号土坑実測図（近世、S=1/80）……143
第81図　B区土坑内出土遺物実測図（近世、690～693はS=1/3、694～701はS=1/6）……144
第82図　B区土坑実測図（近世、SC5はS=1/20、SC6～8はS=1/30、702はS=1/6）……145
第83図　B区包含層出土遺物実測図39（近世、S=1/3）……148
第84図　B区包含層出土遺物実測図40（近世、S=1/3）……149
第85図　B区包含層出土遺物実測図41（近世、S=1/3、742～744はS=2/3）……150

第Ⅵ章　まとめ
第１図　B区４号溝状遺構想定復元図（部分）……184
第２図　松原地区第Ⅳ遺跡の土坑（SC4）……186
第３図　皿・坏の法量分布図……188
第４図　八児遺跡の石鍋（S=1/6）……190

挿表目次

第Ⅲ章　A区の調査
第１表　A区縄文土器観察表……28
第２表　A区石器計測表……28
第３表　A区器種別使用石材構成……28
第４表　A区遺物観察表（古代・中世）……40

第Ⅳ章　B区の調査
第１表　B区１号土坑出土遺物観察表（縄文土器）……47
第２表　B区縄文土器観察表１……55
第３表　B区縄文土器観察表２……56
第４表　B区石器計測表……56
第５表　B区石器の器種・石材構成表……58
第６表　B区掘立柱建物跡計測値一覧（古代・中世）……74
第７表　B区周溝墓測定値一覧（古代）……89
第８表　B区土坑計測値一覧（古代・中世）……94
第９表　B区包含層出土土製品計測表……131

第10表　B区滑石製石鍋計測値一覧……133
第11表　B区滑石製石鍋二次加工品計測値一覧……133
第12表　B区砥石計測値一覧……133
第13表　B区掘立柱建物跡計測値一覧（近世）……136
第14表　B区砥石計測値一覧（近世）……147
第15表　B区火打石計測値一覧（近世）……147
第16表　B区遺物観察表（弥生：弥生土器・石器）……151
第17表　B区遺物観察表（古代・中世 1/8）……152
第18表　B区遺物観察表（古代・中世 2/8）……153
第19表　B区遺物観察表（古代・中世 3/8）……154
第20表　B区遺物観察表（古代・中世 4/8）……155
第21表　B区遺物観察表（古代・中世 5/8）……156
第22表　B区遺物観察表（古代・中世 6/8）……157
第23表　B区遺物観察表（古代・中世 7/8）……158
第24表　B区遺物観察表（古代・中世 8/8）……159
第25表　B区遺物観察表（近世）……160

第Ⅴ章　自然科学分析
第１表　土器圧痕探査の作業記録……161
第２表　土器圧痕観察表……161

第Ⅵ章　まとめ
第１表　宮崎県内で確認された周溝墓一覧……185

図　版　目　次

巻頭図版１
筆無遺跡遠景（霧島連山を望む）
巻頭図版２
B区１号土坑墓副葬品
B区出土陶磁器（緑釉陶器・越州窯系青磁・白磁碗Ⅰ類）
第Ⅲ章　A区の調査
畝状遺構検出状況……32
第Ⅳ章　B区の調査
布が付着した刀子……92
付着した布の拡大写真……92
第Ⅴ章　自然科学分析
土器圧痕拡大写真１……162
土器圧痕拡大写真２……163
図版１……193
筆無遺跡遠景（都城市安久方面を望む）
図版２……194
A区
B区（B地点）
B区（C地点）
図版３……195
B区（D１地点、北半分）
B区（D１地点、南半分）
B区（D２地点）
図版４……196
A区１号道状遺構完掘状況（古代）
A区１号土坑墓（古代）
A区畝状遺構断面（中世）
B区遺構検出状況（C地点西半分丘陵部）
図版５……197
B区１号土坑遺物出土状況（縄文）
B区３号土坑完掘状況（縄文）
B区１～３号竪穴住居跡分布状況（弥生、D１地点北半分）
図版６……198
B区１号・２号竪穴住居跡完掘状況（弥生、D１地点北半分、左：１号、右：２号）
B区３号竪穴住居跡遺物出土状況（弥生、D１地点北半分）
B区遺物出土状況（SA1、遺物番号134）
B区１号土坑遺物出土状況（弥生、遺物番号135）
図版７……199
B区ピット集中区（古代・中世、B地点）
B区２号溝状遺構遠景（古代、D１地点、部分）
B区４号溝状遺構（中世、B地点、部分）
図版８……200
B区２号溝状遺構（古代、完掘状況、B地点）

B区２号溝状遺構埋土堆積状況（古代、Ｄ１地点）
B区４号溝状遺構出入口想定部分（中世、Ｂ地点）
B区３号溝状遺構と１号道状遺構（古代、Ｄ１地点、部分）
B区２号道状遺構（中世、Ｄ２地点）
図版９ 201
B区１号周溝墓完掘状況（古代・Ｃ地点）
B区２号周溝墓完掘状況（古代・Ｂ地点）
B区３号周溝墓完掘状況（古代・Ｄ１地点）
B区１号周溝墓出土遺物（土師器甕）
B区３号周溝墓の中央土壙内遺物出土状況（完掘状況）
B区３号周溝墓の中央土壙内遺物出土状況（出土状況近影）
B区１号周溝状遺構（古代、Ｃ地点）検出状況
B区１号周溝状遺構（古代、Ｃ地点）完掘状況
図版10 202
B区１号土坑墓（中世、Ｄ１地点）完掘状況
B区１号土坑墓（中世、Ｄ１地点）副葬品出土状況
B区湧水の状況（左写真の水際付近で流れ込みによる縄文土器が集中して出土、Ｄ２地点）
B区土層堆積状況（Ｄ２地点、上段右の写真の中央土層観察ベルト）
図版11 203
B区１号・２号溝状遺構埋土堆積状況（近世、Ｄ１地点）
B区１号土坑完掘状況（近世、Ｄ１地点）
B区２号土坑完掘状況（近世、Ｄ１地点）
図版12 204
B区３号・４号土坑完掘状況（近世、Ｄ１地点、手前：４号、奥：３号）
B区３号土坑床面検出状況（近世、Ｄ１地点）
B区３号土坑床面検出状況（近世、Ｄ１地点
B区５号土坑茶臼出土状況（近世、Ｄ１地点）
B区８号土坑白色粘土充填状況（近世、Ｄ１地点）
図版13 205
A区縄文土器１類～４類
A区縄文土器５類
A区縄文土器６類
A区縄文土器７類～９類
A区縄文土器４類・６類・10類
A区石鏃・スクレイパー・剥片
図版14 206
A区石斧・石錘・敲石・磨石
B区ＳＣ１出土遺物
B区縄文土器１類～３類
B区縄文土器３類～６類
B区縄文土器５類（底部）
B区縄文土器７類～12類
図版15 207
B区縄文土器５類・９類・12類
B区石鏃・石匙・スクレイパー・楔形石器
B区スクレイパー・剥片・石核
B区打製石斧・磨製石斧
B区敲石・磨石
B区磨石・石皿
図版16 208
A区１号土坑墓出土遺物（塊）
A区１号道状遺構出土遺物（63、高台付埦）、包含層出土遺物１（皿・坏）
A区包含層出土遺物２（高台付埦・黒色土器）
図版17 209
A区包含層出土遺物３（高台付埦・黒色土器・墨書土器）
A区包含層出土遺物４（土師器：鉢・甕）
A区包含層出土遺物５（土師器：鉢・甕）
図版18 210
A区包含層出土遺物６（須恵器・越州窯系青磁）
A区包含層出土遺物７（須恵器：高台付碗・坏・壺）
A区包含層出土遺物８（刀子）
図版19 211
B区１号竪穴住居跡出土遺物
B区２号竪穴住居跡出土遺物
B区包含層出土遺物１（弥生土器：甕）
図版20 212
B区包含層出土遺物２（弥生土器：甕）
B区包含層出土遺物３（弥生土器：甕）
B区包含層出土遺物４（弥生土器：甕）
図版21 213
B区包含層出土遺物５（弥生土器：壺）

B区包含層出土遺物６（弥生土器：底部）
図版22……214
B区２号溝状遺構出土遺物
B区４号溝状遺構出土遺物
B区２・４号溝状遺構出土遺物
図版23……215
B区２号溝状遺構出土遺物（須恵器：甕）
B区周溝墓出土遺物（高台付埦・甕・鉢）
B区１号土坑墓副葬品（刀子；布付着）
B区１号土坑墓副葬品（刀子）
図版24……216
B区土坑内出土遺物
B区包含層出土遺物１（土師皿の内面）
B区包含層出土遺物２（土師皿の底部外面）
図版25……217
B区包含層出土遺物３（坏・埦・高台付埦）
図版26……218
B区包含層出土遺物４（土師埦の底部外面）
B区包含層出土遺物５（高台付埦）
B区包含層出土遺物６（埦・高台付埦）
図版27……219
B区包含層出土遺物７（高台付埦の底部外面）
B区包含層出土遺物８（黒色土器：内黒）
B区包含層出土遺物９（黒色土器：両黒）
図版28……220
B区包含層出土遺物10（黒色土器、外面、内面）
B区包含層出土遺物11（鍋・鉢）
B区包含層出土遺物12（甕・鉢・壺・布痕土器）
図版29……221
B区包含層出土遺物13（墨書土器）
B区包含層出土遺物14（墨書土器「宋」、坏）
B区包含層出土遺物15（墨書土器「宋」、坏）
図版30……222
B区包含層出土遺物16（須恵器：大甕）
B区包含層出土遺物17（須恵器：甕）
B区包含層出土遺物18（須恵器：横瓶）
図版31……223
B区包含層出土遺物19（須恵器：甕）
B区包含層出土遺物20（須恵器：壺）
B区包含層出土遺物21（須恵器：甕・壺・坏）
B区包含層出土遺物22（東播系須恵器）
B区包含層出土遺物23（緑釉・灰釉etc.）
図版32……224
B区包含層出土遺物24（白磁碗Ａ～Ｃ類）
B区包含層出土遺物25（白磁碗Ｄ～Ｉ類）
図版33……225
B区包含層出土遺物26（白磁皿・白磁合子）
B区包含層出土遺物27（青磁・青花）
図版34……226
B区包含層出土遺物28（石製錘具・滑石製品）
B区包含層出土遺物29（紡錘車・土錘）
B区包含層出土遺物30（砥石）
B区包含層出土遺物31（刀子）
図版35……227
B区近世の遺物１（甕・鉢・擂鉢・蓋）
B区近世の遺物２（碗・筒形碗・火入れ・皿）
図版36……228
B区近世の遺物４（碗・筒形碗・小坏・皿・鉢・擂鉢）
B区近世の遺物５（５号土坑出土、茶臼）
B区近世の遺物６（砥石・石盤・火打石）

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

都城土木事務所では、主要地方道都城東環状線（総延長19.5km）の整備を中核とする地域連携推進道路整備事業を計画した。同事業は、都城市街地中心部の渋滞緩和、交通拠点への連絡強化及び物流の効率化を図るものであり、竣工後は地域高規格道路として計画されている都城志布志道路の一部に組み込まれ、中核国際港湾である志布志港と九州縦貫自動車道都城ＩＣを直結する。

平成12年９月12日付けで県文化課（現、「文化財課」）に都市計画課長より都市計画道路変更の協議があった。それを受けて県文化課は、平成12年10月６日付けで予定地内に８箇所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することを回答した。以後、その回答に基づき埋蔵文化財の保護と開発計画について継続的に協議した結果、現状保存が困難な遺跡については発掘調査を行い記録保存の措置をとることになった。

今回報告する筆無遺跡は、主要地方道都城東環状線の今町工区内に所在する周知の遺跡であり、県文化課が実施した確認調査（平成15年４月14日～16日・平成15年11月11日～14日）の結果、古代末から中世初頭を中心に、縄文時代、弥生時代、近世の遺構・遺物が確認された。

なお、筆無遺跡の本調査は都城土木事務所長の依頼により、工事計画等を勘案しながら平成15年11月から同17年12月の３か年度にわたり宮崎県埋蔵文化財センターが主体となり実施した。

第2節　調査の組織

筆無遺跡の調査組織は以下のとおりである。

宮崎県埋蔵文化財センター

平成15年度

発掘調査　　A区（A地点）・B区（B地点）

所　長	米良弘康
副所長兼総務課長	大薗和博
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川恵史
調査第二課調査第三係長	菅付和樹
調査第二課調査第三係主査（B地点調査担当）	福田泰典
調査第二課調査第三係主査（A地点調査担当）	田中光
調査第二課調査員（嘱託）	重留康宏
調査第二課調査員（嘱託）	古屋美樹

平成16年度

発掘調査　　B区（C地点、D１地点）
整理作業　　A区（A地点）・B区（B地点）

所　長	宮園淳一
副所長兼総務課長	大薗和博
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川恵史
調査第二課調査第三係長	菅付和樹
調査第二課調査第三係主査（D１地点調査担当）	福田泰典
調査第二課調査第三係主事（C地点調査担当）	丹俊詞
調査第二課調査第三係主事（D１地点調査担当）	柳裕三
調査第二課調査員（嘱託）	岸田裕一
調査第二課調査員（嘱託）	目髙優子

平成17年度

発掘調査　B区（D２地点）
整理作業　A区（A地点）・B区（B地点、C地点、D１地点）

所　長	宮園　淳一
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課長	宮越　尊
総務課主幹兼総務係長	石川　恵史
調査第二課調査第三係長	谷口　武範
調査第二課調査第三係主査（D２地点調査担当）	福田　泰典
調査第二課調査第三係主事（D２地点調査担当）	丹　俊詞

平成18年度

整理作業　A区（A地点）・B区（B地点、C地点、D１地点、D２地点）
報告書作成

所　長	清野　勉
副所長	加藤　悟郎
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課長	宮越　尊
総務課主幹（総務担当リーダー）	高山　正信
調査第二課主幹（調査第三担当リーダー）	谷口　武範
調査第二課調査第三担当主査（報告書担当）	福田　泰典
調査第二課調査第三担当主事（報告書担当）	丹　俊詞
調査第二課調査第三担当主事（報告書担当）	柳田　裕三

平成19年度

整理作業　A区（A地点）・B区（B地点、C地点、D１地点、D２地点）
報告書作成

所　長	清野　勉
副所長	加藤　悟郎
総務課長	宮越　尊
総務課主幹（総務担当リーダー）	高山　正信
調査第二課長	石川　悦雄
調査第二課副主幹（調査第三担当リーダー、報告書担当）	福田　泰典
調査第二課調査第三担当主事（報告書担当）	丹　俊詞
調査第二課調査第三担当主事（報告書担当）	柳田　裕三

宮崎県教育庁

事業調整担当（平成15年度～19年度）

文化財課　埋蔵文化財担当主査	飯田　博之

調査協力（平成18・19年度、自然科学分析）

宮崎県総合農業試験場　生物環境部	本山　宏
同上	溝辺　真

調査指導（平成18年度、遺物関係）

宮崎産業経営大学　准教授	柴田　博子
金沢大学埋蔵文化財調査センター	山本　信夫

第Ⅱ章　筆無遺跡の調査

第１節　遺跡の位置と環境

都城市は宮崎県の南西部の都城盆地に位置し、高原町・野尻町・宮崎市・三股町・日南市・串間市の３市３町に隣接する。昨今の市町村合併により平成18年度に１市４町が合併し県内最大の面積を誇る新しい都城市となった。市内を北流する大淀川は、鹿児島県曽於市末吉町にその源を発し、あまたの支流を絡めながら隣接する宮崎市を貫流しやがて日向灘へと注ぐ。都城盆地は肥沃な大地が広がる県内有数の穀倉地帯であるが、この景観はそれら大小河川の恩恵を受けて育まれてきたものである。人々は古来よりその豊かな大地に生業の場を求め、盆地及びその周辺には各時代を通じて数多くの遺跡が存在する。

今回調査の対象となった筆無遺跡は、市の中心から南西に約3.8km、大淀川に面した低地を西方に望む標高約155～160mの河岸段丘上に位置する。遺跡の西側に広がる水田地帯は大淀川流域に沿って展開し，治水の歴史をたどりながら豊かな実りをもたらす農地を確保している。この低地には水田遺構を包蔵する遺跡が存在しており、往時から現在に至るまで連綿として農耕の営みが続いてきたことが考えられる。したがって、我々が目にする風景は、往時の姿を今に写していると言えよう。

次に筆無遺跡の地理的環境および遺跡の歴史的環境について概述する。

１　地理的環境

都城盆地は東西約25km、南北15kmの東西方向に長軸をもつ楕円状を呈している。北西を霧島山、東から南にかけて鰐塚山系、南北を台地や段丘に囲まれており、比較的丘陵や段丘面が希薄である西南方向のみがわずかに開けている。また一般に「シラス」と呼ばれている給良カルデラから噴出した入戸火砕流（約22000～28000年前）の堆積層が卓越していることはよく知られているが、そのほかにも年代指標となる広域テフラとして桜島薩摩テフラ（Sz-S、P14、約12800年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7300年前）、霧島御池軽石（Kr-M、約4600年前）、桜島文明軽石（Sz-3、P3、AD1471）などの堆積層も明瞭に確認できる。

遺跡が所在する都城市今町は都城盆地の南端付近に位置し、大淀川とその支流の梅北川に挟まれた成層シラス（二次シラス）台地上にある。この台地のほぼ中央を国道269号が南北に縦貫しており、北から南の方向にかけて緩やかに高くなる標高は、鹿児島県境付近をそのピークとし台地の南側縁辺部となる。また、西側の縁辺部に当たる遺跡周辺や梅北川西岸の台地東側の縁辺部の眼下には２つの川による浸食により発達した河岸段丘がみられ、より広い流域面積を有する西側の大淀川流域の段丘面の発達が顕著である。東側と西側の縁辺部では河川や雨水による浸食が著しく、その結果として迫状に切れ込んだ地形には台地からの伏流水を水源とする水田が展開しており、その近くでは入戸火砕流堆積物の露頭からなる急崖も随所に散見できる。

大淀川と成層シラスの露頭

２　歴史的環境

本遺跡では旧石器時代と古墳時代を除く縄文時代後期から近世後半までの遺構・遺物が断続的ではあるが確認されている。ここでは、それらの時期について周辺の遺跡や史跡等をもとに概述する。

縄文時代

今回の調査で確認された遺構・遺物は、後期～晩期に帰属するものであるが、その大半は晩期である。遺跡が所在する標高160m前後の台地では、大淀川や梅北川流域に広がる低地を見下ろす縁辺部を中心に後期～晩期の遺跡が集中する傾向が看て取れる。筆無遺跡を挟んで台地東側を北流する梅北川流域にある黒土遺跡（大岩田町）からは、晩期終末の突帯文土器や丹塗磨研の壺などが出土している。中でも特筆すべき点として、晩期の包含層中から出土した土器片に籾圧痕や米粒が認められ、擦り切り技法により穿孔を施した石庖丁も同時に出土したことが挙げられる。昨今、同市南横市町の坂元A遺跡で晩期終末の水田跡が検出され当地域における稲作の初現を晩期終末に求め得ることが定説化したが、これらの事実確認は稲作の伝播を考える上で大きな画期となった。また、黒土遺跡の南約１kmの横尾原遺跡（大岩田町）では、宮崎市青島の松添貝塚から出土したやや幅広の突帯を口縁部に有する松添式土器を埋土中に伴う晩期前半の円形竪穴住居跡１軒と土坑４基を検出している。そのほかにも、近隣では大岩田村ノ前遺跡、大岩田上村遺跡（以上、大岩田町）、油田遺跡（五十町）などで後期～晩期の遺構・遺物が確認されている。

なお、昭和37年（1962）に大岩田町で行われた道路拡幅工事の際に、後に「五十市式土器」の名で呼ばれるようになる器表全面に縄文を施した早期の円筒土器が出土した地点が、大岩田上村遺跡にほど近い国道269号沿いであることも付け加えておきたい。

弥生時代

この時代の遺跡分布状況も縄文時代と比して大きな差異はなく、これまでの調査報告では台地の縁辺部付近を中心に展開しているものと考えられる。しかし、今町地区周辺の弥生時代の遺跡については縁辺部付近に調査が集中していることもあって、それをもって当地域一帯における弥生時代集落の分布傾向まで言及することはできない。これまでの調査事例としては、大岩田村ノ前遺跡や坂ノ下遺跡（今町）が挙げられる。昭和63年に都城市教育委員会により調査が実施された大岩田村ノ前遺跡では、円形プランと考えられる竪穴住居跡１軒と前期～中期の土器群が確認されている。これらの弥生土器は、それまで資料的蓄積が乏しかった前期～中期の地域的様相を解明する上で好材料を提供することになった。また、坂ノ下遺跡では、不整形な弱い間仕切りをもつ竪穴住居跡１軒と前期～後期の土器が出土している。これらの中には、瀬戸内系の凹線文土器や鹿児島県大隅地方から流入もしくは影響を受けたと考えられる鋸歯状の幾何学的文様を有する壺などがあり、その存在は地域的交流を物語る。

古代・中世

古代における律令制度の下、都城市域は諸県郡に属していたことが「和名抄」等の記録に見える。また、延喜式の兵部省諸国駅伝馬条には、「島津駅　駅馬五疋」と見え、古代駅制においても要衝であったことがうかがえる。この島津駅の比定地は現在のところ同市郡元町付近が有力となっているが、正確な位置については未だ特定されていない。その後、万寿年間（1024～28）には、大宰府大監平季基がこの島津の無主荒地を開発し、大宰大弐であった藤原惟憲を通じて宇治関白家の藤原頼通に寄進している。これが島津荘成立の契機となり、建久８年（1197）の「日向国図田帳写」段階では、一円荘2,020町、寄郡1,817町、薩摩・大隅を合わせると8,560町余りに達する国内最大の荘園規模へと成長していく。同図田帳には、鎌倉幕府から日向・大隅・薩摩の地頭職を補任された島津（惟宗）忠久の名が記載されており、南九州における勢力地盤を着実に固めていった姿がうかがえる。

この平安から鎌倉幕府成立前後の時期は、都城市域でも調査事例が増え資料的蓄積がかなり進んできた時期の一つである。大島畠田遺跡（金田町）は９世紀後半から10世紀前半の在地有力者の居館跡であり、平成14年３月に国の史跡指定を受け整備に向けた動きが現在も継続されている。律令体制が変容し、地方において『富豪層』と呼ばれた在地勢力が台頭する時期に当たり、この地域において卓越した経済力を有した支配層の姿を垣間見ることができる。また、この大島畠田遺跡の北東約2.5㎞に所在する並木添遺跡（高木町）では、調査区内をほぼ直線的に延びる約420ｍの道路状遺構や石鋲（丸鞆）等も確認されている。同遺跡から南南西約３㎞前後には島津駅跡の比定地とされる郡元町・早水町があり、遺構の主軸等も勘案して古代官道跡との見方もある。島津忠久の居館跡である「祝吉御所跡」の比定地も大淀川支流沖水川左岸のこの祝吉町・早水町に隣接する郡元町にある。このほかにも、大淀川支流の横市川流域にある馬渡遺跡（蓑原町）では平安時代の居宅跡が確認されており、石鋲（丸鞆）・越州窯系青磁・灰釉陶器・緑釉陶器などが出土している。

祝吉御所跡比定地の石碑

一方、市域南部に当たる筆無遺跡周辺の大淀川及びその支流の梅北川流域に目を転じると島津忠久に加えて平季基関連の史跡や遺跡が分布している。この分布域は、同じく大淀川流域である鹿児島県曽於市末吉町にも広がっており平安から鎌倉にかけての石塔類が数多く残っている。

平季基関連では、梅北町大字益貫にある居館跡の伝承地がまず挙げられる。季基は万寿３年（1026）頃に当地に下向し、この益貫に居を定め三俣院を領有したがその娘婿であった伴兼貞に同院を譲与したとされる。その後、兼貞の子息が肝付氏・萩原氏・安楽氏・梅北氏・和泉氏を称した。現在、居館跡の伝承地付近には「馬乗馬場」などの呼び名が残っているがその全容は詳らかでない。また、季基の墓との伝承がある五輪塔が梅北町の西隣の安久町正応寺や末吉町南之郷橋野にある。このうち安久町正応寺に残る２基の五輪塔は、当地で「屋形石」と呼ばれている。その形態から鎌倉時代末から室町時代のものであり季基の墓というより当地における在地領主層に関連した供養塔と見るべきである。しかしながら、後世に至っても地域信仰の中に季基が生き続けていることはこの地域との深い結びつきを感じさせる。このほかに、島津（惟宗）忠久が祝吉御所造営前に、この地に居を構えた跡とされる「堀之内御所跡」の比定地や季基が島津荘総鎮守として勧請した神柱宮跡（現在は小松原町に遷座）なども現存する。

神柱宮跡（現在の黒尾神社）

堀之内御所跡の石碑（上安久）

このように平季基関連の史跡等は、安久町・梅北町付

近を中心に数多く散見され、島津駅の比定地とされる郡元町・祝吉町・早水町付近では希薄である。この地域にその多くが集中することは、島津荘開発の緒を担った季基が拠点とした地を論ずる際に注目すべき事実であり、忠久を中心とした島津氏の動向として地域的二極化の傾向が看て取れる。平季基による島津荘立券当初の拠点を神水川左岸の郡元地区周辺ではなく、この地域に求めようとする見方もこのような歴史的背景によるものである。

鎌倉時代、続く室町時代になると先述の伴氏一族や藤原姓富山氏などを始めとする諸氏の所職獲得及び権力地盤の確保への動きが活発化してくる。旧来の庄官系在地領主層は弁済使等の所職に補任されるなか、それぞれの本領を守るべく氏族間での対立と和合の流れが複雑化していく。その動きは建武年間から南北朝内乱期にかけて特に顕著となり、市域各地に城郭を構えての争乱も頻繁に起こってくる。遺跡周辺には平季基の居館跡にほど近い梅北町城下にある梅北城跡や国道10号と269号が分岐する大岩田交差点近くの大岩田城跡などが戦国期まで存続した城跡としてよく知られている。

梅北城跡

梅北城跡は平季基が築城したとの伝承も残るが、現存する遺構を観察する限り戦国末の庄内合戦の際に改修された姿と考えるのが妥当であり、大規模な空堀の存在は臨戦状態下の緊張を感じさせる。城跡は土塁の一部が破壊され、その周囲を巡っていた空堀が埋められたことで旧状を部分的に失っているものの、縄張り的には十分復元が可能な状態にある。この城跡については建武３年（1336）の日下部盛連軍忠状に「肝付八郎兼重以下凶徒等、…（中略）…、次五月四日自梅北城凶徒打出之間、…（以下略）」との記載が見える。この時期、肝付兼重は南朝方に属しており、北朝方の日向国守護畠山直顕や薩摩・大隅守護の島津貞久との間で幾度か対立が生じている。

大岩田城跡

また、大岩田城跡は、大淀川と梅北川の合流点にほど近い台地縁辺に築かれた城であり、古くは「大和田城」とも呼ばれ暦応年間（1338～1341）の文書に度々城名の記載がある。現在は主たる曲輪跡は畑地となっているが、幅約10mの空堀跡や「弓場（ゆんば）」と呼ばれる曲輪跡が現存している。梅北城、大岩田城の両城は、交通・物流の要衝であった当地域の要となる存在であり、戦国期に至るまで事あるごとに拠点的性格と機能を与えられ続けた。

その後、16世紀中頃に北郷（ほんごう）氏が庄内一帯を抑え、豊臣政権の影響下にありながらも近世都城領へとつながる新しい領地経営の姿が具現化していくに至り、これら各所に設けられた中世の城郭はその役割を終えることになる。

近世

幕藩体制が確立すると、都城市域は鹿児島藩の外城（とじょう）の一つとして北郷氏の領するところとなる。元和元年（1615）の一国一城令以降は拠点としていた都之城を廃し、天神山（現在の軍神山、旭丘神社（ひのおか）が鎮座。姫城町）から市役所一帯の敷地に政庁を構え政務の中心とした。その後、北郷氏は寛文３年（1663）

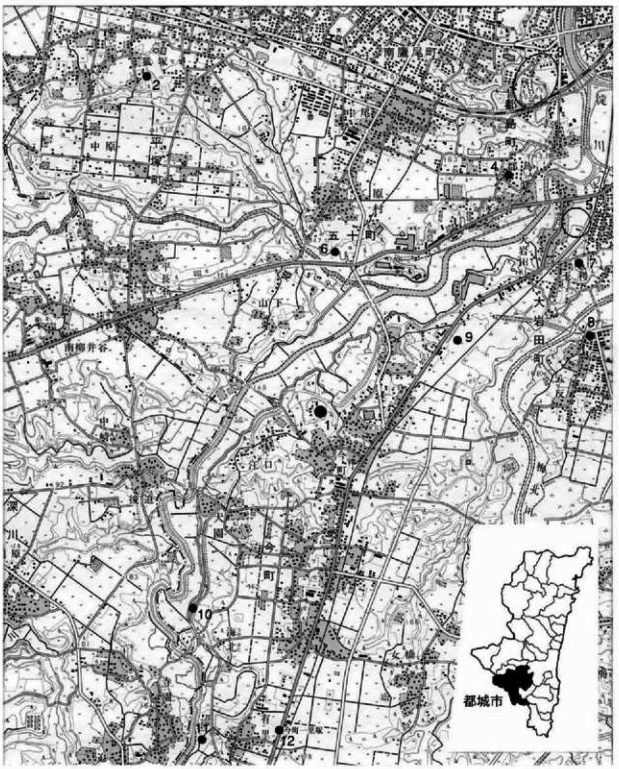
に島津宗家から姓を島津姓に復するよう命ぜられ、都城島津氏として領地経営に当たる。その周辺には町屋が形成され現在の都城市街の基礎が形作られていった。一方、筆無遺跡が所在する今町周辺は、江戸期には五十町分村に属し、中世以来交通の要衝で在り続ける。県境にほど近い今町の有里地区には一里塚としては九州で唯一国の指定史跡（昭和10年12月24日指定）である「今町一里塚」が今なお現存する。幕府巡見使の道程にも当たり、飫肥藩との領境である三股町寺柱に設置された日州寺柱番所（関所）跡などと並んで交易の要衝であった。また、一里塚にほど近い中今町地区には都城市指定文化財である郷士頭領格の家柄であった楠見家の正門と土蔵が残されており江戸中期の郷士格の屋敷構えの一端がうかがえる。この楠見家がある国道269号沿いの中今町地区一帯には上今町・下今町地区には見られない短冊状の地割りが認められ、郷士級の屋敷が軒を連ねていたものと考えられる。

日州寺柱番所跡

今町一里塚

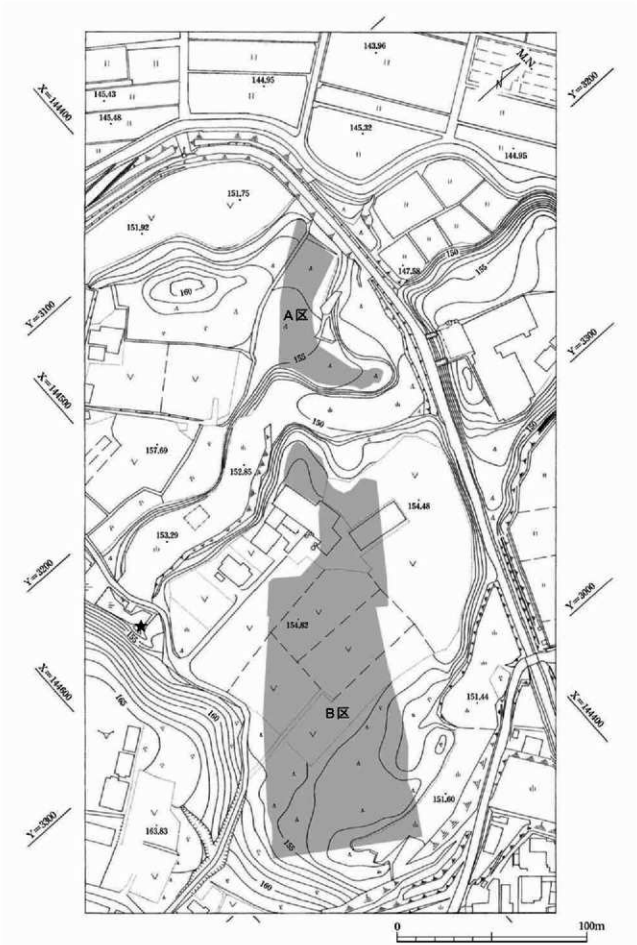
［参考文献］

『都城市遺跡詳細分布調査報告書』都城市文化財調査報告書　第６集	宮崎県都城市教育委員会	1987
『大岩田村ノ前遺跡』都城市文化財調査報告書　第14集	宮崎県都城市教育委員会	1991
『並木添遺跡』都城市文化財調査報告書　第24集	宮崎県都城市教育委員会	1993
『黒土遺跡』都城市文化財調査報告書　第28集	宮崎県都城市教育委員会	1994
『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書　第62集	宮崎県都城市教育委員会	2004
『宮崎県の地名』日本歴史地名体系　46	平凡社	1996
『角川日本地名大辞典』45　宮崎県	角川書店	1986
『新火山灰アトラス』町田洋、新井房夫	東京大学出版会	2003
『宮崎県史』史料編　中世１	宮崎県史刊行会	1990
『大鳥畠田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第28集	宮崎県埋蔵文化財センター	2000
『大岩田上村遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第77集	宮崎県埋蔵文化財センター	2003

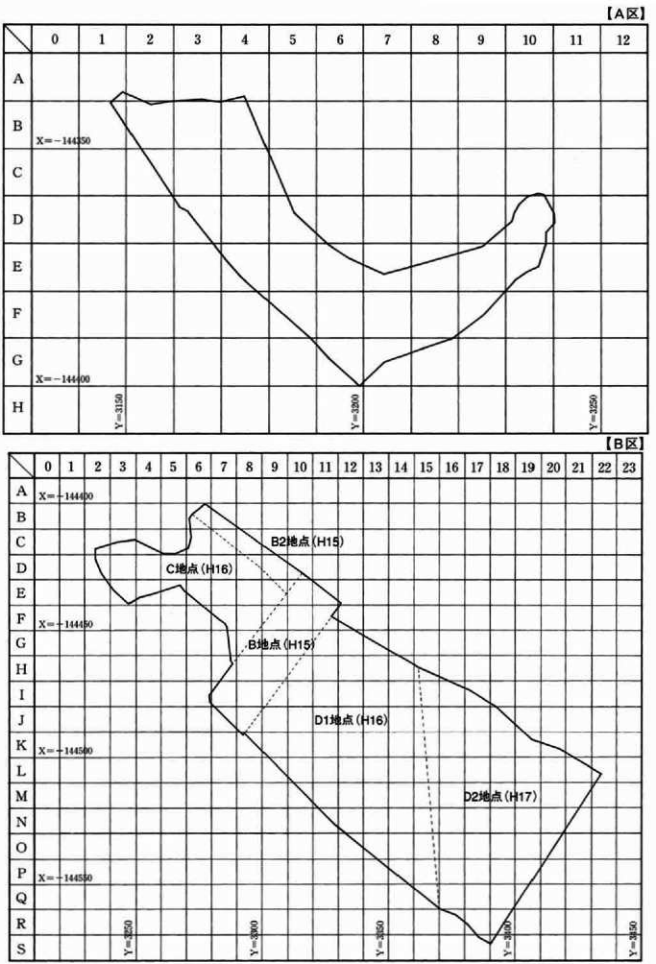


1 筆無遺跡	2 諸麦遺跡	3 都之城跡	4 瀬戸ノ上遺跡
5 大岩田城跡	6 油田遺跡	7 大岩田村ノ前遺跡	8 黒土遺跡
9 大岩田上村遺跡	10 坂ノ下遺跡	11 鵜尾遺跡	12 今町一里塚

第１図　筆無遺跡および周辺遺跡位置図（S=1/25000）



第２図　周辺地形図（S=1/2000）



第３図　A区・B区グリッド配置図
（上段：A区 S=1/800、下段：B区 S=1/1500、1grid=10m×10m）

第２節　調査の経過

平成15年度に着手した笹無遺跡の調査は、工事計画等を勘案して調査対象範囲をＡ～Ｄ２の５地点に分割して３か年度にわたって実施した。（調査時の地点区分についてはＰ10の第３図参照）

１　平成15年度の調査

(1)　Ａ区

試掘調査の結果をもとに15世紀末に降下した桜島文明軽石（Sz-3）の一次堆積層が部分的に残るレベルまでの表土及び耕作土を重機により除去し、それより下位を人力により精査する方向で作業を進めた。生産遺構（畠跡）の検出から着手し、残存状態には耕作等の要因で差異があるものの調査区の広い範囲で畝状遺構を確認した。同遺構の図化終了後、調査はその下層の黒色土（第Ⅲ層）～霧島御池軽石の漸移層（第Ⅳ層）までの掘り下げ作業に移行し、縄文時代後期・晩期から中世の調査を行った。その結果、遺構として10世紀代の土坑墓や道状遺構を、遺物としては包含層中から、縄文土器、弥生土器、古代の土師器・須恵器などを確認した。

その後、重機により霧島御池軽石層の漸移層までを除去し、遺構の検出作業を行ったが同層のレベルでは旧地形は東西方向に走る谷地形となっていたことが判明し、樹根等を含む複数のピットを検出したものの性格が明確な遺構は見い出せなかった。

最後に霧島御池軽石層より下層の文化層についてその存在の有無を確認したが、遺構・遺物を包蔵する層は確認できず、文化層は存在しないものと判断した。平成15年11月10日に始まった調査は、この作業をもって平成16年３月26日にそのすべてを終了した。

【Ａ区　調査日誌抄】

H15.11.15	重機による攪乱層除去作業開始。(11.21終了)
11.21	畝状遺構の調査に着手。(12.16に遺構平面及び断面の図化作業まで終了)
12.10	畝状遺構の空中写真撮影。
12.19	桜島文軽石下層（Ⅲ層）の調査に着手し、古代の土器器・須恵器、弥生土器を確認。
11.20	畝状遺構の調査に着手。(12.16に遺構平面及び断面の図化作業まで終了)
12.10	畝状遺構の空中写真撮影。
12.19	桜島文軽石下層（Ⅲ層）の調査に着手し、古代の土師器・須恵器、弥生土器を確認。
H16. 1.13	１号土坑を調査。土坑内から完形の高台付埦（土師器）が出土。土坑墓と認定。
1.23	霧島御池軽石上面で地形図を作成。
2. 9	Ｂ地点北側（Ｂ区）に設置する工事用道路敷設範囲の調査をＡ区と並行して着手。(3.26終了)
2.12	調査区西端部で検出した溝状遺構の調査に着手。硬化面を確認し、道状遺構と認定。
3. 3	霧島御池軽石上面の遺構分布状況及び工事用道路敷設範囲の空中写真撮影。
3.26	調査事務所等すべてを撤収し調査終了。

(2)　Ｂ区（Ｂ地点）

畑地として利用されていた調査対象範囲は起伏の少ない平坦な地形を呈していた。調査は試掘調査で確認されていた畠跡を確認する作業から着手し、桜島文明軽石が混在する層の上面までを重機により除去した。その結果、不明瞭な畝状の遺構を検出したが、包含する遺物や壁面の土層堆積状況の観察から近現代の耕作によるものであることが判明し、桜島文明軽石の混在するレベルまでを完全に除去し、第Ⅲ層（黒色土）から人力により精査していく方向で調査を進めた。

第Ⅲ層の精査を開始して程なく調査区内の北東隅が緩やかな谷地形であること、また中央部付近では霧島御池軽石まで削平を受け本来の地形が消失していることが明らかとなった。第Ⅲ層の層厚は平均し

て約40cm前後であるが、９世紀後半から12世紀前半の時期幅をもつ土師器、須恵器、緑釉陶器、中国産貿易陶磁（白磁、青磁）などが面積に比して数多く出土した。また、それらに混在する状況で縄文時代晩期の精製磨研土器や弥生時代中期後半から後期の甕なども数は少ないながら出土した。

遺物包含層の掘り下げが進み、霧島御池軽石層（第Ⅴ層）の漸移層（第Ⅳ層）に近づくと土が僅かに黄色味を帯び、遺構が確認できるようになった。その結果、複数のピット、土坑のほかに溝状遺構や中世の周溝墓などを検出するに至った。なかでも、調査区の東の境で検出した直径80cm前後のピットの配列が、方形プランを呈する特異な建物である掘立柱建物跡（SB1）の一部であることが判明したことは、遺跡の性格を考える上からも大きな転機であった。その後、SB1に附随するような位置関係で３間×５間規模の総柱の掘立柱建物跡（SB2）や出入口に相当すると考えられる階段状の掘り残しが確認された溝状遺構（SE4）などが次々と検出された。

調査は、それらの遺構の記録保存終了後、次年度に予定されている東（D1地点）と西（C地点）の調査範囲の確認等も終え、A区と同日の平成16年３月26日に終了した。

【B区-B地点　調査日誌抄】

H16. 1. 7	重機による表土除去作業開始。(1.9終了)
1.15	第Ⅲ層の精査に着手。200点強の古代を中心にした遺物を確認する。
1.22	朝礼時の気温が－３℃。除霜作業が日課となりそうな予感。
1.23	調査区を横断する溝状遺構（SE2）を検出。古代の遺物（10ｃ代）が埋土中に混在。
1.28	白磁が減少傾向に転じ、越州窯系青磁や、緑釉などが出土し始め、古代の様相を呈してくる。
2. 4	調査区の北東隅で中世の周溝墓（SM3）を検出。
2.13	ピットの検出を進める中、掘立柱建物跡を構成する柱穴の並びが見え始める。
3. 4	空中写真撮を実施。
3.18	次年度調査のために座標杭を設置。
3.26	調査事務所等すべてを撤収し調査終了。

2　平成16年度の調査

(1)　B区（C地点）

B地点の西側に広がるA区と対峙する調査区である。調査区内には桜島文明軽石層（第Ⅱ層）は部分的にしか残存しておらず、昨年度の確認調査でも遺構が確認されていないことから第Ⅲ層上面まで重機により除去し、その後人力による掘り下げに移行した。また、A区に向かって張り出した西端部は削平を受けており、表土直下は霧島御池軽石層（第Ⅴ層）であった。

B地点に隣接する付近は浅い窪状の地形を呈し掘り下げに時間を要したが、第Ⅲ層の黒色土からなるその埋土中からは、周囲から流れ込んだと考えられる青磁や白磁といった貿易陶磁類などが細片を含めて3000点弱程度出土した。遺構としては、B地点から続く溝状遺構（SE2、SE4）のほか、古代末から中世初頭の周溝墓、溝状遺構などをその周りの比較的傾斜が緩やかとなる面で検出した。

A区に向かって張り出す削平を受けていた西端部の低丘陵上で、土坑やピットを検出したが、掘立柱建物跡などは確認できず、大半は遺構として認定できないものであった。遺物もほとんど確認できなかったが、窪状の地形の方向に向かって傾斜する斜面で検出した土坑埋土中からは、縄文時代晩期の土器が出土した。

その後トレンチを設定し、さらに下層の鬼界アカホヤ火山灰の堆積層前後で縄文時代の文化層の有無を確認したが該期の遺物等を包含する層は確認できず平成16年12月22日をもって調査を終了した。

【B区-C地点　調査日誌抄】

H16. 7.21　重機による表土除去作業開始。(7.23終了)
7.26　チェーンソーによる切り株除去作業開始。切株内にスズメバチの巣を発見！現場内騒然!!
8.12　周溝状遺構を検出。
9. 9　調査区東側の遺物集中範囲が弱い窪状の地形を呈し始める。
9.27　A地点に向かって張り出す西端部の低丘陵上で弥生土器が数多く出土。
10. 1　空中写真撮影を実施。
10. 6　縄文時代の土坑を検出。遺構内に晩期の土器片２個体分程度を確認。
11.12　調査区の北西端部で周溝墓を検出。
12.14　空中写真撮影を実施する。
12.15　トレンチを設定し鬼界アカホヤ火山灰の堆積層前後で縄文時代の文化層確認作業開始。
12.22　トレンチ等の埋め戻しを完了し調査終了。

⑵　B区（D１地点）

D１地点は、調査事務所設置場所や車両進入経路の確保上の問題から、一度に全面を調査することが困難であったため、調査区を南（約2700㎡）と北（2600㎡）に分割し排土を反転する方法で調査を実施した。調査は先に着手した南側半分を６～10月、その後プレハブ等の移設完了後に残り北側半分と排土置き場としていた東端部分約300㎡を10月～２月に実施した。

調査は桜島文明軽石層の堆積が部分的かつ不安定な状況であった第Ⅲ層上面近くまで重機により表土を除去し、これまでの調査した地点同様にその後を人力による掘り下げ作業とした。

D１地点は最近まで畑地として利用されていたため耕作の影響をかなり受け、調査区北側はかなり攪乱が激しかった。また、レベル的に優越する南側丘陵から派生する弱い尾根状地形の頂部付近では、古代から近世までの包含層が南側ほど削平を強く受け消失していた。

平成15年度に調査を行ったB地点から延びる溝状遺構の検出及び包含層の掘り下げ過程で、古代末から中世前半の遺構・遺物が、削平を受けた尾根状地形を境とする２号溝状遺構に囲まれた南西方向に広がる緩斜面及びB地点へ続く平坦面で広がりを見せた。ただ、D１地点でも１基検出された中世の周溝墓の位置は、この尾根状地形を越えた東側の遺構がほとんど検出されなかった範囲であり、墓域としての意識が働いていたと考えられる。そのほかにも、弥生時代と近世の遺構分布に時代的な地形利用の相異が明らかになるとともに、弥生時代の竪穴住居跡の残存状況から、この尾根状地形がレベル的にそれほど突出せず緩やかに広がっていたことも想定できた。

調査は最後の作業となった弥生時代の竪穴住居跡の記録及び地形図作成が終了後、霧島御池軽石層より下層の文化層について、任意の長さでトレンチを設定し確認を行った。しかし、縄文時代早期の層位まで掘り下げたが、遺構・遺物はともに確認されず文化層は存在しなかった。

調査はこの確認作業を最後に平成17年２月25日をもって終了した。

【B区-D１地点　調査日誌抄】

H16. 6. 7　重機による表土除去作業開始。(6.14終了)
6.15　精査開始。近世の遺物が混入する埋土（桜島文明軽石混）をもつピット群を多数検出。
6.23　周溝墓検出。後に中央土坑から高台付埦が出土。
6.29　近世の竪穴状遺構を４基検出。床面から薩摩焼の陶器等が出土。
7. 6　掘り下げが進みⅢ層中下位から緑釉陶器や越州窯系青磁などの古代の遺物が出土し始める。
8. 9　B地点で確認されていた溝状遺構を合わせて、５条の溝を検出する。
9.22　土坑内から完形の白磁（Ⅳ類）、土師皿、刀子が出土。土坑墓と認定。
10. 1　調査区南半分の空中写真撮影を実施。
10. 8　北半分の調査を完了し、プレハブ等の移転に向けた準備を進める。
10.12　調査区北側に座標杭を設置。
11. 1　プレハブ等の移転完了。表土除去作業を開始。(11.5終了)
11.16　弥生時代の竪穴住居跡を３軒検出。(12.10図化終了)
12.13　濃霧発生！霧がはれるまでしばらく待機して作業開始。
12.27　今年の調査終了。事務所に松飾りを付け年越しの準備。

H17. 1. 5　平成17年の調査開始。
1.11　空中写真撮影実施。早朝－6℃の冷え込みで、遺構検出面は一面の霜、霜、霜！
1.24　トレンチを設定して土層の堆積状況と露島御池軽石堆積層下の文化層確認作業開始。
2.20　調査事務所等撤去及び機材等搬出。調査終了。

2　平成17年度の調査

(1)　B区（D２地点）

筆無遺跡の調査対象範囲東端に位置し、前年度までの確認調査で谷地形と低湿地の存在が確認されていた。調査着手時期が梅雨時であったことから、湧水等も考慮して埋没している谷地形の本格的な検出作業は梅雨明けに設定した。重機による表土除去後、D１地点に隣接する緩やかな傾斜面の調査から開始したが、D２地点はこれまでの地点と違い杉林として利用されていたため、伐採後に残されていた杉根をチェーンソーにより除去する作業に多大な時間を要した。

精査の結果、遺構・遺物ともこれまでと比してかなり少なかったが、白磁片や土師器類、谷地形とほぼ直行する方向へ下る浅い擂鉢状のピットを伴う道状遺構などを確認することができた。しかし、D１地点で中世の周溝墓を検出した地点に近かったことから、さらなる遺構の広がりを期待していたが同類の遺構の検出には至らなかった。

7月15日梅雨明け。緩やかな傾斜面の調査に一応の区切りがつき、同20日から本格的な谷地形の検出作業に着手する。当初１か所と考えていた谷地形は、作業が進むにつれて明らかになってくる南側丘陵から派生した地形に相応して、もう１か所弱い谷地形が存在することが明らかになった。加えて、低湿地を形成する湧水点も確認され、水中ポンプによる排水作業を並行して行いながらの調査となった。谷地形の検出過程では、県内に甚大な被害をもたらした台風14号の影響で露島御池軽石混じりの大量の土砂が流入し水中ポンプが役に立たなくなるなどの事態も発生した。しかしながら、最終的には人力で可能な範囲まで谷地形を復元し、人為的に廃棄されたと考えられる中世初頭を中心とする遺物の集中出土も確認できた。

最後に、鬼界アカホヤ火山灰が露出していた低湿地近くで縄文時代早期の文化層の有無を確認する。その結果、該期の文化層は存在せずさらにその下層でも遺構・遺物ともに確認できなかったことから、平成17年12月20日すべての作業を終了した。

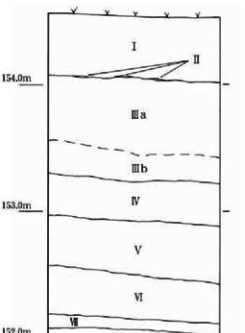
【B区-D２地点調査日誌抄】

H17. 6.13　重機による表土除去作業開始。(6.20終了)
6.21　土留めのため植えられていた杉の根をチェーンソーで除去する作業に時間を要する。(6.27終了)
7. 5　座標杭設置作業。
7. 6　湧水と降雨の影響で調査区内に池が３つ出現！水中ポンプフル稼働！
7.15　梅雨明け。谷地形の本格的な検出作業を開始。
8. 3　湧水周りの精査を開始。帯状のにじみを確認する。(後に地滑りの痕跡であることが判明)
8.12　低湿地内のに流れ込んだ露島御池軽石に混在して縄文時代晩期の土器片が出土。
9. 6　台風14号が直撃。現場が一部水没する。土砂が大量に流入し除去作業に時間を要する。
9.21　空中写真撮影実施。
10.12　重機により、谷地形内の堆積土を除去。(10.14終了)
10.27　調査区内北側の谷地形内に白磁等を中心として遺物が集中して出土する範囲を確認。
11.25　トレンチの壁面精査で噴砂現象を確認。
11.27　調査区内で最も傾斜が急な湧水周りの土層を図化。平均斜度が約9°であった。(11.29完了)
12.15　調査区内の埋め戻し作業に着手。
12.20　調査事務所等すべてを撤収し調査終了。

第３節　基本層序

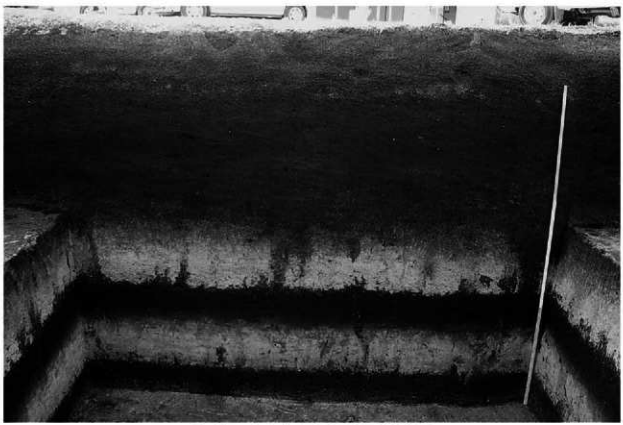
Ｂ区のＥ11グリッド北壁土層堆積状況を第４図に示した。今回の調査対象範囲における土層の堆積状況は、桜島文明軽石（Sz-3、AD1470）、霧島御池軽石（Kr-M、約4600年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7300年前）を３つの鍵層とし、谷地形等の特異な場合を除いて各地点ともて大きな差異は認められない。したがって、第４図は調査区内の土層堆積状況を概ね反映している。

第Ⅰ層は表土及び旧耕作土で、平均層厚60cm前後である。第Ⅱ層は桜島文明軽石の堆積層であるが、Ａ区・Ｂ区とも耕作等の影響で残存状況は良好とはいえない。ただ、谷地形を検出したＤ２地点では耕作等の影響をさほど受けていなかったため平均層厚15cm前後の一次堆積層を確認できた。第Ⅲ層の黒色土は中世から縄文時代後期・晩期の文化層である。平均層厚70cm前後であり、層の中位から下位にかけて第Ⅴ層の霧島御池軽石堆積層及びその上層の漸移層の影響を受けわずかに黄色味を帯びる。遺物の包含は上位ほど密である。第Ⅳ層は霧島御池軽石の上層に位置する漸移層である。同層中で確認された遺物はごくわずかで、クラック等による混入によるものである。第Ⅴ層は霧島御池軽石の、一次堆積層である。同軽石は調査区及びその周辺の露頭の観察においても安定した堆積状況が確認できる。平均層厚が35cm前後である。低湿地に流入して水中に堆積していた同軽石は灰白色（Hue7Y2/1）を呈していた。第Ⅵ層は平均層厚45cm前後の安定した堆積状況を示す黒色土であるが、遺構・遺物等は確認できなかった。第Ⅶ層は鬼界アカホヤ火山灰の上層に位置する漸移層である。第Ⅷ層は鬼界アカホヤ火山灰の一次堆積層である。層中下位には火山豆石が明瞭に確認できる。第Ⅸ層は縄文時代早期の遺構・遺物の文化層に相当する層位である。同層の中位から下位にかけて約7500年前に降下した桜島横坂軽石（Sz-Ym）に由来する黄橙色粒子が確認できる。



第Ⅰ層　褐灰色撹乱土（Hue10YR4/1）
表土（耕作土）
第Ⅱ層　黄灰色軽石（Hue2.5Y6/3、Sz-3）
桜島文明軽石の一次堆積層。耕作の影響を受け部分的に残存。
第Ⅲ層　遺物包含層。２層に細分
IIIa層　黒色土（Hue10YR2/1）
火山成ガラス成分をわずかに含む。粗砂。
IIIb層　黒色土（Hue10YR2/1）
暗褐色土（Hue10YR3/3）が第Ⅳ層に近づくにつれ散漫に混在する。IIIa層に比して火山成ガラス成分を多く含む。
第Ⅳ層　暗褐色土（Hue10YR3/4）
霧島御池軽石（Kr-M）の細粒30%程度含む。漸移層。
第Ⅴ層　黄褐色軽石（Hue10YR5/8、Kr-M）
霧島御池軽石の一次堆積層。層中下位には５～10mm前後の粒子が安定して堆積。
第Ⅵ層　黒色土（Hue10YR2/1）
火山成ガラス成分及び赤橙色の微細粒をわずかに含む。粗砂。
第Ⅶ層　暗褐色土（Hue7.5YR3/4）
鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の漸移層。風成層特有の斑文状のにじみが確認できる。
第Ⅷ層　明黄褐色土（Hue10YR6/8、K-Ah）
鬼界アカホヤ火山の一次堆積層。層中下位に火山豆石が密に堆積。
第Ⅸ層　黒色土（Hue10YR1.7/1）
桜島横坂軽石（Sz-Ym）の５mm前後の黄橙色粒子が20%程度混在。火山成ガラス成分を多く含む。

第４図　Ｂ区土層堆積状況（Ｅ11grid北壁、S=1/30）



①G7grid（B区）における土層堆積状況

筆無遺跡の周辺では、広域指標テフラである桜島文明軽石（Sz-3、P3、AD1471）、霧島御池軽石（Kr-M、約4600年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7300年前）が安定して堆積している。

②H13grid（B区）における土層堆積状況

③Q19grid（B区）における土層堆積状況

②は地すべり等が要因で正常に堆積していた鬼界アカホヤ火山灰等の堆積層がブロック状に遊離し、その間隙に下層から噴き上がった入戸火砕流堆積物が入り込んだ堆積状況である。また、③では噴き上がった同火砕流堆積物が桜島文明軽石の一次堆積層にまで達している。

いずれも「噴砂現象」による土層堆積状況を示すものであると考えられる。

筆無遺跡　A区

第Ⅲ章　A区の調査

第1節　縄文時代の遺物

本遺跡では縄文時代後期前葉から突帯文期にかけての遺物が出土した。遺物の出土層位はⅢa～Ⅲb層であるが、同層およびその下層に位置する第Ⅳ層、第Ⅴ層（霧島御池軽石：Kr-M）で検出された遺構は性格不明のピットが大半であり遺物を伴うものはなく、出土遺物はすべて包含層中からのものである。

なお、整理段階において出土遺物の層位および分布の十分な傾向分析はできなかったため、ここでは出土遺物を土器・石器ごとに器種および器形等に一定の分類基準を設けそれに基づき説明を加える。

縄文土器について

A地区で出土した縄文土器についてこれまで研究されてきた土器編年を基軸に分類作業を行った。形態的特徴により深鉢形（第Ⅰ群）と浅鉢形（第Ⅱ群）に大別し、文様・器形といった個々の属性の分類作業から第Ⅰ群を1類～6類に第Ⅱ群を7類～10類に細別した。分類された土器群について、以下説明を行う。

第Ⅰ群　深鉢形土器

深鉢形の形態を呈する土器である。これらを文様を中心に分類すると有文・無文に大別できる。有文土器は凹線文や沈線文を施す土器群と突帯文を施す土器群とがあり、無文は精製と粗製の土器群に各々細別できる。凹線文や沈線文の土器群は1類～3類、突帯文土器群は6類、無文土器群は4類～5類がそれに相当する。

1類（第1図、1・2）

口縁部に肥厚帯を有し、その肥厚帯に文様を施文する土器である。1は肥厚帯に縦位2段の刺突文を施し、その下部に横位の凹線を施す。2は肥厚帯に横位の沈線を施し、その下部に貝殻腹縁刺突文を連続して施す。整形のための調整方法は条痕である。

2類（第1図、3～5）

口縁部が直立し凹線文等の文様を施す土器である。4は胴部片であるが凹線文から3と同類のものと考えられよう。5は凹線ではないが、肥厚帯をもたず直立気味の口縁部から2類に分類した。口唇部には刻み目を施し、口縁下部に横位の沈線文を施す。整形のための調整方法は条痕後ナデである。

3類（第1図、6～10）

口縁部が逆「く」の字状に屈曲し、口縁部に2条から3条の沈線を有する土器である。6は3条の沈線文を横位に施す。7・8は6に比べやや浅い2条の沈線を施す。9・10は調整・色調・胎土等から8と同一個体と考えられる。整形のための調整方法は条痕か条痕後ナデである。

4類（第1図、11・12）

ミガキ調整の精製深鉢形土器である。11は、口縁部が直立し、頸部がやや窄まり、胴部が張り出す形態を呈している。底部は、小径の平底である。頸部外面の浅い稜線とは対照的に、頸部内面には明瞭な稜を持つ。煤の付着範囲は外面が胴部中位付近を除く部分に帯状に付着し、内面は逆に胴部中位部分に煤が付着し、一部に焦げと考えられる炭化物も付着している。12は11と同一個体と考えられる。

5類（第2図、13～21）

条痕調整の粗製深鉢形土器である。完形復元できる個体がないため全体のプロポーションを把握することは難しいが、やや外反する口縁部と外側に張り出す胴部を持ち、やや窄まる頸部により明瞭な屈曲を呈するようである。整形のための調整方法は横方向の条痕である。接合面に粘土帯の痕跡が顕著に認められる。

6類（第3・4図、22～32）

条痕調整の粗製の深鉢形で突帯文を有する土器である。口縁部形態と突帯の施文箇所により4種に細分できる。

・口縁部が外反し、口縁下部に突帯文を施すもの（22～23・26）

・口縁部が外反し、口縁部と突帯文の境が不明瞭なもの（24～25・27・29）

・口縁部が内湾し、口縁部下部に突帯文を施すもの（28）

・口縁部が内湾し、口縁部と突帯文の境が不明瞭なもの（30）

また、内湾する口縁部形態に接合する胴部片は、31・32のように突帯文を屈曲部に有する器形が想定される。32は胴部上位が条痕調整、下位がナデ調整で、さらに長軸11cm程度の木葉の圧痕もみられる。また、底部は残存しないが22の胴部外面中位に帯状に煤が集中して付着している。内面の煤はわずかである。

第II群　浅鉢形土器

深鉢形の土器とは異なり浅鉢形の形態を呈する土器である。ミガキ調整の精製土器と条痕調整の粗製土器に大別され、土器群を文様構成と形態により細分する。

精製浅鉢形土器

7類（第4図、33）

口縁部が比較的短く、胴部と頸部に屈曲をもち頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部形態は不明である。内面には粗いミガキ調整を施す。

8類（第4図、34・35）

口縁部が比較的長く、胴部が屈曲し、頸部から口縁部にかけて外反する。口縁端部に施文がない34と端部に膨らみをもち口縁部がやや短い35がある。

9類（第4図、36～38）

口縁部が比較的長く、頸部から口縁部にかけて外反し、さらに口縁端部にかけて立ち上がる。36・37は、口縁端部の立ち上がりに沈線を施す。38は、沈線は見られないもののの口縁端部に肥厚帯を有し、頸部に焼成後の穿孔を有する。

粗製浅鉢形土器

10類（第4・5図、39～41）

口縁部が直立して立ち上がり、頸部がなく口縁からそのまま平底の底部へと連続する器形を呈する。39の底部は中心部がやや上げ底気味になり編布の圧痕が残る。40は全体の器形は不明であるが、編布の圧痕から10類に分類した。41は口縁部に刻目突帯文を施し、胴部の屈曲部から底部にかけて肥厚する傾向が認められる。39・40は胴部外面上位から口縁部にかけて帯状に煤が付着する。しかし、内面の煤の

付着はわずかである。

円盤形土製品（第５図、42）

器としての機能をもつ粘土製品である土器とは異なり、土器の砕片を二次的に加工した土器製品（42）が１点のみ出土している。周辺を打ち欠いており長軸・短軸ともに約４㎝、最大幅0.8㎝、重さ13.7ｇである。

小結～Ａ区の縄文土器～

細別した土器を型式学的な編年序列に集約して小結としたい。

深鉢形土器；１類１は宮ノ迫式、２類は指宿式、３類６は三万田式、それ以外は中岳Ⅱ式、４類は入佐式、５類は黒川式、６類は無刻目突帯文、浅鉢形土器；８類は入佐式、７類・９類は黒川式、10類は刻目突帯文に相当すると考えられる。

石器について

縄文時代後期から突帯文期に相当すると考えられる石器について、型式学的器種を基軸に分類作業を行い、出土した石器を石器製作から剥片石器と礫塊石器に分類した。剥片石器は石鏃・スクレイパー・打製石斧・石核・剥片等が出土しており、礫塊石器は、磨製石斧・石錘・敲石・磨石が出土している。以下、説明を行う。

石鏃（第６図、43・44）

打製石鏃が２点出土している。いずれも一部を欠損しているが、基部形態は深い凹基で平面正三角形（43）と素材剥片の周辺部のみを簡単に整形した略五角形（44）のものがある。石材は、チャート（43）と腰岳産黒曜石（44）である。

スクレイパー（第６図、45）

大きさは石鏃と大差なく楕円形に近い平面形で、縁辺に連続する剥離を施し刃部を形成している。石材はチャートである。

剥片（第６図、46～49）

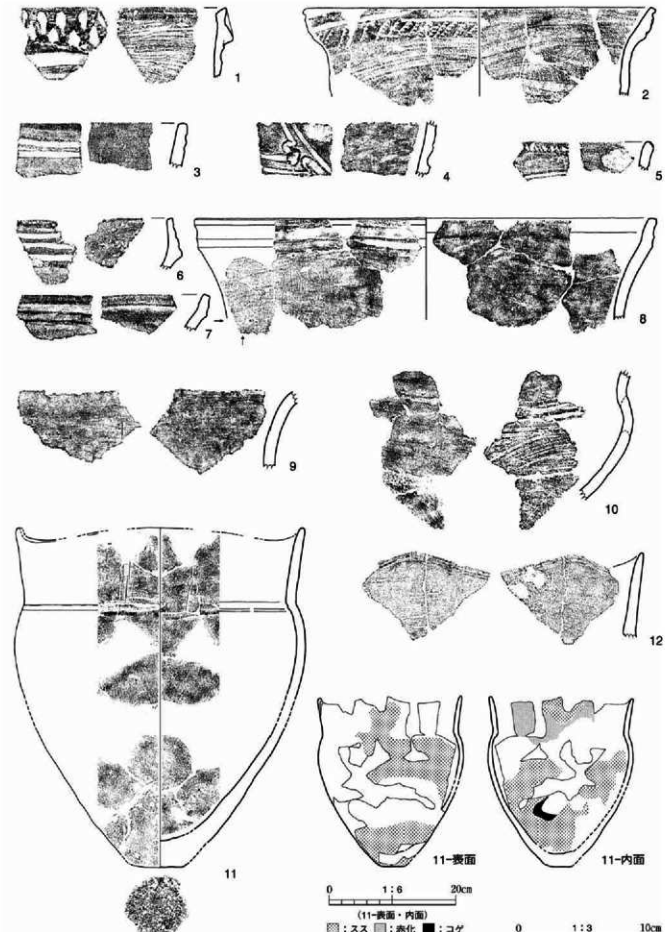
打面形成を行った後、縦長に剥片剥離している剥片である。石材は腰岳産黒曜石（46・48）・チャート（47）・凝灰岩（49）である。これらの多くは、石鏃等のトゥール製作に関連したものと想定される。

石核（第６図、50～51）

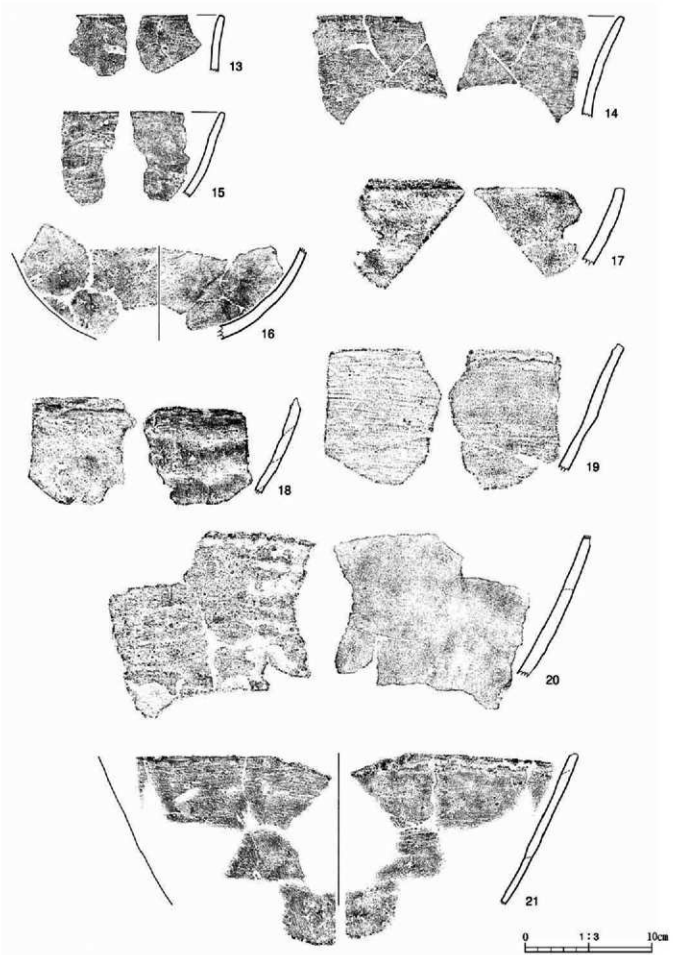
石材が流紋岩（50）とチャート（51）で最終形態が小型の形態を呈する石核である。剥片剥離の方向も打面転移を行いながら複数方向から剥片を作出している。

石斧（第６図、52～55）

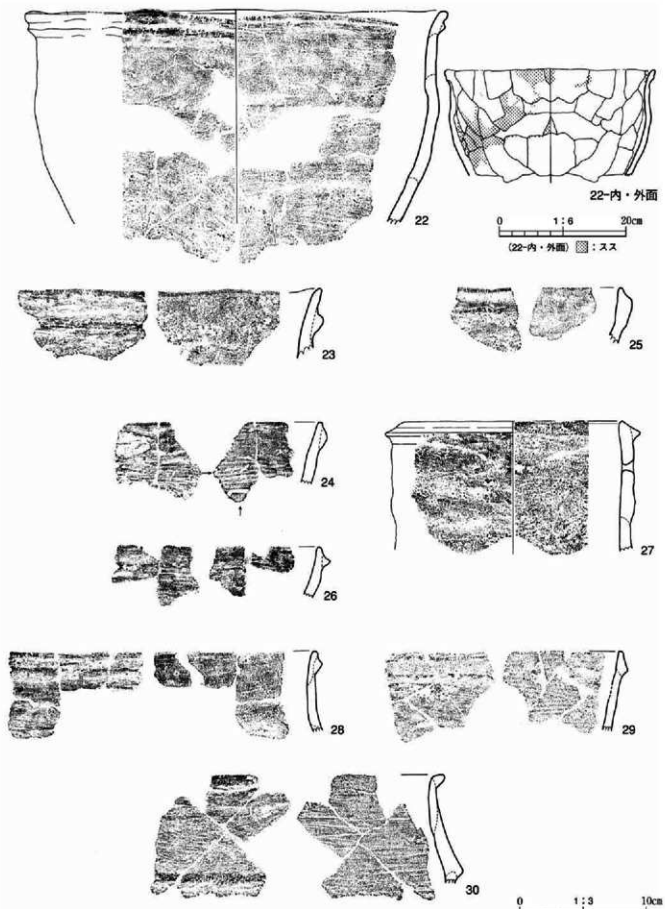
石斧は４点出土しており、その内訳は打製石斧が３点、磨製石斧が１点である。石材はホルンフェルスである。いずれも欠損品であり全体の形態は不明瞭である。52は自然面を多く残し、側縁部から細かい剥離調整を施す。肩部から刃部にかけて光沢が著しく、刃部の擦痕が著しい。53は欠損が著しいが、刃部の擦痕等から52に近い形態のものと想定される。54は窄まった基部のみ残存し、側辺部から細かい剥離調整を施す。基部端部に擦痕が看取される。これらは最終形態に研磨、擦痕が観察される箇所が、柄の装着部分や摩滅した刃部にあたることから使用痕と考えられる。55は断面形や整形方法から、基部に向かってやや窄まる磨製石斧と捉えたい。側辺部を中心に敲打痕や剥離痕がみえ、敲打痕の著しい箇



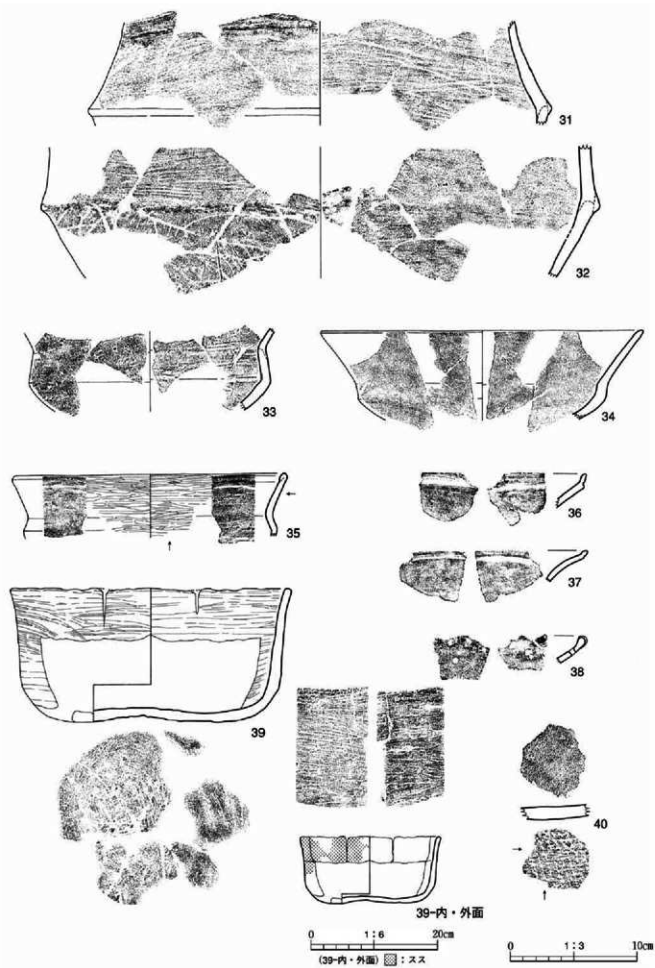
第１図　Ａ区包含層出土遺物実測図１（縄文土器、S=1/3、炭化物付着状況：S=1/6）



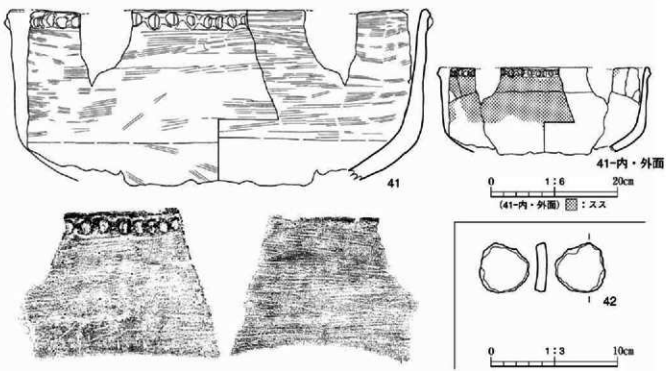
第２図　Ａ区包含層出土遺物実測図２（縄文土器、S=1/3）



第３図　Ａ区包含層出土遺物実測図３（縄文土器、S=1/3、炭化物付着状況：S=1/6）



第４図　Ａ区包含層出土遺物実測図４（縄文土器、S=1/3、炭化物付着状況：S=1/6）



第５図　Ａ区包含層出土遺物実測図５（縄文土器、S=1/3、炭化物付着状況：S=1/6）

所は柄の装着箇所の可能性がある。

石錘（第６図、56）

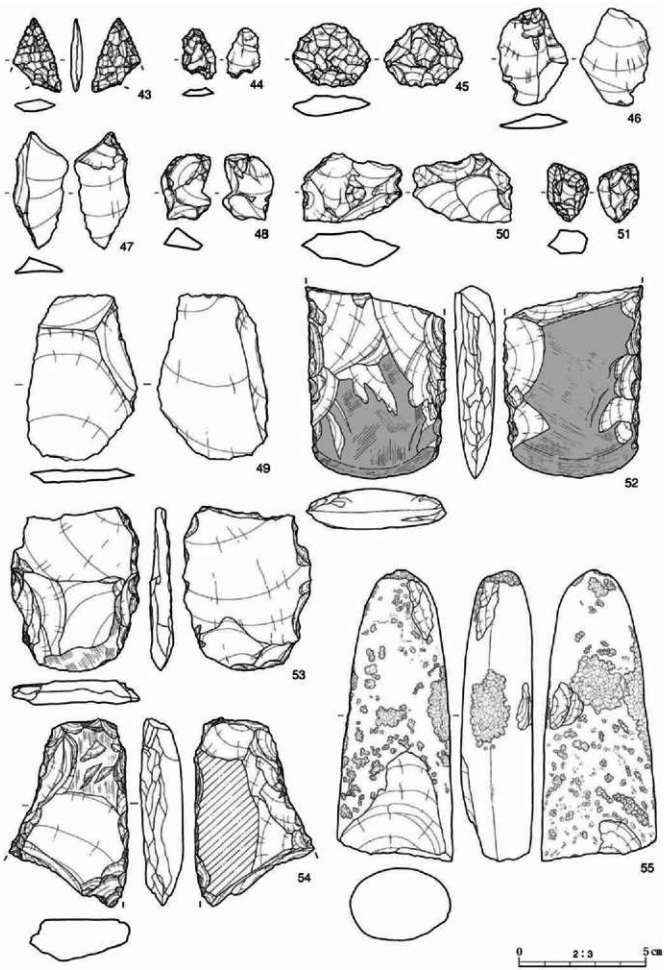
自然面の長軸方向の端部に切り目をいれる砂岩製の切目石錘である。ただ、背面の上端は切り目の周辺に剥離痕がみられる。切り目を施した後、使用等により剥離したものであろう。

敲石・磨石（第７図、57～60）

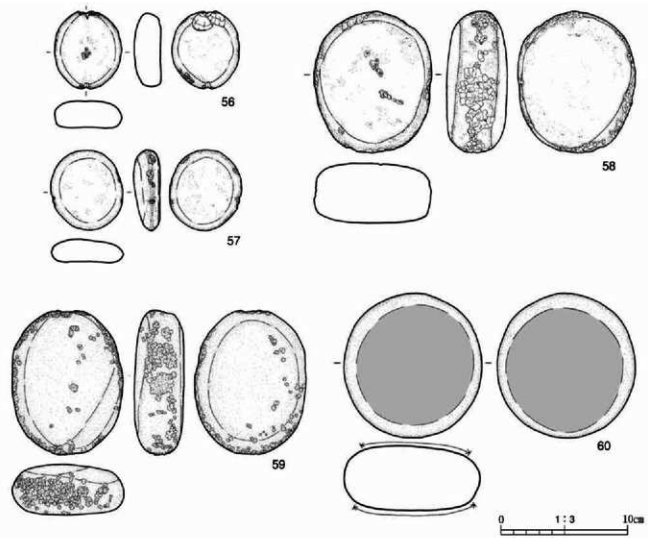
57～59は砂岩製の敲石、60は凝灰岩製の磨石である。敲石をサイズにより大小の二つに分類する。57は親指と人差し指で固定可能な小サイズ、58・59は掌大の大サイズである。いずれも側辺部をラウンドして敲打している。

小結～Ａ区の石器～

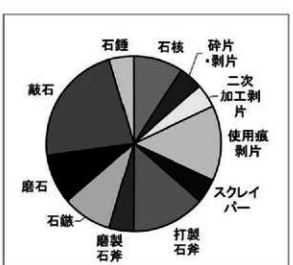
組成と石材についてまとめ、小結としたい。石器の割合は均一しているものの、トゥール類には石斧や敲石・磨石類が目立つ。特に打製石斧が一定量占める点は注意したい。また、石斧にはホルンフェルス、敲石・磨石には砂岩といった周辺で獲得可能な石材に偏りがみられる。その他、チャートの出土量が目立ち、石鏃等のトゥール類から剥片・砕片・石核が存在が確認できるため、周辺で石器製作から一部においては使用までの工程が窺える。流紋岩については、石核１点のみと少なく対応するトゥールが見られない。腰岳産黒曜石は、石核が確認できないが、縦長剥片を剥離した後、石鏃を製作するまでの作業工程が想定される。



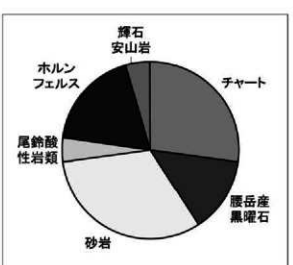
第６図　Ａ区包含層出土遺物実測図６（石器、S=1/2）



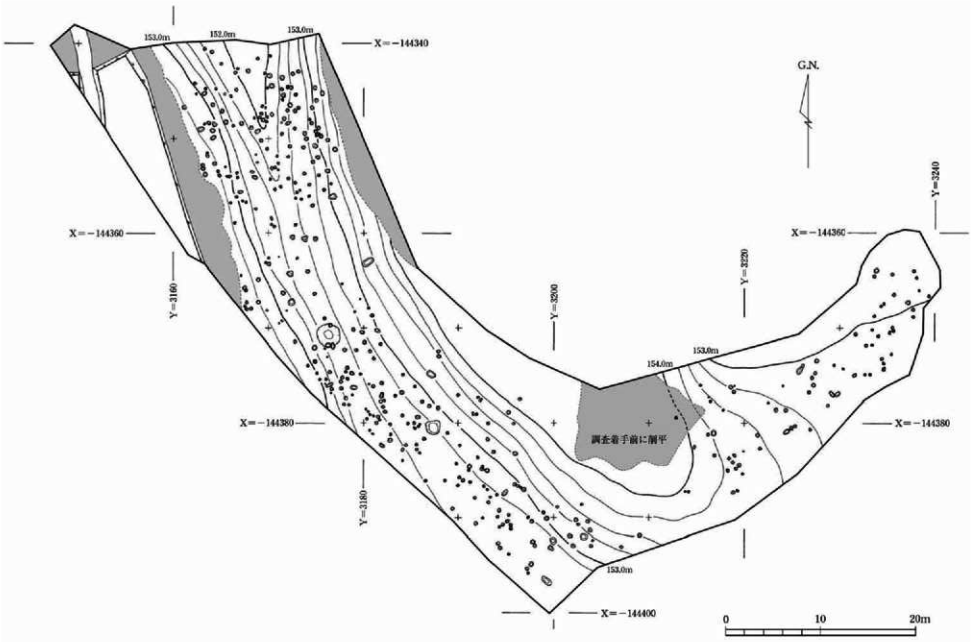
第７図　A区包含層出土遺物実測図７（石器、S=1/2）



第８図　A区石器組成



第９図　A区使用石材組成



第10図　A区遺構分布図（第Ⅴ層上面、S=1/400）

第１表　Ａ区縄文土器観察表

No.	器種・部位	層位	施文・調整等	胎土 角・輝	胎土 雲母	胎土 長・石	胎土 軽・ス	胎土 火山ガ	胎土 砂粒	胎土 他	煤	色調(Hue 標準土色)	備考
1	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 肥厚帯→条痕→ナデ→凹線→刺突 内 条痕	○		○	○	○				外 明褐(7.5YR5/6) 内 明褐(7.5YR5/6)	
2	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 条痕→沈線→貝殻腹縁刺突 内 条痕→ナデ	○		○	○	○			○	外 にぶい褐(7.5YR5/4) 内 褐(7.5YR4/3)	推定口径27.2cm
3	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 ナデ→沈線 内 丁寧なナデ	○		○		○				外 灰褐(7.5YR4/2) 内 にぶい褐(7.5YR5/3)	
4	深鉢 胴部	Ⅲb	外 ナデ→沈線 内 ナデ	○		○		○				外 赤褐(5YR4/6) 内 にぶい黄橙(10YR5/4)	
5	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 ナデ→沈線→刺突 内 ナデ	○		○		○				外 明褐(7.5YR5/6) 内 明褐(7.5YR5/6)	
6	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 丁寧なナデ→沈線 内 丁寧なナデ	○		○	○			褐		外 明赤褐(5YR5/6) 内 褐(7.5YR4/6)	
7	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 ミガキ→沈線 内 丁寧なナデ	○		○	○			褐		外 赤褐(5YR4/6) 内 赤褐(5YR4/6)	
8	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 条痕→ミガキ→沈線 内 条痕→ミガキ	○		○	○				○	外 褐(7.5YR4/6) 内 褐(7.5YR4/4)	外面昆虫の圧痕(3.5㎜) 推定口径36.6cm
9	深鉢 胴部	Ⅲb	外 条痕→ミガキ 内 条痕→ミガキ	○		○	○				○	外 褐(7.5YR4/6) 内 褐(7.5YR4/6)	
10	深鉢 胴部	Ⅲb	外 ナデ→ミガキ 内 条痕→ミガキ	○		○	○				○	外 にぶい赤褐(5YR5/4) 内 暗灰黄(2.5YR4/2)	
11	深鉢 口縁部一底部	Ⅲb	外 ナデ→ミガキ 内 ナデ→ミガキ	○		○	○				○	外 にぶい赤褐(2.5YR4/4) 内 赤褐(5YR4/6)	推定口径22.8cm 推定底径4.2cm
12	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 ナデ→ミガキ 内 ナデ	○		○	○				○	外 にぶい赤褐(5YR5/4) 内 赤褐(5YR4/6)	
13	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 ナデ 内 ナデ	○		○	○				○	外 黒褐(5YR3/1) 内 黄灰(2.5YR4/1)	
14	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 条痕 内 ミガキ	○		○	○				○	外 にぶい黄橙(10YR6/3) 内 にぶい褐(7.5YR6/3)	
15	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 条痕→ナデ 内 丁寧なナデ	○		○					○	外 にぶい褐(7.5YR6/3) 内 にぶい褐(7.5YR5/3)	
16	深鉢 胴部	Ⅲb	外 ナデ 内 ナデ	○		○	○					外 にぶい橙(7.5YR7/4) 内 にぶい橙(7.5YR6/4)	
17	深鉢 胴部	Ⅲb	外 条痕 内 ナデ	○		○				褐	○	外 にぶい黄橙(10YR7/3) 内 にぶい黄橙(10YR7/3)	
18	深鉢 胴部	Ⅲb	外 条痕 内 条痕→ナデ	○		○			○	褐		外 にぶい橙(7.5YR7/4) 内 にぶい橙(7.5YR7/4)	
19	深鉢 胴部	Ⅲb	外 条痕 内 条痕→ナデ	○		○			○	褐		外 橙(7.5YR6/6) 内 にぶい橙(7.5YR6/4)	
20	深鉢 胴部	Ⅲb	外 条痕→ナデ 内 条痕→ナデ	○		○					○	外 にぶい黄橙(10YR7/3) 内 にぶい黄橙(10YR7/3)	
21	深鉢 胴部	Ⅲb	外 条痕 内 条痕→ナデ	○		○			○	褐	○	外 にぶい橙(7.5YR7/4) 内 にぶい橙(7.5YR7/4)	推定胴径37.8cm
22	深鉢 口縁一胴部	Ⅲa・b	外 突帯→条痕→ナデ 内 条痕→ナデ	○		○		○			○	外 にぶい橙(7.5YR7/4) 内 にぶい橙(7.5YR7/4)	推定口径33cm
23	深鉢 口縁部	—	外 条痕→ナデ 内 ナデ	○		○				褐		外 にぶい橙(7.5YR6/4) 内 にぶい橙(7.5YR6/4)	
24	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 突帯→条痕→ナデ 内 条痕	○		○		○				外 にぶい黄橙(10YR7/4) 内 にぶい黄橙(10YR7/4)	内面植物圧痕(3.5㎜・9㎜)
25	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 肥厚帯→ナデ 内 ナデ	○		○				褐		外 灰黄褐(10YR6/2) 内 褐灰(10YR5/1)	
26	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 突帯→条痕→ナデ 内 条痕→ナデ	○		○	○				○	外 明褐(7.5YR5/6) 内 にぶい褐(7.5YR5/3)	
27	深鉢 口縁一胴部	Ⅲb	外 円圏圧痕→条痕→ナデ 内 ナデ	○		○	○	○		赤チ 褐		外 浅黄(2.5YR7/3) 内 浅黄(2.5YR7/3)	推定口径17.3cm
28	深鉢 口縁部	—	外 突帯→条痕→ナデ 内 条痕→ナデ	○		○				褐	○	外 橙(7.5YR7/6) 内 橙(7.5YR7/6)	
29	深鉢 口縁部	Ⅲb	外 突帯→条痕→ナデ 内 条痕	○		○			○	褐	○	外 橙(5YR6/6) 内 にぶい橙(7.5YR6/4)	
30	深鉢 口縁部一頸部	Ⅲb	外 突帯→条痕→ナデ 内 条痕	○		○						外 橙(7.5YR6/6) 内 橙(7.5YR6/6)	
31	深鉢 頸部	Ⅲb	外 条痕→ナデ 内 条痕	○		○					○	外 橙(7.5YR6/6) 内 にぶい黄橙(10YR6/4)	推定胴径36.6cm
32	深鉢 頸部	Ⅲb	外 条痕(屈曲部上)・ナデ(屈曲部下)末葉痕 内 条痕	○		○					○	外 橙(5YR6/6) 内 にぶい黄橙(10YR7/4)	推定胴径44.2cm
33	浅鉢 胴部	Ⅲb	外 ナデ→ミガキ 内 条痕→ナデ	○			○	○			○	外 赤褐(5YR4/8) 内 にぶい赤褐(5YR4/4)	
34	浅鉢 口縁部一胴部	Ⅲb	外 ミガキ 内 ミガキ			○	○	○				外 にぶい黄橙(10YR7/3) 内 にぶい黄橙(10YR7/3)	推定口径25.2cm
35	浅鉢 口縁一胴部	Ⅲb	外 ミガキ 内 ミガキ			○	○	○				外 にぶい黄橙(10YR7/3) 内 にぶい黄橙(10YR7/3)	植物片の圧痕(2.5㎜) 推定口径21.3cm
36	浅鉢 口縁部	Ⅲa	外 ミガキ 内 ミガキ	○		○	○	○			○	外 灰黄褐(10YR4/2) 内 にぶい褐(7.5YR5/4)	
37	浅鉢 口縁部	Ⅳ	外 ミガキ 内 ミガキ			○	○	○			○	外 浅黄橙(10YR8/3) 内 浅黄橙(10YR8/3)	
38	浅鉢 口縁部	Ⅲb	外 肥厚帯→ナデ→穿孔 内 ナデ	○		○	○	○				外 明黄褐(10YR6/6) 内 にぶい黄橙(10YR6/4)	
39	浅鉢 口縁一底部	Ⅲb	外 条痕→ナデ 内 条痕→ナデ	○		○	○	○		橙	○	外 橙(7.5YR7/6) 内 にぶい黄橙(7.5YR7/4)	推定口径21.6cm
40	浅鉢 底部	Ⅲb	外 網代圧痕 内 丁寧なナデ	○		○						外 にぶい黄橙(10YR7/4) 内 にぶい黄橙(10YR7/4)	外面種子圧痕(長軸2.5㎜)
41	浅鉢 口縁一底部	Ⅲb	外 条痕→ナデ 内 条痕→ナデ	○		○	○				○	外 にぶい橙(7.5YR7/4) 内 灰黄橙(10YR6/2)	推定口径32.8cm
42	円盤形土製品 胴部	Ⅲb	外 ナデ→打ち欠き 内 ナデ→打ち欠き	○		○	○				○	外 にぶい褐(7.5YR5/4) 内 にぶい黄橙(10YR5/4)	

※1 胎土 角・輝—角閃石・輝石 雲母—金雲母から黒雲母 長・石—長石・石英 軽・ス—白色・黄褐色の軽石・スコリア 火山ガ—火山ガラス(バブル型が最も多い) を示す
※2 胎土 他の赤チ—赤色を帯びるチャート 褐—褐色の石 を示す
※3 胎土鉱物の同定は、平成18年度 第2回宮崎県埋蔵文化財担当専門職員研修を受け実体顕微鏡で柳田が観察を行い同定した。
※4 色調 左から灰白・黄灰・黄・橙・にぶい褐・褐・赤褐・暗褐・黒褐・黒の順でそれに類すると任意に識別したものである。

第２表　Ａ区石器計測表

番号	器種	石材	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
43	石鏃	チャート	Ⅲa	2.85	1.85	0.45	1.7
44	石鏃	腰岳産黒曜石	Ⅲb	2	1.3	0.3	0.7
45	スクレイパー	チャート	Ⅲa	2.5	3.05	0.8	5.8
46	剥片	腰岳産黒曜石	Ⅲa	3.85	2.75	0.6	4.6
47	剥片	チャート	Ⅲa	4.6	2.2	0.65	5.5
48	剥片	腰岳産黒曜石	Ⅲa	2.6	2	0.85	3.5
49	剥片	凝灰岩	Ⅲb	6.55	4.35	0.55	17.7
50	石核	流紋岩	Ⅲa	2.7	4	1.4	15.3
51	石核	チャート	Ⅲb	2.25	1.65	0.95	3.5
52	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	Ⅲb	7.45	5.45	1.55	86.3
53	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	Ⅲb	6.4	5.05	0.9	34.3
54	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	Ⅲb	7.35	4.7	1.65	64.5
55	磨製石斧	頁岩質ホルンフェルス	Ⅲb	11.4	4.55	2.8	222.5
56	石錘	砂岩	Ⅲb	6.1	5.3	2.15	99.1
57	敲石	砂岩	Ⅲb	6.25	5.7	2	99.4
58	敲石	砂岩	Ⅲb	11.2	9.2	4.8	770.4
59	敲石	砂岩	Ⅲa	11.3	3.95	4	611.5
60	磨石	尾鈴酸性岩類	一括	11.35	10.9	5.15	1021.8

※1 石材同定のは都城市教育委員会2002「横市遺跡群」『都城市文化財調査報告書第58集』による

第３表　Ａ区器種別使用石材構成

石材＼器種	Co	Ch・F	Re	UF	Ah	S	Ax	PAx	SW	Hs	Gs	Total
Ch	2	1		1	1	1						6
ob			1	1	1							3
Sa									1	1	5	7
Os										1		1
Hr							3	1				4
An				1							1	
Total	2	1	1	3	2	1	3	1	1	2	5	22

石材	Total
Ch	6
ob(kw)	3
Sa	7
Os	1
Hr	4
Sh	1
Total	22

器種	Co	Ch・F	Re	UF	Ah	S	Ax	PAx	SW	Hs	Gs	Total
Total	2	1	1	3	2	1	3	1	1	2	5	22

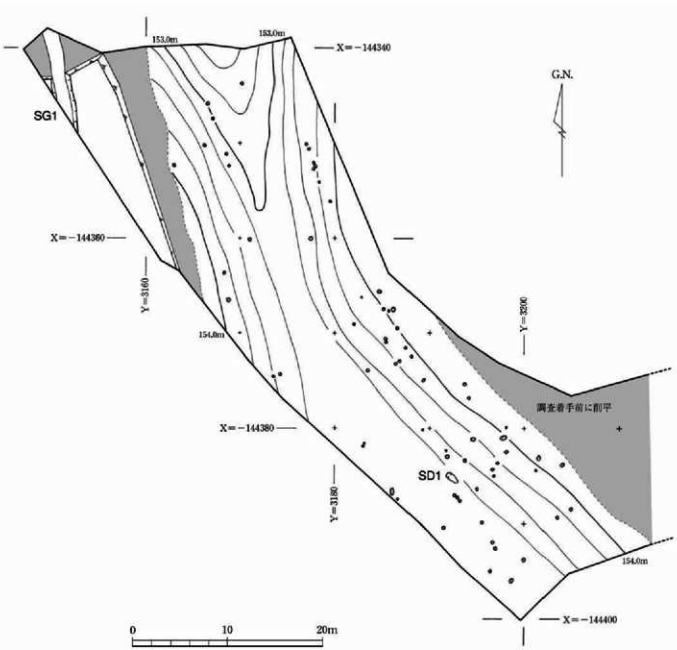
【器種】Co:石核　Ch:砕片　F:剥片　Re:二次加工剥片　UF:使用痕剥片　Ah:石鏃　S:スクレイパー　Ax:打製石斧　PAx:磨製石斧　Dr:石錐　SW:石錘　Gs:敲石　Hs:磨石

【石材】Ch:チャート　ob(kw):桑ノ木津留産黒曜石　Sa:砂岩　Os:尾鈴山酸性岩類　Hr:ホルンフェルス　Sh:頁岩

第２節　古代から中世の遺構と遺物

Ａ区では古代の遺構として土坑墓１基と道状遺構１条を、中世の遺構としては15世紀後半に降下した桜島文明軽石により埋没あるいはその後に復旧したと考えられる畝状遺構（畠跡）を確認した。遺跡周辺では後世の開墾等により桜島文明軽石の堆積状況は良好ではないが、Ａ区は調査着手時点の地形とは異なり、旧地形ではＮ－16°－Ｗの方向で弱い谷地形が存在していたため、その地形を反映したレベル的に低い谷地形中央部付近を中心に畝状遺構は残存していた。

遺物についてはその主たる包含層である桜島文明軽石堆積層下層の黒色土（第Ⅲａ層、第Ⅲｂ層）で、９世紀から13世紀代までの遺物が出土したが、その出土範囲は弱い谷地形の傾斜に相応していた。掘立柱建物跡や溝状遺構などの生活空間を想定させる遺構もＡ区では検出されていないことから、これらの遺物は隣接地からの流入等による可能性が高いと考える。



第11図　Ａ区遺構分布図（古代・中世、S=1/400、等高線は第Ⅳ層上面）

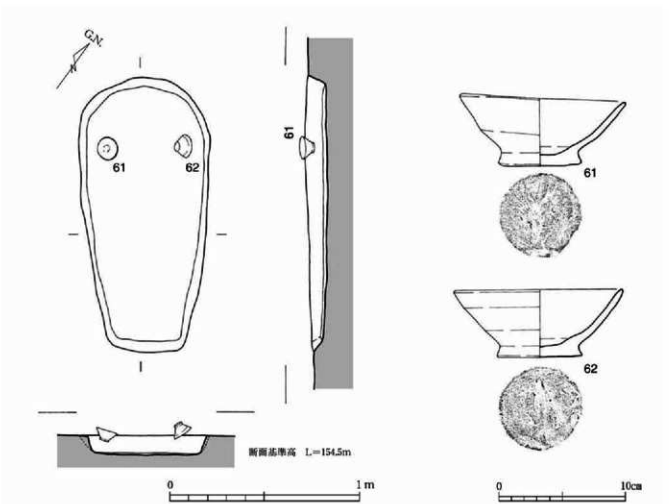
1　遺構

1号土坑墓（第12図、SD1）

Ｆ６グリッドで検出された古代の遺構である。精査段階での見極めが遅れたため、本来の掘り込みレベルより下での検出となった。検出された遺構は検出面で長軸約1.47m、最大短軸約0.7m、最深部で約0.12mを測り、主軸方位をＮ－約38°－Ｅにとる。平面形態は楕状を呈すが、坑の短軸最大幅付近から一方の端部が緩やかな円弧を描く。坑内には、被葬者の頭部から肩部付近と考えられる位置にほぼ完形の碗２個体がシンメトリーな位置関係で出土した。これらの遺物は黒褐色土（Hue2.5Y3/1）の単一埋土中の底面よりやや浮いたレベルで出土しており、片方の埴が逆さまになっていたことなどから埋納時の原位置は止めていないと考えられる。

遺構内に埋納されていた遺物を第12図に示した。

61・62は完形の埴であり、法量的にも技法的にも似通っている。外方に向かいわずかに内湾しながら直線的に開く体部を有し、底部外面は切り離した後に丁寧なナデ調整を施している。底部の回転台からの切り離しはヘラ切り技法によると考えられる。また、底部外面にはともにヘラ状工具による刺突痕が認められる。この刺突痕は回転台から切り離した後に、ヘラ状工具を回転台との間に差し込んで取り上げる際のヘラ起こし痕と考えられる。



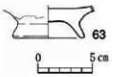
第12図　Ａ区１号土坑墓（SD1、S=1/20）及び遺構内出土遺物（S=1/3）

１号道状遺構（第11図、SG1）

調査区の西端に当たるＢ２グリッドで検出された古代の遺構である。同グリッド付近は杉を植林する際の造成及び耕地確保のために掘削されており、鬼界アカホヤ火山灰の堆積層レベルまで削平されていたことから地形の改変が著しく、検出時点で遺構の上端は既に消失していた。

検出された遺構は確認できた範囲で総延長約10.5m、残存していた下端で幅約1.5mを測る。遺構の延長主軸はＮ－約8°－Ｗであり、隣接する杉林の方向から西側の低地に向かい緩やかに傾斜していた。当初、溝状遺構と考えていたが、底面で硬化面が検出されたことから道状遺構と認定するに至った。

遺構内からは第13図の高台付塊の底部（63）と土師器の細片が出土している。底部内面を平滑に広く確保し、外方に向かい浅い角度で開く体部を有する器形が想定できることから高台付皿と考えられる。貼り付けられた高台には内外面とも丁寧な回転ナデによる調整が認められる。



第13図　Ａ区１号道状遺構出土遺物

畝状遺構（第14図、畠跡）

桜島文明軽石が降下した15世紀後半の農耕に関連する中世の遺構である。

確認された遺構は削平を受け部分的に消失していたが、残存していたその広がりは約666.7㎡、Ａ区調査面積の約27.7%を占める。検出された遺構を概観すると、Ｂ３グリッドからＥ４グリッド方向への広がり（Ａ群）、Ｆ５グリッドからＧ７グリッド方向への広がり（Ｂ群）、Ｇ７・Ｅ９・Ｅ10グリッドで検出された部分的な比較的狭い範囲の遺構（Ｃ群）に大別できる。以下、検出された畝跡について主軸方位、単位と配置、埋土の堆積状況の３つの観点から考察を加える。

畝立ての主軸方位

これら３群の主軸方位を比較するとＡ群がＮ－約25°－Ｅ、Ｂ群がＮ－約31°－Ｅとさほど大きな相異がないのに対し、Ｃ群のＥ８・Ｅ９グリッド付近で検出された遺構はＮ－約22°－ＷとＡ群・Ｂ群に対して曲尺状に近い位置関係を保っていた。この位置関係の相異を生み出す要因として、霧島御池軽石堆積層上面の地形として表れた弱い谷地形（第11図）を反映した第Ⅲａ層の堆積状況が考えられ、傾斜を意識しそれにほぼ直交させて畝立てしていたことが分かる。

なお、Ｅ４グリッド南端とＧ７グリッドの調査区外周に沿って主軸方位を異にする遺構が一部検出された。これらは、Ｅ４グリッドの遺構はＢ群、Ｇ７グリッドの遺構はＣ群に包括されると考える。

畝跡の単位と配置

遺構を構成する畝跡１単位レベルの比較では、Ａ群が１単位の長さが10mを超える規模の畝を並列させる配置になっているのに対し、Ｂ群では平均して２m前後の小さな畝を１単位として一定方向に連続させる配置構成となっている。さらに、Ａ群が直線的かつ整然とした配置であるのに対して、Ｂ群の畝の配置がやや不統一であることもその相異として際立っている。また、Ｂ群の畝の配置には、Ｆ５グリッドにみられるような畝立ての方向と直交する意図的に配置した区画的要素を併せもつ間隔が確認でき、「１単位→小ブロック」という構成意識が垣間見える。

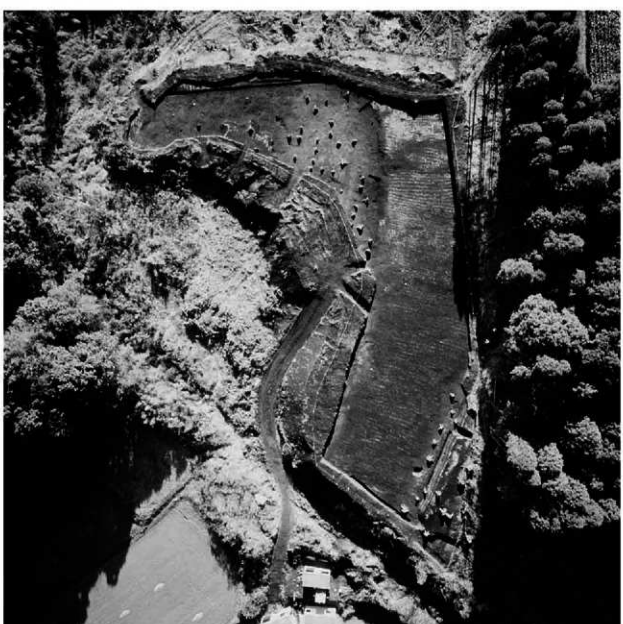
なお、Ｃ群については完全な畝跡１単位を検出できなかったため比較の対象から除外する。

畝跡の埋土堆積状況

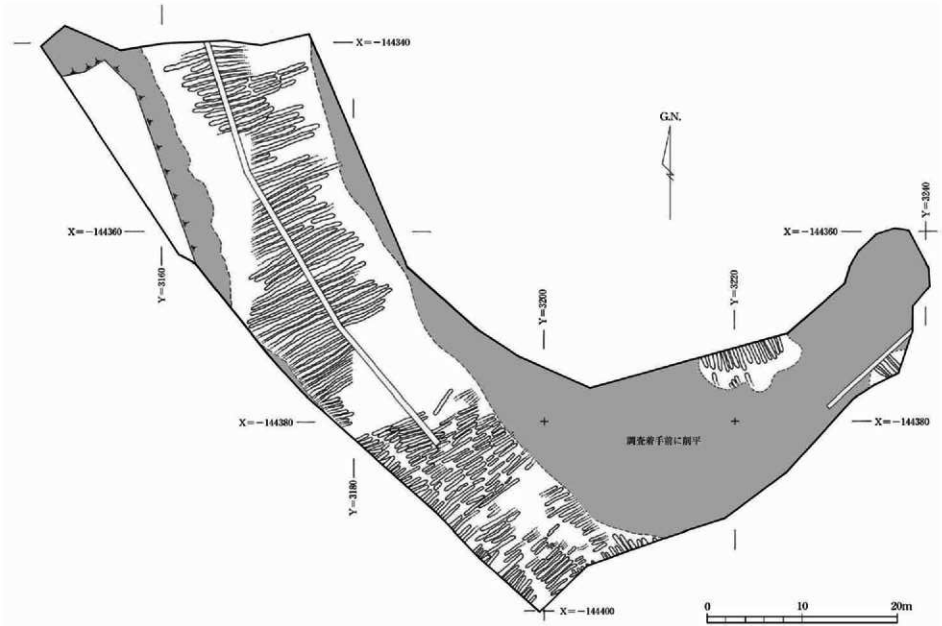
埋土の断面観察の結果では、桜島文明軽石と第Ⅲa層の黒色土の混濁が強いA・C群と桜島文明軽石にわずかにⅢa層の黒色土が混じるB群とに二分できる。A・C群の混濁はⅢa層の黒色土を巻き上げたような堆積状況を呈していたのに対し、B群の残存状況が良好な埋土では、桜島文明軽石の微細粒が埋土中下層に顕著に認められ、黒色土が水成作用によりその間隙に混入した様子が観察できた。

以上、観点別に比較を行ったが、主軸方位については単純に地形的制約によるものと考えることが自然でありそれ以上の言及は避ける。しかし残り２つの観点から、B群は桜島文明軽石の降下による埋没状態、A群・C群は同軽石降下後の復旧という時期差が想定できる。

なお、A群・C群については近世以降の遺構である可能性も否定できないが、A区においては近世の遺構・遺物が確認できなかったこと、埋土の堆積状況から桜島文明軽石降下から時間的経過がさほど大きくない時点での所産であると判断したことを根拠に中世の遺構としてここで取り上げた。



畝状遺構検出状況



第14図　畝状遺構実測図（中世、S=1/400）

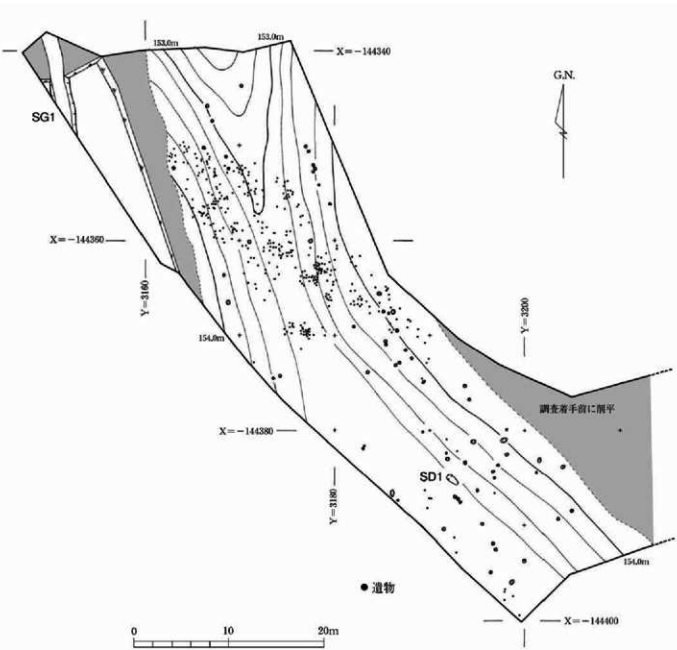
2　遺物

層位的には基本層序における第Ⅲa層が古代から中世の遺物の主たる包含層である。

出土状況としては第15図に示すようにＣ３・Ｃ４・Ｄ４の３グリッド付近にやや集中する傾向が見られたものの、遺構に伴うものではなくその多くが包含層からの出土である。谷地形の開放部の基点付近に当たり地形的要因による流れ込み等の可能性も指摘できる。遺物の大半は食膳具としての土師器坏・埦、煮炊具としての土師器甕である。そのほか、須恵器の甕・小型壺なども出土している。

ここではそれらの遺物について器種・調整などの特徴観察をもとに分類し、若干の説明を加える。

なお、個々の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。



第15図　Ａ区遺物分布図（部分、古代・中世、S=1/400）

土師器（第16～18図、64～87）

皿（第16図、64～67）

すべてヘラ切り離しの底部を有する皿である。口径は64が約8.5cm、65～67は9.5cm前後、底径は67がやや小さいが、いずれも6.5cm前後である。64・65は口唇部をシャープに、66・67はやや丸く収める。また、67は底部から体部への立ち上がり付近に弱い屈曲が認められる。個体間の形態差は小さい。

坏（第16図、68～72）

68は直線的に外方に開く体部を有する。やや風化が進んでいるが底部はヘラ切り離しの後に丁寧なナデ調整が施されている。69は口径、底径ともにやや大きめの坏である。器壁が比較的厚く体部は緩やかな膨らみをもって立ち上がり口唇部丸く収める。70・71はヘラ切り離しの底部片である。70は68に、71は69に類する器形と考えられる。72は硬く焼き締めた手捏ねで成形された小型の坏である。

円盤状高台埦（第16図、73～76）

73～76は円盤状高台埦の底部一括資料である。いずれも底部外面にはヘラ切り離しの後に丁寧なナデ調整を施している。74・75には回転台から取り上げる際のヘラ起こし痕が認められる。75～77の高台周縁は丸く収めるのに対し、76はシャープである。75の内面には内側に向かって弱く突出した段が認められる。体部がやや緩い角度で外方に向かい開き、底径も他と比してやや大きい。

高台付埦（第16図、77～87）

77は器表面がやや風化気味であるが内外面ともに丁寧な回転ナデにより成形されている。78はやや肉厚の高台を有する底部である。高台外面には、わずかであるが外反傾向が認められ、内面は緩やかに膨らんでいる。82～87は内外面のほぼ全面に及ぶ丁寧なミガキによる器表面調整、白磁碗Ⅳ類の玉縁口縁に似た肥厚する口縁部、退化傾向にある低い高台、これらの３要素を有するもしくはそれに類する一群である。器表の色調はいずれも淡黄色もしくは浅黄色を呈す。79は器表面は内外面ともに丁寧なミガキを施しているが、やや風化気味であり単位が判然としない。体部は緩やかに膨らみながら立ち上がり口縁部付近でわずかに内反する。退化した低い高台は外方に向かい鋭く開き、内面から外面ともに丁寧な回転ナデ調整で仕上げる。80は79と比して直線的に外方に開く体部を有する。口縁部付近の内反は認められない。81は断面が正三角形に近い直立する低い高台を有する底部である。79に類する緩やかに膨らみながら立ち上がる体部を有する器形が想定できる。

84～87は口縁部の一括資料である。87を除く５点は玉縁状に肥厚する。83にはわずかではあるが内反傾向が認められる。86は小さく丸く収める玉縁状を呈する。87は内外面に丁寧なミガキを施す端反りの口縁であり、黒色土器A類（内黒）に属する91・92の口縁部に類する。

黒色土器（第17図、88～93）

いずれも内面のみに黒化処理を施すA類（内黒）の資料である。88は外方に向かい直線的に開く体部と高さのあるしっかりした高台を有する。高台は接地面から周縁にかけてやや浮き身となる。内面のミガキは口縁部付近から底部内面中央に向けて集約されるように密に施される。89・90は88と同じく外方に向かい直線的に開く体部を有する個体である。89は器壁がやや肉厚である。91・92は内外面ともにミガキが施される端反りの口縁部であり器壁はやや薄手である。93は丁寧に成形された底部である。内面の風化が著しくミガキの単位は不明である。

墨書土器（第17図、94・95）

94は坏もしくは埦の体部、95は坏の底部である。94はB区で大量に確認されている「山」と「水」の合わせ文字「𡳞」が読み取れる。95は文字あるいは記号の一部である。

なお、墨書土器に書かれた文字や記号についてはB区の出土遺物も合わせて参照にされたい。

鉢（第17図、96～101）

胴部に膨らみを有さず底部から外方に開く器形から鉢と考えられる。口縁部のヨコナデ、内面の口縁部から胴部への屈曲部以下の粗いケズリ、外面のナデ調整は各個体とも共通している。

96～99は底部から口縁部までやや直立気味に直線的に開く器形を呈する。96は口縁部の外反傾向が弱いが、97・100・101は水平方向に近い角度で側方へと開いている。いずれの個体にも強弱の相異はあるが、口縁部内面から胴部内面への屈曲部に明瞭な稜が認められる。

甕（第17・18図、102～109）

口縁部の外反傾向と胴部の張りが顕著である。102・103はやや直立気味に立ち上がる器形を有する。102の口縁部内面には刺圧痕が残る。104～108は口縁部の一括資料である。104は緩やかに弧を描きながら外反する。器壁がやや薄手で口縁端部は丸く収める。105・106は外方に向かって立ち上がり、内面の口縁部から胴部への屈曲部に明瞭な稜を有する。108の個体は口縁部がやや肥厚する傾向にある。109は小型の甕である。口縁部から底部まで器壁の厚みはほぼ均一である。各個体とも調整は鉢と共通する。

須恵器（第18図、110～117）

坏（第18図、110）

体部から口縁部にかけて外反する器形を有する坏である。底部はヘラ切り離しである。

高台付埦（第18図、111～113）

111は焼成時に変形し、外方に開くやや薄手の体部中位から口縁部にかけて波状に変形している。調整は内外面ともに回転ナデで丁寧である。高台は接合面から接地面までがほぼ同じ厚みを有し、外面に明瞭な稜が認められる。接地面の周縁はシャープに仕上げる。112は直線的に開く体部を有し口縁端部は肥厚し丸く収める。113は体部下位で一度弱く屈曲し、さらに体部上位で外反傾向が認められる。

甕（第18図、114）

弱い外反傾向が認められる甕の口縁部であり、端部を平滑に仕上げている。確認できる確実な調整はナデとヨコナデでのみであるが、内面に当て具痕の一部と考えられる痕跡がわずかに認められる。

壺（第18図、115～117）

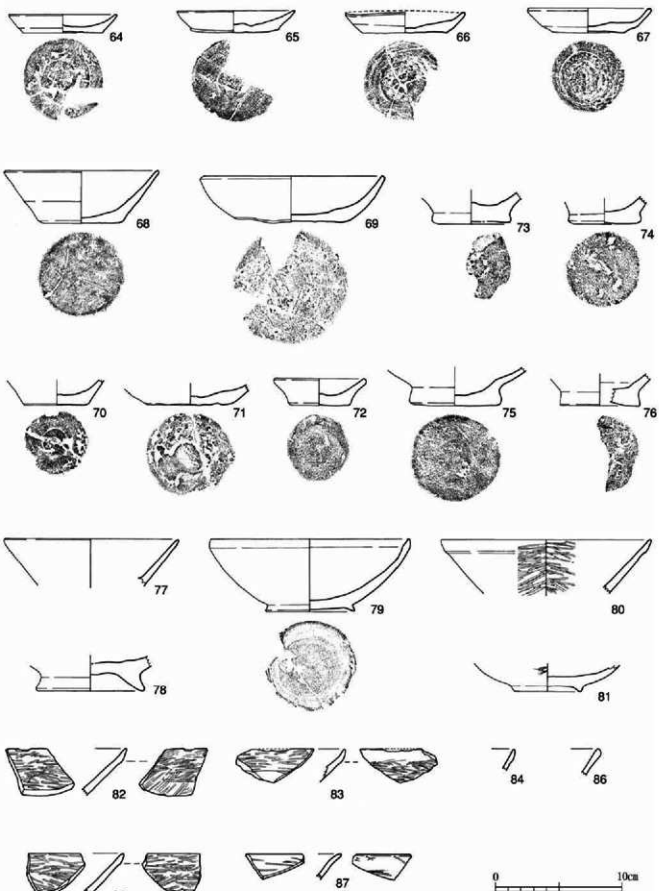
いずれも小型の壺である。115は口縁部から頸部を失う資料であるが、逆「く」の字の受け口状の口縁を有すると考えられる。底部外面には記号と考えられる「＋」の刻書が認められる。116・117は短頸壺である。116の器高が117をやや上回るが個体差は小さい。

陶磁器（第18図、118）

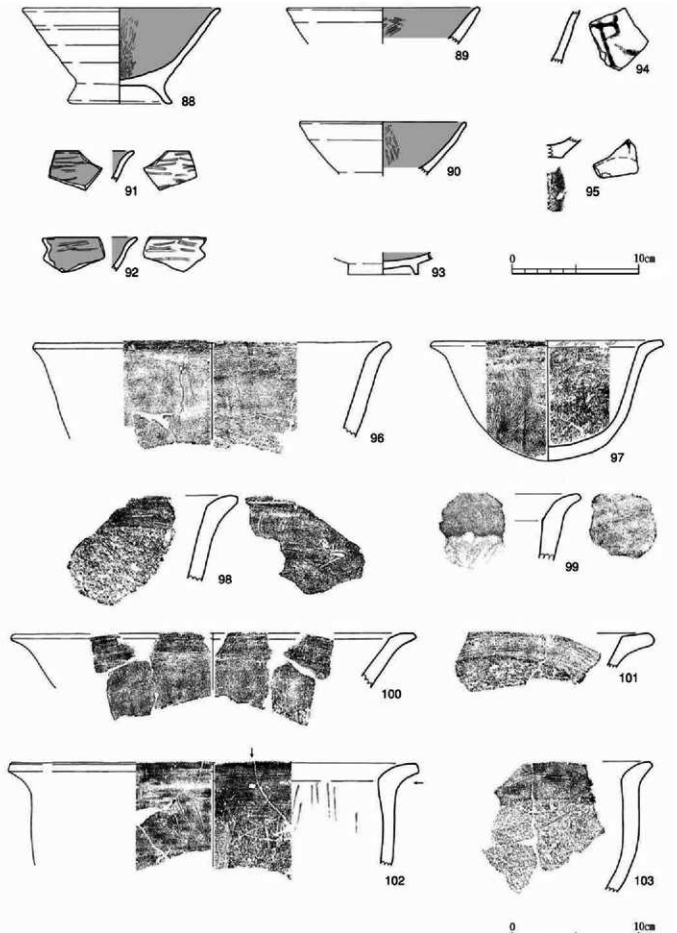
越州窯系青磁碗の口縁部である。大宰府分類の1-1a類に相当する。

鉄製品（第18図、119）

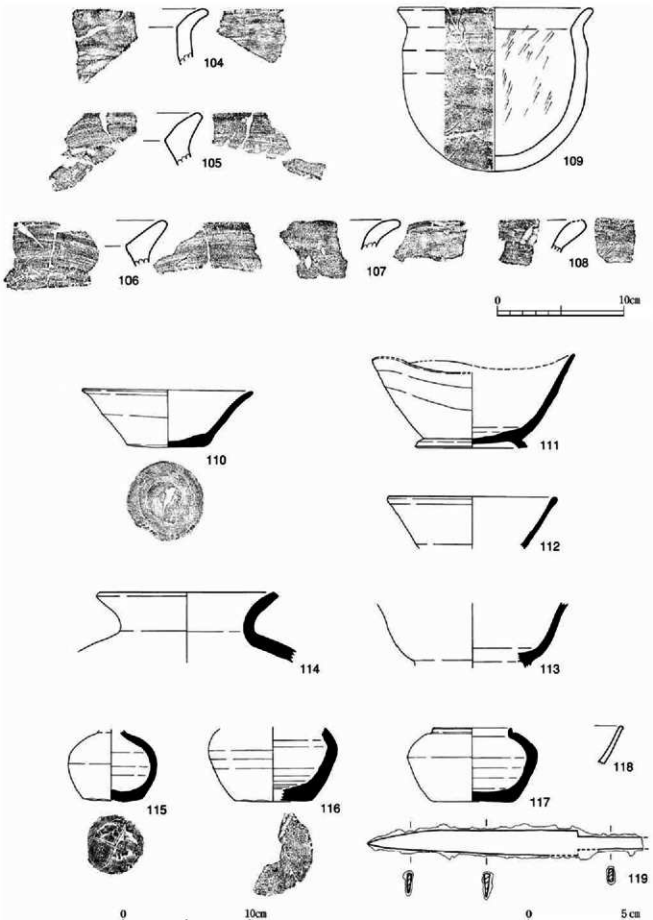
119は刀子である。腐食が激しいが、形状をよく止める。残存最大長約14.5cm、重量17.7ｇである。



第16図　A区包含層出土遺物実測図８（土師皿・坏・高台付埦、S=1/3）



第17図　A区包含層出土遺物実測図９（黒色土器・墨書土器・鉢・甕、S=1/3）

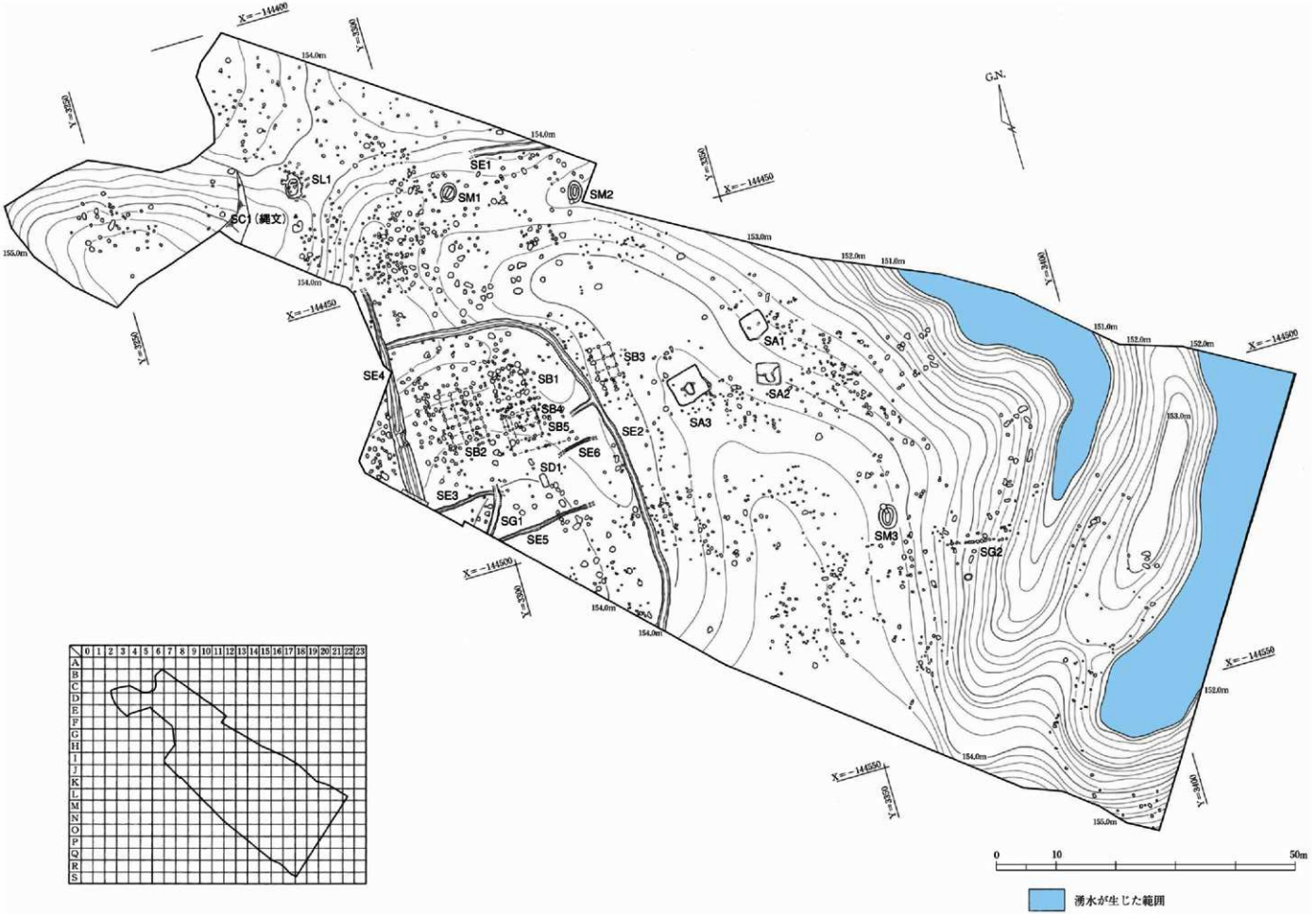


第18図　A区包含層出土遺物実測図10（土師器甕・須恵器・青磁 S=1/3、金属製品 S=1/2）

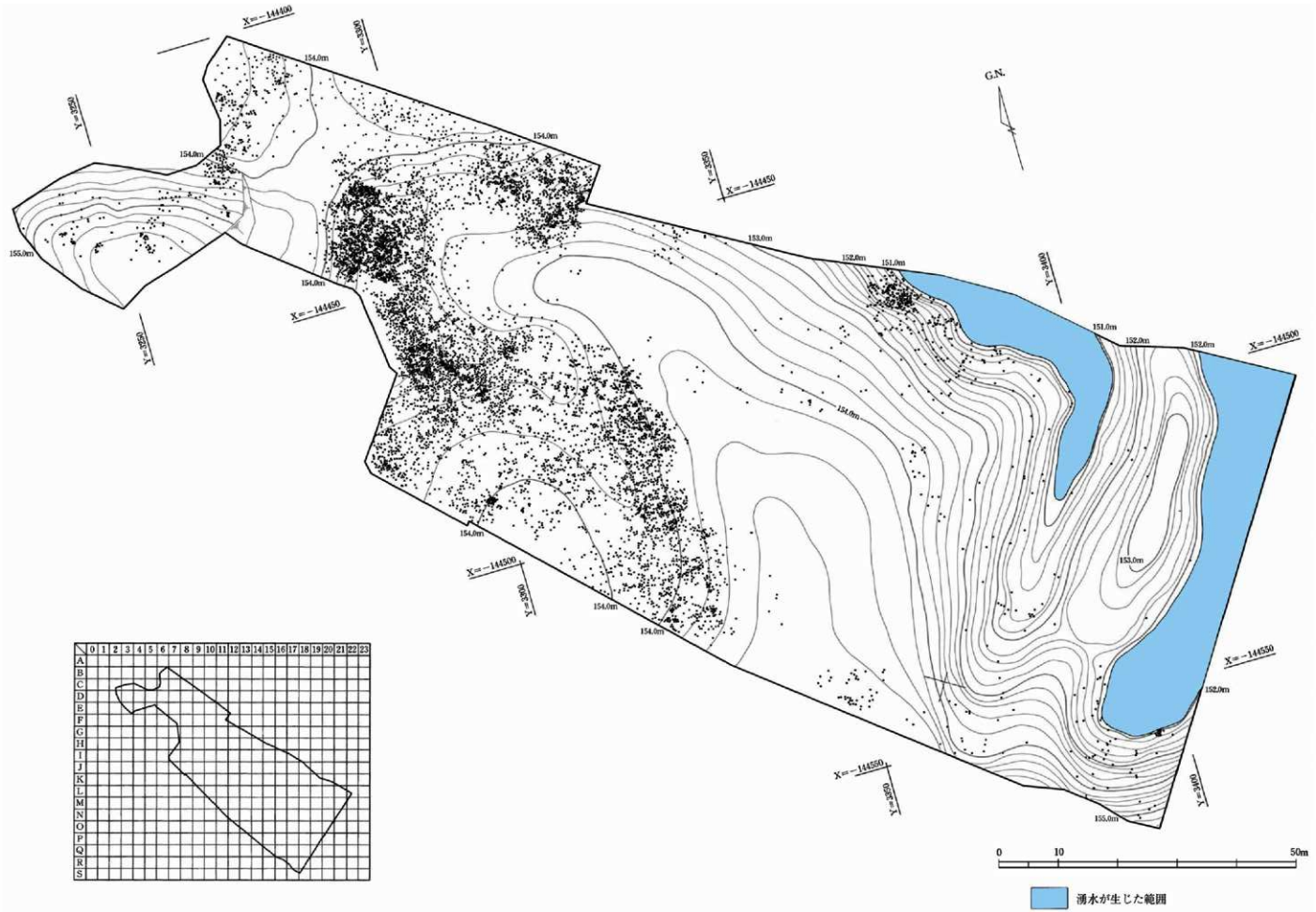
第４表　Ａ区遺物観察表（古代・中世）

遺物番号	種別	器種・部位	層位位置	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
61	土師器	埦 口縁部～底部	SD1	13.1	6.5	5.7	回転ナデ ヘラ切りのあと工具ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2～3㎜大の赤褐色粒	
62	土師器	埦 口縁部～底部	SD1	13.4	6.75	5.3	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	3㎜大の赤褐色粒 4㎜大のにぶい褐色粒	
63	土師器	高台付皿 底部	SG1	－	(6.6)	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	微細黒色粒	
64	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(8.6)	(6.2)	1.45	ナデ 回転ナデ ヘラ切り底	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の灰色・茶色粒	
65	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(9.3)	6.9	1.7	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細透明光沢粒 2㎜以下の黒色・灰色粒	
66	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	9.4	6.8	1.7	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の灰白色・赤褐色粒 0.5㎜以下の黒色・無色透明光沢粒	
67	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(9.45)	5.7	1.9	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1.5㎜以下の赤褐色・黒色・灰色粒 微細無色透明粒・黒色光沢粒	
68	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	12.2	6.2	4.1	回転ナデ ヘラ切り底（風化顕著）	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2㎜大の明褐色粒	
69	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	14.6	8.8	3.75	ヨコナデ スス付着 回転ナデ ヘラ切り底	ヨコナデ 回転ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	微細黒色粒	
70	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	5.2	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細透明光沢粒 2㎜以下の茶色粒	
71	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	6.7	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	明褐灰	にぶい橙	2㎜以下の茶色・灰黒色粒	
72	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(6.9)	4.6	2.1	ナデ ヘラ切り底	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細無色透明粒 1㎜以下の黒色光沢鉱物粒・橙色粒	
73	土師器	埦 底部	Ⅲa層	－	(6.2)	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の茶色粒	
74	土師器	埦 底部	Ⅲa層	－	5	－	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	微細透明光沢粒 1㎜以下の白色・茶色粒	
75	土師器	埦 底部	Ⅲa層	－	7.0	－	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ（風化気味）	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1.5㎜以下の橙色・赤褐色・黒粒 1㎜以下の黒色・無色透明光沢粒	
76	土師器	埦 底部	Ⅲa層	－	(6.35)	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1㎜以下のにぶい赤褐粒	
77	土師器	高台付埦 口縁部～体部	Ⅲa層	(13.8)	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の灰褐色粒	
78	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	8.4	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の茶色粒	
79	土師器	高台付埦 口縁部～底部	Ⅲa層	(15.65)	7.5	5.7	回転ナデのあとミガキ 回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	精良	
80	土師器	高台付埦 口縁部～体部	Ⅲa層	(16.3)	－	－	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	精良 微細光沢粒	
81	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(5.2)	－	ミガキ 回転ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の褐灰色粒	
82	土師器	高台付埦 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	ミガキ	ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	精良	
83	土師器	高台付埦 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	ミガキ	ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	精良	
84	土師器	高台付埦 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細黒色粒・光沢粒	
85	土師器	高台付埦 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	精良 微細黒色粒	
86	土師器	高台付埦 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	ミガキ（風化顕著）	ミガキ（風化顕著）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細黒色粒・光沢粒	
87	土師器	高台付埦 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ミガキ	ミガキ	黒褐 灰黄褐	黒褐	1㎜以下の透明光沢粒	
88	土師器	高台付埦 口縁部～底部	Ⅲa層	(15.1)	7.9	7.5	回転ナデ ナデ ミガキ	ミガキ	にぶい橙	黒	1㎜以下の透明光沢・黒色光沢粒 2㎜以下の茶色・黒色・灰色粒	黒色土器(内黒)
89	土師器	高台付埦 口縁部	Ⅲa層	(14.9)	－	－	回転ナデ ミガキ	丁寧なミガキ	黒 にぶい橙	黒	微細無色透明鉱光沢粒・黒褐色粒	黒色土器(内黒)
90	土師器	高台付埦 口縁部～体部	Ⅲa層	(12.8)	－	－	回転ナデ ミガキ	ミガキ	にぶい橙	黒	1㎜以下の透明光沢粒 茶色・黒色・灰色粒	黒色土器(内黒)
91	土師器	高台付埦 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 褐灰	黒褐	1㎜大の透明光沢粒・灰色粒	黒色土器(内黒)
92	土師器	高台付埦 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ミガキ	ミガキ	灰黄褐	褐灰	微細無色透明鉱光沢粒 黒褐色粒	黒色土器(内黒)
93	土師器	高台付埦 底部	Ⅲa層	－	(5.5)	－	ミガキ	ミガキ	灰黄褐	黒	1㎜以下の茶色粒 微細透明粒	黒色土器(内黒)
94	土師器	坏 体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細透明光沢粒・黒色粒	墨書土器
95	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ ナデ ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	微細透明光沢粒・黒色粒	墨書土器
96	土師器	鉢 口縁部～体部	Ⅲa層	(28.4)	－	－	ヨコナデ ケズリ状のナデ ナデ	ナデ 粗いナデ	黒	褐	微細白色粒	
97	土師器	鉢 口縁部～底部	Ⅲa層	(18.5)	－	9.45	ケズリのあと粗いナデ	ケズリ ケズリ状のナデ	黒褐	にぶい褐	3㎜大の明黄褐色粒 4㎜大の赤褐色粒	
98	土師器	鉢 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ケズリ	黒	灰黄褐	5㎜大の赤褐色粒	
99	土師器	甕 口縁部	Ⅲb層	－	－	－	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ケズリ	黒	にぶい赤褐	2㎜以下の白色粒 4㎜大の明赤褐色粒	
100	土師器	鉢 口縁部～体部	Ⅲa層	(32.0)	－	－	ヨコナデ 粗いヨコナデ ナデ	ナデ 粗いナデ	黒	にぶい褐	1㎜以下の白色粒	
101	土師器	鉢 口縁部	Ⅲa層	(24.6)	－	－	ヨコナデ ナデ	ナデ	黒褐	暗褐	1～2㎜の白色・乳白色鉱物粒	
102	土師器	甕 口縁部～胴部	Ⅲa層	(32.4)	－	－	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ケズリ	黒 にぶい褐	にぶい褐	1㎜前後の赤褐色・白色粒	
103	土師器	甕 口縁部～胴部	Ⅲa層	－	－	－	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ケズリ（風化気味）	暗赤褐	にぶい赤褐	1㎜以下の白色砂粒・灰色粒	
104	土師器	甕 口縁部	Ⅲb層	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ 工具ナデ	灰黄褐	にぶい橙	2㎜大の石英粒	
105	土師器	甕 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の微細赤褐色粒	
106	土師器	甕 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	微細暗赤褐色粒	
107	土師器	甕 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ナデ	粗いヨコナデ	にぶい褐	褐	5㎜大の黒色粒 1㎜大の石英粒	
108	土師器	甕 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ヨコナデ ナデ	ナデ	にぶい橙	黒褐	1㎜以下の微細黒色粒	
109	土師器	甕 口縁部～底部	Ⅲa層	(15.4)	－	12.8	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ケズリ 粗いナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	5㎜前後の黒色粒 3㎜大の石英粒	
110	須恵器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	13.5	6.3	4.5	回転ナデ ヘラ切り 灰かぶり	回転ナデ	灰黄褐	灰黄褐	精良	
111	須恵器	高台付椀 口縁部～底部	Ⅲa層	15.9	7.5	6.6	回転ナデ 灰かぶり	回転ナデ 回転ナデのあとナデ	黄褐 黒褐	暗灰黄	精良	
112	須恵器	高台付椀 口縁部～体部	Ⅲa層	(12.8)	－	－	回転ナデ 回転ナデのあとナデ	回転ナデ	灰黄 黄灰	灰黄 黄灰	精良 4㎜以下の灰色粒	
113	須恵器	椀 胴部～底部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	褐灰 褐	褐灰	微細無色透明鉱光沢粒 灰褐色・にぶい橙色粒	
114	須恵器	甕 口縁部～肩部	Ⅲa層	(13.6)	－	－	ナデ	ナデ	黄灰	黒褐 黄灰	微細無色透明鉱光沢粒 3㎜以下の黒褐色・灰白色粒	
115	須恵器	小型壺 胴部～底部	Ⅲa層	－	4.6	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	暗灰黄	黄灰	1㎜以下の白色・黒色粒	
116	須恵器	小型短頸壺 胴部～底部	Ⅲa層	－	(6.1)	－	回転ナデ 灰かぶり ヘラ切り	回転ナデ	灰	灰	精良	
117	須恵器	小型短頸壺 口縁部～底部	Ⅲa層	(6.2)	(6.4)	5.8	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	黄灰	黄灰	1㎜以下の白色・黒色粒 微細透明光沢粒	
118	青磁	碗 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	精良 灰白色粒	越州窯系青磁

筆無遺跡　B区



第１図　Ｂ区遺構分布図（第Ⅳ層上面、S=1/600）



第２図　Ｂ区遺物分布図（S=1/600）

第Ⅳ章　B区の調査

序説　B区の地形的概要

A区の東側に谷地形を隔てて広がり、その東側から南側にかけて調査区を取り巻くように位置する比高差10m前後の台地丘陵裾部までがB区（B～D１地点）である。平成15、16年度に調査を実施した３地点（B・C・D１地点）は、最近まで耕地として利用され平坦な地形を呈していた。また、平成17年度に調査を実施したD２地点は畑地としての利用が早い段階に放棄され一部の植林を除いて大半は荒地であった。しかし、B区の本来の地形は調査範囲が広がるとともに次第に明らかになり、遺構・遺物の分布状況は谷地形等が複雑に入り組んだその地形的制約を大きく受けていたことも合わせて明らかになった。そこで、遺構・遺物の詳述に先立ちB区の地形的概要をここで述べることにする。

なお、B区の地形全体の様相については遺構分布図（P41・42、第１図）を参照されたい。

B区の最高標点は縄文時代の土坑（SC1）が検出されたD５グリッドの南西に隣接するE４グリッドで、海抜絶対高約155.7mである。次いで東端のS18グリッドの約155.5mがそれに続く。調査区内の比高差は埋没谷を検出したJ18グリッド付近の谷筋のレベル約151.0mと比較すると約６mである。しかし、この埋没谷には大量の流入土が堆積し湧水も生じたことから谷底の最深部を確認するに至っておらず、実際には６m以上の比高差があることは確実である。さらに、当初比較的平坦な地形を想定していたB・D１地点には調査区南側の台地丘陵から派生する弱い尾根状の地形が北北西の方向に張り出していたことが判明した。この弱い尾根の張り出しは、M13グリッド付近で現地表面下約－0.4m前後で検出され、基本層序第Ⅴ層の霧島御池軽石の一次堆積層より上位の層まで削平されていた。表土から同軽石堆積層より上位層までの堆積層厚が本遺跡内では約1.5m、尾根地形の検出レベルが約154.5m前後であったことを考え合わせると地形の改変以前は156m近いレベルを有していたと想定できる。しかしながら、後背の台地丘陵と比するとかなり低いレベルであることから、その裾部付近から緩やかに派生した幅広の舌状を呈する尾根地形であるといえる。この弱い尾根地形上で弥生時代の竪穴住居跡が３軒検出されたことも、一定面積を有するなだらかな平坦面が展開していたことを裏付けるものである。

古代から中世の遺構・遺物の分布状況はこの尾根地形を境にしてその西側と東側で大きな相異を見せる。掘立柱建物跡や溝状遺構等の主たる遺構や該期の遺物の分布範囲は尾根西側の標高153.2～154.0mの範囲にほぼ限定され、それ以外の範囲では希薄になる。尾根の東側に至っては、性格が明らかな遺構は周溝墓１基と浅いピットが連なる道状遺構１条となり、遺物の出土数も激減する。尾根地形東側のこのような遺構・遺物の分布状況を生み出すもう一つの地形的な要因として、尾根地形とともに検出された谷地形と間断なく生じていた湧水があげられる。本遺跡近くの台地丘陵裾部には、季節により水位の変化があるものの今なお湧水が生じ小沼となっている場所（P９、第Ⅰ章第２図の「★」地点）もあり、調査区内で確認した湧水も台地が蓄えた雨水が層界から滲出していることに起因すると考えられる。

しかしながら、尾根の西側の土層堆積状況と谷地形の埋没状況を観察した際、1471年前後に一定の時期幅をもって降下したとされる桜島文明軽石の一次堆積層は、層位的レベル差はあるものの２つの場所ではともに谷地形等を反映せずに水平に堆積していた。こられらの土層堆積状況を一つの根拠として、15世紀後半頃までには谷地形も徐々に埋没し、現在我々が目にする現地表面に近い比較的起伏の少ない地形へと変貌していたと推察することができる。

第１節　縄文時代の遺構と遺物

Ｂ区では縄文時代の後期から晩期の土坑３基が検出され、縄文時代早期・後期前葉から晩期後半にかけての遺物が出土した。遺構はＣ地点に限定され少数であるのに対し、遺物は断絶的であるが幅広い時期の資料が出土している。早期の遺物はＣ地点・Ｄ２地点の急斜面に散逸して出土しており、そのほとんどが周辺からの流れ込みの可能性が高く原位置を保ってはいないと考えられる。また、最も多い晩期の遺物については、晩期の土坑が検出されていることから、当該期において何らかの土地利用が考えられるが、ピットや性格不明の落ち込みといった小規模な遺構しか検出されなかった。以下、遺構と遺物について説明を行う。

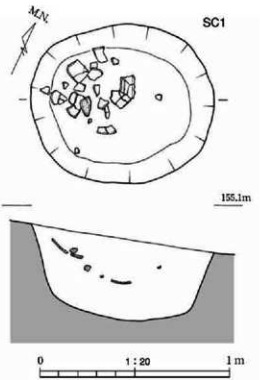
１　遺構

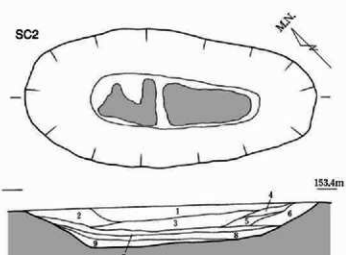
Ｂ区ではＶ層で土坑３基を検出した。１号は窪地の地形の方向に向かう傾斜面で検出した。土坑内からは晩期の遺物が出土しているが、２号・３号は遺物が検出されなかった。２号・３号は、検出面がＶ層と古代以降の遺構検出面より深い検出面であることから、遺物は検出されなかったものの当該期に帰属する遺構の可能性が高いと考えられる。

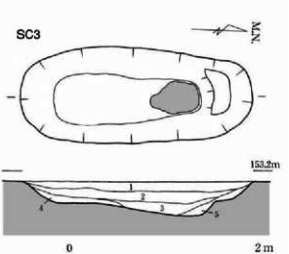
土坑

１号土坑（第３図、ＳＣ１）

平面プランは楕円形で、長軸約0.97m、短軸約0.82m、深さ約0.50mである。遺構埋土の中位より第２図に示した１～４が出土している。遺構内の出土土器は全て浅鉢で個体数にして３個体分に相当するが、１の土器片が多数残っていたの





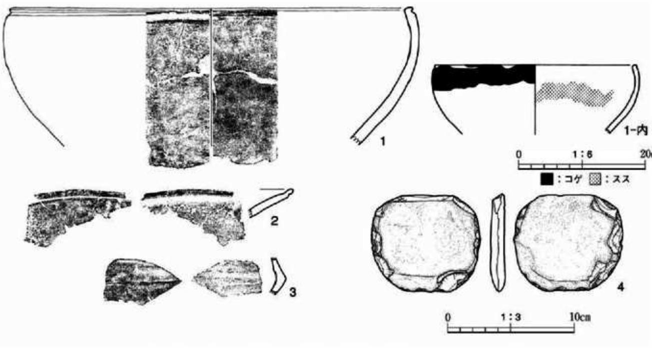


1　褐色土（Hue7.5YR4/6）　しまりが強く硬くしまっている。Kr-Mの粒子を含む。
2　黒褐色土（Hue7.5YR3/1）　Kr-Mの粒子をわずかに含む。硬くしまっている。
3　暗褐色土（Hue7.5YR2/3）　２よりややしまりが強い、Kr-Mの粒子の含有率は２に比して低い。
4　黒褐色土（Hue7.5YR2/3）　Kr-Mの粒子を全体的に含みしまっている。
5　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　Kr-Mの粒子を全体的に含む。４に比してややしまりが弱い。
6　暗褐色土（Hue7.5YR3/3）　３と組成的には近似、Kr-Mの粒子をわずかに含む。
7　黒褐色土（Hue7.5YR2/2）　４と近似するが、Kr-Mの粒子全体的に散漫に含む。
8　黒色土（Hue7.5YR2/1）　しまりがありやや粘ふかい、Kr-Mの粒子をごくわずかに含む。
9　黒色土（Hue7.5YR2/1）　Kr-Mの粒子を多量に含み、非常に硬くしまっている。

※平面図内のアミ部分は、硬化が認められた範囲

1　黒色土（Hue7.5YR2/1）　Kr-Mの粒子をごくわずかに含む。やや軟らかくしまりが弱い。
2　黒褐色土（Hue7.5YR2/2）　Kr-Mの粒子を全体的に含み、しまっている。
3　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　２と組成的には近似する。
4　黒褐色土（Hue7.5YR3/1）　Kr-Mの細粒子を含み、かたくしまっている。
5　黒褐色土（Hue7.5YR2/2）　４に比してKr-Mの粒子を多く含み、非常に硬くしまっている。

第３図　Ｂ区１～３号土坑実測図（縄文、SC1：S=1/20、SC2・SC3：S=1/40）



第４図　Ｂ区１号土坑出土遺物実測図（縄文土器・石器、S=1/3）

第１表　Ｂ区１号土坑出土遺物観察表（縄文土器）

No.	器種・部位	出土遺構	施文・調整等	胎土 角・輝	胎土 雲母	胎土 長・石	胎土 火山灰	胎土 砂粒	胎土 他	煤	色調 明⇔暗	色調(Hue 標準土色)	備考
1	浅鉢 口縁部	SC1	外 ミガキ→沈線 内 ミガキ	○		○	○		パ	○	外 内	橙(5YR6/6) 明赤褐(5YR5/6)	推定口径31.7cm
2	浅鉢 口縁部	SC1	外 ミガキ→沈線 内 ミガキ	○		○			褐	○	外 内	にぶい橙(7.5YR6/4) 褐灰(10YR5/1)	
3	浅鉢 胴部	SC1	外 ミガキ 内 ミガキ	○		○	○		赤チ	○	外 内	にぶい赤褐(5YR5/4) 暗赤褐(2.5YR3/1)	

※1　胎土　角・輝－角閃石・輝石　雲母－金雲母から黒雲母　長・石－長石・石英　火山灰－白色・黄褐色を帯びた軽石製　を示す
※2　胎土　他の赤チ－赤色を帯びるチャート　パ－パブルオール　褐－褐色の石　を示す
※3　胎土鉱物の同定は、平成18年度　第2回埋蔵文化財担当専門職員研修を受け実体顕微鏡で柳田が観察を行い同定した。
※4　色調　左から灰白・黄灰・黄・橙・にぶい褐・褐・赤褐・暗褐・黒褐・黒の順でそれに類すると任意に識別したものである。

に対し、２と３は口縁部片のみと流れ込みの可能性が高い。１は口縁部外面に１条の沈線が巡り、口縁部から胴部まで椀状の形態を呈している。口縁部の外面上部には帯状に炭化物が著しく付着し、胴部内面中位以下に残る帯状の煤と対照的である。

４は母岩の縁辺のみを粗く打ち欠く円盤状石器で、長軸約8.6cm、短軸約7.65cm、厚さ約1.15cm、重量約128.1ｇである。石材はホルンフェルスである。

２号土坑（第３図、ＳＣ２）

平面プランは長楕円形で、長軸約1.53ｍ、短軸約0.72ｍ、深さ約0.20ｍである。床面には硬化した部分がみられるが、土坑の使用に伴うものか地質的要因によるものか判断し難い。遺物は出土しなかった。

３号土坑（第３図、ＳＣ３）

平面プランは長楕円形で、長軸約1.22ｍ、短軸約0.51ｍ、深さ約0.18ｍである。２号土坑同様、床面に硬化した部分がみられた。遺物は出土しなかった。

２　遺物

包含層の遺物について諸条件から層位及び分布的遺物の傾向を把握することができなかったため、ここでは一定の分類基準に準じて各項目別に記述することとする。

縄文土器について

B地区で出土した縄文土器についてA区と同様の基準により深鉢形（第Ⅰ群）と浅鉢形（第Ⅱ群）に大別し、文様・器形といった個々の属性の分類作業から第Ⅰ群を1類～6類に、第Ⅱ群を7類～12類に細別した。分類された土器群について以下説明を行う。

第Ⅰ群　深鉢形土器

深鉢形土器を文様を中心に分類すると、有文・無文に大別できる。有文土器は縄文や刻みを施す土器群と回線文や沈線文を施す土器群とがあり各々細別できる。

縄文や刻みを施文する土器群は1・2類、回線文や沈線文の土器群は3・4類、無文土器群は5・6類がそれに相当する。

1類（第3図、5・6）

胴部に縄文を施す土器である。微隆起の突帯に刻み目を施し、その下部に結節縄文を縦方向に施す。内面調整は5が条痕調整、6はナデである。

2類（第3図、7）

胴部片で4条の条痕を横方向に施し、条痕下部に微細な刻み目を施す。内面調整はナデである。

3類（第3・4図、8～22）

回線文を施す一群である。口縁部形態と文様の施文等により大きく3種に細別できる。

・口縁部が肥厚かつ小さく外反し、口縁部付近に無文帯を有するもの

ⅰ）頸部から胴部にかけて文様を施すもの（8・9・11）

ⅱ）口唇部に刻みを施し、頸部から胴部にかけて文様を施すもの（12）

・口縁部が肥厚せず外反し、口縁部付近に無文帯を有するもの

ⅰ）頸部から胴部にかけて文様を施すもの（13・15）

・口縁部は肥厚せず、わずかに内湾気味に外方に開くもの

ⅰ）口唇部直下から胴部にかけて文様を施すもの（10・14～18）

19～22は胴部片でいずれかの分類に属する。文様モチーフも直線的な回線や回線階段状のものなどヴァリエーションがみられる。

4類（第4図、23～28）

口縁部に肥厚帯を有し、沈線文を施す一群である。口縁部形態及び沈線文にはヴァリエーションがみられる。27・28は胴部片である。27は頸部屈曲部にあたり、連続する刺突文の下部に横位の沈線文を施す。内面屈曲部の稜線が明瞭である。28は胴部屈曲部下位にあたり縄文を施した後、沈線文を施す。

5類（第4・5図、29～34・46～54）

条痕やナデ調整の粗製深鉢形土器である。29・31～34は胴部で、30・46～54は底部及び脚部である。29・30は深く粗い条痕調整を内外面に施しており同一個体と考えられる。31～34他はナデ調整であるが、形態は29に類するものと想定される。底部の形態は、底端が丸いもの（46～49）、底端が突出するもの（50～53）とがある。底部には網代の圧痕がみられるものがあり、土器製作時の使用によるものと考えられる。54は台付皿形土器の脚部で透かしの痕跡もみられる。

6類（第4・5図、35～45）

条痕調整の粗製の深鉢形土器である。完形品がないため全体のプロポーションを把握し難いが、やや

外反する口縁部と外側に張り出す胴部を持ち、やや窄まる頸部により明瞭な屈曲を呈する器形が想定できる。整形のための調整方法は横方向の条痕である。接合面に粘土帯の痕跡が顕著に認められる。

35～39は口縁部、40～45は胴部である。口縁部形態にもいくつかのヴァリエーションがみられるが、大別すると直立する35～38と微妙な肥厚帯を有する39とに分けられる。41・42・44・45の4点は色調・胎土・調整方法から同一個体の可能性が高い。また、顔料が塗彩される点から浅鉢形の可能性もある。43は調整方法から5類より6類に近い胴部片と考えられる。

第Ⅱ群　浅鉢形土器

深鉢形の土器とは異なり浅鉢形の形態を呈する土器である。A区とは異なりミガキ調整の精製土器のみ出土している。形態により浅鉢形の7類～10類と椀形の11類～15類に大別され、さらにこれらの土器群を文様構成と形態により細分する。

7類（第5図、55・56）

口縁部が比較的長く、胴部が屈曲し、頸部から口縁部にかけて湾曲する土器である。55は口縁端部が直立する。56は頸部から口縁部にかけて大きく湾曲するが、口縁端部に細沈線を施す程度である。内外面はミガキ調整を施す土器である。

8類（第6図、57～64・66）

口縁部が比較的長く、胴部が屈曲し、頸部から口縁部にかけて外反する土器である。57～59は口縁端部が肥厚し、明確な沈線等は施されない。60～63は口縁部外面に沈線文を施し、口縁端部が小さく立ち上がる。66は内面に沈線を施し端部を直立させている。

9類（第6図、65）

口縁部が比較的短く、胴部と頸部に屈曲をもち、頸部から口縁部にかけて外反する。口縁端部には施文等はないが丁寧なミガキが施されている。外面及び頸部内面付近の二次的被熱比熱による剥落が著しい。外面下部に一部煤が付着している。

10類（第6図、67～69）

口縁部が短く、胴部と頸部に屈曲をもち、胴径が口径を上回る土器である。67は口縁部にヒレ状突起をもち明瞭なミガキ調整である。68・69は丁寧なナデ調整である。

11類（第7図、70～73）

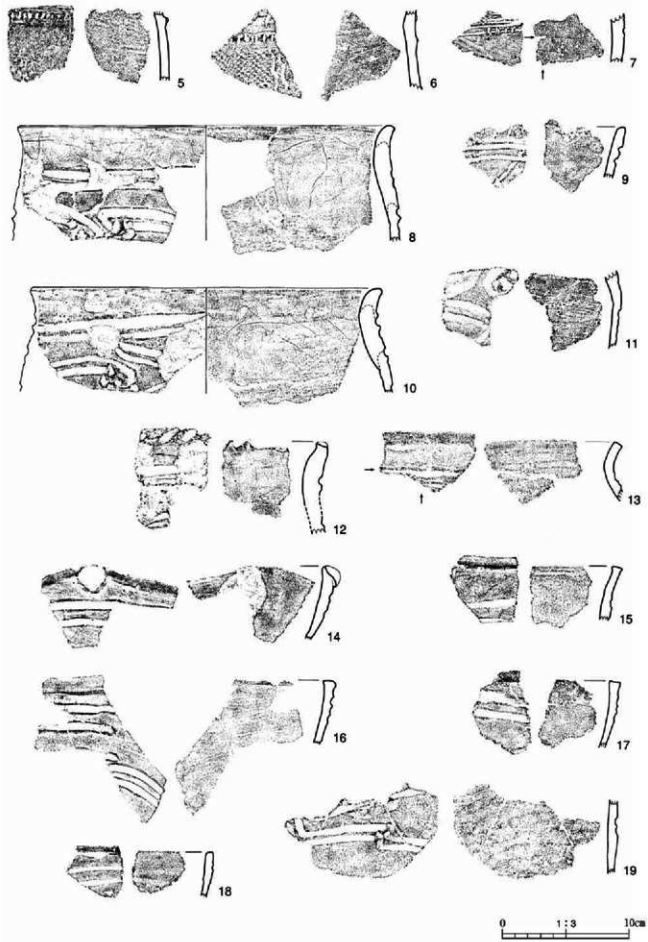
稜をもたず、丸く膨らむ湾曲した胴部に外反する短い口縁部がつく土器である。70・71は口縁部内面に沈線を施す。72は無文で胴部の湾曲の度合いが小さい。

12類（第7図、74～76）

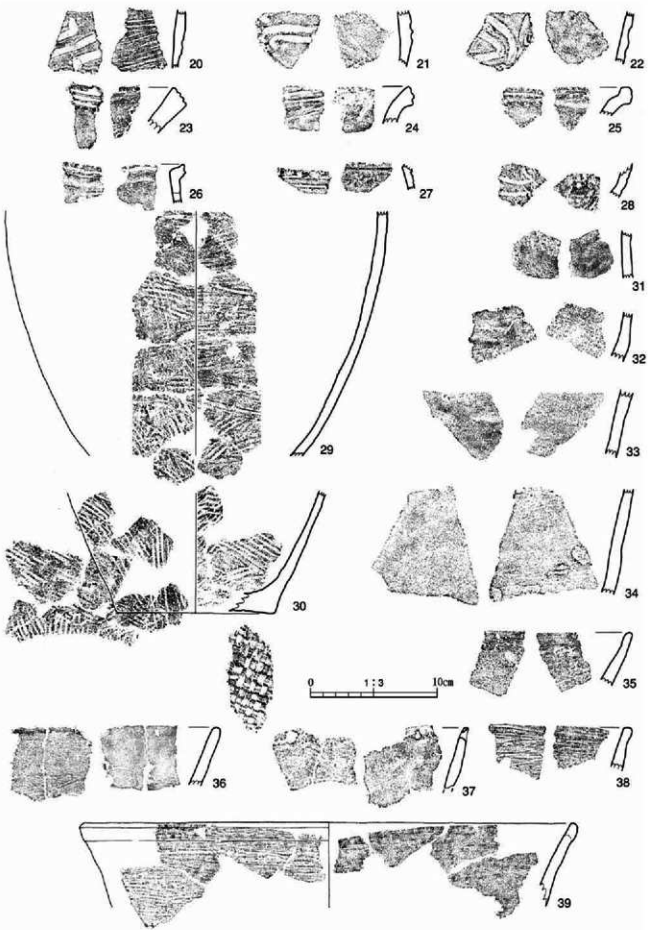
稜を持たず、胴部が鈍角に内側に向かい屈曲する土器である。74は口縁部外面に明瞭な沈線を施す。75・76は胴部片で不明確であるが屈曲の度合いや接合痕の形態からあえてこのカテゴリーに分類した。

小結～B区の縄文土器について～

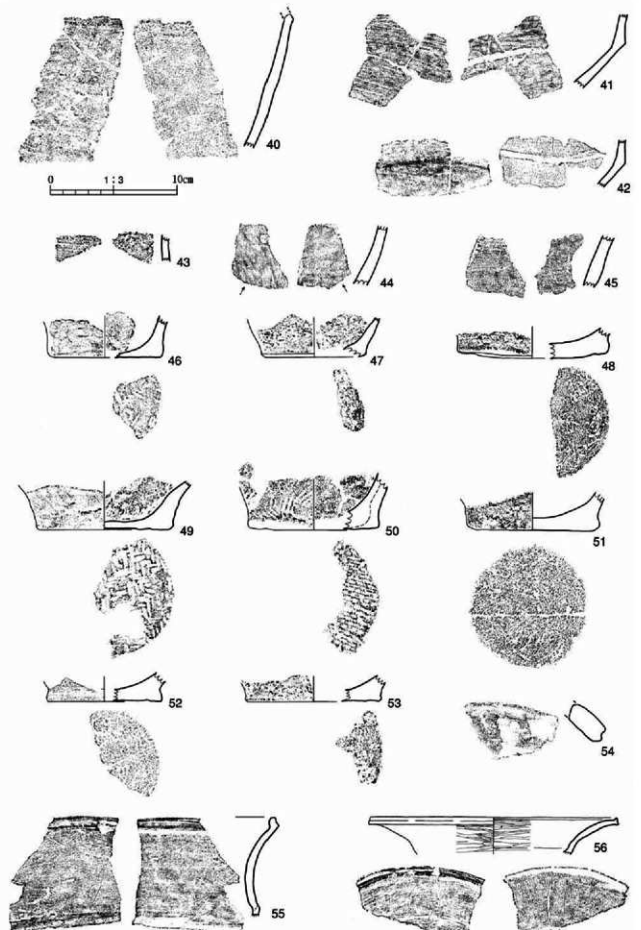
細別した土器を型式学的な編年序列に集約して小結としたい。**深鉢形土器**；1類は平栫式、2類は塞ノ神式、3類は指宿式、4類は中岳Ⅱ式系、そのうち〈28〉は納曽式、〈27〉は西平式、5類は後期の無文土器、6類は黒川式、**浅鉢形土器**；7類（浅鉢形）・11類（椀形）〈71・72〉は入佐式、8類（浅鉢形）・11類〈70・73〉・12類（椀形）は黒川式古段階、9類・10類（浅鉢形）は黒川式新段階に相当すると考えられる。



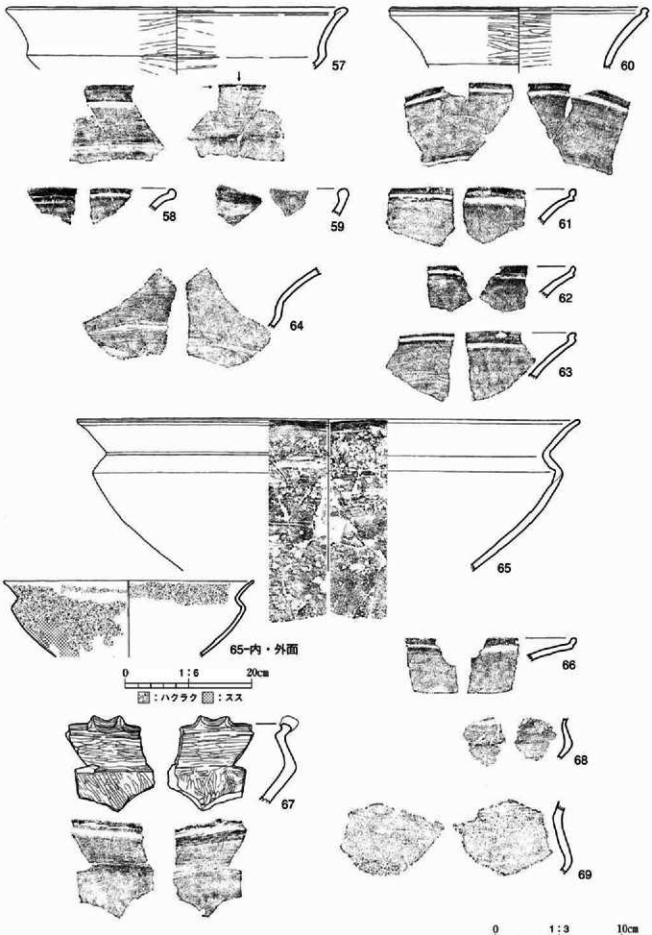
第５図　Ｂ区包含層出土遺物実測図１（縄文土器、S=1/3）



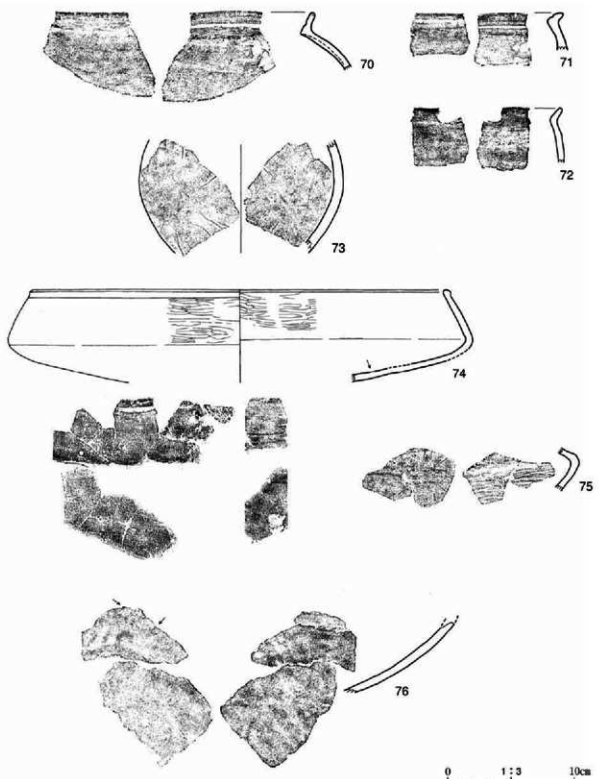
第６図　Ｂ区包含層出土遺物実測図２（縄文土器、S=1/3）



第７図　Ｂ区包含層出土遺物実測図３（縄文土器、S=1/3）



第８図　Ｂ区包含層出土遺物実測図４（縄文土器、S=1/3）



第９図　Ｂ区包含層出土遺物実測図５（縄文土器、S=1/3）

第２表　Ｂ区縄文土器観察表１

No.	器種・部位	層位・地点	施文・調整等	角・輝	雲母	長・石	軽・ス	火山ガ	砂粒	他	煤	色調(Hue 標準土色)	備考
5	深鉢 胴部	一括 C	外 ナデ→結節縄文→突帯→刻み 内 条痕	○		○	○				○	外 にぶい黄橙(10YR6/4) 内 にぶい黄橙(10YR5/3)	
6	深鉢 胴部	一括 C	外 ナデ→結節縄文→突帯→刻み 内 ナデ	○		○						外 にぶい黄橙(10YR7/4) 内 褐灰(10YR5/1)	
7	深鉢 胴部	Ⅲa D2	外 ナデ→沈線→刺突 内 ナデ	○		○				礫		外 にぶい黄橙(10YR6/4) 内 にぶい黄橙(10YR5/3)	植物片の圧痕(長軸8mm)
8	深鉢 口縁部	SH1 B2	外 ナデ→凹線 内 ナデ	○	○	○	○	○		赤チ	○	外 橙(5YR6/6) 内 明赤褐(5YR5/6)	推定口径29.8cm
9	深鉢 口縁部	SA1 B2	外 ナデ→凹線 内 ナデ	○	○	○	○	○		赤チ	○	外 にぶい褐(5YR5/4) 内 明赤褐(5YR5/6)	推定口径27.8cm
10	深鉢 口縁部	Ⅲa B2	外 ナデ→凹線 内 ナデ	○		○					○	外 にぶい橙(7.5YR6/4) 内 にぶい橙(7.5YR6/4)	
11	深鉢 胴部	Ⅲb B2	外 ナデ→凹線 内 ナデ	○	○	○	○	○		赤チ		外 にぶい褐(7.5YR5/4) 内 明赤褐(5YR5/6)	
12	深鉢 口縁部	Ⅲb B2	外 ナデ→凹線→刻み 内 ナデ	○	○	○	○	○		赤チ	○	外 にぶい褐(7.5YR5/4) 内 明赤褐(5YR5/6)	
13	深鉢 口縁部	Ⅲb B2	外 丁寧なナデ→凹線 内 ナデ	○	○	○	○	○		赤チ		外 灰褐(7.5YR4/2) 内 橙(7.5YR6/6)	表面種子状の圧痕(長軸4.5mm)
14	深鉢 口縁部	Ⅲb B2	外 ナデ→凹線→刻み 内 ナデ	○		○	○	○		赤チ		外 にぶい褐(5YR5/4) 内 明赤褐(2.5YR5/6)	波状口縁
15	浅鉢 口縁部	Ⅲb B2	外 ナデ→凹線 内 ナデ	○	○	○					○	外 灰褐(7.5YR4/2) 内 黒褐(7.5YR3/1)	波状口縁
16	深鉢 口縁部	Ⅲb B2	外 ナデ→凹線→刻み 内 条痕→ナデ	○	○	○	○			礫		外 灰褐(7.5YR4/2) 内 暗褐(7.5YR3/4)	
17	深鉢 口縁部	Ⅲa・b B2	外 ナデ→凹線 内 ナデ	○	○	○	○	○		赤チ		外 赤褐(5YR4/6) 内 赤褐(5YR4/6)	
18	深鉢 口縁部	Ⅲb B2	外 ミガキ→凹線 内 ミガキ	○	○	○	○	○		赤チ		外 にぶい赤褐(5YR5/4) 内 にぶい黄褐(10YR5/4)	
19	深鉢 胴部	Ⅲa B2	外 ナデ→凹線 内 条痕	○	○	○	○	○		赤チ	○	外 明赤褐(5YR5/6) 内 にぶい赤褐(5YR4/3)	
20	深鉢 胴部	Ⅲb B2	外 ナデ→凹線 内 条痕	○	○	○		○		赤チ		外 褐灰(7.5YR4/1) 内 褐灰(7.5YR4/1)	
21	深鉢 胴部	Ⅲa B2	外 ナデ→凹線 内 ナデ	○	○	○	○	○		赤チ		外 にぶい褐(7.5YR5/4) 内 橙(7.5YR6/6)	
22	深鉢 胴部	Ⅲb B2	外 ナデ→凹線 内 ナデ	○	○	○				赤チ	○	外 にぶい褐(7.5YR5/4) 内 褐(7.5YR4/3)	
23	深鉢 口縁部	Ⅲb C	外 ナデ→沈線 内 ナデ	○		○	○		○	礫	○	外 褐灰(7.5YR4/1) 内 褐灰(10YR4/1)	
24	深鉢 口縁部	Ⅲb C	外 ミガキ→沈線 内 ナデ	○		○	○					外 にぶい赤褐(5YR5/4) 内 にぶい赤褐(5YR5/4)	
25	深鉢 口縁部	Ⅲa C	外 ナデ→沈線 内 ナデ	○		○	○					外 明赤褐(5YR5/6) 内 にぶい褐(7.5YR5/3)	
26	深鉢 口縁部	Ⅲa C	外 肥厚→ナデ→沈線 内 ナデ	○		○	○				○	外 黒褐(7.5YR3/2) 内 明褐(7.5YR5/6)	
27	深鉢 胴部	トレンチ B2	外 ナデ→縄文→沈線→刺突 内 ナデ	○		○	○			礫		外 にぶい褐(7.5YR5/4) 内 灰褐(7.5YR5/2)	
28	深鉢 胴部	Ⅲb B2	外 ナデ→沈線 内 ナデ	○		◎						外 明褐(7.5YR5/6) 内 灰褐(7.5YR5/2)	
29	深鉢 胴部	Ⅲa・b B2	外 条痕 内 条痕	○		○	○			礫	○	外 赤褐(5YR4/6) 内 にぶい赤褐(5YR5/4)	
30	深鉢 底部	Ⅲa・b B2	外 条痕 内 条痕	○		○	○			礫	○	外 赤褐(5YR4/6) 内 にぶい赤褐(5YR5/4)	
31	深鉢 胴部	トレンチ B2	外 ナデ 内 ナデ	○		○	○				○	外 褐(7.5YR4/4) 内 にぶい褐(7.5YR5/4)	
32	深鉢 胴部	Ⅲa B2	外 ナデ 内 ナデ	○		○				礫	○	外 灰褐(7.5YR6/2) 内 にぶい黄橙(10YR6/3)	
33	深鉢 胴部	Ⅲb C	外 ナデ 内 ナデ	○		○	○				○	外 橙(7.5YR6/6) 内 灰褐(7.5YR4/2)	
34	深鉢 胴部	Ⅲa B	外 ナデ 内 ナデ	○		○	○	○	○	礫		外 にぶい赤褐(5YR5/3) 内 にぶい黄褐(10YR5/3)	
35	深鉢 口縁部	Ⅲb C	外 条痕→ナデ 内 ナデ	○		○	○	○	○	礫	○	外 明赤褐(5YR5/6) 内 にぶい褐(5YR4/4)	
36	深鉢 口縁部	Ⅲa B2	外 条痕→ナデ 内 ナデ	○		○			○		○	外 にぶい褐(7.5YR6/3) 内 褐灰(7.5YR5/1)	
37	深鉢 口縁部	Ⅲa B2	外 ナデ 内 ナデ	○		○			○			外 にぶい黄橙(10YR7/3) 内 にぶい黄橙(10YR7/2)	
38	深鉢 口縁部	Ⅲb B2	外 条痕 内 条痕			○	○		○		○	外 にぶい橙(5YR6/4) 内 にぶい橙(7.5YR6/4)	
39	深鉢 口縁部	Ⅲb C	外 条痕 内 条痕→ナデ			○			○	繊		外 にぶい黄橙(10YR7/4) 内 にぶい黄橙(10YR7/4)	推定口径38.6cm
40	深鉢 胴部	Ⅲb B2	外 条痕 内 条痕→ナデ	○		○	◎					外 黒褐(7.5YR3/2) 内 褐灰(7.5YR5/1)	
41	浅鉢 胴部	Ⅲb C	外 条痕(屈曲上部)・ミガキ(屈曲下部) 内 ミガキ	○		○	○					外 にぶい黄橙(10YR7/3) 内 にぶい黄橙(10YR7/4)	屈曲上部に赤色顔料付着
42	浅鉢 胴部	Ⅲb C	外 条痕(屈曲上部)・ミガキ(屈曲下部) 内 ミガキ	○		○	○	○			○	外 にぶい黄橙(10YR7/4) 内 にぶい黄橙(10YR7/4)	屈曲上部に赤色顔料付着 屈曲下部に煤。
43	深鉢 胴部	Ⅲa B2	外 ナデ 内 ナデ	○		○						外 黒褐(7.5YR3/2) 内 にぶい赤褐(5YR4/2)	
44	深鉢 胴部	Ⅲa B2	外 ミガキ 内 ミガキ	○		○	○	○			○	外 にぶい黄橙(10YR7/3) 内 にぶい黄橙(10YR7/4)	土器片上部に煤付着。断面植物片の圧痕(5mm
45	深鉢 胴部	Ⅲa C	外 ナデ 内 ナデ	○		○	○	○			○	外 にぶい黄橙(10YR6/3) 内 灰黄褐(10YR6/2)	
46	深鉢 底部	Ⅲa B2	外 条痕→ナデ 内 ナデ	○	○	○	○	○				外 褐(7.5YR4/4) 内 にぶい褐(7.5YR5/3)	網代底 推定口径8cm
47	深鉢 底部	Ⅲa B2	外 ナデ 内 ナデ	○	○	○	○	○		赤チ		外 赤褐(5YR4/8) 内 明赤褐(5YR5/6)	推定口径8cm
48	深鉢 底部	Ⅲb C	外 ナデ 内 ナデ	○		○	○			礫	○	外 にぶい橙(5YR6/4) 内 にぶい橙(7.5YR7/4)	推定口径11.4cm
49	深鉢 底部	Ⅲb B2	外 ナデ・指頭圧痕 内 ナデ	○	○	○	○	○				外 にぶい赤褐(5YR5/4) 内 にぶい赤褐(5YR5/4)	網代底・白色物付着 推定底径10.4cm
50	深鉢 底部	Ⅲa B2	外 ナデ 内 ナデ	○		○						外 褐灰(7.5YR5/1) 内 にぶい赤褐(5YR4/4)	網代底・白色物付着 推定底径6.25cm
51	深鉢 底部	Ⅲb C	外 ナデ 内 ナデ	○		◎						外 赤褐(2.5YR4/6) 内 灰褐(7.5YR4/2)	推定口径10.4cm
52	深鉢 底部	Ⅲa B2	外 ナデ 内 ナデ	○		○	○	○		礫		外 橙(5YR6/6) 内 灰褐(7.5YR5/2)	推定底径9cm
53	深鉢 底部	Ⅲa B2	外 ナデ 内 ナデ	○		○	○			礫	○	外 明赤褐(5YR5/6) 内 にぶい赤褐(5YR5/4)	推定底径10.4cm
54	深鉢 脚部	Ⅲa B2	外 透かし→ナデ 内 ナデ	○	○	○	○			赤チ		外 明赤褐(2.5YR5/6) 内 明赤褐(2.5YR5/6)	
55	浅鉢 口縁～胴部	Ⅲa B2	外 ミガキ 内 ミガキ	○		○		○		礫	○	外 にぶい橙(7.5YR6/4) 内 にぶい橙(7.5YR6/4)	
56	浅鉢 口縁部	Ⅲb C	外 ミガキ→細沈線 内 ミガキ	○		○		○			○	外 明赤褐(5YR5/6) 内 橙(7.5YR6/6)	推定口径19.5cm
57	浅鉢 口縁～胴部	Ⅲa B・C	外 ミガキ 内 ミガキ	○		○		○			○	外 にぶい黄橙(10YR7/3) 内 にぶい黄橙(10YR7/2)	推定口径33.3cm 口縁に圧痕
58	浅鉢 口縁部	SC1 D1	外 ミガキ 内 ミガキ	○		○	○	○				外 褐灰(10YR5/1) 内 灰黄褐(10YR6/2)	
59	浅鉢 口縁部	Ⅲa C	外 突起→ミガキ 内 ナデ	○		○					○	外 にぶい褐(7.5YR5/4) 内 にぶい褐(7.5YR5/4)	
60	浅鉢 口縁部	一括 C	外 ミガキ→沈線 内 ミガキ	○		○	○	○			○	外 褐灰(7.5YR5/1) 内 黄灰(2.5YR5/1)	推定口径20cm
61	浅鉢 口縁部	Ⅲa B2	外 ミガキ→沈線 内 ミガキ	○	○	○	○	○			○	外 黒褐(10YR3/1) 内 褐灰(10YR6/1)	

第３表　Ｂ区縄文土器観察表２

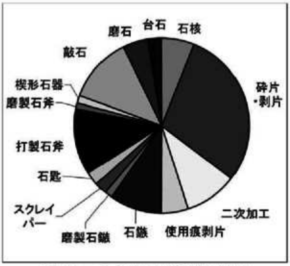
No.	器種・部位	層位・地点	施文・調整等	胎土 角・輝	胎土 雲母	胎土 長・石	胎土 軽・ス	胎土 火山ガ	胎土 砂粒	胎土 他	煤	色調(Hue 標準土色)	備考
62	浅鉢 口縁部	IIIa B2	外 ミガキ→沈線 内 ミガキ	○		○		○			○	外 褐灰(5YR4/1) 内 褐灰(10YR4/1)	
63	浅鉢 口縁部	IIIb C	外 ミガキ→沈線 内 ミガキ	○		○	○	○				外 にぶい褐(7.5YR5/3) 内 褐灰(7.5YR4/1)	
64	浅鉢 胴部	IIIb C	外 ミガキ 内 ミガキ	○		○	○	○				外 にぶい黄橙(10YR7/2) 内 にぶい黄橙(10YR7/2)	
65	浅鉢 口縁ー胴部	IIIa D1	外 ミガキ 内 ミガキ	○	○	○	○	○			○	外 にぶい褐(7.5YR5/3) 内 にぶい褐(7.5YR5/3)	二次焼成 推定口径39.2cm
66	浅鉢 口縁部	IIIb C	外 ミガキ→沈線 内 ミガキ	○		○	○	○				外 赤褐(5YR4/8) 内 赤褐(5YR5/8)	
67	浅鉢 口縁部	IIIb B	外 貝殻→ミガキ 内 ミガキ	○		○				褐		外 灰黄褐(10YR5/2) 内 褐灰(10YR4/1)	
68	浅鉢 胴部	IIIa C	外 ナデ 内 ナデ	○		○						外 明赤褐(5YR5/6) 内 明赤褐(5YR5/6)	
69	浅鉢 胴部	IIIa B2	外 ミガキ 内 ナデ	○		○					○	外 にぶい黄褐(10YR5/3) 内 灰黄褐(10YR5/2)	
70	浅鉢 口縁部	IIIa B	外 ミガキ 内 ナデ→ミガキ→沈線	○		○		○				外 褐灰(10YR4/1) 内 褐灰(10YR4/1)	
71	浅鉢 口縁部	表採 B	外 ミガキ 内 ナデ→沈線			○		○				外 にぶい黄橙(10YR7/4) 内 にぶい黄橙(10YR7/4)	
72	浅鉢 口縁部	IIIa B	外 ナデ 内 ナデ			○		○			○	外 にぶい赤褐(5YR5/4) 内 にぶい黄褐(10YR5/3)	
73	浅鉢 胴部	IIIb C	外 ミガキ 内 ミガキ	○		○				褐	○	外 にぶい黄褐(10YR4/3) 内 暗褐(10YR3/3)	
74	浅鉢 口縁ー胴部	IIIa D2	外 ミガキ→沈線 内 ミガキ	○		○	○	○				外 褐灰(7.5YR6/1) 内 褐灰(10YR4/1)	内面種子圧痕(3mm) 推定口径22.6cm
75	浅鉢 胴部	IIIa C	外 ミガキ 内 ナデ	○		○	○	○				外 黒褐(5YR3/1) 内 黒褐(5YR3/1)	
76	浅鉢 胴部	IIIb B2	外 ミガキ 内 ミガキ	○		○	○	○				外 黄灰(2.5YR5/1) 内 黒褐(10YR3/1)	内面植物片の圧痕

※1 胎土 角・輝－角閃石・輝石 雲母－金雲母から黒雲母 長・石－長石・石英 軽・ス－白色・黄褐色の軽石・スコリア 火山ガ－火山ガラス(バブル型が最も多い) を示す
※2 胎土 他の赤チ－赤色を帯びるチャート 褐－褐色の石 を示す
※3 胎土鉱物の同定は、平成18年度 第2回埋蔵文化財担当専門職員研修を受け実体顕微鏡で柳田が観察を行い同定した。
※4 色調 左から灰白・黄灰・黄・橙・にぶい褐・褐・赤褐・暗褐・黒褐・黒の順でそれに類すると任意に識別したものである。

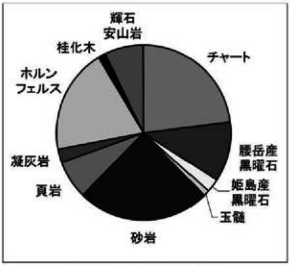
第４表　Ｂ区石器計測表

番号	器種	石材	層位・地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
77	石鏃	チャート	IIIb C	2.7	2.4	0.4	1.3
78	石鏃	玉髄	IIIa B	2.3	1.8	0.4	1
79	石鏃	腰岳産黒曜石	IIIa D1	1.85	1.63	0.33	0.8
80	石鏃	チャート	IIIa C	2.1	2	0.4	1
81	石鏃	腰岳産黒曜石	IIIa D2	1.9	1.35	0.3	0.6
82	石鏃	腰岳産黒曜石	SC1 B2	2.15	1.4	0.45	0.7
83	石鏃	チャート	SC1 B2	2.1	1.2	0.4	0.9
84	石鏃	ホルンフェルス	SH7 C	2.35	1.05	3.05	1
85	磨製石鏃	頁岩	IIIa D1	3.63	2.63	0.3	3.3
86	石匙	頁岩	一括 C	5.7	3.2	0.8	13.2
87	石匙	チャート	SC1 B2	5.15	2.7	1.2	131.1
88	スクレイパー	チャート	IIIa B	1.75	2.3	0.41	1.8
89	スクレイパー	輝石安山岩	IIIa D1	9.55	6.95	1.6	120.2
90	楔形石器	腰岳産黒曜石	一括 C	2.4	1.55	0.6	2
91	二次加工剥片	チャート	IIIa B	3.05	2.25	1.02	5.8
92	剥片	チャート	IIIa B2	4.9	3.4	1.25	22.5
93	剥片	腰岳産黒曜石	IIIb B2	3.7	2.25	0.5	2.6
94	剥片	腰岳産黒曜石	IIIa B2	3.2	2.4	1	6.1
95	剥片	チャート	IIIa B2	2.6	3.5	1.2	8
96	剥片	頁岩質ホルンフェルス	IIIb B2	3.35	4.2	1	11.7
97	剥片	チャート	SC1 B2	2.6	4.3	0.9	7.5
98	剥片	頁岩質ホルンフェルス	IIIa B2	4.6	4.15	1.15	18.7
99	剥片	珪化木	IIIb D1	4.8	4.9	1.55	25.2
100	剥片	砂岩	IIIb B2	6.5	7.25	2.8	104.3
101	剥片	砂岩	IIIa D1	7.45	9.2	1.05	74.9
102	石核	チャート	IIIa D2	4.35	3.87	2.3	47.6
103	石核	チャート	近世SH D1	4.95	5.25	5.7	123.7
104	石核	チャート	IIIa B2	1.2	2.1	1.25	2.1
105	石核	チャート	SC1 B2	4.9	2.2	1.8	17.5
106	石核	チャート	IIIa D1	1.55	3.92	1.6	7.9
107	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	IIIb C	8.38	4.69	1.82	74
108	打製石斧	輝石安山岩	IIIa D1	13.55	7.96	1.05	173.4
109	打製石斧	輝石安山岩	IIIa D1	13.15	8.4	1.35	178.9
110	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	IIIa D1	13.85	6.85	2.1	258
111	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	IIIb C	11.75	5.7	1.1	106.3
112	打製石斧	頁岩	IIIa D2	9.35	5.95	1.05	53.8
113	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	IIIb C	7.8	3.88	0.8	27.3
114	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	SH1 B2	6.3	7.7	1.7	109.9
115	打製石斧	頁岩質ホルンフェルス	IIIb C	7.8	7.8	1.8	141
116	打製石斧	頁岩	IIIa D2	8.25	4.9	1.1	38.7
117	磨製石斧	頁岩質ホルンフェルス	IIIa B2	8.5	4.65	2.2	105.5
118	敲石(磨製石斧)	頁岩質ホルンフェルス	IIIa D1	7.68	6.5	3.2	269
119	敲石	砂岩	IIIa D1	5	4.05	1.5	35.2
120	敲石	凝灰岩	III C	5.82	5.08	2.61	11.3
121	敲石	砂岩	IIIa B2	6	5.1	2.3	95.8
122	敲石・磨石	凝灰岩	IIIa B	9.6	8.1	4.7	552.8
123	敲石・磨石	砂岩	IIIa B	9.9	7.8	4.2	588.2
124	敲石	砂岩	IIIa D1	8.3	8.6	3.2	309.5
125	磨石	砂岩	IIIa-b C	8.1	8.6	2.3	240.7
126	磨石・敲石	砂岩	IIIa B	13.3	8.45	4.2	594.6
127	敲石	砂岩	III D2	11.15	7.25	3.7	377.9
128	磨石・敲石	砂岩	SH26 B2	12.8	6.95	3.55	466.5
129	台石	砂岩	IIIa B	26.2	13	7.1	3353.6
130	台石	輝石安山岩	IIIa B	30	30.5	6.7	8250

※1 石材の同定は都城市教育委員会2002「横市遺跡群」『都城市文化財調査報告書第58集』による



第10図　Ｂ区石器の器種別構成比較



第11図　Ｂ区使用石材比較

石器について

縄文時代から弥生時代に相当すると考えられる石器について、型式学的器種を基軸に分類作業を行った。遺物は、縄文時代後期から中世までを含むⅢ層を中心に出土していた。形態的特徴から縄文時代から弥生時代の石器と古代以降の石器を弁別した。しかし、縄文時代から弥生時代の石器については、個々の石器から時期差を見いだすことができなかった。そこで、石器については時代的区別による報告を行わず便宜的に一括して取り扱うこととした。

B区で出土した石器を石器製作から剥片石器と礫塊石器に分類した。剥片石器は、石鏃・石匙・スクレイパー・打製石斧・石核・剥片等が出土しており、礫塊石器は、磨製石鏃・磨製石斧・石錘・敲石・磨石・台石が出土している。以下説明を行う。

石鏃（第12図、77～85）

打製石鏃が多く、局部磨製石鏃が１点、磨製石鏃が１点がみられる。石材は、腰岳産黒曜石やチャート・頁岩・ホルンフェルス・玉髄があり、特定石材に偏ることはない。

石鏃は、基部形態から深い凹基・浅い凹基の２種に分けられる。深い凹基には、平面正三角形（77・78）と平面五角形（81～83）のものがある。局部磨製石鏃（84）も平面正三角形に近く、素材剥片の周縁部のみを簡単に整形している。浅い凹基には平面正三角形（79）と平面五角形（80）がある。磨製石鏃（85）は頁岩製で打製石鏃と比べ２倍近い大きさであり格段の差がみられる。

石匙（第12図、86・87）

86は頁岩製の石匙で欠損が著しい。剥片を剥離した後、縁辺に加工を施している。87はチャート製で横長剥片を剥離した後、側縁に加工を施している。

スクレイパー（第12図、88・89）

88はチャートを石材とし一部欠損が見られる。小型であるが縁辺に加工を施している。89は安山岩製で横長の大きい剥片を剥離した後、側辺に加工を施している。

楔形石器（第12図、90）

90は腰岳産黒曜石で縦長の小型剥片を剥離した後、両面からの剥離調整が見られる。

剥片（第12・13図、91～101）

打面整形を行った後、縦長あるいは横長の剥片を剥離している。石材には、腰岳産黒曜石・チャート・桂化木・ホルンフェルス・砂岩がみられる。未図化ではあるが姫島産黒曜石の砕片も出土している。91～94は縦長剥片、95～101は横長剥片である。その殆どが石鏃等のトゥール製作に関連したものと想定される。横長剥片の100は自然面を残し打面整形した後、剥離を行っている。101は礫面に煤が観察され、赤化している点は中世の石器にもみられ注意を要する。100・101とも縁辺に使用痕が見られる。99の石材は桂化木であり、珍しい。

石核（第13図、102～106）

石核の大半は103を除き最終形態が小型である。自然面を有することと、打面整形の後に剥離調整を行っている点は全ての石核に共通する。また、打面転移を行いながら複数方向から剥片を作出していることも共通しているが、103のみに自然面から楔状に剥離調整が行われていることが看取できる。中近世の火打ち石の可能性もあることを指摘しておく。

石斧（第13～15図、107～117）

石斧は全部で11点出土しており、打製石斧が10点、磨製石斧が１点出土している。欠損品が多く全体の形態は不明瞭である。残存する形態から短冊形と有肩形の２種に大別できる。短冊形は、頁岩源ホルンフェルス（107）と安山岩（108・109）がある。安山岩製は、扁平な剥片を作出し側辺部に剥離調整を施している。有肩形は頁岩源ホルンフェルス（110・111）と頁岩（112）とがある。

その他、欠損が著しく全体像が不明瞭であるが石斧と想定される113・114・115もこのカテゴリーに含めた。112・116は石材と堆積土壌の性質により鉱物性付着物が認められ剥離の状況が不明瞭になっている。これらの打製石斧は、残存する刃部の摩滅や研磨痕の方向等から、視認できる擦痕は使用によるものと捉えたい。磨製石斧とした117は、刃部のみ残存している。刃部に研磨痕や側辺部等に敲打痕が見られる。

敲石・磨石（第15・16図、118～128）

サイズにより大・中・小の三つに分類するが、研磨の有無や敲打痕の残存部位などの使用痕にヴァリエーションがある。119～121は親指と人差し指で固定可能な小サイズである。118・122～124は掌大の中サイズである。118は形態と研磨痕から磨製石斧を転用した敲石と考えられる。123は表面の敲打による凹みが著しい。124は欠損が著しく表面の中央部のみ敲打がみられる。125は磨石である。126～128は乳房状の形態で拳大以上の大サイズである。いずれも長軸の縁辺部に敲打痕が見られる。

台石（第16図、129・130）

129は3353.6ｇの重量があり安定している点から台石としての機能面が強いと考え、このカテゴリーに含めた。130は長軸0.30m、重量8250ｇと大型で重く、表面の敲打痕も著しい。裏面が艶やかであるが使用による研磨等ではなかろう。

小結～Ｂ区の石器について～

組成と石材についてまとめ、小結としたい。器種と石材の割合についてはほぼＡ区と同様の内容である。Ａ区と異なる点として、石匙、磨製石鏃の器種が増える点と、東九州の姫島産黒曜石と都城市母智丘産の輝石安山岩の石材が豊富になる点（藤木2005・都城市教委2007）があげられる。Ａ区と比べて器種・石材が増加することは、縄文時代早期・弥生時代前中期といった遺物包含層内の時期幅の増加に相関すると想定される。そこで、都城盆地内の遺跡と比較すると、磨製石鏃（85）や幅広の有肩石斧（110）は後述の弥生時代に帰属するものと考えられ、姫島産黒曜石は縄文早期の所産とも捉えられる。輝石安山岩は縄文後期から弥生時代後期まで使用されており時期の特定はできない。Ｂ区でも腰岳産黒曜石の剥片石器が多数確認されたが、都城盆地内では弥生時代以降に黒曜石の使用はなく、砂岩・頁岩・チャート・安山岩などの周辺石材に偏る傾向にあるため、この腰岳産黒曜石製の石器は縄文時代後期から晩期の時期のものとみて大過ないと考えられる。

第５表　Ｂ区石器の器種・石材構成表

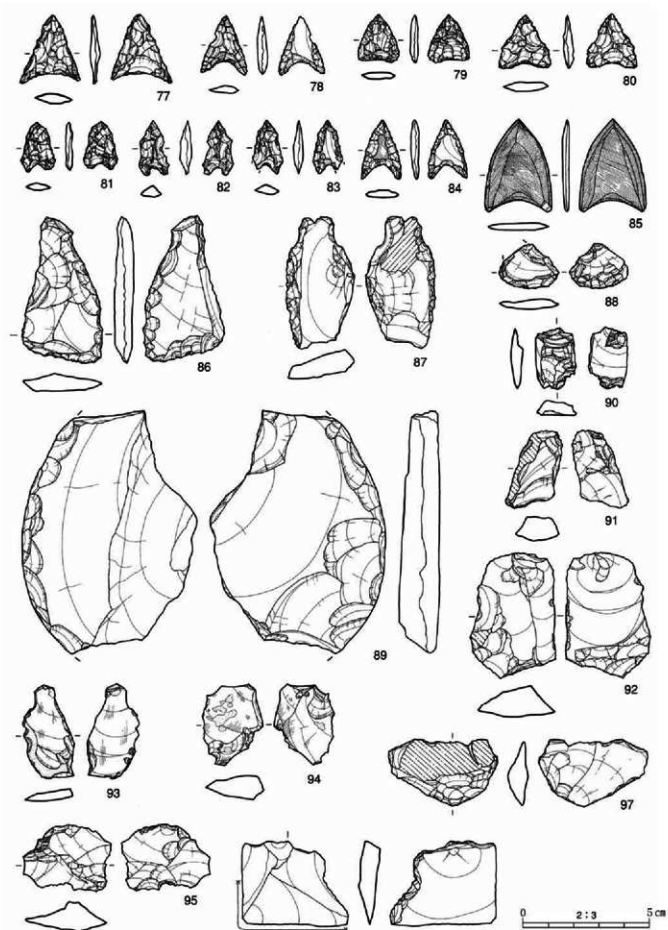
器種 / 石材	Co	Ch・F	Re	UF	Ah	PAh	S	Sn	Ax	PAx	PE	Hs	Gs	QS	他	Total
Ch	5	5	4		3		1	1								19
ob(ks)		5			3						1					9
ob(hm)		2														2
Sa		5		3								4	7	1		20
Tu													2			2
Hr		4	2	1	1	1			6	1			1			17
Sh		2						1	2							5
An		1	1				1		2					1		6
他			1		1											2
Total	5	24	8	4	8	1	2	2	10	1	1	4	10	2	0	82

器種	Co	Ch・F	Re	UF	Ah	PAh	S	Sn	Ax	PAx	PE	Hs	Gs	QS	他	Total
Total	5	24	8	4	8	1	2	2	10	1	1	4	10	2	0	82

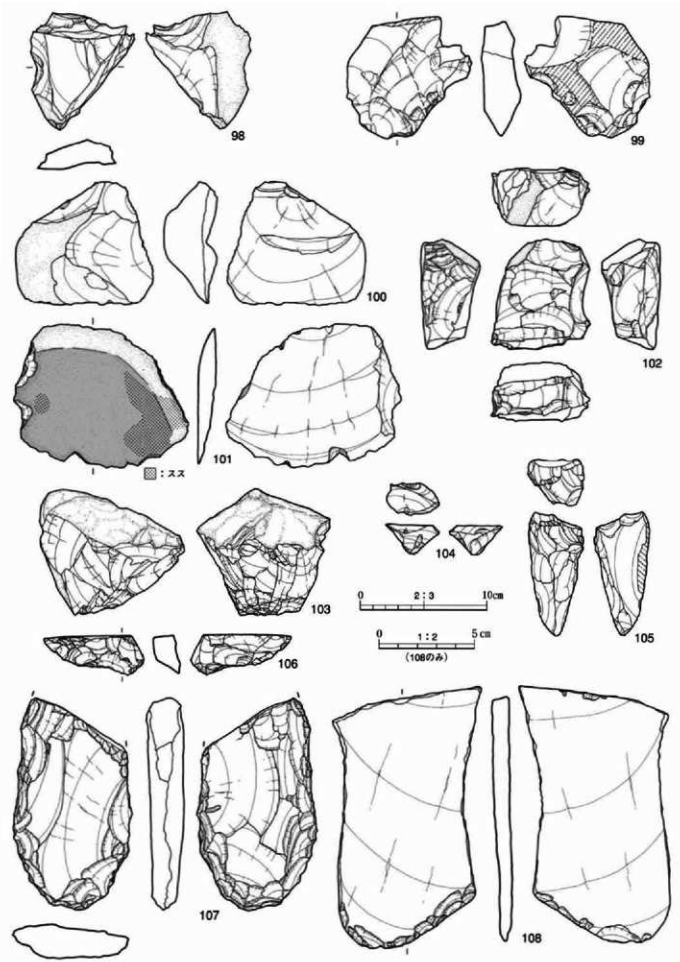
石材	Total
Ch	19
ob(ks)	9
ob(hm)	2
Sa	20
Tu	2
Hr	17
Sh	5
An	6
他	2
Total	82

【器種】Co:石核　Ch:砕片　F:剥片　Re:二次加工剥片　UF:使用痕剥片　RF:粗雑な剥片　Ah:石鏃　PAh:磨製石鏃　S:スクレイパー　Sn:石匙　Ax:打製石斧　PAx:磨製石斧　PE:楔形石器　Dr:石錐　SW:石錘　Gs:敲石　Hs:磨石　QS:台石　An:石皿

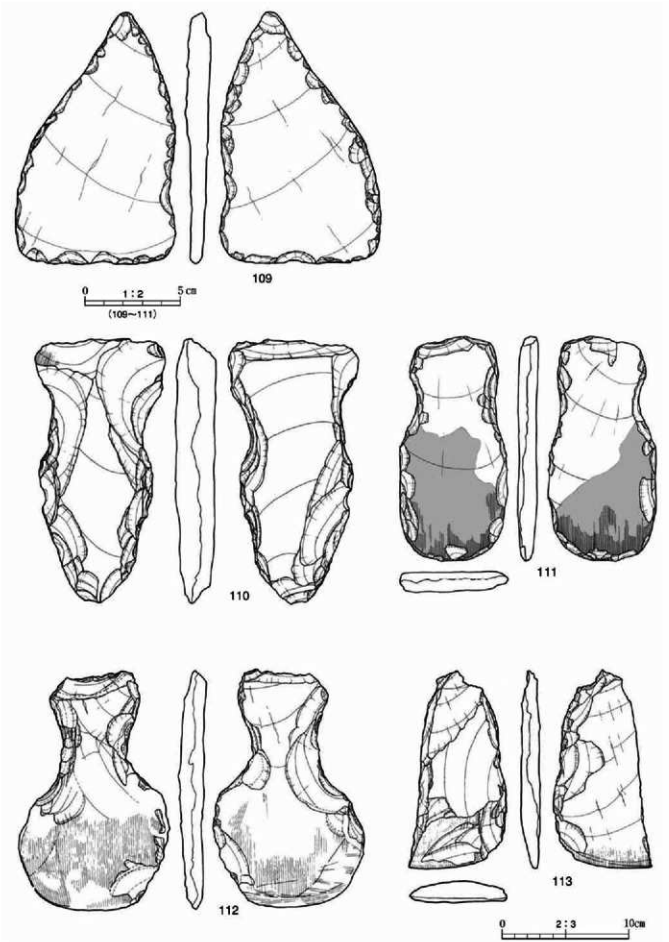
【石材】Ch:チャート　ob(ks):腰岳産黒曜石　ob(kw):桑ノ木津留産黒曜石　Sa:砂岩　Tu:凝灰岩　Hr:ホルンフェルス　Sh:頁岩　An:安山岩



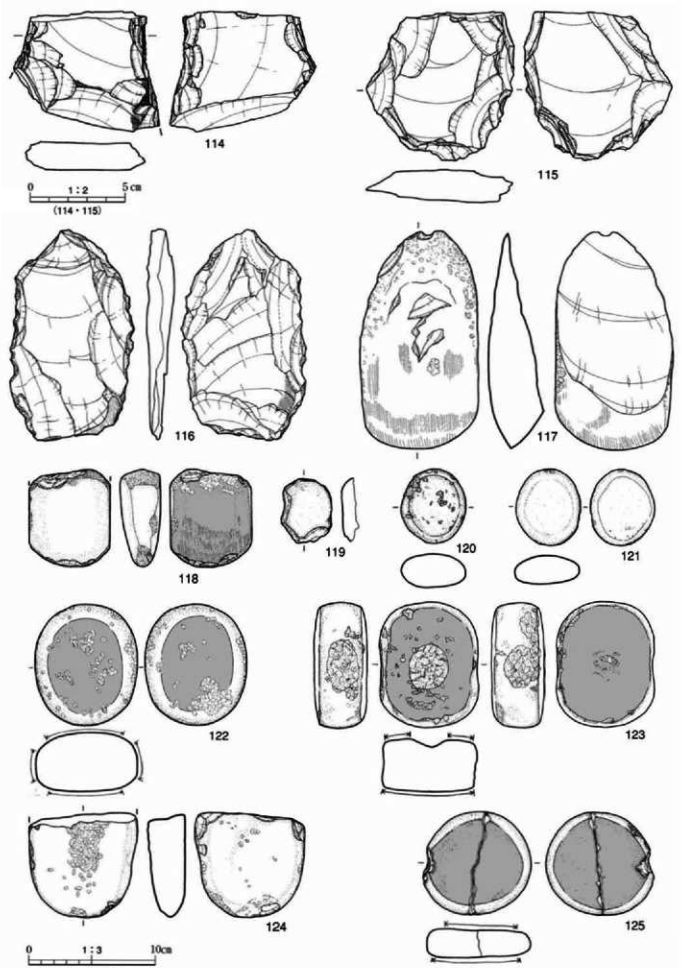
第12図　B区包含層出土遺物実測図６（石器、S=2/3）



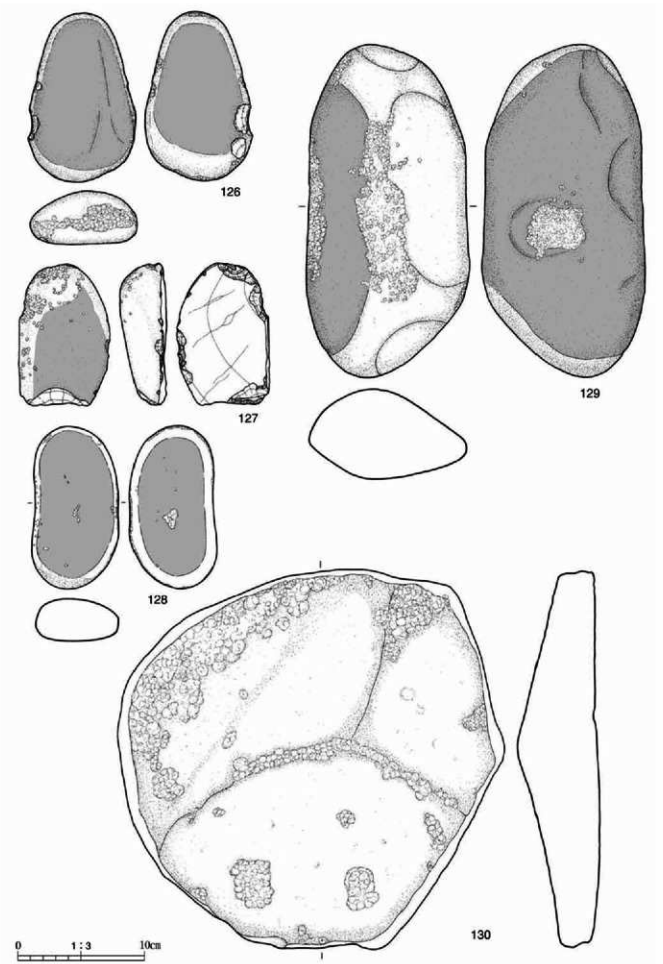
第13図　B区包含層出土遺物実測図７（石器、S=2/3、101はS=1/2）



第14図　B区包含層出土遺物実測図８（石器、109～111はS=1/2、112・113はS=2/3）



第15図　B区包含層出土遺物実測図９（石器、114・115はS=1/2、116～125はS=1/3）



第16図　B区包含層出土遺物実測図10（石器、S=1/3）

第２節　弥生時代の遺構と遺物

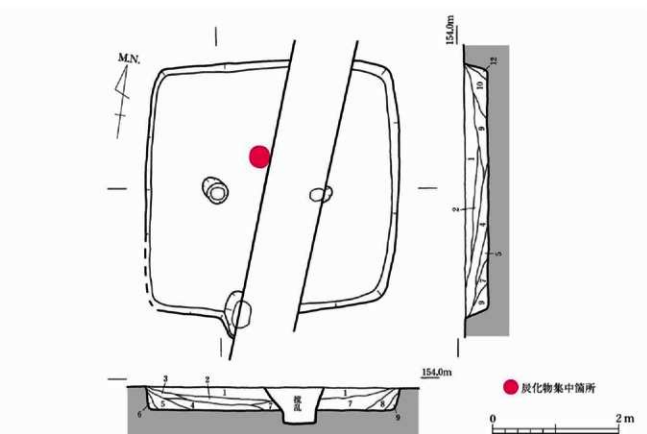
１　遺構

竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（SA1、第17図）

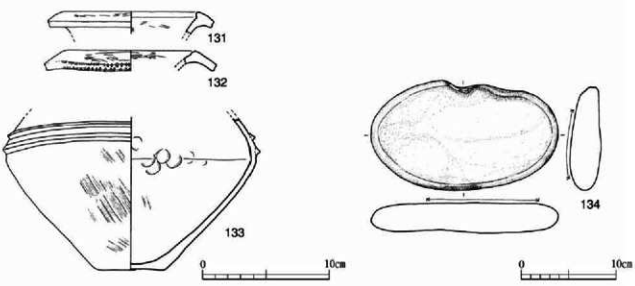
検出面から床面までの深さ約0.4m、一辺が約４mの隅丸方形プランの竪穴住居跡である。遺構の一部を撹乱による掘り込みで失っていたが、住居内の中央で東西方向に並ぶピット２基を確認することができた。この他にピットを確認できなかったことからこの２基のピットが主柱穴で、２本柱の竪穴住居であったと考えられる。２基の柱穴は上端の計測値で長軸約0.45m、短軸約0.3mの楕円形であり、深さが約0.85mといずれも深くしっかりとしている。ピットのやや北側で炭化物が集中して出土する部分があったが、掘り込みなどは確認されておらずこの部分が炉の役割をしていたかは不明である。また、住居跡の北西部分でも少量ではあるが炭化物が出土している。

遺構内から出土した遺物は少なく、住居跡の北西部分から弥生時代の土器（131～133）が床面からやや浮いた状態で、磨石（134）が南壁中央付近のピットの西側の床面に置かれたような状況で出土した。磨石の出土状況や検出状況から考えると、このピットは後世のものではなくこの住居跡に伴うものであ



1　黒褐色土（Hue7.5YR2/2）　露島御池軽石の10mmを超える粒子を散漫に含むが、ややしまりがない。
2　黒褐色土（Hue10YR2/3）　5～9mmの粒子をわずかに含む。
3　黒褐色土（Hue10YR2/3）　露島御池軽石の３mm以下の細粒を多く含む。5mm大のブロック1216%程度。
4　黒褐色土（Hue2.5YR3/1）　３に類似しているが、ややかたくしまっている。
5　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　露島御池軽石の10mm以下の粒子を多量に含み、しまりがありかたい。
6　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　一次埋土である。アカホヤに起因する黄褐色粘土と３に類似した土を含む。
7　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　３類似しているが、露島御池軽石の粒子がさらに小さい。
8　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　暗褐色の粘質土に起因し、わずかに黄色を帯びる。5mm大の粒子を多く含み、ややしまりがない。
9　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　６と類似するが、黒褐色ブロックは含まない。
10　黒褐色土（Hue10YR2/3）　露島御池軽石の粒子を全体的に含む。硬さと粒子の含有率が高く、非常にかたくしまっている。
11　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　８に類似している。しまりがなくほと時を経てず流入したものと考えられる。
12　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　８と同じく一次埋土である。露島御池軽石の５mm大の粒子を含む。ややかたくしまっている。

第17図　B区１号竪穴住居跡実測図（弥生、S=1/60）



第18図　B区１号竪穴住居跡出土遺物実測図（弥生土器、S=1/3、石器、S=1/2）

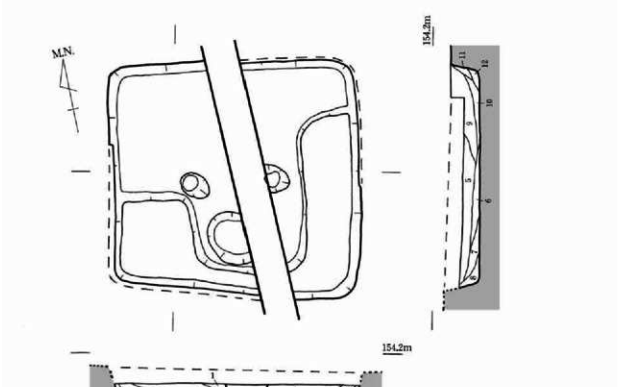
ると考えられるが、撹乱により破壊されている部分が多く不明な点が多い。

131・132は頸部以下を失う下垂傾向が見られる壷の口縁部である。131は口縁部の内側がやや突出する特徴をもち、ナデにより調整した後にミガキを施している。口唇部はヨコナデで面取りされ端部に凹線状の窪みが見られる。132の口縁部は逆Ｌ字状に下垂し、口唇部には131と同じ弱い窪みが見られ、その角にヘラによる刻目が施されている。口唇部の上面から内面にかけてはナデのあとミガキを施している。133は壷の胴部上位から底部の資料である。平底の底部から外方へ向かい直線的に立ち上がり、胴部で屈曲させ内湾しながら直線的に立ち上がる。胴部の屈曲部付近には断面が三角形状を呈す２条の貼付け突帯を施す。胴部上半から口縁部までは、ＳＡ３から出土した135と同じような器形を呈するのではないかと考えられる。外面にハケ目、内面には指オサエと部分的にナデによる調整が見られる。

なお、133の壷はＳＡ３の南で検出した１号土坑（ＳＣ１）から出土した壷の破片と接合したことから、ここで取り扱いＳＣ１での再掲載はしない。

２号竪穴住居跡（SA2、第19図）

昨今の掘り込みにより遺構中央を削平されていたが、一辺約４ｍの隅丸方形プランの竪穴住居跡である。東西方向に主柱穴と考えられるピットを２基確認することができた。他にピットが確認できなかったことからＳＡ１と同様に２本柱であったと考えられる。２基の主柱穴は上端の計測値で長軸が約0.5ｍ、短軸約0.4ｍであり、深さ約１ｍといずれも深くしっかりとしている。この住居跡の上端のほとんどは後世の撹乱により消失しており、出入口などを確認することはできなかった。住居跡の床面の北側と中央がやや低く検出面からの深さは約0.5ｍ、南側と東西の壁際のＵ字状の約１ｍは検出面からの深さが約0.4ｍで一段高い構造（ベット状）になっている。ベット状遺構を持つ住居跡が確認できたのは３軒の住居跡のうちＳＡ２のみである。また、住居跡の中央のやや南よりの床面が低い部分に直径が約0.9ｍ、深さが約0.5ｍの浅い掘り込みが確認できた。この浅い掘り込みは炉的な役割をしていたのではないかと推測できたが、炭化物や焼土等は確認することはできなかったため炉として認識するには至らなかった。



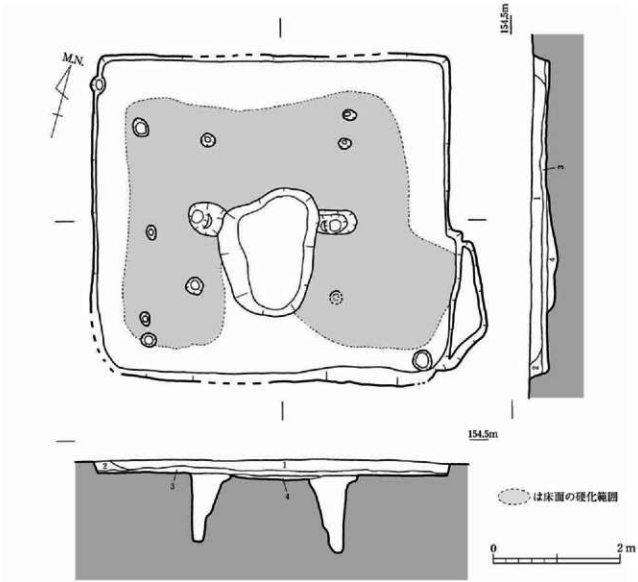
1 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1) 5mm大の粒子を30%含む。しまりがなくやわらかい。
2 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1) 5～8mm大の粒子をわずかに含む。
3 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1) 2と類似しているが粒子がやや細かく、3mm前後で構成。
4 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 細粒から10mm大の粒子を含む。赤みを帯びた露島層池軽石のブロックを含む。
5 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 3mm大を中心に10～12mmの粒子も混じる。ややかたくしまっている。
6 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 5と類似しているが、しまりがあり炭化物を比較的多く含む。
7 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) かたくしまっている。黄色の小粒を含む。
8 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 4と類似しているが、しまりがなくパサパサしている。
9 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 露島層池軽石の5mm大の粒子を多く含む。しまりがやや弱い。
10 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 露島層池軽石の7～10mm大の粒子を多く含む。かたくしまっている。
11 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 露島層池軽石の小ブロックを含む。ややしまりが弱い。
12 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 11に比べかたくしまっている。露島層池軽石の赤みを帯びた粒子を含む。

第19図　B区２号竪穴住居跡実測図（弥生、S=1/60）

ＳＡ２からの出土遺物はほとんどなく、土器片が数点のみ床面からやや浮いた状態で埋土中から出土している。遺物は弥生時代に帰属することは確かであるが、器種や器形などは不明である。

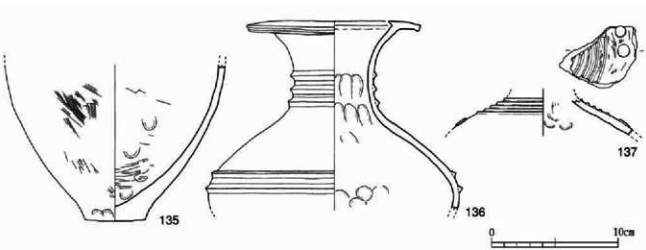
３号竪穴住居跡（SA3、第20図）

ＳＡ１・２とは異なり一回り規模が大きく、5.5m×5mの方形プランを呈する竪穴住居跡である。検出面からの深さは削平の影響で約0.3m、東西方向に主柱穴と考えられるピットを２基確認することができた。２基の柱穴はともに長軸約0.8m、短軸約0.45mであり、深さが約1.1mといずれも深くしっかりしている。また、住居跡の南東の壁が東側に飛び出している状況で検出され、当初は後世の遺構かと考えられたが、掘り進めると住居跡から約0.6mほど東に突出していた。住居跡の床面から約0.1mほどの段差で高くなる不整形な平坦面が存在する階段状の遺構であることが判明したことから、この部分が出入口ではないかと考えられる。また、主柱穴のほかにも硬化した床面の範囲（破線ライン）の四隅に４基のピットが確認でき、出入口付近のピットだけが出入口の邪魔になるためか壁側にずれている。この壁側にずらしたピットは出入口の支えの役割をもしていたのではないかと考えられる。さらにこの四



1 黒褐色土（Hue10YR2/1） 霧島御池軽石のS㎜大の粒子を多く含む。しまりがやや弱い。
2 黒褐色土（Hue10YR3/2） 1と類似しているが粒子がやや細かく、暗色を呈する。
3 黒褐色土（Hue7.5YR3/1） 霧島御池軽石の小ブロックを含み、かたくしまっている。
4 黒褐色土（Hue7.5YR3/2） 霧島御池軽石のキブロックと焼化物を多く含み、アカホヤブロックを少量含む。しまりがなくやわらかい。

第20図　B区３号竪穴住居跡実測図（弥生、S=1/60）



第21図　B区３号竪穴住居跡出土遺物実測図（弥生土器、S=1/3）

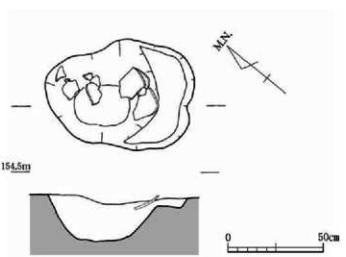
隅のピットの内側でも４基のピットが検出されている。出入口の１基は後世の撹乱により大半が破壊されているが、これらのピットは住居空間を考えるとスペースが狭くなるが、ＳＡ３は規模が大きく竪穴住居の構造上、主柱穴以外に屋根を支えるための柱が必要であったとも考えられる。床面の観察では主柱穴の掘り方を切る形で住居の中央に深さ約0.1mほどの浅い掘り込みを確認することができたが、焼土や炭化物などは確認できず、炉などの役割をしていたのかを確認することはできず性格は不明である。

住居内から出土した遺物を第21図に図示した。136は底部を失う壺である。西側の主柱穴内の床面から約0.4mの深さで出土した。胴部に２条、頸部に３条の断面三角形を呈する貼付け突帯をもつ。頸部は直線的に立ち上がりながら、口縁部に近づくにつれて外反する。口縁部はやや下垂する逆Ｌ字状を呈し、口唇部には１条の沈線が巡る。口縁部は内側にもやや突出し三角形状を呈す。外面調整はナデ、内面調整は指オサエのあと、ナデにより丁寧に整形されている。ＳＡ１から出土した133は焼成や胎土などから同一個体の可能性がある。135・137は住居の埋土中から出土した。137は壺の胴部上位から頸部付近にかけての資料である。頸部付近には５条の断面三角形の貼付け突帯を施し、胴部上位には円形浮文を施す。外面はナデのあとミガキ、内面は指オサエのあとナデにより調整されている。135は甕の底部から胴部にかけての資料である。底部は平底で外方にやや湾曲しながら立ち上がり、胴部は張らず上方に向かい立ち上がる。外面調整はナデのあとハケ目、一部にミガキが見られる。内面は指オサエのあと、ナデにより調整されている。

土坑

１号土坑

長軸約0.8m、短軸約0.6m、深さ約0.25mの不整形な楕円形を呈す土坑であり、ＳＡ３の南東側で隣接して検出された。133の壺の破片が検出時に確認され、ＳＡ１から出土した135と接合したことから同時期の遺構と考えられる。住居跡のすぐ近くに位置することから、貯蔵穴などの性格が想定できたが、土器片以外の植物遺存体などの検証材料となる遺物は確認できず、その性格については言及できない。



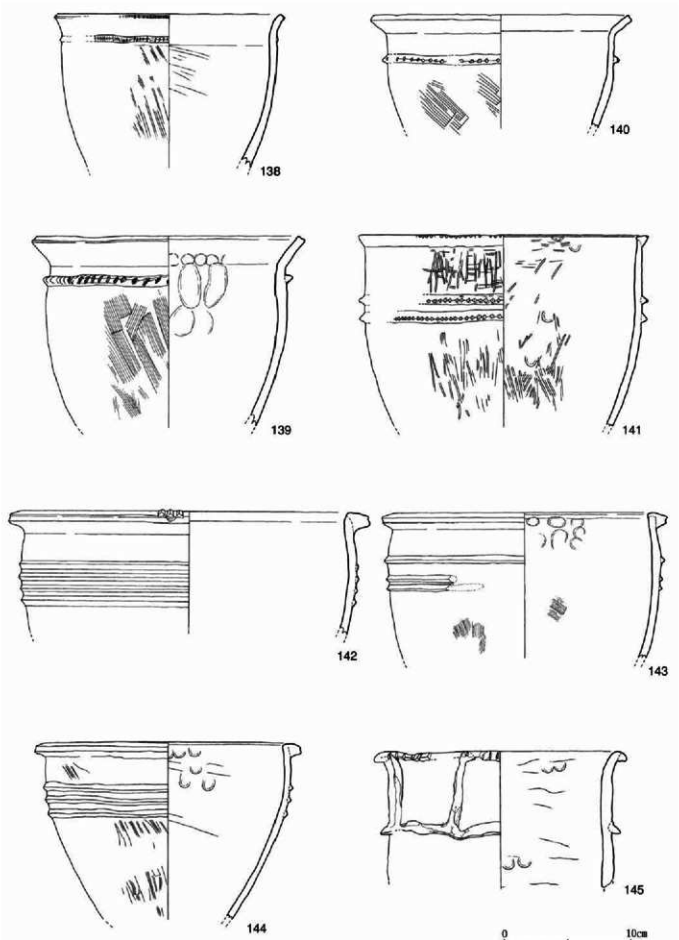
第22図　Ｂ区１号土坑実測図（弥生、S=1/20）

２　遺物

出土した弥生時代の遺物はほとんどが包含層より出土している。第Ⅲa層中からの出土遺物が大半であり、古代の土器とほぼ同一レベルで出土した遺物もあった。ここではそれらの弥生土器について、器種ごとに器形的特徴等をもとに若干の説明を加える。

壺（第23～26図、138～158、164～168）

138～140は「く」の字状の口縁と頸部に１条の貼付け突帯を特徴とする。突帯には刻目が施され、口唇部はヨコナデにより面取りされ凹線状の窪みをもつ。外面にはハケ目、内面は指オサエやミガキによ

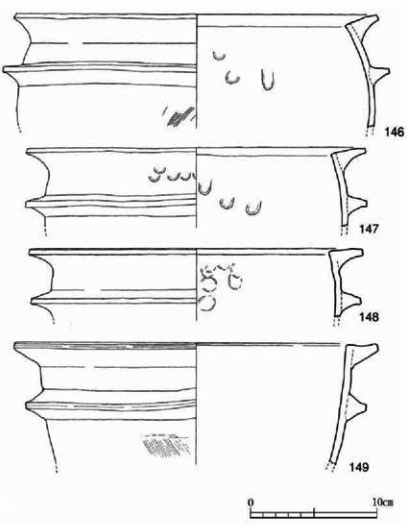


第23図　B区包含層出土遺物実測図11（弥生土器、S=1/3）

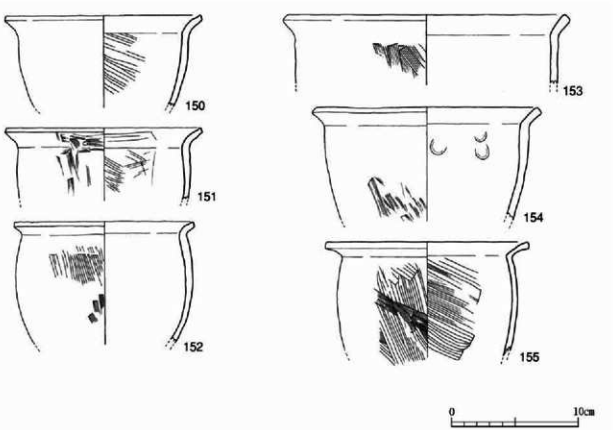
る調整が見られる。138の口唇部には刻目が施されている。141は口縁部が直立し口唇部には刻目を施す。口縁部は小さな断面三角形状を呈し、突帯の位置は138～140に比べて下がる。調整は内外面にミガキが見られる。142～144は口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部に粘土を付け足し外側へ開く逆L字状となる。口唇部には凹線状の窪みが見られる。また、3～4条の断面が三角形を呈する貼付け突帯を有するが、接合が粗い。調整は外面はミガキ、内面は指オサエのあとナデである。145は口縁部をやや外反させ、その端部に粘土紐を足し小さく下垂する口唇部を作り出し刻目を施す。また、断面三角形の不均一な縦横方向の貼付け突帯を有するが、接合が極めて粗い。

146～149は厚みのある器壁と、突出する発達した口縁部と貼付け突帯を器形的特徴とする。146～148は内湾しながら立ち上がり、端部を平滑に収める断面台形状の口縁部を有する。146・147の口縁部はやや上向き、148・149の口縁部はほぼ水平方向に開く。146～148には口縁端部にヨコナデによる凹線状の窪みがみられるが、149には同様の窪みは認められない。146～148の口縁部上面はヨコナデ、ナデにより平滑に仕上げる。149の口縁部上面は平滑気味に仕上げているが、緩やかに窪んでいる。これは調整の際に親指の腹でヨコナデを施したことに起因すると考えられる。

150～156は138～149とは異なり、突帯を持たない甕の一群である。150～155は「く」の字状に屈曲し外方に向かい開く口縁部を有する。丁寧なナデ調整を施し、その端部は面取りされ平滑気味に仕上げられている。内外面ともにハケ目調整を施す。152の胴部は緩やかではあるが張り出しが他と比して強く球胴を呈する。155の口縁部は150～154と比して開き角が大きく、外方に向かい水平近くまで外反する。わずかな反りが認められ、その断面形状には端部に向かって緩やかに肥厚する傾向が看取できる。156は水平に開く口縁部と張り出さずに底部に向かい緩やかに窄まる胴部を器形的特徴とする。口縁部直下に幅広の凹線状の窪みが周回し、胴部最上位に明瞭な稜有する。157の口縁部上面は149と同様に緩やかに窪んでいる。158の胎土には砂粒および微細礫を含み焼成も良好で堅く焼き締まっている。器壁もやや厚く特異な個体である。



第24図　B区包含層出土遺物実測図12（弥生土器、S=1/3）



第25図　B区包含層出土遺物13（弥生土器、S=1/3）

164～168は底部の一括資料である。164は上げ底の底部であり、外面にハケ目調整が見られる。165は厚みのある平底の底部である。底部外周縁付近に指オサエで調整している。166の外周縁はわずかに外側へ張り出しその端部を丸く収める。調整は風化が著しく不明である。167は発達した脚台状の底部で屈曲部から外方へ直線的に立ち上がる。外周縁に１条の沈線を施す。168は外方に向かい直線的に開く器形を有する。底部の厚みは比較的薄い。風化が著しく調整が判然としない。

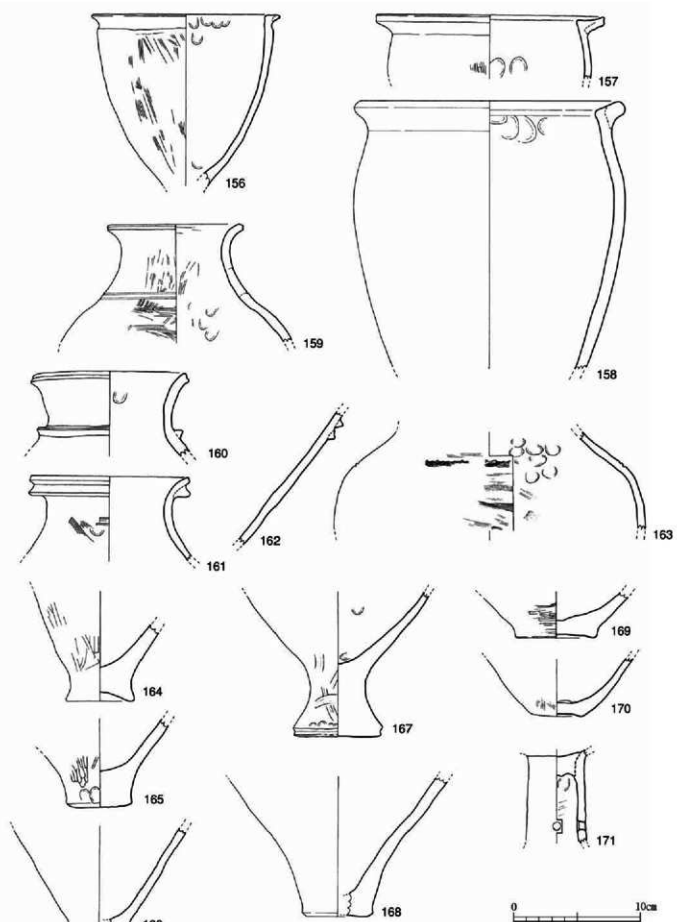
壺（第26図、159～163、169・170）

159～161は頸部から口縁部にかけて緩やかなカーブを描いて外反する器形的特徴を有する。159は胴部から頸部への変化点付近に２条の沈線が巡る。口唇部はヨコナデによる丁寧な調整が施され１条の沈線が施される。160はは胴部から頸部の変化点に１条の貼付け突帯を巡らす。口唇部に凹線状の窪みが周回する。161は口縁部外面直下に下垂する１条の貼付け突帯を巡らす複合口縁を有する。162・163はは壺の胴部である。162は肩部分に櫛描き波状文を施す。163は直線的に外方に開き上がり、胴部の最大幅直下に２条の貼付け突帯が確認できる。

169・170は底部の一括資料である。ともにやや上げ底気味の底部である。

高坏（第26図、171）

171は坏部と底部を失う高坏の脚部のみの資料である。ほぼ直立する脚であるが、上方から下方に向かってわずかに開く。裾部から底部への変化点付近に円形の透かし穴を施す。



第26図　B区包含層出土遺物実測図14（弥生土器、S=1/3）

第３節　古代から中世の遺構と遺物

Ｂ区で検出された遺構はその大半が古代から中世に帰属する。主な遺構としては、掘立柱建物跡５棟、溝状遺構６条、道状遺構２条、周溝墓３基、土坑墓１基、周溝状遺構１基、土坑57基である。また、出土遺物の様相は９世紀から16世紀代までの時期幅を呈するが、遺構との関連から見ると９～12世紀代に遺跡としての興隆期を見出すことができる。

以下、個々の遺構・遺物について若干の説明を加えるが、遺構相互の併存関係や供伴遺物などから推察できる時期的問題については第Ⅴ章で詳述することにする。

１　遺構

掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（SB1、第28図）

Ｈ９・Ｉ９グリッドで検出された３間×３間のほぼ方形の平面プランを呈する形態的に特異な建物跡であり、その周囲に16基のピットが巡る。

方形プランを構成する柱穴跡の間隔は一定ではないが、12基の柱穴跡が対辺の柱穴跡と均整よく対峙して配置されている。柱穴跡の規模は上端長軸の測定値で平均約0.8mを測り、SH７を除いてほぼ円形のプランを呈する。また、SH２・SH４・SH５・SH８・SH10・SH11の６基の柱穴跡は途中に三日月状のテラスを有する２段ピットであることが確認された。

柱穴跡の埋土状況の観察では、12基中８基で柱痕跡が確認されている。その８基の柱穴跡のうち６基は２段ピットの柱穴跡である。12基の柱穴跡は埋土的には大きな差異は認められなかったが、２段ピットの柱穴跡で柱痕跡がよく残っているという観察結果から考えれば、柱材の入れ替えや補修に際して生じた形態差とも考えられる。また、すべての柱穴跡において根固め等の建築技法は認められず、霧島御池軽石層を掘り抜き、その下層のしまりのある安定した黒色土（第Ⅵ層）を基底とする。柱痕跡周囲の埋土は一様に固くしまっていた。

３間×３間の建物跡の周囲を巡る16基のピットについては、身舎を巡る四面庇を構成する柱穴跡と認識していたが、北東隅角と南西隅角で柱穴跡を検出することができなかった。この事実から、①庇を構成する柱穴跡、②巡り廻下状の施設の束柱跡、③鍵括弧状に配置された塀もしくは柵を構成する柱穴跡、という捉え方も考えられることから、庇以外の構造物が存在した可能性も指摘しておきたい。

なお、身舎の柱穴跡からの出土遺物は埋土中に混在する土師器の細片が大半であったが、SH４から白磁碗Ⅳ類の体部片と土師器坏の細片が出土している。

２号掘立柱建物跡（SB2、第29図）

Ｉ８・Ｉ９グリッドで検出された３間×５間の総柱建物跡である。SB１の西側に位置し、主軸方位をＮ－４°－Ｗにとる。また、桁行約7.8m、梁行約6.0m、平面積にして約53.1㎡の建物規模は検出された５棟の掘立柱建物跡の中では最大を誇る。

柱穴跡の平均柱間は、個々の遺構の下端中央を測点としてその間隔を計測すると約1.86mであるが、実際には約1.44～2.12mのばらつきがあり、SH３～SH21の東西軸を境としてその北側の柱間が広くなっている。その中でもSH１～６の南北軸とSH14～24の南北軸の比較において、SH３～６、SH21～24までの柱間に対し、SH１～３とSH19～21の柱穴跡の間隔が広くなる傾向が顕著に認められる。その理由は

明確にはできないが、SH３～SH21の東西軸以北については増床等の可能性も指摘できる。また、梁の方位軸から明らかにずれているSH８・SH９・SH11については東柱として据えられた柱跡と見ることもでき、全体的な構成を勘案するとそのほかにも同様の役割を担う柱跡が含まれていると考えられる。

３号掘立柱建物跡（SB3、第30図）

H11・I11グリッドを中心に検出された２間×３間の総柱建物跡である。SB１の東側にやや離れて位置するが、主軸方位N－５°－WはSB１と同一主軸方位である。

柱穴跡の配置を見るとSH７のみが桁の方位軸からわずかに振れている。また、SH２～SH10の東西軸とSH１～SH９の東西軸の桁方向の柱間はやや広めになっているなどの一部不均等な配置も見られるものの、全体的には均整のとれた柱穴の配置になっている。

４号掘立柱建物跡（SB4、第31図）

I９グリッドを中心に検出された１間×３間規模の建物跡である。SB1の南側に位置し、桁方向を主軸とする方位はN－94°－Wであり、SB１の主軸方位とほぼ直交する位置関係を保つ。

俯瞰的に捉えるとSB１の東西軸とほぼ並立することから、規模的にはかなり小さいもののSB１の附属建物という見方ができる。

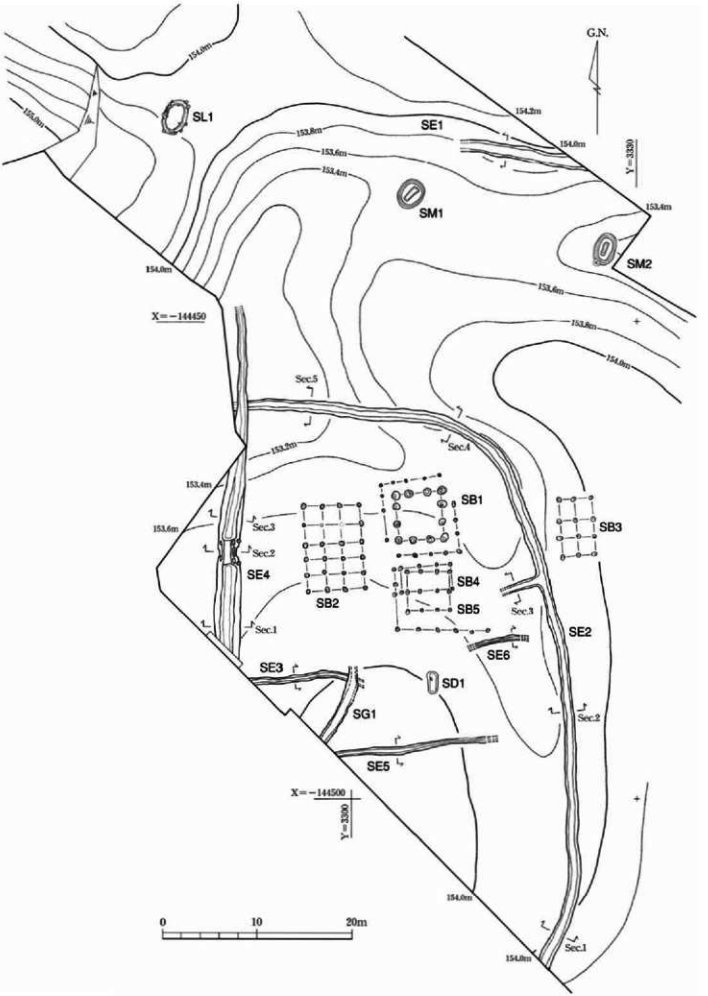
５号掘立柱建物跡（SB5、第31図）

I９・J９グリッドで検出された２間×３間のほぼ方形プランを呈する建物跡である。建物跡の南側と西側で、南北方向にSH11～SH14（総延長約6.2m）、東西の方向にSH14～SH19（総延長約9.5m）のおおよそL字状に配された塀もしくは柵と考えられるピット列が検出された。しかし、南側のピット列がほぼ一定間隔を保っているのに対し西側のピット列はその間隔が不揃いである。特にピット列のSH13とSH14の間は約3.76mと極端に広くなっていることから、両ピット間については相互のピットを連結させずに開放空間であると想定し、SH11～SH13（約2.65m）・SH14～SH19という２つのピット列として捉えることが自然であろう。また、この建物跡の平面プランをSB１の対角間の距離を１として比較してみると、SB１：SB５＝１：0.87となりやや小振りながらも両遺構は比較的近い規模を有していることが分かる。３間×３間と２間×３間という構造上の相異は建物の平面積規模に起因するものの、性格的には似通った意味をもつ建物跡として考えてよいであろう。

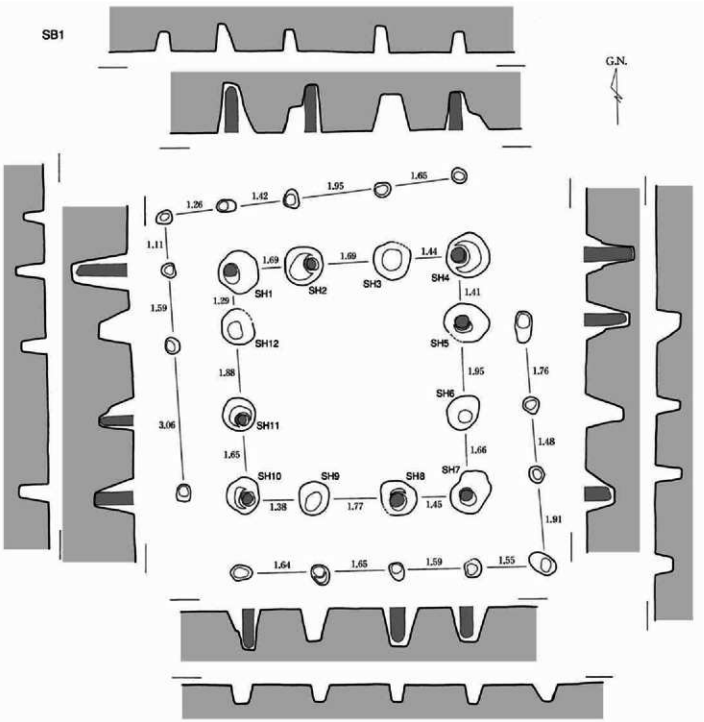
SB１からSB５の５棟の掘立柱建物跡について、柱穴跡から器種及び帰属年代が推定可能な遺物が出土した遺構はSB１のみである。しかし、柱穴跡や溝状遺構の埋土をもとにした比較・分類ではSB１からSB４の４棟が中世、SB５の１棟が古代に帰属する遺構と考えられる。

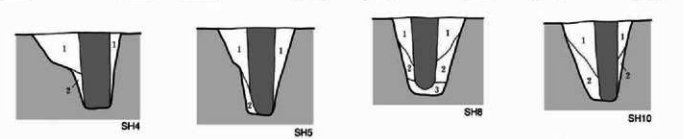
第６表　B区掘立柱建物跡計測値一覧（古代・中世）

遺構番号	規　格	主軸方位	桁行(m)	梁行(m)	面積(㎡)	桁梁比率（桁行／梁行）	備　考
ＳＢ１	３間×３間	Ｎ－５°－Ｗ	4.94	4.68	23.1	1.04	「」状のピット列が附随。塀もしくは柵の跡か。
ＳＢ２	３間×５間	Ｎ－４°－Ｗ	8.76	6.02	53.1	1.46	総柱建物跡
ＳＢ３	２間×３間	Ｎ－５°－Ｗ	5.98	3.49	20.9	1.71	総柱建物跡
ＳＢ４	１間×３間	Ｎ－94°－Ｗ	5.22	2.59	13.4	2.02	ＳＢ１に附随
ＳＢ５	２間×３間	Ｎ－２°－Ｗ	4.41	4.06	17.8	1.09	Ｌ字状のピット列が附随。塀もしくは柵の跡か。



第27図　B区古代・中世主要遺構分布図（部分、S=1/400）

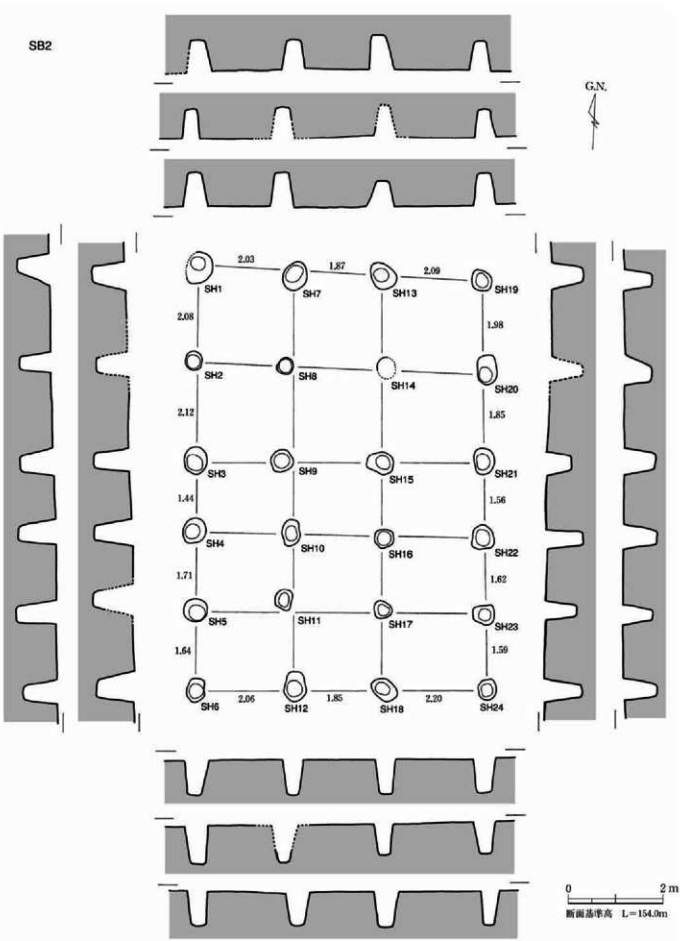




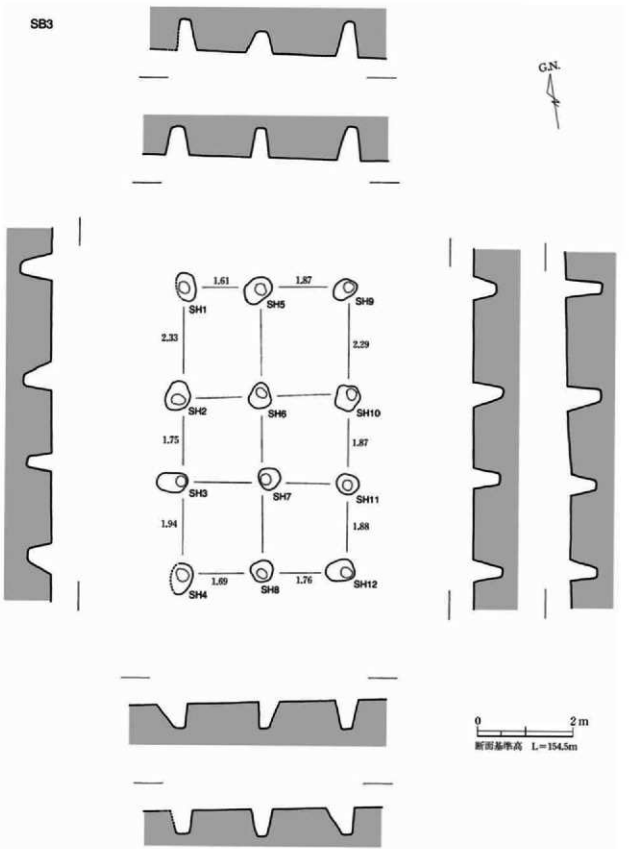
ＳＢ１柱穴埋土（共通）

1　黒褐色土（Hue7.5YR3/1）　Kr-Mの微細粒を全体的に含む。粗砂。
2　黒褐色土（Hue7.5YR3/1）　Kr-Mの粒子（微細粒～5mm大）を多く含む。粗砂。
2　黒色土（Hue7.5YR2/1）　Kr-Mの粒子を多く含み、黒くしまっている。

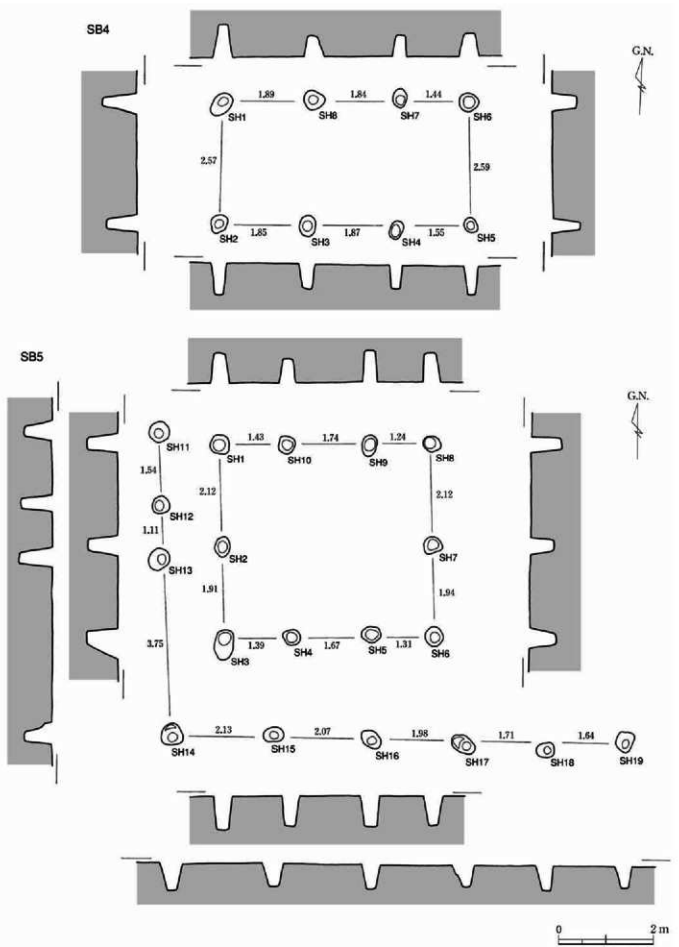
第28図　Ｂ区１号掘立柱建物跡実測図（中世、S=1/80、柱穴埋土状況断面図はS=1/40）



第29図　B区２号掘立柱建物跡実測図（中世、S=1/80）



第30図　B区３号掘立柱建物跡実測図（中世、S=1/80）



第31図　B区４号・５号掘立柱建物跡実測図（４号：中世、５号：古代、S=1/80）

溝状遺構

1号溝状遺構（SE1、第27・33図）

E10・E11グリッドで検出された遺構で、走向軸をN－82°－Wにとる。遺構規模は検出範囲の最大値で総延長約13.8m、上端間約1.38m、深さ約0.18mである。断面形状は逆台形を呈す。遺構が検出されたE10・E11グリッド付近は北から南に向かう緩やかな下り勾配であるが、遺構の底面はほぼ水平であった。また、平滑な底面から道的な性格も考えられるが、調査段階では明瞭な硬化面等が確認できなかったことから溝状遺構との認識でとどめておく。

遺構内からは、底面よりわずかに上のレベルで黒色土器の高台付境の底部片（第60図375）と白磁碗Ⅳ類の底部片（未図化）が出土している。

2号溝状遺構（SE2、第27・33・34・35図）

検出した6条の溝跡の中では最大の規模を誇るが、西端のG 7グリッド付近は攪乱により消失、南端のM10・M11グリッドより先は調査区外のため全体像を確認するには至らなかった。

確認できた範囲での総延長は約84.5mであるが、遺構はL11・M11グリッドとH10グリッドで緩やかに2度方向を変え、（E－75°－N）→（N－9°－W）→（N－84°－E）と走向軸を変化させる。この走行軸の変化は、遺構が南側の台地丘陵から派生した前述の尾根地形の西側裾に沿う形で設けられたことに起因するものである。また、I 10グリッドではI 11グリッドの方向に向けて緩やかな下り勾配となる約3.2mのT字状の分岐も確認されている。

遺構内から出土した遺物を第34・35図に示した。ここではそれらの遺物について器形・調整等の特徴観察をもとに若干の説明を加える。

なお、図化した遺物のうち底面付近で出土した遺物は184・189である。

172～175は土師器である。172・173は皿である。172は底部から外方に向かい直線的に立ち上がる器形を有する。173は172と比してやや大きめの口径と肉厚の器壁を有し、体部外面の下半分には回転ナデ調整の際の明瞭な稜が幾重にも残る。底部はともにヘラ切り離しであるが、172の底部には切り離し後の丁寧なナデ調整が施されている。174はヘラ切り離しの底部を有する坏である。口縁部から体部中位を失う資料である。175は口縁部を失う高台付境である。体部中位に弱い屈曲が認められるものの、外方に向かい直線的に開く器形を有する。体部同様に外方に向かい直線的に開く高台は、その接地面を平滑に仕上げる。

176・177は墨書土器である。176の文字は完全ではないが「山」と「水」の合わせ文字「泉」と判読できる。177は「水」の文字の第4画目の終筆部と考えられる。器種はともに土師器の坏である。178は胴部内面の繊維圧着痕が明瞭に残る布痕土器の口縁部である。179～182は土師器甕の口縁部から胴部上位にかけての資料である。179は強く外反する口縁部内面から胴部への屈曲部に明瞭な稜を有し、胴部中位が弱く球状に張り出す器形を想定できる。最大径は口縁部にあると考えられる。180は179と比して内面の稜の明瞭さに欠けるが器形的にはより外方に強く張り出す器形になると考えられる。181・182は外反する口縁部から胴部への屈曲部以下を失う資料であるが、残存する胴部の形状から外方にさほど張り出さず直線的な胴部になると考えられることから鉢の可能性も指摘できる。

183～186は須恵器の甕である。183～185は外反しながら外方へと開く直口縁と肩部に最大径を有する器形的特徴を共有する。また、器表面調整の観察では外面に格子目タタキ（183）・平行タタキ（184・

185）という相異があるが、内面には頸部から肩部にかけて同心円当て具痕、それ以下に平行当て具痕が認められ、当て具を使い分けていることも共通している。186は183～185に比して大型の甕であり、外方に緩い角度で開く受け口状の屈曲した口縁部を有する。器表面調整としては外面に平行タタキ、内面には頸部から胴部中位までに同心円当て具痕、それ以下に平行当て具痕が残る。当て具痕は調整後にナデ消され比較的滑らかな器表面に調整している。器形的には該期の個体としては長胴である。

187～192は貿易陶磁である。187～189は越州窯系青磁の碗である。３点とも大宰府分類のⅠ-1a類に相当する。190～192は白磁の碗である。190はⅫ類の底部である。釉調は淡い水色を呈し、調整も丁寧で端正な作りである。191はⅤ-1a類の口縁部、192はⅣ－1a類の底部に相当する。

３号溝状遺構（SE2、第27・33図）

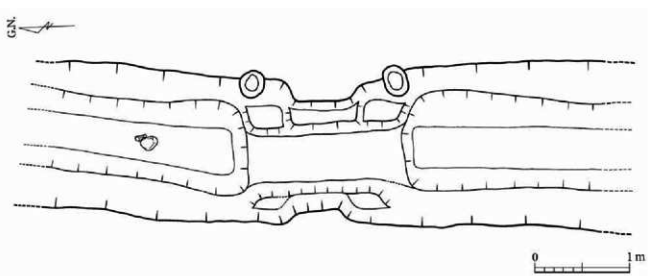
Ｊ８グリッドで検出した総延長は約10.5m、走向軸をＮ－84°－Ｅにとる遺構である。調査区内のＪ９グリッドとの境界付近でSG１を切った後は不明瞭となるが、Ｊ７グリッドより先に遺構が残存していることは確実である。単一層の埋土はSE２に近似し、土師器細片がわずかに混在していた。

４号溝状遺構（SE4、第27・32・33・36図）

走向軸をほぼ南北軸に近いＮ－３°－Ｅにとる溝跡で、Ｆ７～Ｊ７の５つのグリッドにまたがり検出された遺構である。総延長約36.5mは長さではSE２に次ぐ遺構規模であるが、溝幅は検出時の上端間で最大約2.88mと６条の溝跡の中では最も広い。

断面形状は逆台形状を基本とするが、上方で一度角度を変え外方に向け大きく開く。この角度変化については、埋土観察の結果から第１層と第２層の層界が比較的平坦になっていたこと、第１層がそれ以下の堆積層と比べて短時間に埋め戻されたような状況が認められることから、逆台形状のレベルまで埋没した後も時期を隔てて再度機能していた可能性がある。その際、溝幅の拡幅が行われたことも考えられ、溝の壁面が当初から「く」の字状の角度変化を有していたかについては言及できない。

第32図はＪ７グリッドで検出された遺構の一部である。掘り残すことによって造り出された階段状の施設と左右対称に位置する２基のピットが検出されている。溝跡の底面は基本層序の第Ⅵ層に相当する黒色土を基底とするが、この範囲についてはそのレベルまで掘り下げずにあらかじめ掘り残して削り出したと考えられる。したがって、当初からこの場所にこのような施設を設置する構想をもって溝の掘削



第32図　Ｂ区４号溝状遺構実測図（部分、S=1/40）

が進められたと考えるのが妥当であり、同時性を指摘できる掘立柱建物跡等を含めた位置的な関係も視野に入れて検討する必要がある。また、遺構の底面は通路として機能していたことも考えられたが、硬化面等の痕跡は検出されず、底面の傾斜がＩ７グリッドのこの門跡と考えられる遺構を境にして南北方向へと緩やかな下り勾配となっていたことが確認された。

なお、この階段状の施設についての考察は第Ⅵ章を参照されたい。

遺構内から出土した遺物を第36図に示した。ここではそれらの遺物について器形・調整等の特徴観察をもとに若干の説明を加える。

なお、図化した遺物のうち底面付近で出土した遺物は211の白磁片が１点である。

193～201は土師器である。193は脚台付皿の脚部である。内外面ともに調整は丁寧である。194～196は坏である。195は円盤状の底部から一度外側へ張り出し外方へと立ち上がる。196はやや張り出した底部側縁に回転ナデで丁寧に調整した跡が認められる。ともにヘラ切り離しの底部を有する。197・198は円盤状高台境である。197は安定した底部から緩やかに膨らみながら立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反する。520の緑釉陶器の境に近似した器形を呈する。198は円盤状の底部の周縁にヘラ切り離し後に粗くナデ上げた痕跡が残る。体部の調整に比して底部の調整が粗い。199は高台付境の底部である。やや浅い角度で外方へと開く体部と接地面を平滑にナデで仕上げた高台を有する。200・201は黒色土器であり、器種はともに高台付境である。201はやや退化傾向にある低い高台を有する。

202～204は墨書土器である。202・204に書かれた文字は「炭」と判読できるが、203・205の墨書は文字と認識できるが判然としない。

206～209は須恵器である。206・207は横瓶であり、調整等から同一個体と考えられる。胴部は両端が平滑面にならず楕円状になる。器表面は外面を格子目タタキで調整し、内面には同心円当て具痕が認められるが内面の当て具痕は器表面調整時にナデ消されている。208は壺の口縁部と胴部を失う資料である。器表面は外面を平行タタキで調整、内面には同心円当て具痕と指オサエ痕も部分的に認められる。受け口状の口縁部と平底を有すると考えられる。209は中世須恵器の擂鉢であり、内面には６条１単位の擂目が認められる。外面を丁寧なナデ、内面をハケメにより調整する。肥後系の個体か。

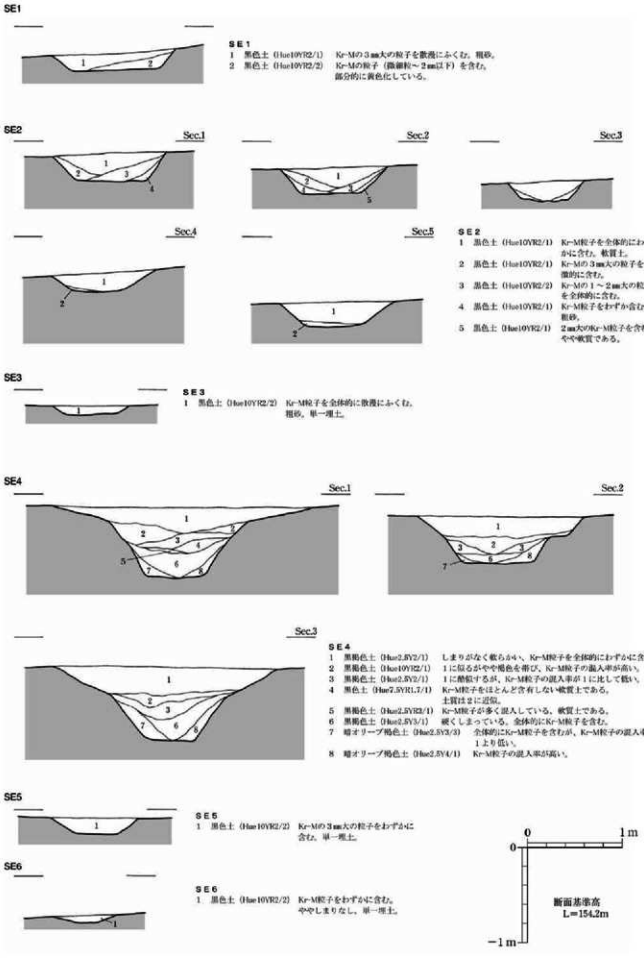
210～213は陶磁器である。210は貿易陶磁の陶製壺で釉調は暗緑黄色を呈する。肩部に横方向の四耳を有する耳壺Ⅴ類に相当する。211・212は白磁碗Ⅳ類に相当する。211は底部内面に有する段の特徴からⅣ-1b類に相当する。212の玉縁口縁は断面がシャープな三角形状を呈する。器壁が比較的薄く、口縁部外面の玉縁直下には器表面調整による凹線状の窪みが認められる。213は元末明初のアラベスク文様を描いた青花碗である。呉須は深い青みを帯びた美しいコバルト色を呈す。

５号溝状遺構（SE5、第27・33図）

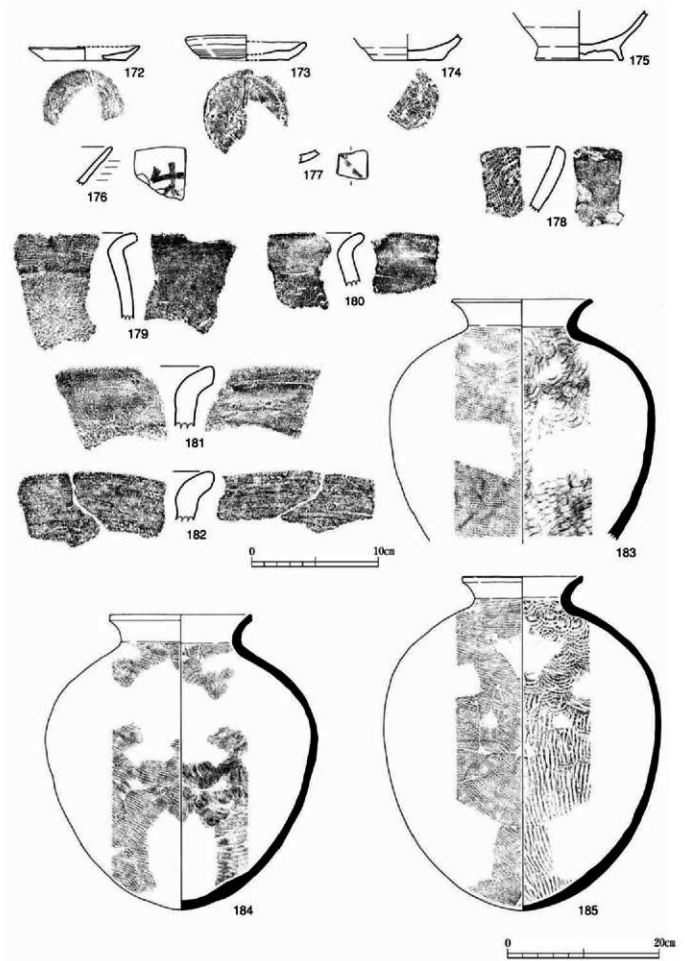
Ｋ８からＫ10グリッドで東西方向にＥ－７°－Ｎの走向軸を保ち検出された。検出できた範囲で総延長約16.2m、最大幅は約0.95mである。遺構埋土中には土師器の細片がわずかに混在した程度で時期を特定する遺物は確認できなかった。埋土的にはSE２に近似することから古代の遺構と考えられる。

６号溝状遺構（SE6、第27・33図）

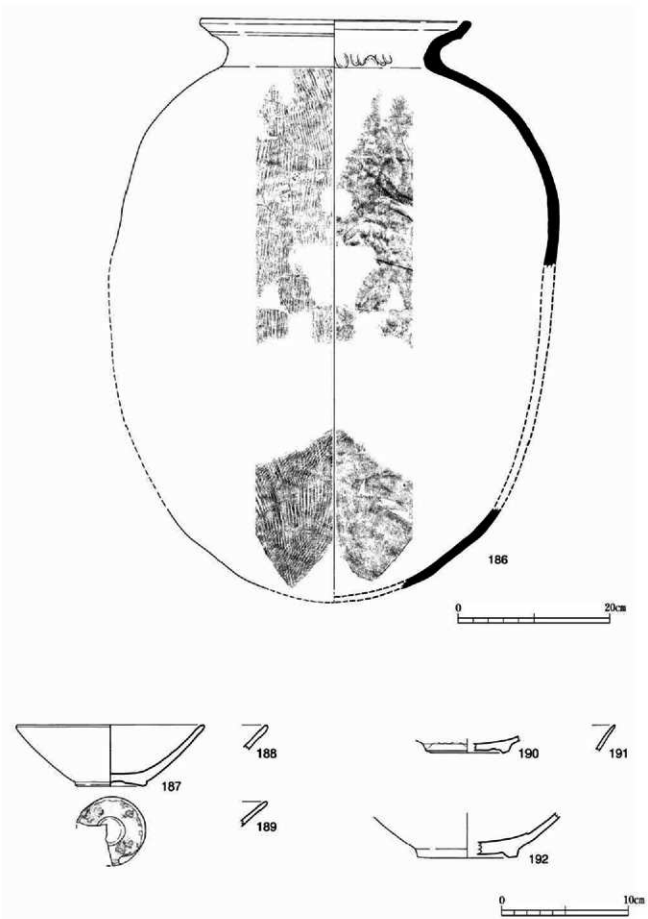
Ｊ10グリッドで検出された走向軸をＥ－10°－Ｎに保つ極めて小規模な遺構である。規模的には検出時の測定値で総延長5.1m、最大幅約0.58m、最も深い所で約0.09mである。



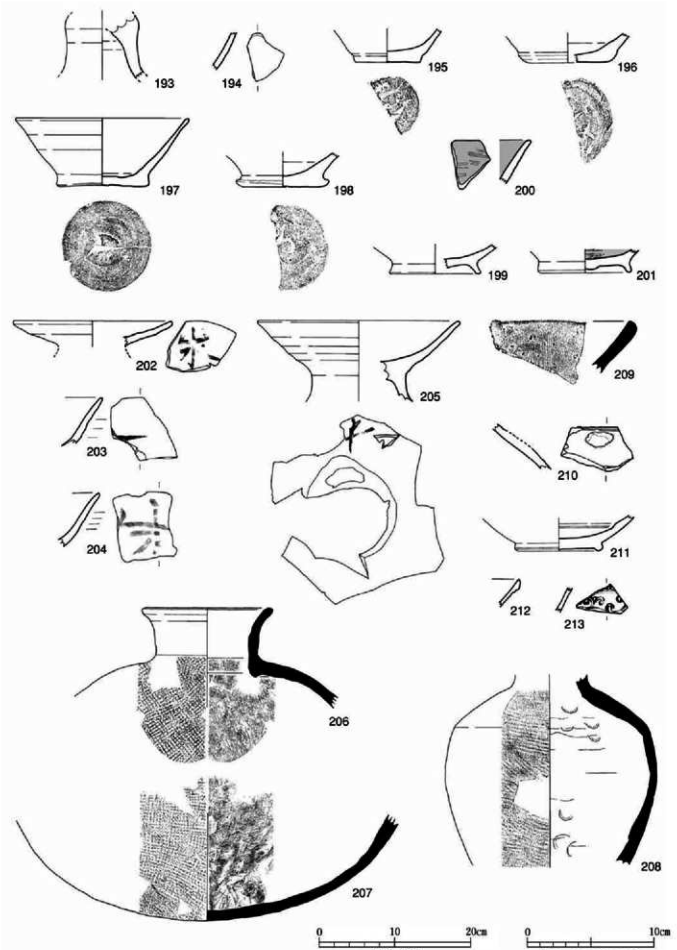
第33図　B区溝状遺構埋土状況実測図（古代・中世、S=1/40）



第34図　B区２号溝状遺構出土遺物実測図１（古代、S=1/3、183～185はS=1/5）



第35図　B区２号溝状遺構出土遺物実測図２（古代、186はS=1/5、187～192は1/3）



第36図　B区４号溝状遺構出土遺物実測図（古代、S=1/3、206～208はS=1/5）

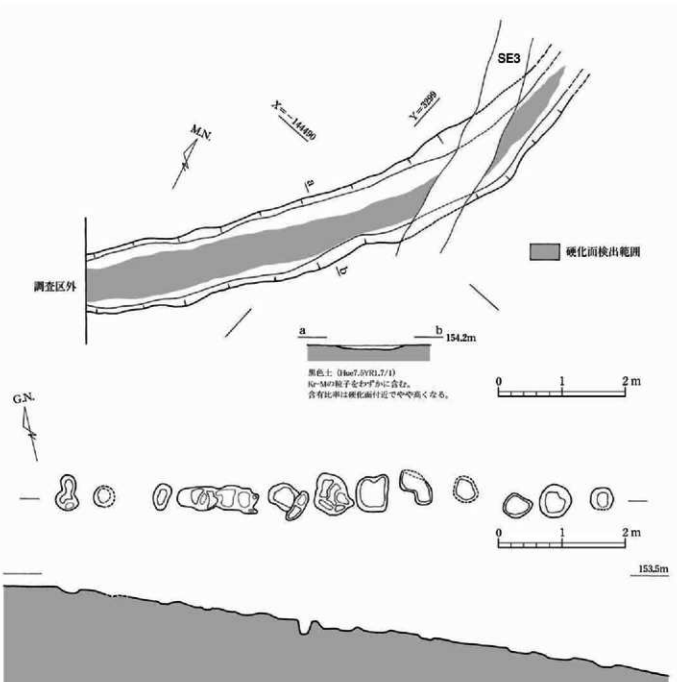
道状遺構

1号道状遺構（SG1、第37図）

Ｊ８・Ｋ８11グリッドで検出された遺構である。走向軸をＮ－35°－Ｅにとり、緩やかなカーブを描く。平均で約0.55m幅の連続する明瞭な硬化面を確認できた。SE３に一部を切られることから同遺構に先行する古代の遺構であると考えられる。遺構埋土中には土師器細片が混在していた。

2号道状遺構（SG2、第37図）

M16グリッドで検出された14基のごく浅いピットが連続する遺構である。Ｅ－12°－Ｓの走向軸を保ち、湧水が生じた谷地形の傾斜に直交し約９°の勾配で下っていた。ピットの底面には暗赤褐色を呈す部分的な硬化面が認められた。遺構埋土中にはSG１と同様に土師器細片が混在する程度であった。



第37図　Ｂ区１号・２号道状遺構実測図（古代・中世、S=1/30）

周溝墓

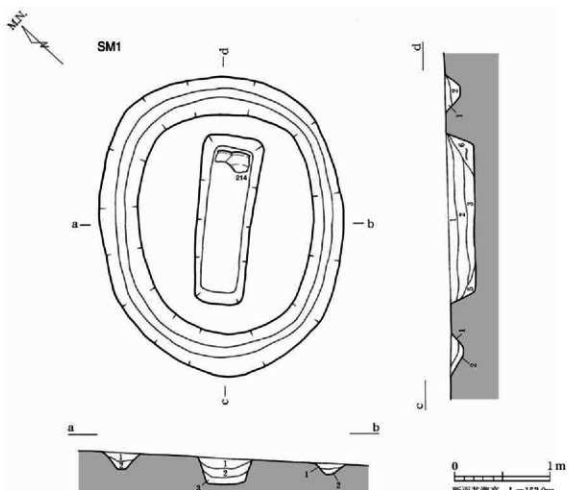
土壙とその周囲に巡る楕円形周溝の組み合わせを基本プランとする遺構である。検出された３基の遺構はすべて南側の台地丘陵から派生した弱い尾根地形の北側及び東側に位置していた。尾根地形を空間の境界として利用し、掘立柱建物跡や溝状遺構が検出された尾根地形西側の空間と明らかに隔絶しようとした意識が働いていたと考えられる。

なお、各遺構の規模等の詳細は第７表を参照されたい。

１号周溝墓（SM1、第38図）

切り合い関係がなく、３基の周溝墓の中では唯一完全な形で検出された遺構である。周溝と土壙の主軸にはやや相異があるが、土壙の主軸を遺構としての主軸として考えるのが妥当であろう。土壙は隅丸長方形プランであるが、南東側の一辺がその対辺よりやや長めになっている。

土壙内からはその底面直上で底部を失う約1/2個体の土師器甕（第41図、214）が出土した。遺物の位置は被葬者の頭部付近と考えられ、残りの破片が土壙内から出土しなかったことから約1/2個体の甕が枕として使用された可能性を指摘できる。



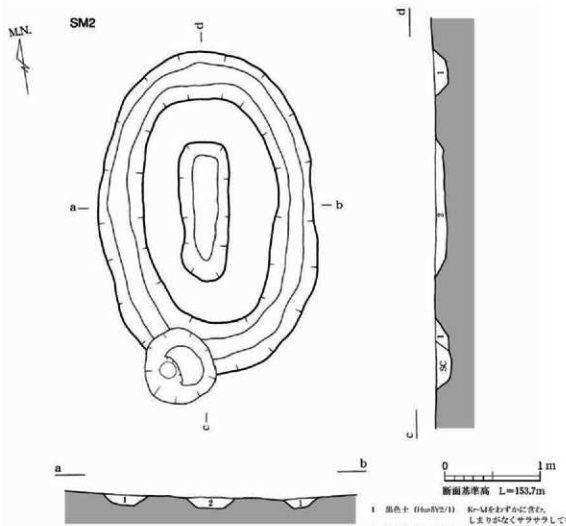
1　黒色土（Hue10YR2/1）　Kr-Mの粒子をわずかに含み、ややしまっている。
2　黒褐色土（Hue10YR2/2）　1に比してしまっており、Kr-Mの粒子を多量に含む。
3　黒色土（Hue10YR2/2）　組成・土色ともに1に近似。ややしまりがない。
4　黒褐色土（Hue10YR3/1）　しまりが強く、3に比してKr-Mを多く含む。
5　黒褐色土（Hue10YR3/1）　ごく微量のKr-M粒子を含み、しまりが強い。
6　黒褐色土（Hue10YR2/3）　しまりが弱く、わずかにKr-Mの細粒を含む。

第38図　B区１号周溝墓実測図（古代、S=1/40）

２号周溝墓（SM2、第39図）

１号周溝墓と比べてやや細長い長楕円形の周溝を有する。一部を後世の攪乱土坑に切られていたが全体のプランは明瞭に把握できる。やや不整形な中央の土壙と周溝の主軸は揃っており、全体としては均整のとれた遺構である。しかし、基本層序の第Ⅲa層の黒色土と遺構埋土の黒色土が近似しており、その判別が遅れたため本来の掘り込みレベルより下位での検出となった。

なお、土壙及び周溝の埋土には土師器の細片が混在していたが副葬品として認識できる遺物は確認できなかった。



第39図　B区２号周溝墓実測図（古代、S=1/40）

第７表　周溝墓測定値一覧（古代）

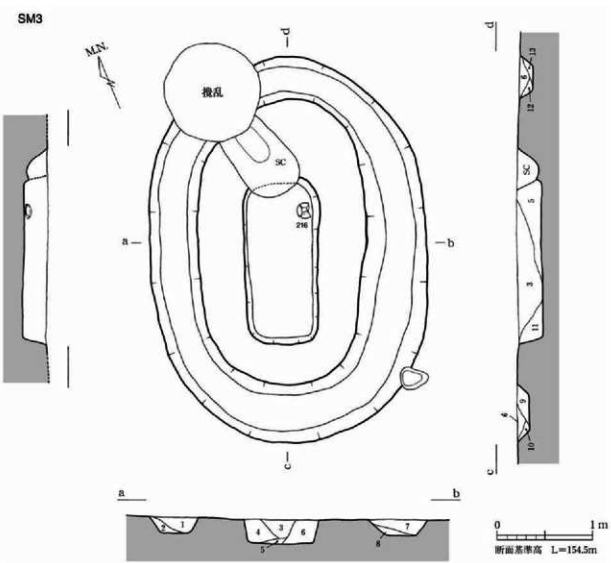
			１号周溝墓（SM1）	２号周溝墓（SM2）	３号周溝墓（SM3）
主軸方位			N－48°－E	N－8°－E	N－23°－E
検出位置			E９	F11	L15・M15
土壙	長軸		1.75	1.47	1.74
	短軸		0.65	0.54	0.83
	深さ		0.28	0.12	0.26
周溝	外縁	長軸径	3.16	3.38	4.08
		短軸径	2.66	2.26	2.92
	内縁	長軸径	2.32	2.35	2.98
		短軸径	1.78	1.42	1.77
	深さ		0.17	0.14	0.17

※　表中の値は検出時の最大値（m）

３号周溝墓（SM3、第40図）

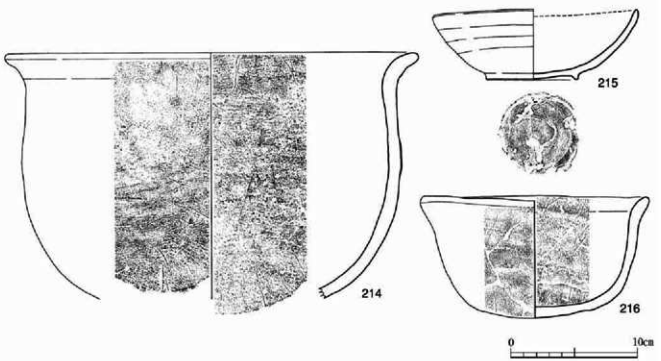
１号・２号周溝墓と離れた尾根地形東側で検出された。同遺構の検出により周辺に墓域が広がる可能性が考えられたことから、類似する遺構の検出に努めたが３号周溝墓は単独で存在していた。

遺構は３基の周溝墓の中で最大の規模を有し、周溝外縁の長軸が４ｍを超える。また、周溝と土壙はともに後世の遺構に切られていたが均整のとれた全体プランを確認できた。土壙のプランは隅丸の長方形で、被葬者の頭部側になると考えられる位置の壁際付近に土師器の高台付埦（第41図、215）が副葬されていた。やや退化傾向にある低く幅の狭い高台を有し、器表面は内外ともに滑らかで、密にミガキを施していたと考えられるが単位は判然としない。黒色土器Ａ類である387（第59図）と近似する器形を有し、時期的に併行する個体と考えられる。また、周溝の埋土内からは216の土師器の鉢が出土している。レベル的には周溝の底面からやや浮いた状態であった。



1　黒色土（Hue10YR2/1）　Kr-Mの１mm大の粒子を多く含む。
2　黒色土（Hue10YR2/1）　Kr-Mの１～３mm大の粒子を散漫に含む。
3　黒色土（Hue10YR2/1）　Kr-Mの５mm前後の粒子を全体的に含む。
4　黒色土（Hue7.5YR2/1）　Kr-Mの１～５mm大の粒子を全体的に含む。
5　黒色土（Hue10YR2/1）　層中下位にKr-Mの３～５mm大の粒子が水平に混在。
6　黒色土（Hue10YR2/1）　Kr-Mの細粒をごくわずかに含む。
7　黒色土（Hue7.5YR2/1）　Kr-Mの３mm大の粒子を20%程度含む。
8　黒色土（Hue7.5YR2/1）　Kr-Mの１～２mm大の粒子が全体的に混入。
9　黒色土（Hue7.5YR2/1）　Kr-Mの３～５mm大の粒子を20%程度含む。
10　黒色土（Hue7.5YR2/1）　Kr-Mの細粒をごくわずかに含む。組成的には６と同質。
11　黒色土（Hue10YR2/1）　Kr-Mの１～５mm大の粒子と小ブロックをわずかに含む。
12　黒色土（Hue10YR2/1）　Kr-Mの２mm大の粒子をわずかに含む。
13　黒色土（Hue10YR2/1）　Kr-Mの２～５mm大の粒子を30%程度含む。

第40図　Ｂ区３号周溝墓実測図（古代、S=1/40）



第41図　B区周溝墓出土遺物実測図（SM1：214、SM3：215・216、古代、S=1/3）

周溝状遺構

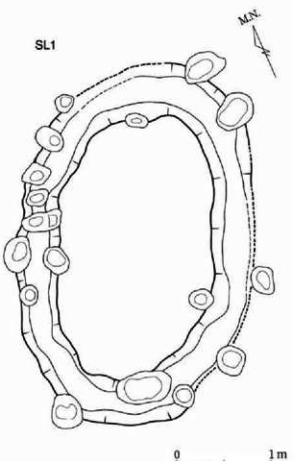
1号周溝状遺構（SL1、第42図）

D7グリッドで検出された遺構であり、主軸方位をN−31°−Eにとる。

同グリッド周辺は削平が著しく、検出面は霧島御池軽石の堆積層がほぼ露出している状況であった。さらに複数のピットと後世の攪乱に切られ遺構は部分的に消失していた。

検出時点では周溝墓の土壙が削平で消失したとも考えられたが、検出した周溝墓の土壙は3基とも周溝よりさらに低いレベルを底面としていたことから土壙は存在しないと判断した。また、遺構プランから弥生時代に帰属する遺構の可能性も考えられたが、埋土中から古代の須恵器、土師器の細片が出土したことから該期の周溝状遺構と認定した。

遺構規模はいずれも最大値で、で周溝外縁の長軸約3.83m、短軸約2.5m（推定）、内縁の長軸約2.82m、短軸約1.64mである。



第42図　B区1号周溝状遺構実測図（古代、S=1/40）

土坑墓

１号土坑墓（SD1、第43図）

Ｊ９グリッドで検出された中世の遺構であり、主軸方位をほぼ座標北にとる。遺構規模はいずれも検出時の最大値で、長軸約2.27m、短軸約1.07m、深さ0.38mである。平面プランは不整形な隅丸の長方形であり、断面形状は逆台形を呈す。遺構は南東の隅角付近を後世の土坑に一部切られていたが、全体のプランは明瞭に把握できる。

遺構内からは副葬品である土師器皿２点（217・218）、白磁碗１点（219）、刀子２本（220・221）がほぼ一箇所に集中した状態で出土した。おそらく遺物が集中していたこの付近が被葬者の頭部から肩部付近に相当する位置と考えられる。

出土した遺物の出土状況の観察では、220の刀子が白磁碗の下に、221の刀子が217の土師器皿の下になる位置関係を保っていた。また、220の刀子は白磁碗の底部に接し、その切先が上方に持ち上がった状態で出土した。埋葬時点で刀子の上にこれらの遺物を添え置きしたとは考えにくく、この状況からして刀子以外は棺蓋上に置かれた棺外副葬であり、一定の時間が経過した後に棺蓋が腐食し副葬品が落下した状況を呈していたと考えられる。

217はヘラ切り離しの後にナデを施した底部を有し、部分的に板目の圧痕が認められる。また、底部内面中央のごく狭い範囲にナデを施し凹凸を成形している。218は糸切り離しの底部を有する。底部外面以外の調整はすべて回転ナデである。底部内面に有する平坦な段は217と同様に成形時の凹凸を平滑にした際にできたと考えられる。219は肥厚した玉縁の口縁部と底部内面に１条の沈線を有する器形的特徴から白磁碗Ⅳ-1a類に相当する完形の個体である。

220・221は刀子である。220はその切先が失われているが、その欠損部分付近には布の付着が認められる（下写真参照）。残存する刃部の曲線からカマス切先の形状であったと考えられる。軟Ｘ線で確認したが茎の目釘穴は判然としなかった。221は茎の端部を失うがほぼ完全な状態で出土した。茎を中心に木質の遺存が認められた。

なお、２本の刀子の大きさは残存する計測値で以下のとおりである。

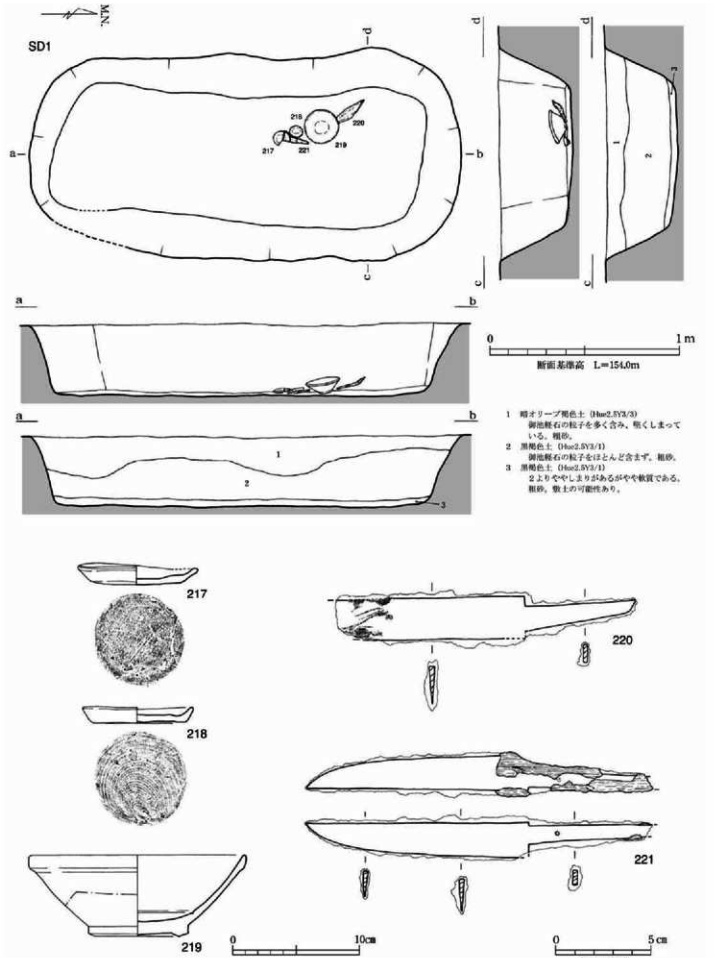
220：最大長約15.8cm／最大幅約0.4cm／重量約31.2ｇ

221：最大長約18.3cm／最大幅約0.3cm／重量約39.6ｇ

上：刀子（220）
写真の円内に布が付着している。

右：刀子に付着した布の拡大写真
平織りの布は、細い繊維から紡がれた糸で織られている。糸および刀子のもつ光沢は処理に用いた薬品によるものである。

付着した布（倍率は任意）



第43図　B区１号土坑墓（S=1/20）及び遺構内出土遺物実測図（217～219はS=1/3、220・221はS=1/2、中世）

土坑（SC、第８表、第44図）

Ｂ区では78基の土坑を検出したが、完掘時の土坑形状や埋土状況の観察結果から樹根等の可能性が高い遺構を排除し57基を土坑として認定した。そのうち遺構内から器種等が判別できる遺物が出土した４基を除いては遺構の帰属時期まで言及できない。しかし、遺物が出土した４基の遺構埋土を一つの判断基準とすると概ね10～12世代の時期幅に収まると考えられる。

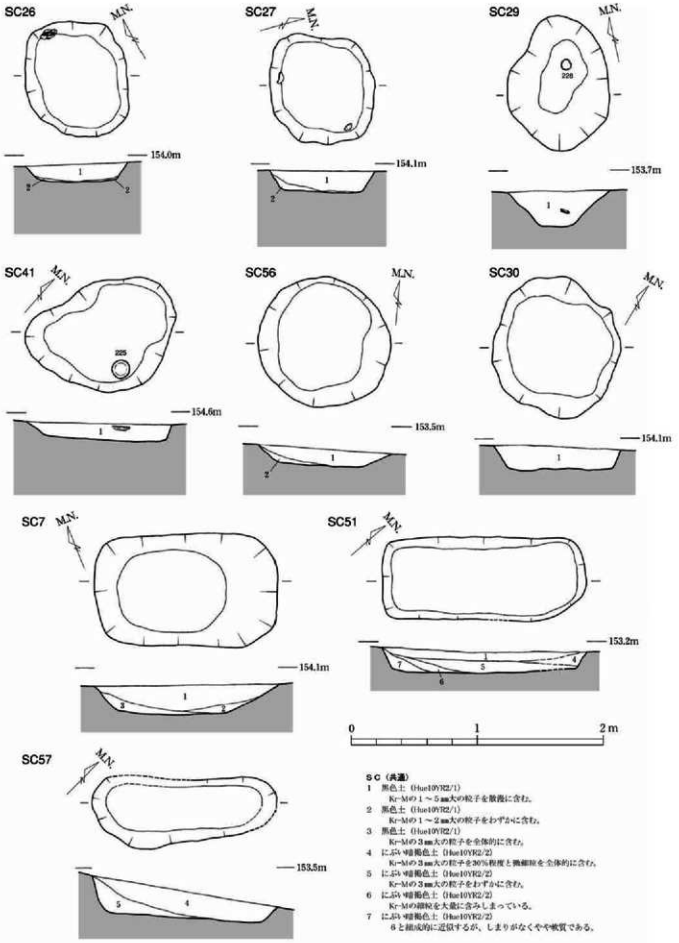
57基について概観すると規模的には長軸の平均値が約1.18mであり、全体的には１ｍ前後規模の遺構が大半を占める。長軸が２ｍを超えるSC１・SC40のような大型の土坑も２基検出されてはいるが、長軸が1.5mを越える規模の遺構は全体の約12.3%程度に過ぎない。

遺構プランとしては円形・楕円形・隅丸長方形などが認められるが、それ以外の不整形な形状の土坑がまた、長軸の値を短軸の値で除した形状比の平均値は1.39であり、数値上からは長軸が短軸をやや上回る楕円形もしくはそれに準じるプランが主となる傾向を示す。しかし、先述した不整形なプランも含めた平均値であり、遺跡内で検出された土坑のプランにおける相対的な傾向を反映するものではない。

57基の土坑の分布は、谷地形や湧水点が検出されたＤ２地点が地形的な制約を受け希薄であったこと、Ｇ９グリッド付近でやや集中する範囲があったことが確認できた。しかし、Ｇ９グリッド付近で集中して検出された土坑にプラン的に共通性はなく、あわせて意図的な配置状況も看取できない。

第８表　土坑計測値一覧（古代・中世）

SC No.	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	形状比	備　考	SC No.	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	形状比	備　考
1	2.29	1.48	0.28	1.55		31	1.01	0.94	0.35	1.07	
2	1.11	0.97	0.31	1.14		32	0.87	0.79	0.18	1.10	
3	1.48	0.79	0.17	1.87		33	0.94	0.77	0.18	1.22	
4	1.31	1.12	0.19	1.17		34	1.19	0.84	0.28	1.42	
5	0.98	0.97	0.11	1.01		35	0.91	0.76	0.27	1.20	
6	1.09	0.64	0.28	1.70		36	1.29	1.03	0.63	1.25	
7	1.45	0.91	0.24	1.59		37	0.96	0.93	0.35	1.03	
8	0.94	0.72	0.23	1.31		38	0.65	0.35	0.42	1.86	
9	1.16	0.74	0.33	1.57		39	1.61	0.77	0.44	2.09	
10	0.94	0.74	0.29	1.27		40	2.57	1.28	0.31	2.01	
11	1.03	0.78	0.32	1.32		41	1.15	1.01	0.16	1.14	坏
12	0.83	0.74	0.28	1.12		42	1.25	0.99	0.31	1.26	
13	1.53	0.98	1.03	1.56		43	1.32	0.94	0.25	1.40	
14	1.23	0.69	0.24	1.78		44	1.10	1.02	0.21	1.08	
15	1.15	0.63	0.13	1.83		45	1.27	1.17	0.31	1.09	
16	0.81	0.71	0.13	1.14		46	1.29	1.12	0.22	1.15	
17	1.18	1.06	0.16	1.11		47	1.06	1.02	0.26	1.04	
18	1.26	0.98	0.44	1.29		48	1.41	1.25	0.25	1.13	
19	0.79	0.75	0.19	1.05		49	0.78	0.77	0.16	1.01	
20	0.98	0.86	0.18	1.14		50	1.28	1.15	0.17	1.11	
21	0.93	0.73	0.17	1.27		51	1.62	0.66	0.19	2.45	
22	0.64	0.61	0.22	1.05		52	1.01	0.59	0.36	1.71	
23	1.22	1.08	0.33	1.13		53	1.38	0.62	0.34	2.23	
24	1.21	0.77	0.32	1.57		54	0.79	0.76	0.22	1.04	
25	1.10	0.86	0.22	1.28		55	1.15	0.95	0.25	1.21	
26	1.01	0.77	0.18	1.31	坏	56	1.05	1.02	0.14	1.03	
27	0.99	0.86	0.17	1.15	坏・鉢	57	1.46	0.84	0.23	2.70	
28	1.59	1.03	0.66	1.54		※　測定値はいずれも完掘時の最大値である。					
29	1.61	0.80	0.28	2.01	白磁底部片	※　形状比とは（長軸／短軸）の値である。					
30	1.12	1.02	0.22	1.10							

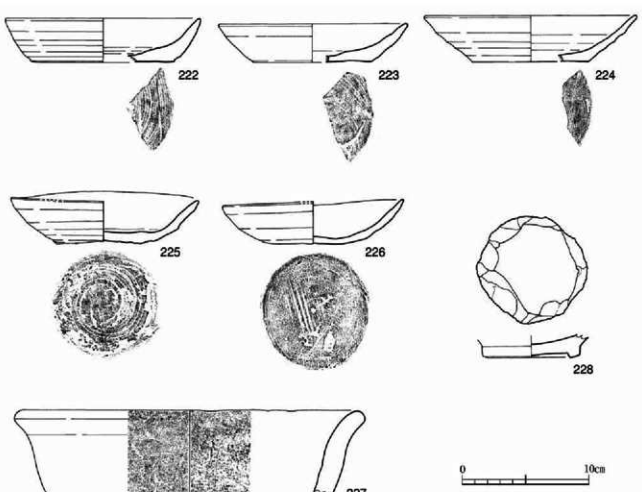


第44図　B区土坑実測図（SC7・26・27・29・30・41・51・56・57、古代・中世、S=1/30）

遺構内から出土した図化に耐えうる遺物７点を第46図に示した。このほかの土坑の埋土にも土師器の細片等が混在していたが器種等の判別が可能な個体はわずかであった。

222～226は土師器の坏である。このうち222～224の３点はSC26（第44図）から出土した一括資料である。遺構内のほぼ同じ位置でこの３点の遺物は確認されたが、完形に復元できる個体はない。

３点の遺物のうち222・223の２点は糸切り底である。224の底部は切り離しの痕をナデ消しているが、ヘラ切り離しによるものと考えられる。222はやや肉厚の底部から上方に向かい鋭く立ち上がる器形を有する。223は222と比して体部の立ち上がりの角度はやや緩くなるが、口径と底径の大きさは近似する。224は体部体部の稜が明瞭であり、外方に向かい鋭く開く器形を有する。調整は内外面ともに丁寧である。225はSC41から出土した完形の個体であり、ヘラ切り離しの痕が明瞭に残る。口縁部の歪みは焼成による影響も多少受けているが成形段階によるところが大きいと考えられる。226は楕円形を呈するヘラ切り底を有する。底部内面には底部外面を平滑に仕上げる際のナデが明瞭に残り、外面にはその際に敷いていたと考えられる板目の圧痕が残る。SC27から出土。227は土師器の鉢である。SC27から出土。口縁が外反し、胴部の破断面から下位は緩やかに内側へと収束する器形が想定できることから鉢と考える。胴部内面にはケズリによる調整が認められる。228は白磁碗Ⅳ類の底部である。SC27から出土。破損した個体の底部周縁を打ち欠き円盤状に加工している。使用目的は不明。



第45図　B区土坑内出土遺物実測図（古代・中世、S=1/3）

2　遺物

層位的には基本層序における第Ⅲa層が９世紀代後半から12世紀代を中心とする古代・中世の遺物包含層である。遺物の包含状況としては同層中の中位レベルにその大半が集中し、遺構検出面となる第Ⅲb層に近づくにつれて希薄となる。出土したおもな遺物としては、土師器（坏・埦・高台付埦・甕）、墨書土器（坏・高台付埦）、古代須恵器（甕・壺・横瓶）、中世須恵器（東播系捏鉢）、国産陶器（灰釉・緑釉）、貿易陶磁器（白磁・青磁・青花・褐釉陶器）、滑石製石鍋、石製錘具などがあげられる。

なお、遺物の分布状況としては、次の５つの集中区が認められた（P43・44、第２図参照）。

第１集中区（Ｅ７・Ｅ８・Ｆ７・Ｆ８グリッド付近）

古代の土師器、須恵器、陶磁器（越州窯系青磁）が数多く出土した。地形的には西から東に向かって標高約153.2～154.0m間で平均斜度約11°の下り勾配となる斜面から標高約153.2mの平坦な地形に変化する付近である。この地形は調査着手時点では埋没した状態であったため、その旧地形を検出する過程の埋土中に多量の遺物が混在する状況であった。

なお、Ｂ区で出土した越州窯系青磁碗については、この集中区においてその大半が確認されている。

第２集中区（Ｈ８グリッド付近）

M11グリッドから緩やかに西方向へと展開するごく弱い谷地形の端部付近に位置する。古代の土師器が中心であり、特に布痕土器の出土はこの付近にほぼ限られていた。２号溝状遺構（SE2、古代）の端部付近とも重なり、周囲と比較して標高的にも低い範囲である。

第３集中区（Ｅ10・Ｅ11・Ｆ11グリッド付近）

古代の２号周溝墓（SM2）が検出された付近である。調査区内ではそれほど明瞭ではないが、この付近から東北東に向かって開析による谷地形が開放していく基点付近に当たる。昨今の地形改変によりこの谷地形は埋め立てられ宅地の一部となっているが、かなり急な傾斜を有する谷地形であったことが調査区外の現地形から判断できる。この範囲からは墨書土器が多く出土した。

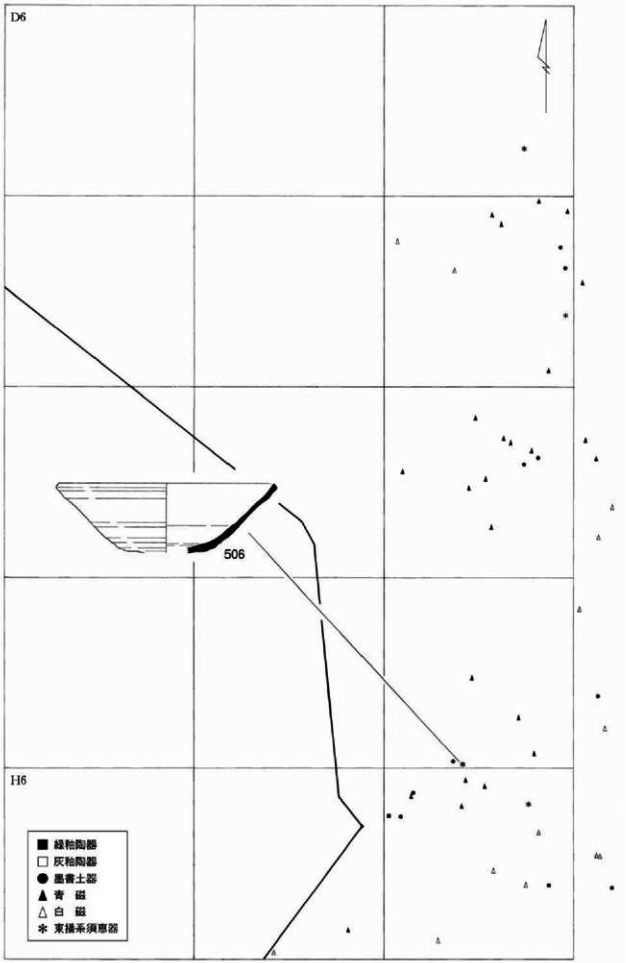
第４集中区（Ｊ12グリッド付近）

中世の３号掘立柱建物跡（SB3）が検出された付近である。先述した古代の２号溝状遺構（SE2）の東側縁辺に沿って点々と遺物の集中が見られた。SE2の検出に至るまでの包含層中から出土した遺物であり、中世の白磁碗Ⅳ・Ⅴ類を中心とするその遺物構成は第１～３集中区とは様相が異なる。

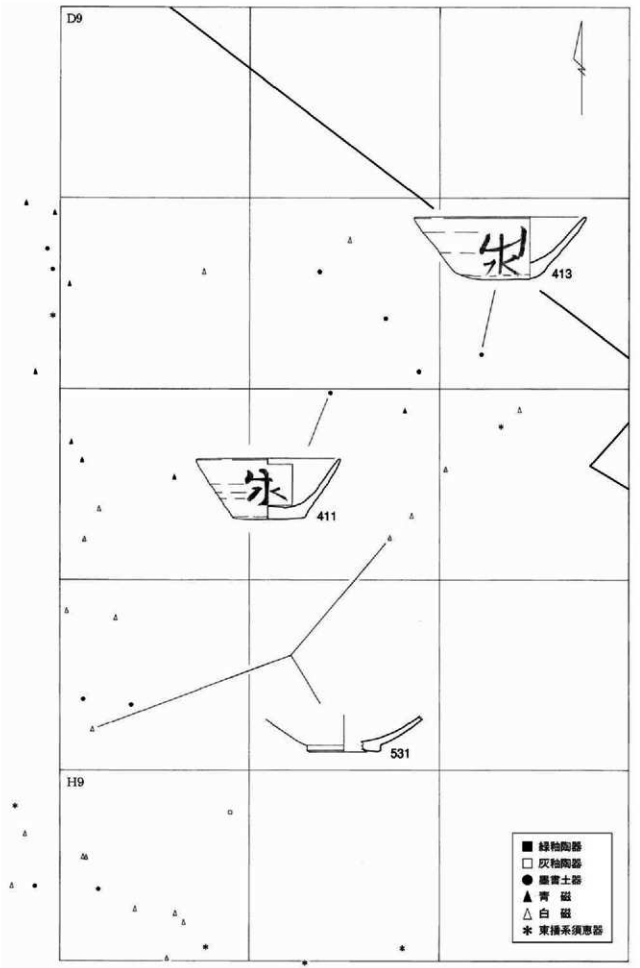
第５集中区（H15グリッド付近）

湧水が生じたＤ２地点の谷地形の斜面で検出された集中区であり、出土した遺物の帰属年代は第４集中区と同じである。しかし、調査区南側の低丘陵裾部から派生する弱い舌状の尾根地形の東側に位置するこの周辺に遺構は存在せず、廃棄等による人為的要因から局所的に集中する状況を呈したと考えるのが妥当であろう。

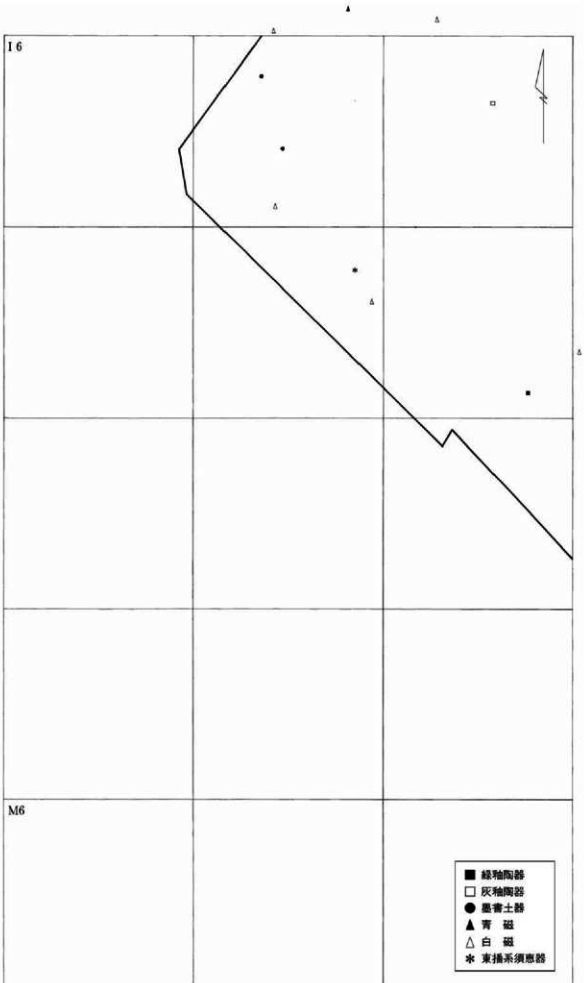
以上が遺物の集中が見られた範囲の概要であるが、全体的にみると調査区内で大きく弧を描く２号溝状遺構の内側に遺物分布範囲は偏倚し、調査区南側の低丘陵裾部から派生する弱い舌状の尾根地形の北側及び複雑な谷地形を検出したＤ２地点は遺物が希薄であった。このことから古代から中世にかけての生活空間が地形的制約を大きく受けていたことが分かるが、裏を返せばこの地形を有効に活用し、溝等の遺構を所々に配置することによって巧みに区画していたと考えることもできる。



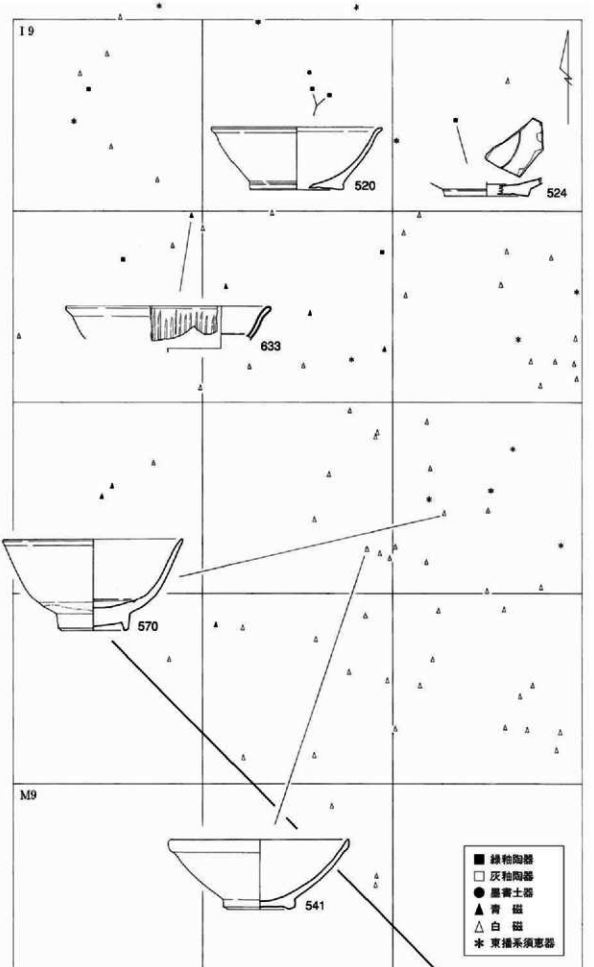
第46図　B区古代・中世の主要遺物分布状況１（部分、S=１/200、1grid ⇒ 10m×10m）



第47図　B区古代・中世の主要遺物分布状況２（部分、S=１/200、1grid ⇒ 10m×10m）



第48図　B区古代・中世の主要遺物分布状況３（部分、S=１/200、1grid ⇒ 10m×10m）



第49図　B区古代・中世の主要遺物分布状況４（部分、S=１/200、1grid ⇒ 10m×10m）

第50図　B区主要遺構・遺物分布図（部分、古代・中世、S=1/400）

包含層からの出土遺物

遺構に伴わず包含層から出土した遺物を第51～74図に示した。以下、出土した遺物について器種ごとに類別し若干の説明を加える。

なお、個々の遺物の詳細については遺物観察表及び計測表を参照されたい。

土師器（第51～58図、229～299）

皿（第51～52図、229～253）

229は体部にわずかな膨らみを有し、口縁端部を尖り気味に鋭く仕上げる。230・231は外方に向かい直線的に開く体部を有し、口縁部直下で弱く屈曲が認められる。口縁端部は229と同様に鋭く仕上げる。232～238は口縁端部に認められるわずかな肥厚と弱い外反傾向を特徴とし、ヘラ切り底の底部は、やや薄手の個体と比較的厚みを有する個体に分かれる。239～242は直線的に開く比較的厚みのある体部を有する。底部内面から体部内面への変化点がやや曖昧である。243～247は口縁端部を丸く収め、体部の厚みがほぼ均一である。248・249は体部が弱く膨らみ、緩やかに上方に立ち上がる器形を有する。229～249の底部はすべてヘラ切り底である。

250～253は糸切り底の底部を有する個体である。252の体部下位には回転ナデにより生じた稜が顕著に残る。糸切り底の底部を有する個体が全体に占める割合は低い。

高台付皿（第52図、254～256）

254は外方に向かい緩い角度で直線的に開く体部を有し、口縁端部を丸く収める。底部内面は丁寧なナデにより平滑に仕上げる。体部はほぼ均一な厚みを有し、内外面ともに回転ナデによる丁寧な調整を施す。安定した高台端部は接地面付近でごくわずかに外反する。255・256は平滑に成形された底部内面に布目の圧痕が認められる。

脚台付皿（第52図、257）

脚部の資料である。調整は内外面ともに丁寧な回転ナデである。255～257と比して高さを有し、接地面に向けて緩やかに広がる充実した脚部を有することから脚台付皿として分類した。

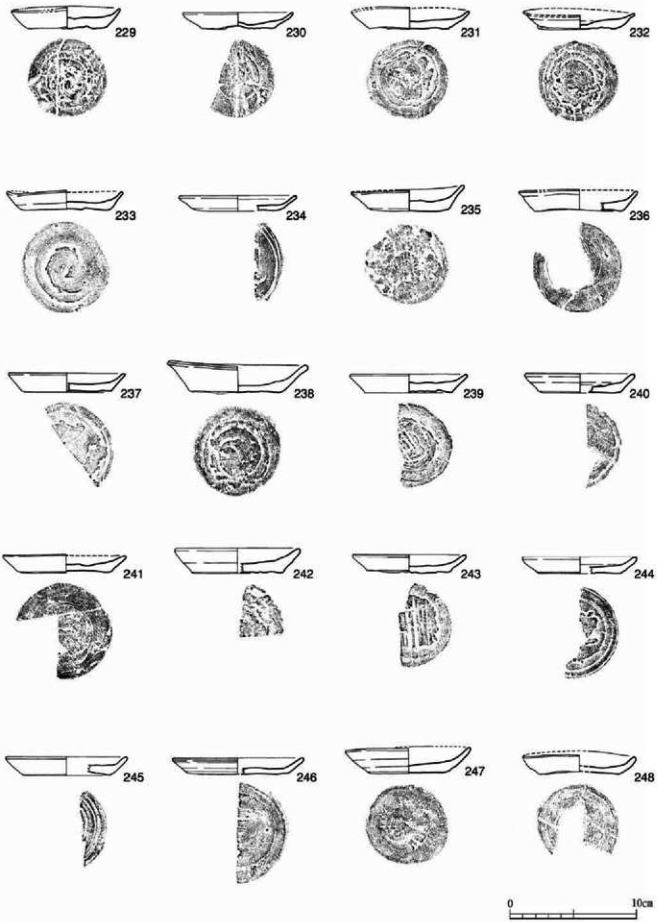
坏（第53～55図、258～299）

258～264は弱い円盤状の底部から外方に向かい開く体部と底部から体部へ変化点付近に認められる外器面の弱い屈曲を特徴とする。体部には、中位が弱く膨らむもの（258・259・260・262・263）と直線的に外方に開くもの（261・264）がある。258・259は法量的に他と比して小さく、調整が丁寧である。底部はすべてヘラ切り底である。

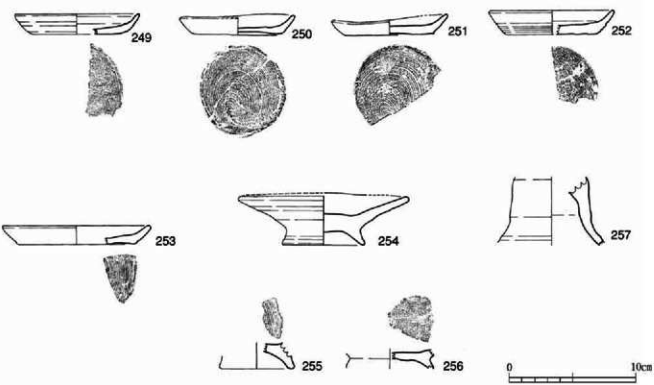
265・266は安定した底部から外方に向かいやや立ち気味に開く器形を有し、体部下位には弱い膨らみが認められる。体部の立ち上がりが他と比してわずかに強く器高も高い。底部はヘラ切り底。

267～269は器形的には258・259と近似する。底径がやや小さく体部の立ち上がりもやや緩やかである。267は外器面の調整が丁寧であり、成形時に生じた体部外面の稜を回転ナデにより消している。器高に着目すると265・266と比してやや高めである。

270～276は15cm前後の口径を有する坏である。底部外面に見られる成形時の回転台からの切り離し痕は、270～273がヘラ切り、274～276が糸切りである。270は口縁部に歪みが見られるが、成形時の調整は丁寧であり歪みは焼成によるものと考えられる。底部外面にはその内面をナデにより調整した際の押圧によると考えられる板目圧痕が残る。271は法量的に最も小さく、外方に向かい比較的浅い



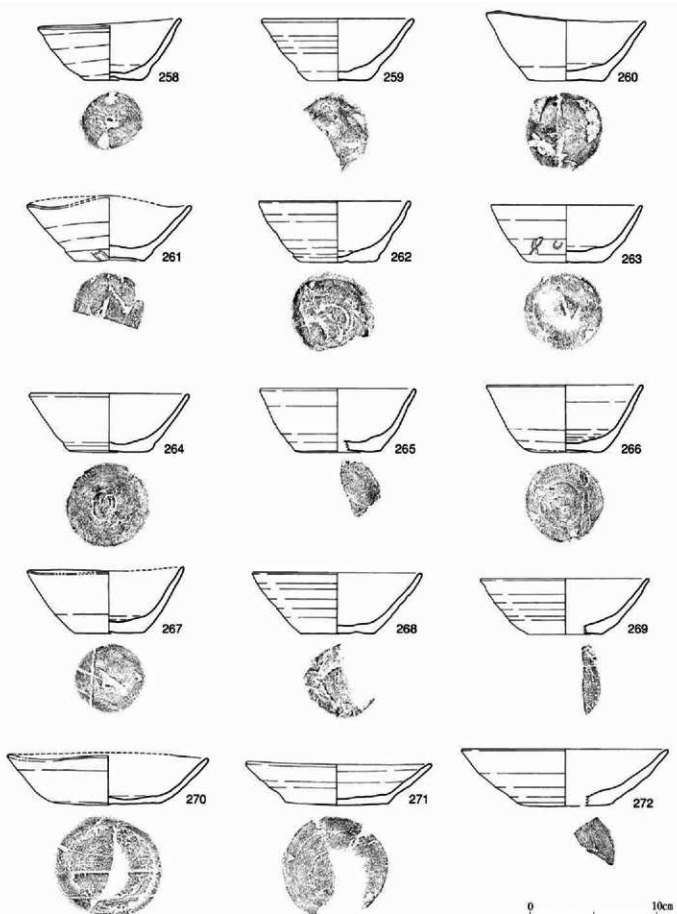
第51図　B区包含層出土遺物実測図15（古代・中世、S=1/3）



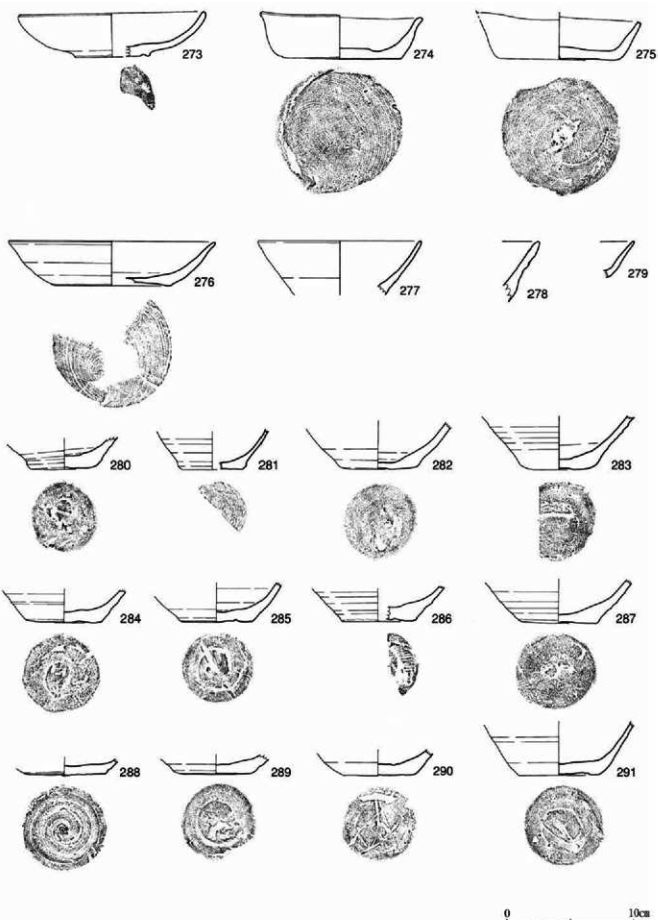
第52図　B区包含層出土遺物実測図16（古代・中世、S=1/3）

角度で開く器壁の厚い体部を有する。底部の周縁まで丁寧な回転ナデにより調整を施している。272は26号土坑（SC26）から出土した坏（224）に近似する。224と比べて底径がやや小さいがヘラ切り離しの痕をナデ消す等の調整は共通する。273は底部から一度側方に向かって開いたあと、緩やかなカーブを描きながら立ち上がる器形を有する。274・275は広く確保した底部から立ち気味に上方に向かう体部を有する。器表面はくすんだ灰黄色を呈す。276はやや上げ底気味の底部であるが、取り上げもしくは焼成前乾燥段階に生じた形状であり、意図的成形によるものではないと考える。

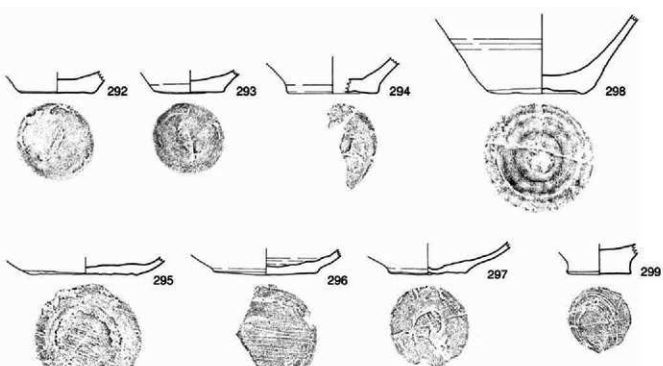
277～299は口縁部から体部と底部の一括資料である。277は267～269、278は265・266に類する口縁部である。279は破断面付近に体部から底部への変化点が認められること、推定口径がやや大きめであることから270～276に類する15cm前後の口径を有する坏と考えられる。280～297の底部片は、その器形的特徴から280・281が258～264、282・283が265・266、284～294が267～269、295～297が270～276に類する。298は器形から坏として分類したが本来は高台付壺の底部である。早い段階で貼り付けた高台が剥離したと考えられ、その剥離面を調整した痕跡が認められる。299は糸切り底を有する底部片である。焼成が良好であり硬く焼き締まっている。



第53図　B区包含層出土遺物実測図17（古代・中世、S=1/3）



第54図　B区包含層出土遺物実測図18（古代・中世、S=1/3）



第55図　B区包含層出土遺物実測図19（古代・中世、S=1/3）

円盤状高台埦（第56図、300～316）

300・301は底径が5㎝程度の底部を有し、外方に向かい直線的に開く器形を有する。302～304は底径が7㎝弱の安定した底部を有する。302は口縁部がわずかに外反し周縁端部を丸く仕上げる。303は薄めの高台からやや立ち気味に開く器形を有する。304は厚みのある高台と中位がわずかに膨らむ体部を有する。305は底部を失う資料であるが、器形的には304に類すると考えられる。

308～316は底部の一括資料である。315は周縁の外方への開きは弱いがその端部をシャープに仕上げ、顕著な稜が認められる。316は304に類する底部であり、底径もほぼ同じである。308～314は底部から体部への変化点に明瞭な「く」の字状の屈曲を有する。底部周縁の断面形状には、端部を丸く収めるものや、接地面付近に最大径を有し比較的シャープな三角形状を呈するものなど個体差があるが、その差は回転台から底部を切り離した際のナデ調整の度合いも要因として考えられる。

高台付埦（第57・58図、317～366）

317～319は外方に向かい直線的に開く器形を有する。317は内面にミガキを施すが若干風化気味であり単位が判然としない。318は20cm近い口径を有し、内外面を回転ナデで丁寧に仕上げる。319は均一で厚みのある器壁を有し、口縁端部を丸く収める。320・321は体部下位に膨らみを有し緩やかに立ち上がる器形を有する。320の口縁部にはごくわずかな外反傾向が見られる。321は口縁外面がわずかに肥厚する。体部内外面にミガキ、低めの高台の内外面には丁寧なナデを施す。322は剥落が著しいが朱が施された痕跡が認められる。323は319と同一個体か。324～329は口縁部の外反が顕著な端反りの埦であるが、328は屈曲が特に顕著である。すべて内外面にミガキを施すが、その単位が判別できたのは325・329の

2個体のみであり全体的にやや風化気味である。

330～338は特異な口縁部を有する。330～335はその断面が三角形に肥厚する。白磁碗Ⅳ類の玉縁状の口縁を意識したものか。330を除いて、浅い角度で開く体部を器形的特徴とし、一様に焼成が良好で灰黄白色を呈す。336は丸く収めた口縁端部が小さな玉縁状を呈する。白磁碗V－3a類の口縁部に近似する。337は330～335の口縁形状に似るが、口唇部直下にごく弱い沈線状の窪みを有する。338は口縁部内面の口唇部直下に弱い沈線状の窪みを有する。339は内外面に丁寧なミガキを施す大型の埦であり、内湾気味に立ち上がる器形を有する。2条の沈線状の窪みが周回するが故意に施されたものであるかは不明である。340は口径が約5.8cmの高台付小坏である。内外面に丁寧なミガキを施し、体部は口縁部に近づくにつれてシャープとなりごくわずかに外反する。本来、坏の範疇で分類すべき個体であるが、器形的類似性をもってここで取り扱う。

341～362は底部の一括資料である。341～343は底部内面にヘラ切り離しの痕跡が残る低い高台を有する。343の高台は底部外面が接地面からわずかに浮く程度の低いものであるが、輪状の高台に成形する意識が感じられ比較的丁寧な調整である。344～354は外方に向かい直線的に開き、一定の厚みを有する高台である。344～346は断面が三角形を呈し、その端部はわずかに丸みを帯びるもののシャープさを残す。346はやや低めの高台である。347・348の端部は平坦に面取され断面形状は足長の台形状を呈する。348は内外面ともに丁寧な調整を施している。349・350はの高台は器壁の厚みがほぼ均一であり、その端部を丸く収める。350の底部外面には高台を貼り付ける際の調整による放射状圧痕が見られる。351～354はわずかに外反しながら外方に向かって張り出す高台を有する。355～358は外方へさほど開かない低めの高台である。355・356は高台端部の接地面がわずかに内湾、357・358は反対にわずかに外反する傾向が見られる。359の高台はさほど高さを有しないが、その内外面を回転ナデによる調整で丁寧に仕上げる。湾曲しながら外方に開く形状と平滑な接地面は、A区で出土した須恵器の高台付碗（111）の高台に類似する。360～367は器表の内外面に密なミガキを施すことが調整の特徴として共通するが、高台の作りはやや粗雑なものが目立つ。形状的にもやや退化傾向を示すと考えられ、364・365・367のように底部外面中央がほぼ接地するような個体も見られる。341～343の高台付近の丁寧な調整と比すると、360～367は高台の成形及び調整が粗であり形骸化しつつある。

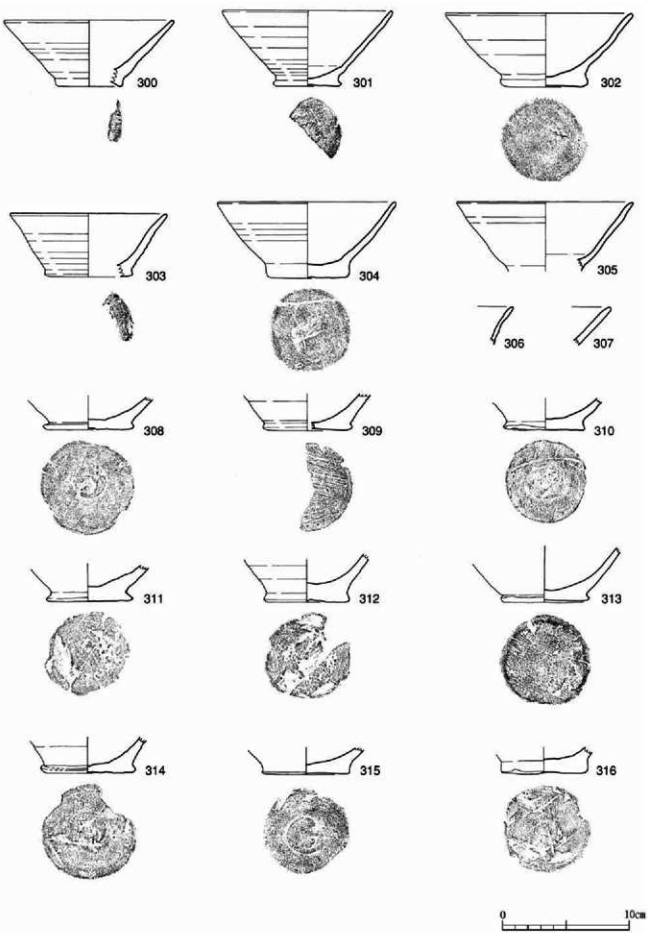
黒色土器（第59・60図、368～397）

黒色土器A類（内黒：内面のみを黒化処理）とB類（両黒：内外面を黒化処理）の両タイプが確認されている。A類とB類を比較すると、B類の焼成はA類に比べて極めて良好である。また、瓦質土器に近い風合いをもつ個体もあり、黒化処理の技法的相異が考えられる。器種的にはやや退化気味の低い高台をもつ高台付埦が大半を占める。また、完形復元できた個体はB類の皿（388）が1点であり、底部片のみが出土した割合が高い。

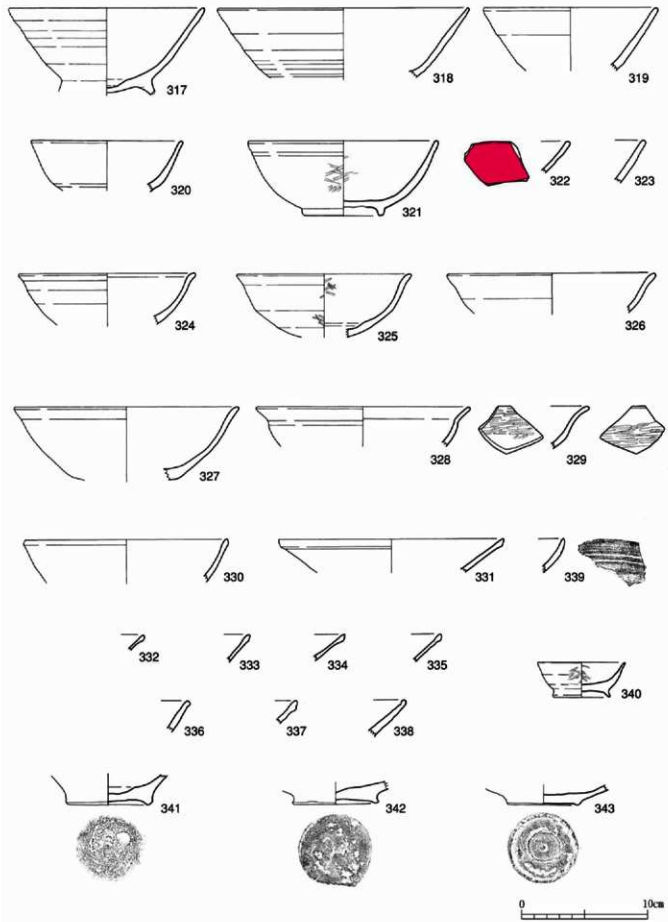
なお、黒化処理が施された器表面にはすべて密なミガキが施されているが、器表面が風化気味でミガキの単位が判然としないもの（370）についてはミガキの方向等を図化していない。

黒色土器A類（第59図、368～387）

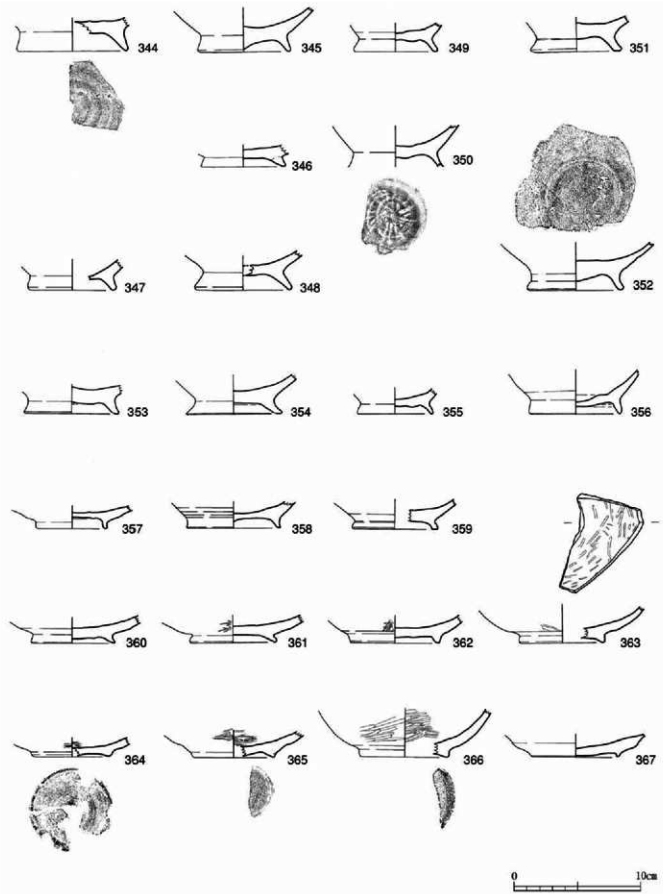
368～373は外反する口縁を有する高台付埦である。368・369は体部中位より少し下で一度屈曲し角度を変えてやや開きながら上方に向かい立ち上がる。325の器形的特徴に近似する。



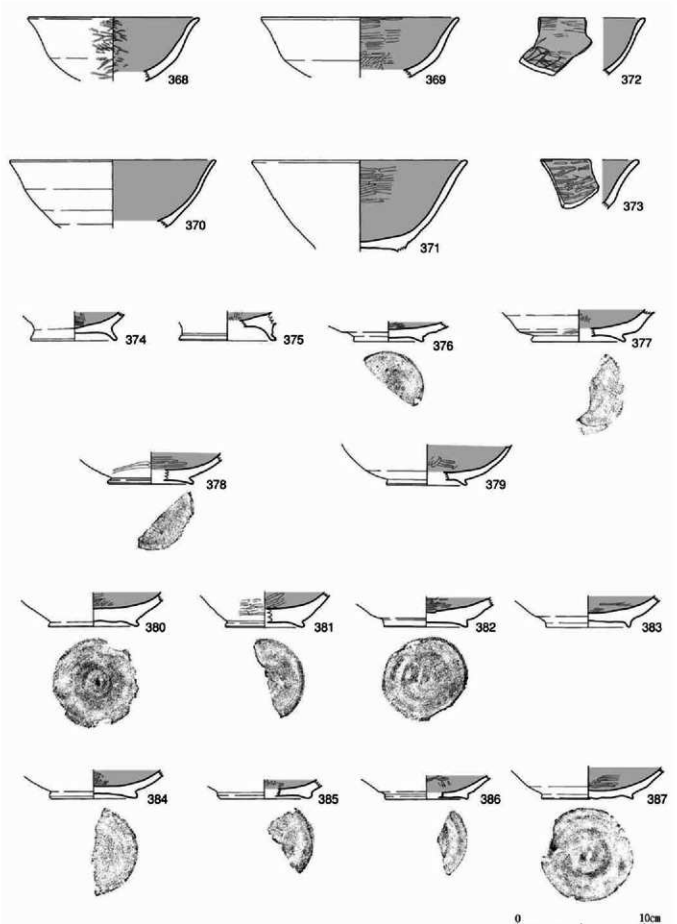
第56図　B区包含層出土遺物実測図20（古代・中世、S=1/3）



第57図　B区包含層出土遺物実測図21（古代・中世、S=1/3）



第58図　B区包含層出土遺物実測図22（古代・中世、S=1/3）

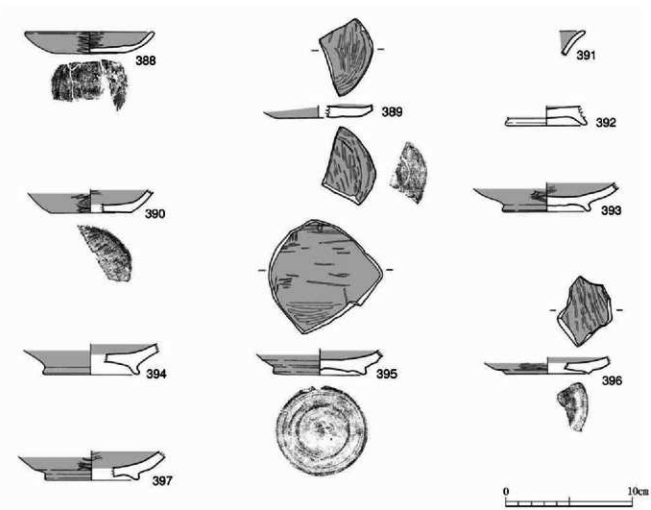


第59図　B区包含層出土遺物実測図23（古代・中世、S=1/3）

374～387は底部の一括資料である。374は外方に直線的に開く348に類する高台である。375は断面形状としてはやや立ち気味であり、その高台外側面に沈線状の窪みが周回する。この類の窪みをもつ個体はこの１点である。376～387は体部外面から高台への変化点は明瞭であるが、底部外面から高台接地面までは緩やかなカーブで連続し、高台の高さも一様に低い。底部外面が接地面からわずかに浮く程度で円盤状高台に近いもの（386）や形骸化した小さな高台となっているもの（387）なども見られる。376・377は底部に近い体部下位に明瞭な屈曲が認められる。このような器形的特徴は363・367・382・386にも認められ、いずれの高台も退化傾向を示す。

黒色土器Ｂ類（第60図、388～397）

Ｂ類には皿・坏・高台付埦の３つの器種がある。388・389は皿である。全面に密にミガキを施し器表面は底部外面まで黒光りし、底部には平滑にするために研磨した痕跡が見られる。390は坏である。調整としては388の皿に酷似する。391～397は高台付埦である。392・394は黒色土器の中では比較的高さを有する高台であるが、黒化処理を施さない高台付埦も含めて考えると相対的に退化傾向が感じられる。



第60図　Ｂ区包含層出土遺物実測図24（古代・中世、S=1/3）

甕（第61図、398～401）

口縁部及び胴部片の資料である。398は外方大きくに開き口縁端部を丸く収める。口縁部から胴部への内面変化点に明瞭な稜が認められる。399・400は398と比べてやや立ち気味の口縁である。399の口縁端部は平滑気味に仕上げる。401は外面に籾圧痕が残る。

鉢（第61図、402・403）

402は上方に向かい直線的に開く器形を呈する。破断面付近が底部への変化点に近く、器高は10㎝以下にとどまると考えられる。403は胴部が張り出さず、レンズ状の底部から上方に向かい立ち上がる器形を呈する。胴部から口縁部への変化点付近の屈曲は弱く、口縁部の外反も小さい。

鍋（第61図、404）

広く確保した底部と低い器高から鍋としての機能が考えられる。口縁部は外反しながら外方へと延びる。胴部から口縁部への内面の変化点には弱く稜が立つ。

壺（第61図、405）

口縁部と底部を失う小型の壺である。外方に大きく開く口縁と平底の底部を想定する。時期的には短頸と長頸の両タイプが存在するが、頸部付近の開き角から判断して短頸壺と考えられる。

布痕土器（第61図、406～410）

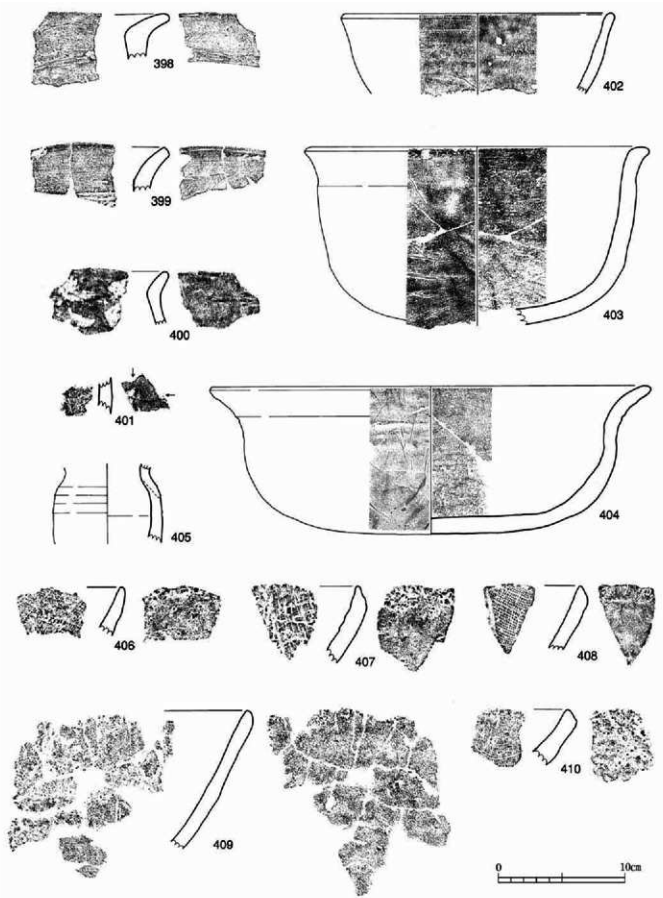
軟焼成の型作りであることに加え、細礫混じりの脆い土器であるため細片での出土が多い。器面の調整は，外器面を粗いナデ，口縁部をヘラ等の工具でそぎ落とし必要に応じてナデを施す程度ですべて粗製である。内器面に見られる布目の圧痕はすべて平織りであるが、織り目には粗密が見られる。

墨書土器（第62・63図、411～475）

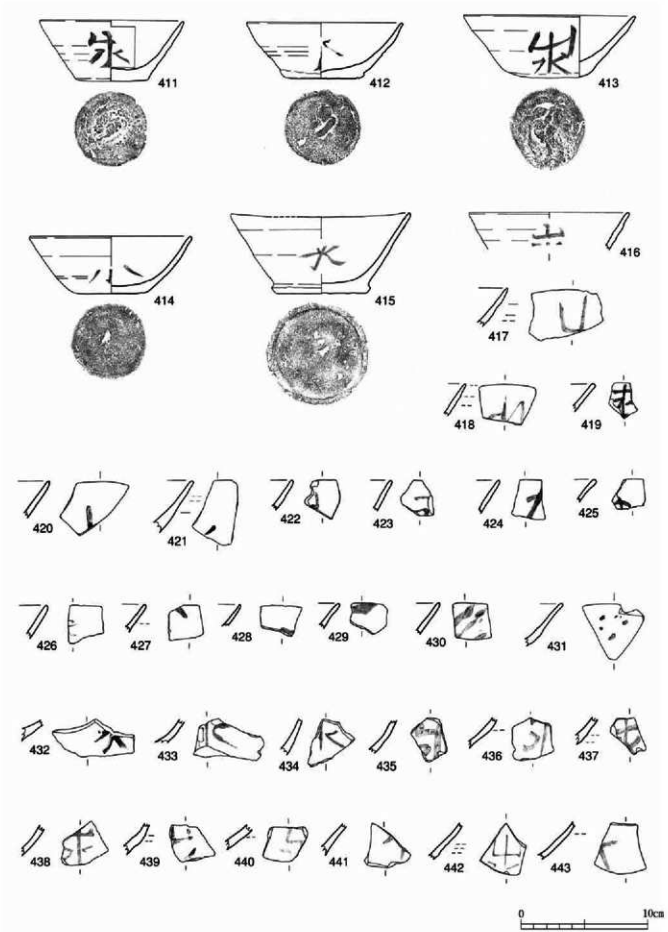
包含層中で確認された墨書土器は65点を数え、E10・H8グリッドにやや集中する傾向が見られた。墨書土器の総数としては２号溝状遺構から出土した２点と４号溝状遺構から出土した４点を合わせると計73点となる。また、墨書が確認された器種は土師器の坏・埦・高台付埦の３器種に限定される。

墨書の中では「山」と「水」を組み合わせて一文字として表記した合わせ文字「㞷」と判読できるもの（411～424、432～443、465～469、474）がその大半を占める。この合わせ文字はいずれも体部に正位で書かれ、書体はそのほとんどが楷書体あるが行書体（418）や線描きに近いもの（442）も見られる。「㞷」については、それに類似する文字として「㞷」がよく知られている。この「㞷」の合わせ文字は、「山」・「水」・「土」の３文字を組み合わせたもので「地」の意味に通じる。しかしながら、今回の調査で確認できた墨書の中には「㞷」の文字の存在は皆無であった。その理由としては、誤字である「㞷」が通例となった、「山」と「水」の２文字の組み合わせで同様あるいは別の意味をもたせたなどの理由も考えられる。また、文字として認識はできるものの判読することができないもの（425～429、444～459、470～473）ある。このうち445については文字の上半分を失う資料であるが、「本」・「奉」などいくつかの比定できる文字候補がありそのいずれかと考えられる。

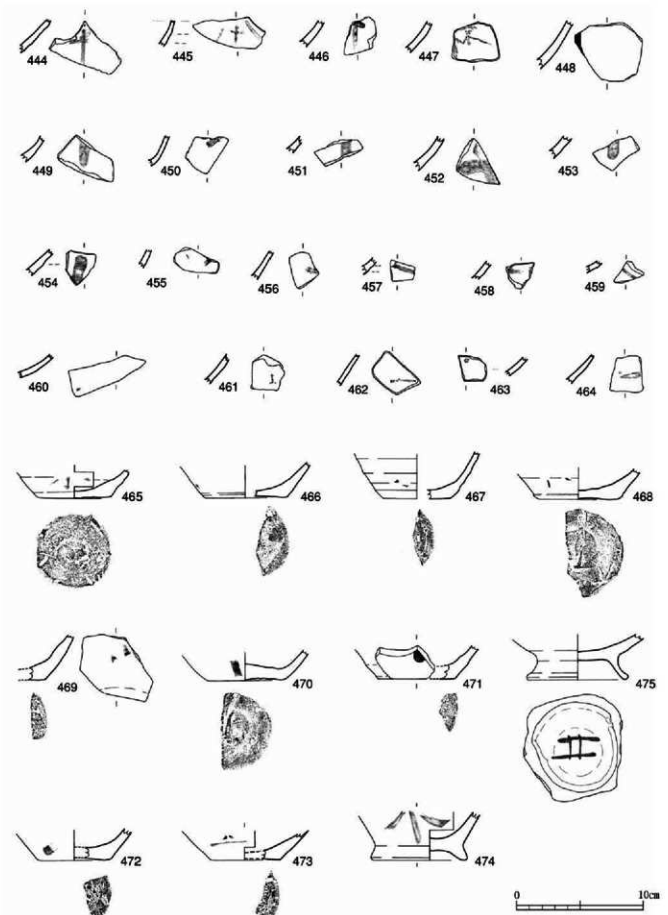
記号として明らかに認識できるものとしては475の高台付埦の高台内に書された魔除け的な意味合いをもつ「#」がある。このほかに、文字・記号のごく一部と考えられる墨書または墨痕と認識できるものが６点（430・431、460～464）確認された。しかし、460～464は残存する墨の跡がごくわずかであり正確な区別は困難である。



第61図　B区包含層出土遺物実測図25（古代・中世、S=1/3）



第62図　B区包含層出土遺物実測図26（古代・中世、S=1/3）



第63図　B区包含層出土遺物実測図27（古代・中世、S=1/3）

須恵器（第64～67図、476～504）

甕（第64・65図、476～489）

476は肩部付近に最大幅をもつ大甕である。胴部中位から底部を欠う資料であるが、残存する肩部付近の計測値で最大幅約75cmを計り、法量的に4号溝状遺構から出土した大甕（186）を優越する。器形的には頸部の立ち上がりが高く、外方に開く受け口状の口縁部を有する。器表面に残る調整痕は内面の頸部から肩部付近にかけて同心円当て具痕、それ以下には平行当て具痕が認められ、部位による使い分けが明瞭である。477～484は胴部の最大幅が平均して35cm程度の甕である。また、口縁部を一括した485～489も法量的には大差がないと考えられる。186・476に見られる受け口状の二重口縁ではなく、すべて外方もしくは上方に向かって開く単口縁である。器表面に残るタタキによる調整と当て具痕を観察すると、外器面に格子目タタキ痕（479）と平行タタキ痕（477～483）、内器面には同心円当て具痕と平行当て具痕が認められる。このうち478の外器面のタタキ痕には1条の垂直方向の隆起線が中央に認められる魚骨状の特異なタタキ痕である。

壺（第65図、490～502）

490・491は器高が30cm前後の壺であり、ともに口縁部を欠う資料である。491は肩部が明瞭に発達した長頸壺的な要素をもつが、胴部がさらに下方へ延びることから、両個体とも受け口状の二重口縁を有する壺と考えられる。492は490と比べて頸部の立ち上がりは低いが器形的に近い小型の壺である。493は器高が10cmに満たないと考えられる小型の壺である。494～500は受け口状の二重口縁を有する壺の口縁部、501・502は底部の一括資料である。

横瓶（第66図、503）

503は頸部から肩部に向かってほぼ水平に延び側方は半球状を呈する。4号溝状遺構の埋土から出土した同一個体と考えられる横瓶（206・207）と比べるとやや古相を呈する。調整は4号溝状遺構から出土した個体と同様で、外面に格子目タタキ痕、内面に指オサエとナデ消された同心円当て具痕がわずかに確認できる。

坏（第66図、504）

504は坏もしくは高台付境のやや肥厚した口縁部である。体部より下を欠う資料であり、器種の判別ができないことからはここでは坏の口縁部として取り扱った。

東播系須恵器（第67図、505～519）

505～519は青鼠色の器表と砂粒を比較的多く含む胎土が特徴的である。また、粘土紐を積み上げた際に生じた凹凸を粗い回転ナデで調整している点も各個体共通する。

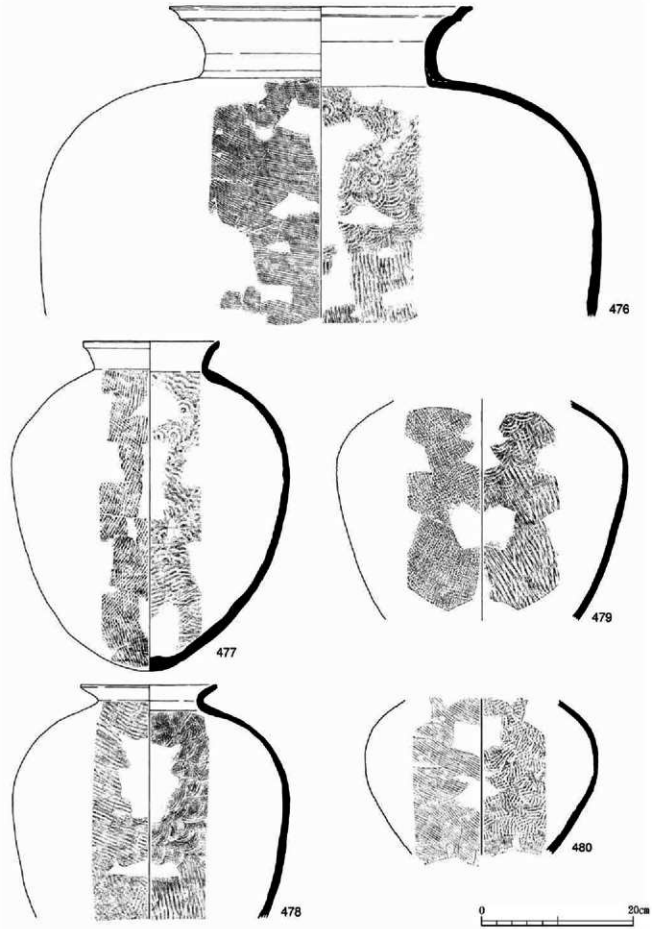
505は小径の糸切り底から浅い角度で開く体部を有する坏の底部である。506は出土した東播系須恵器の中で唯一完形近くまで図面上復元できた鉢である。底径約12cmの糸切り底から外方に向かい開き、推定口径は約35cmと安定した器形である。口縁部のみの資料である518の推定口径が約27cmであることから、そのほかの個体もおおむね30cm前後の口径を有すると考えられる。

口縁部の形態にはいくつかのタイプがあり、その特徴をもとに分類すると以下のようになる。

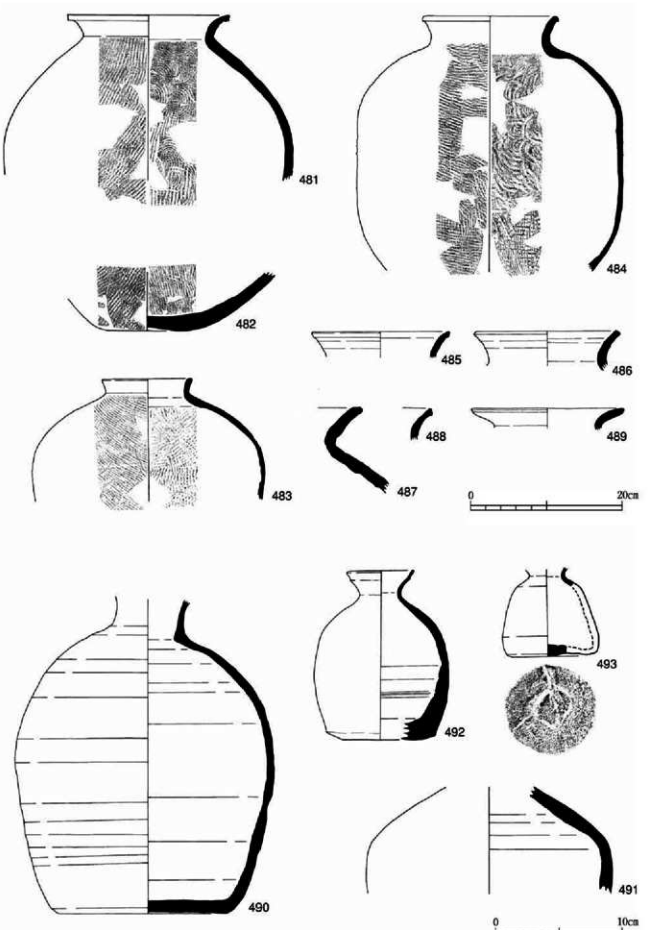
i）体部内面の開き角に対して直角よりわずかに開く肥厚しない口縁端面を有するもの

a）口縁端面に沈線状の窪みをもち外側に顕著に張り出すもの（509・510）

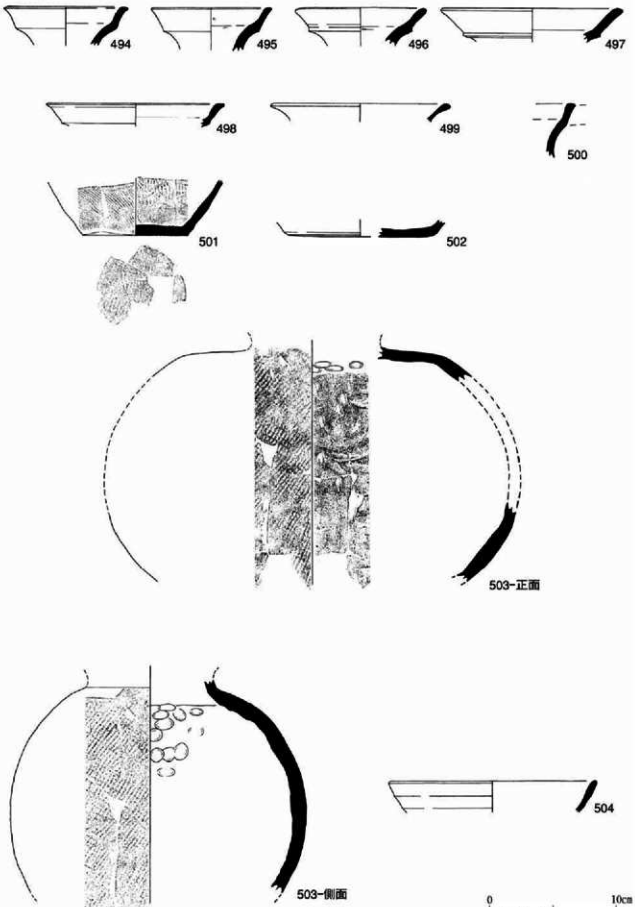
b）口縁端面に沈線状の弱い窪みをもち外側に張り出さないもの（506・507）



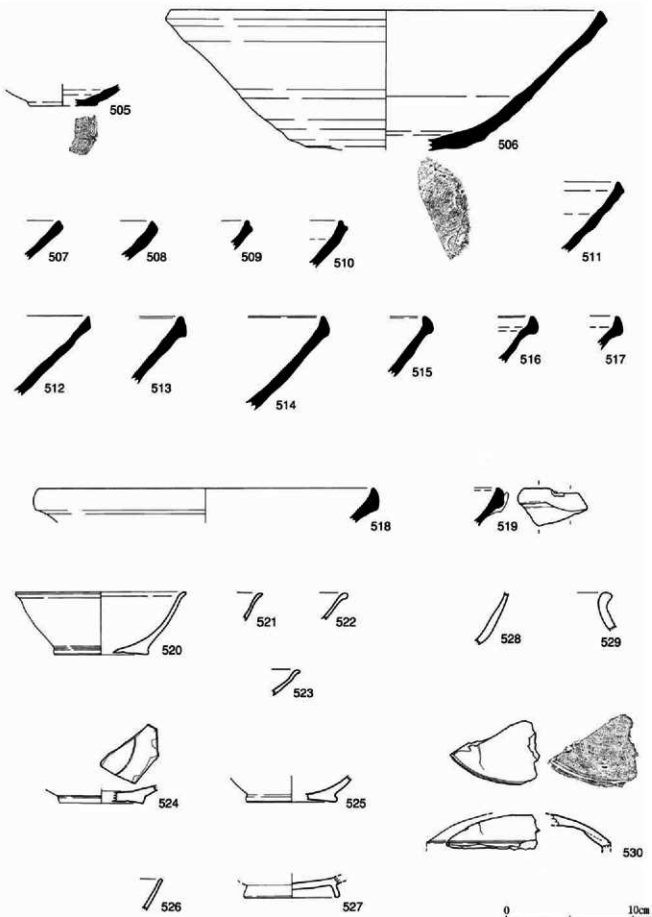
第64図　B区包含層出土遺物実測図28（古代・中世、S=1/3）



第65図　B区包含層出土遺物実測図29（古代・中世、S=1/3）



第66図　B区包含層出土遺物実測図30（古代・中世、S=1/3）



第67図　B区包含層出土遺物実測図31（古代・中世、S=1/3）

c）口縁端面に沈線状の窪みをもたないもの（508）

ii）肥厚しない口縁部をもち、口唇部が上方に向かい鋭く立ち上がるもの（511・512）

iii）口縁部が肥厚し、その外面が下方に向け鋭く突出するもの（513）

iv）口縁部が肥厚し、その端部が内湾気味に立ち上がるもの

a）外面に突出する（514・515・518・519）

b）内面と外面に弱く突出し受け口状の断面形態を呈するもの（516・517）

緑釉陶器（第67図、520～525）

9世紀前半の洛西産の緑釉陶器である。520は端反りの埦である。底部外面に凹線状の窪みを有する。521・522は碗の口縁部である。521は520に器形的特徴が類似すると考えられる。522は口縁端部が丸く肥厚する。523は口縁端部が外方に向かい小さく外反し、体部に明瞭な屈曲を有する皿である。

524・525は底部資料である。524は底部内面の体部への変化点付近に弱い段を有し、俯瞰すると周回する圏線状に見える。525は円盤状の高台から緩やかに立ち上がる体部が想定できる。

灰釉陶器（第67図、526・527）

確認できた灰釉陶器は2点のみである。526は碗の口縁部である器表面全体に微細黒斑が認められる。527は皿の底部である。高台内面にはヘラケズリの調整痕が残る。見込みの範囲は無釉で、破断面近くにわずかな釉が認められる。器表面全体に見られる微細黒斑は526と同様である。

陶磁器（第67～72図、528～647）

天目茶碗（第67図、528）

体部片のみの資料である。黒褐色の釉を施し、胎土は淡黄色を呈する。口縁部と底部を失う資料であるが、釉調および胎土の特徴から瀬戸系の天目茶碗と考えられる。

壺（第67図、529）

暗緑褐の釉を施す耳壺の口縁部である。4号溝状遺構から出土した耳壺の肩部付近の破片（210）と同一個体の可能性が指摘できる。大宰府陶磁器分類の耳壺Ⅴ類に比定できる。

蓋（第67図、530）

暗赤褐色の陶製蓋である。頂部から緩やかな弧を描きながら1条の沈線が巡る周縁に達するが、そこから下方に向かい垂直に延びる器形から蓋と認定した。ヘラ記号状の線刻が認められる。

白磁（第68～70図、531～620）

白磁は土師器の坏・埦に次いで出土点数が多く、青磁の出土点数を大きく優越する。確認された器種としては碗が最も多く、皿の出土点数がそれに続く。そのほかにも青白磁の碗や小型の合子も出土しているがごく少量であり、壺類などの出土は皆無である。出土した白磁についてその様相を概観すると、碗C類（大宰府陶磁器分類：碗Ⅳ類）およびD類（大宰府陶磁器分類：碗Ⅴ類）の点数が白磁の総出土点数において高い割合を占める。

ここでは、器種ごとにその器形的特徴をもとに分類し、若干の説明を加える。

碗（第68・69図、531～599）

碗A類（第68図、531、大宰府陶磁器分類：白磁碗Ⅰ類）

蛇ノ目高台を有する碗の底部片である。乳白色の釉を丁寧に施し、焼成も良好で釉の発泡なども見られず滑らかな器表である。碗A類に属する個体はこの1点のみである。

碗B類（第68図、532・533、大宰府陶磁器分類：白磁碗Ⅱ類）

わずかに内湾傾向のある体部と玉縁口縁を有する碗である。薄く施された釉は淡緑色を呈し、その下には白色の化粧土が施される。ともに貫入が認められる。

碗C類（第68図、534～569、大宰府陶磁器分類：白磁碗Ⅳ類）

玉縁の口縁部と浅く削り出された高台を有する厚みのある底部を器形的特徴とする碗の一群である。口径は平均して15cm前後で、釉調はわずかに灰色味を帯びた白色が大半を占めるが、にぶい黄白色やわずかに水色味を帯びた釉調も認められる。また、回転ヘラ削りの調整痕が明瞭に残ることも大きな特徴の一つである。ここでは口縁部の玉縁形状、器壁の厚さなどの器形的特徴をもとに若干の説明を加える。

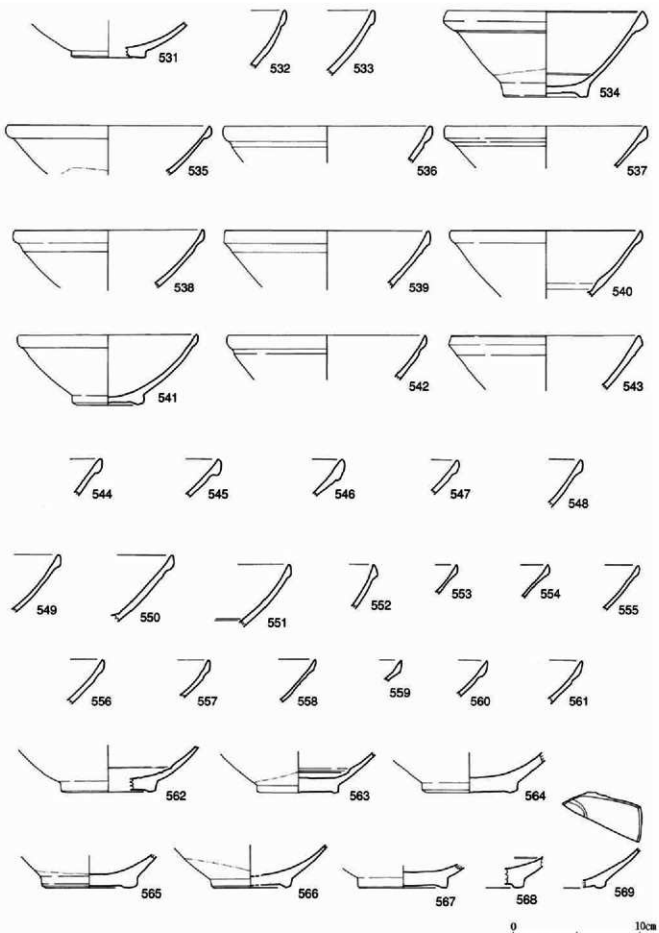
534は大きく肥厚する玉縁の口縁を有し、他の個体と比しても肥厚の度合いが高い。見込みには圏線状の沈線が1条巡る。体部・底部ともに肉厚の器壁である。535は半月状の玉縁を呈し、口縁端部を鋭く仕上げる。536・537は相対的には肥厚傾向が強い口縁部である。口縁部外面の玉縁直下には凹線状の窪みが認められるが、口縁部成形時の調整によるもので意図的成形ではないと考える。538～542は肥厚傾向がやや弱い比較的扁平に近い玉縁状の口縁部を有する。540は見込み付近に明瞭な段状の膨らみを有する。543は玉縁状の口縁部であるが、体部から口縁部への明瞭な変化点が認められない。544～561は図面上での反転復元が困難であった口縁部資料でることから断面形態のみの比較にとどめる。544～552は玉縁の肥厚傾向が強い口縁部である。このうち547～550の4点は544～546と比較するとやや玉縁の大きさが小振りである。553～561は肥厚傾向が弱い玉縁口縁であるが、556・557のように体部の器壁の厚みと肥厚部の厚みに大差がない個体もある。553・554は体部から体部から口縁部への明瞭な変化点がなく流れるように口縁部へと連続する。光を透過するほど極めて薄い器壁を有する。555・558にも同様の特徴があり釉も薄くかけられている。559・560・561は口縁端部をシャープに仕上げる。

562～569は底部の一括資料である。浅く削られて成形された高台の畳付はその外周縁が回転ケズリにより面取され浮き上がっている。このうち568については釉調がB類に類似し貫入を生じていることから、同類に属する可能性もあることを指摘しておきたい。

碗D類（第69図、570～591・596・597、大宰府陶磁器分類：白磁碗Ⅴ類）

断面逆台形状の細長く高さのある高台を有する碗の一群である。口縁部には直口縁・外反・屈曲などバリエーションが豊富である。C類についで出土量が多い。

570～577は口縁部が直口縁もしくはわずかに端部が外反する傾向が見られる個体である。釉は体部下位付近までかかり高台は露胎とする。577のように口縁部外面が弱く突出する個体も見られる。578～583は外反傾向が顕著で口縁部内面には弱い沈線が1条巡る。578～580は外面無文であるが、581～583は間延びした逆S字状の縦方向の篦描きによる花弁文を施す。584～589の口縁部は小さな玉縁状を呈する。C類の玉縁と比べるとごく小さく、589のように口縁端部外面の沈線状の窪みにより玉縁状に見なされるものもある。器壁は一様に薄手であり、釉調も白色からわずかに水色味を帯びるものまであり、全体的に丁寧な作りのものが目立つ。590・591は口縁端部が小さく水平方向に屈曲し嘴状を呈する。591には578～583と同様に体部内面に弱い沈線が1条巡る。底部一括資料の596・597はこの類に属する。



第68図　B区包含層出土遺物実測図32（古代・中世、S=1/3）

碗Ｅ類（第69図、592）

緩やかな膨らみをもつ体部と外反する口縁部を特徴とする。また、比較的厚みがある体部内面には篦描きによる花弁文を施す。釉調はやや黄色味を帯び微細な貫入が生じている。

碗Ｆ類（第69図、593、大宰府陶磁器分類：白磁碗Ⅸ類）

口縁部の断面形状はD類に共通するが特徴をもつが、口縁部内面から外面のごく一部の釉を施釉後に剥ぎ取り口禿げとすることから明瞭に区別される。

碗Ｇ類（第69図、594・595、大宰府陶磁器分類：白磁碗Ⅺ類）

わずかに外反する口縁部と外面の篦描きによる蓮弁文を特徴とする。釉調はわずかに淡緑色を帯びる。２号溝状遺構から出土した白磁碗の底部（190）と同類である。

碗Ｈ類（第69図、598、大宰府陶磁器分類：白磁碗Ⅵ類）

底部のみの資料である。回転削りにより成形された高台は内外面ともに丁寧な作りで、畳付は平滑に仕上げる。内面見込みの部分には櫛目文を施す。釉調はやや黄色味を帯び浅黄色を呈する。

碗Ｉ類（第69図、599、大宰府陶磁器分類：白磁碗Ⅷ類）

底部のみの資料であり、見込み部分を蛇ノ目釉剥ぎとする。体部内面には蛇ノ目釉剥ぎの外周縁付近に明瞭な段を有する。高台外面に焼成時に付着した砂が認められる。

皿（第70図、600～617）

皿Ａ類（第70図、600～603、大宰府陶磁器分類：白磁皿Ⅱ類）

わずかに灰色味を帯びた白色の釉調と肉厚の底部を特徴とする。口縁部はわずかに外反するが603のようにほぼ直口縁に近い断面形状の個体もある。体部内面中位に小さな段を有する。施釉は体部下位付近までで底部は露胎とする。

皿Ｂ類（第70図、604～606、大宰府陶磁器分類：白磁皿Ⅲ類）

Ａ類と比較して体部の外方への開き角がやや大きい。口縁部はわずかに外反しその端部は鋭く仕上げる。Ａ類と同様に体部内面の中位に小さな段を有する。606は見込み部分に環状に釉を剥ぎ取った痕が見られる。

皿Ｃ類（第70図、607・608、大宰府陶磁器分類：白磁皿Ⅳ類）

水平方向もしくはやや下方に向かい屈曲する口縁部を大きな特徴とする。白濁した釉が厚くかかりわずかに灰色味を帯びた釉調を呈する。

皿Ｄ類（第70図、609・610、大宰府陶磁器分類：白磁皿Ⅴ類）

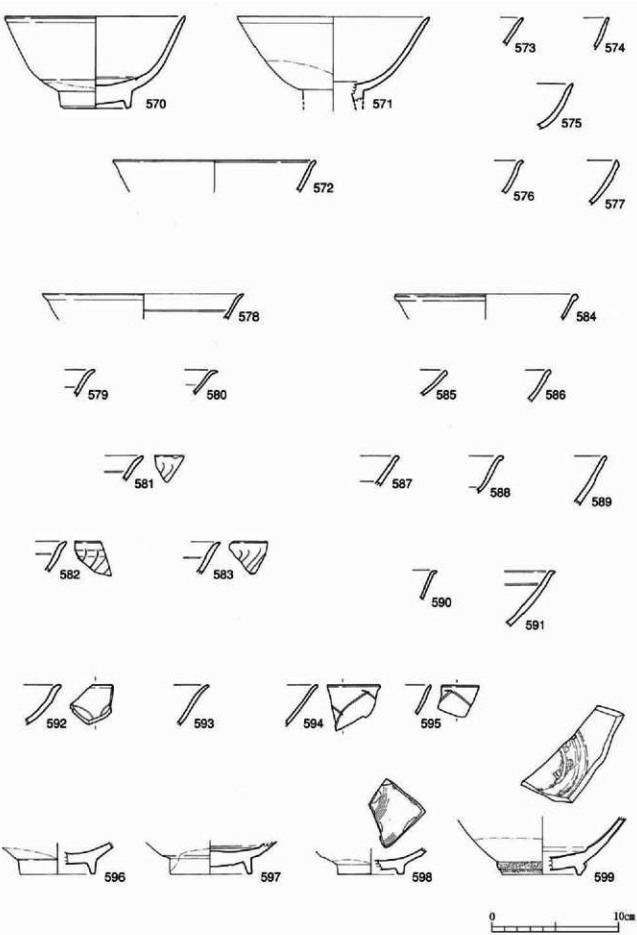
平底もしくはやや上げ底の底部を有する個体である。後述するＥ類と比べると底径がやや大きめである。ともに内面の見込み付近に小さな段が認められる。

皿Ｅ類（第70図、611～616、大宰府陶磁器分類：白磁皿Ⅵ類）

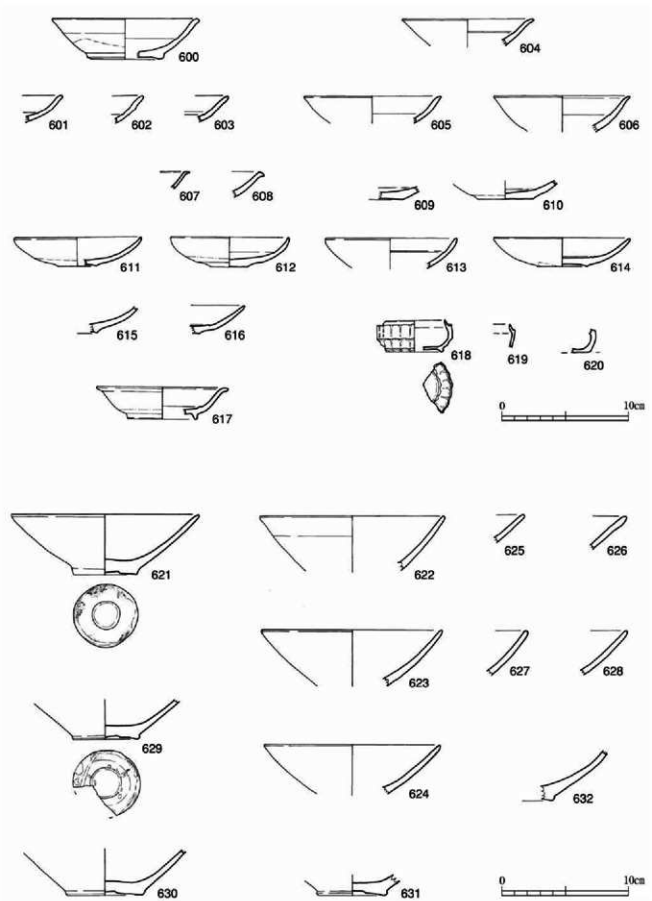
底径３㎝前後のやや上げ底となる底部と大きく外方に開く体部を器形的特徴とする。底部と体部の区別は下方に突き出す小径の底部であることから明瞭である。口縁部は直口縁もしくはやや内反する傾向がある。体部内面にはＤ類と同様に小さな段が認められる。

皿Ｆ類（第70図、617）

わずかに灰色味を帯びた釉調を呈する。高台は断面形状がやや先細りの三角形で畳付の幅が狭い。底部内面の見込み部分の釉を重ね焼きのため施釉後に環状に剥ぎ取っている。施釉の範囲は体部下位



第69図　B区包含層出土遺物実測図33（古代・中世、S=1/3）



第70図　B区包含層出土遺物実測図34（古代・中世、S=1/3）

までとし高台は内外面ともに無釉である。横田分類の白磁碗E類に相当する15世紀後半から16世紀代の白磁である。

合子（第70図、618～620）

合子は3点出土したがすべて身の破片であり蓋は確認されなかった。すべて型作りによる成形であり、口径は図上復元できた618が示す6㎝前後の直径であると考えられる。

618は俯瞰すると菊花状の密な花弁に見える精緻な造りの合子である。内外面ともに施釉されているが、接地面および蓋との擦り合わせとなる立ち上がりの部分は無釉である。釉調は柔らかな乳白色を呈する。619はやや薄手の器壁であり、釉調は618に近似し、立ち上がりの部分を無釉とする。620はやや水色味の強い釉調を呈する。微細黒色斑が胎土に特徴的に認められる。

青磁（第70・71図、621～645）

出土した器種としては碗・皿・高台付皿・盤であるが、白磁と比べ青磁の出土点数は少ない。その中でも古相を示す越州窯系青磁碗の出土点数が青磁全体の中で占める割合が高いのが目立つ。ここでは越州窯系・同安窯系・龍泉窯系で大きく類別し、器形的特徴などをもとに若干の説明を加える。

越州窯系青磁（第70図、621～632）

わずかな膨らみを有し外方に開く体部と蛇ノ目高台の底部を特徴とする碗である。口縁部は直口縁でその端部をやや丸く収める。釉調はややくすんだオリーブ色を呈し微細な貫入が見られ、蛇ノ目高台の畳付けの部分は、施釉後に釉を削り取っている。確認された越州窯系青磁はすべて碗であり、大宰府陶磁器分類のⅠ-1a類に相当する。

同安窯系青磁（第71図、633～635）

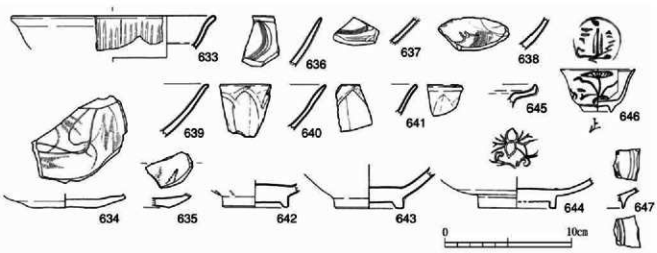
碗（633）と皿（634・635）の破片が出している。633は口縁部が外反しその端部を丸く収める。釉調は透明感があるややくすんだオリーブ色を呈する。体部外面に間隔が不均一な粗い縦方向の櫛目文を施す。634・635は見込みに鋸歯状の櫛点描文を施す。施釉は体部下位までで底部は無釉とする。大宰府陶磁器分類の碗Ⅲ-1a類（633）、皿Ⅰ-2b類（634・635）にそれぞれ相当する。

龍泉窯系青磁（第71図、636～645）

碗・高台付皿・盤の3器種が確認された。636～638はいずれも内面に片彫文による劃花文を施す碗である。636・637は片彫文のみ、638は片彫文と櫛目文の両方が認められる。釉調はいずれもやや青みを帯びた深いオリーブ色を呈する。639～642は体部に片彫りによる蓮連弁文を施す碗である。644は見込み部分を広く取る高台付皿の底部片である。印花を施す見込み部分を無釉とする。645は盤の口縁部である。体部から水平方向に屈曲しさらに口縁端部で上方に向かい屈曲する器形的特徴を有する。大宰府陶磁器分類の碗Ⅰ-2a類（636・637）、碗Ⅰ-3a類（638）、碗Ⅲ-2c類（639～643）、皿Ⅳ類（644）にそれぞれ相当する。

青花（第71図、646・647）

青花の出土は4号溝状遺構から出土した碗の体部片（213）とこの2点のあわせて3点である。646は小坏である。体部外面と見込み部分に文様を施す。体部は花文、見込みの文様は植物と考えられるが判然としない。高台内には「止」と判読できる文字が書かれているが筆運から判断すると記号の可能性もある。647は見込みに文様が描かれ、その回りに2本の圏線が巡る皿の底部片である。文様は判然としないが、器形的には玉取獅子・十字花文等のモチーフが描かれていると考えられる。



第71図　B区包含層出土遺物実測図35（中世S=1/3）

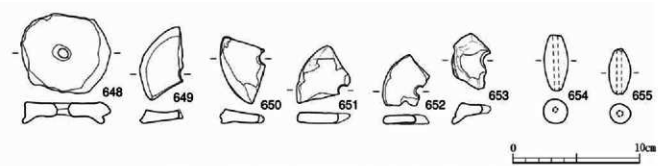
土製品（第72図、第９表、648～655）

紡錘車（第72図、648～652）

確認された紡錘車６点のうち５点は黒色土器・高台付埦・坏の底部を転用したもので、焼成前に穿孔を施した個体は651が１点のみである。このうち653の高台付埦を転用した個体は、高台の外側面に１条の沈線が周回する特徴が375と共通している。375は穿孔の及ぶ範囲まで残存しておらず、紡錘車との認識はできないが同一個体の可能性も指摘できる。

土錘（第72図、654・655）

土錘についてはその形状から確実に土錘と判別できる個体２点のみを図化した。出土点数は少ない。



第72図　B区包含層出土遺物実測図36（古代・中世S=1/3）

第９表　B区包含層出土土製品計測表

【紡錘車】

遺物番号	層位位置	法量 最大径（cm）	最大孔径（cm）	重量（g）	（）推定値	備考
648	Ⅲa層	7.1	0.9	58.8		転用紡錘車（黒色土器・高台付埦）、外周一部欠損
649	Ⅲa層	(6.6)	(1.2)	(17.3)		転用紡錘車（土師器・高台付埦）、約２/３欠損
650	Ⅲa層	(6.7)	(1.2)	16.9		転用紡錘車（土師器・高台付埦）、約３/４欠損
651	Ⅲa層	(6.2)	(0.8)	13.1		焼成前穿孔、約３/４欠損
652	Ⅲa層	(4.8)	(0.8)	9.9		約４/５欠損
653	Ⅲa層	(6.4)	(1.2)	11.4		転用紡錘車（土師器・高台付埦）、約４/５欠損

【土錘】

遺物番号	層位位置	法量 最大径（cm）	最大孔径（cm）	重量（g）	（）推定値	備考
654	Ⅲa層	(3.9)	2.0	12.8		端部欠損
655	Ⅲa層	(3.7)	1.8	6.5		端部欠損

※測定値は残存範囲での最大値

石製品（第73・74図、656～688）

石製錘具（第73図、656・657）

出土した石製の錘具は656・657の２点のみであり、巡方は確認されていない。656はいずれも最大値で縦約5.4cm、横幅約4.1cm、厚み約7.5cm、重量約35.8ｇの花崗閃緑岩製の鉈尾である。裏面には帯に固定する際に必要となる双方向から穿孔された３つの穴が残る。石材の表面は風化により滑らかさを失っているが、含有する角閃石や黒雲母等の有色鉱物は鋭い光沢を保つ。657は丸鞆の下部直線から半円状の曲線へと形状が変化する隅角付近の破片と考えられる。裏面の穿孔位置は656と異なり隅角に偏倚しており相異が認められる。石材はやや黒色を呈する656と同様の花崗閃緑岩である。残存重量は約4.9ｇである。

滑石製石製品（第73図、658～675）

石鍋（658～660）

658は20cm前後の口径と推定される縦方向の瘤状把手を有する石鍋である。659は658と同様の器形を有するが、658と比べて把手の部分が大きく調整も丁寧である。660は削り出しによる断面台形状の鍔が口縁部直下に周回する。内面には文様とも見える線刻が残るが、それが施された時期の判断は困難である。器形的特徴から時期的には658・659は10世紀末から11世紀代、660は13世紀代に位置付けられる遺物である。

小型石鍋（664）

664は口径が７cmに満たない小型石鍋である。器形的特徴は658・659に共通しており、時期的にも同期の遺物と考えられる。細部まで丁寧な作りで、銀色味を帯びた桃色を呈す。包含層中からの出土遺物であるが、本来は土坑墓等の副葬品であった可能性が高い。

石鍋片の二次加工品（661～663、665～675）

661は蔓取手穴がある口縁部付近の破片である。口縁部から斜方向に破断もしくは切断した面を研磨している。662は体部片であり未貫通の穿孔が残る。破断面には加工がなく、単なる破片とも考えられるが穿孔が認められることから加工品とした。663は底部片である。底部から体部への変化点付近に研磨痕が認められる。665は直方体に加工した滑石片に上方および側面から穿孔を施す。穿孔の順序は上方→側面である。分銅もしくは錘としての利用が考えられる。666は一部が欠損しており全体の形状は確認できない。残存部から判断すると匙状に加工されていたと考えることができる。一部に錆状の付着物が残る。667は鍋蓋状の形状に加工された体部片である。つまみ様の形状を削出した後、双方向からの穿孔を施したと考えられる。668・669はともに体部片の加工品であり、用途としては665と同様に分銅もしくは錘が想定できる。幅の狭い方の端部に抉りを入れ、そこに紐などを結んで使用したものか。669には665と同様に上方および側面からの穿孔を施している。穿孔の順序は側面→上方である。665・669の穿孔に紐を通すと鉛直方向にぶら下げることができる。670はほぼ全面が研磨されている。一部に体部の調整痕もしくは切断痕と考えられる痕が残るが、判然とせず部位の判断は不可能である。小型の磨製石斧にどことなく似通った形状を呈するが、滑石という極めて軟質の石材で何らかの対象を加工するための道具を作るとは考えにくい。表面には無数の擦痕が認められるが成形のための調整痕か道具としての使用痕かは判別できず用途不明である。671は四辺がやや外側に張り出す長方形に加工した製品である。側縁は鋭く仕上げ、断面形状は長軸と短軸の両方向とも幅

の狭い木の葉状を呈する。裏面は平滑に研磨するが、表面には２箇所に欠損部が認められ逆Ｕ字状の突起加工部があったものとも考えられる。八児遺跡（宮崎市高岡町大字下倉永）出土の石鍋には同様の加工品を用いた補修の例がある。672～674は鏃先状に加工された製品である。672の先端は平面的には丸味を帯びるが断面は鋭く仕上げる。直線的に加工された一辺は丁寧に研磨される。673は石鍋の瘤状把手に似た突起が認められるが、二次加工の段階で削り出されたものである。672と同様の形状を呈すが直線的な一辺は破断面である。674は672・673の丸味を帯びた先端部に相当すると考えられる破片である。675は両面を研磨し１㎝弱の厚みに研磨した加工品である。穿孔が施された段階が二次加工時かそれ以前のものかは不明である。

砥石（第74図、676～688）

包含層中から出土した13点を図示した。石材としては砂岩が中心であるが、そのほかに頁岩（685）やリソイダイト（天草陶石、680・686）を使用した砥石も３点含まれていた。砥石の形状としては、676・677のように自然石をそのまま用い、その比較的平滑な自然面を主たる砥面として使用した例が多い。また、４点（685・686・687・688）ほど長軸の最大長が10㎝未満の小型砥石も出土している。685は扁平な頁岩の表裏面のみを砥面として使用したと考えられ、側面には使用痕が皆無である。686はリソイダイトを石材とする。ほぼ全面に使用痕が認められる。687は両端を失う686に似た形状を呈する資料である。688は有孔砥石であるが、穿孔部が破断して失われる資料である。残された使用痕は側面図の凹状の減り具合から分かるように一方の砥面でより顕著である。手持ちにより使用した提砥と考えられる。

鉄製品（第74図、689）

689直線的な刃部を有する刀子である。残存最大長約26.3㎝、重量約70.6ｇである。

第10表　滑石製石鍋計測値一覧

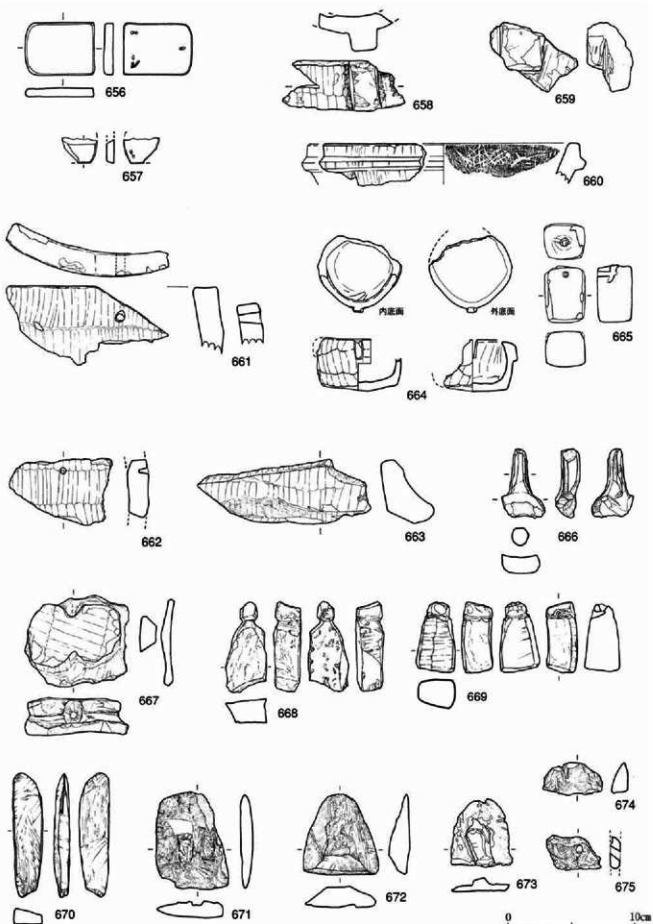
遺物番号	層位	計測値				備考
		口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	重量（g）	
658	■a層	—	—	—	97.7	石鍋片（口縁部・縦方向の把手）
659	■a層	—	—	—	104.3	石鍋片（口縁部・縦方向の把手）
660	■a層	21.1	—	—	82.0	石鍋片（口縁部・横方向の脚）
664	■a層	6.6	5.8	4.2	90.2	小型石鍋（口縁部・縦方向の把手）

第11表　滑石製石鍋二次加工品計測値一覧

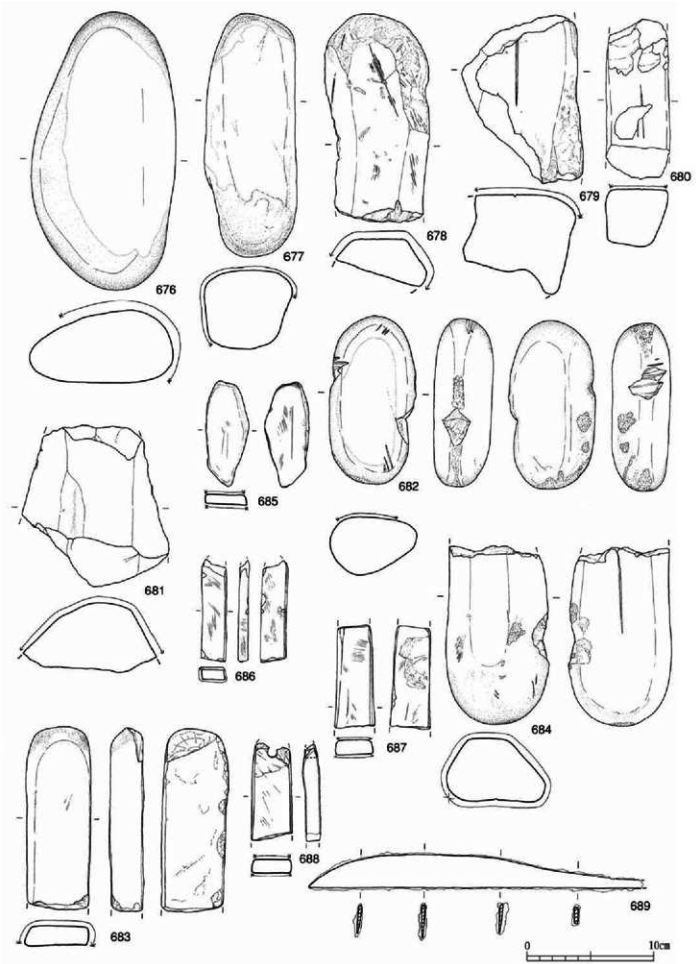
遺物番号	層位	計測値				備考
		最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	
661	■a層	—	11.1	2.0	198.7	石鍋片（二次加工・穿孔）
662	■a層	—	7.8	1.7	103.1	石鍋片（体部付近・二次加工・穿孔）
663	■a層	—	—	—	276.0	石鍋片（底部付近・二次加工）
665	■a層	4.5	3.2	2.3	79.5	分銅もしくは錘として利用か？
666	■a層	5.4	3.4	1.5	25.0	錘か？
667	■a層	8.2	7.2	3.0	218.7	錘か？
668	■a層	7.1	3.2	2.2	62.5	分銅もしくは錘として利用か？
669	■a層	4.5	2.9	2.5	64.8	分銅もしくは錘として利用か？
670	■a層	9.9	2.4	1.5	44.9	用途不明
671	■a層	7.1	5.1	1.2	73.2	用途不明
672	■a層	8.4	6.9	1.7	73.3	用途不明
673	■a層	5.4	4.9	1.1	28.8	用途不明
674	■a層	4.7	2.6	1.3	19.1	用途不明
675	■a層	4.3	2.9	0.8	14.9	用途不明

第12表　砥石計測値一覧

遺物番号	層位	計測値				石材	備考
		最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）		
676	■a層	21.7	11.4	5.7	1876.5	砂岩	
677	■a層	19.2	7.3	6.3	1841.7	砂岩	
678	■a層	16.3	8.4	3.7	665.5	砂岩	
679	■a層	13.2	9.7	7.8	988.7	砂岩	敲状痕
680	■a層	12.6	5.9	4.7	423.6	リソイダイト	敲状痕
681	■a層	12.2	11.6	6.0	931.1	砂岩	
682	■a層	13.2	6.4	4.6	583.2	砂岩	
683	■a層	14.4	5.1	1.7	379.2	砂岩	
684	■a層	14.0	8.2	5.7	995.6	砂岩	
685	■a層	8.3	3.4	0.9	42.9	頁岩	小型砥石
686	■a層	8.1	1.9	0.8	23.1	リソイダイト	小型砥石
687	■a層	9.2	3.2	1.2	57.1	砂岩	小型砥石
688	■a層	7.6	3.2	1.1	49.0	砂岩	小型砥石・提磨



第73図　B区出土遺物実測図37（石製鋳具・滑石製品、古代・中世、S=1/3）



第74図　B区出土遺物実測図38（砥石・刀子、古代・中世、S=1/3）

第４節　近世の遺構と遺物

第Ⅱ章第３節の基本層序で示したとおり、調査区内は15世紀末に降下した桜島文明軽石が部分的にごくわずかに残存するレベルまで耕作等の影響を受け、近世の遺物包含層はほぼ消失していた。

そこで遺構については、埋土観察および遺構内出土遺物の検討を踏まえた上で近世に帰属すると認定したものを取り扱う。また、桜島文明軽石が混在する耕作土中で確認した近世の遺物については、昨今の客土搬入の事実がないことが確認できたことから、消失した近世の遺物包含層からの遊離遺物として可能な限り図化を試みたものであることを前置きしておく。

１　遺構

検出されたおもな遺構は、掘立柱建物跡２棟、Ｌ字に折れ曲がるピット列１、竪穴の室と考えられる遺構を含む土坑８基、溝状遺構２条である。出土遺物の様相は17世紀の中頃から19世紀末までの時期幅を呈するが、遺構との関連から見るとその中心時期は18世紀前半と考えられる。

掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（SB1、第76図）

K11・K12・L11・L12の４つのグリッドにまたがって検出された遺構である。柱穴と考えられるピットが複数あり不均一な柱間であるが、桁行の北側列（SH３～９）のSH３・４・６・７・８の５基の柱穴がほぼ均等な間隔となっていることから基本プランは２間×４間の掘立柱建物であったと考えられる。しかし、５基の柱穴（SH5・8・14・15・16）が基本プランのライン上にあり、束柱や出入口を設けるために補助的に設置された柱も存在する可能性があることを指摘しておく。

２号掘立柱建物跡（SB2、第77図）

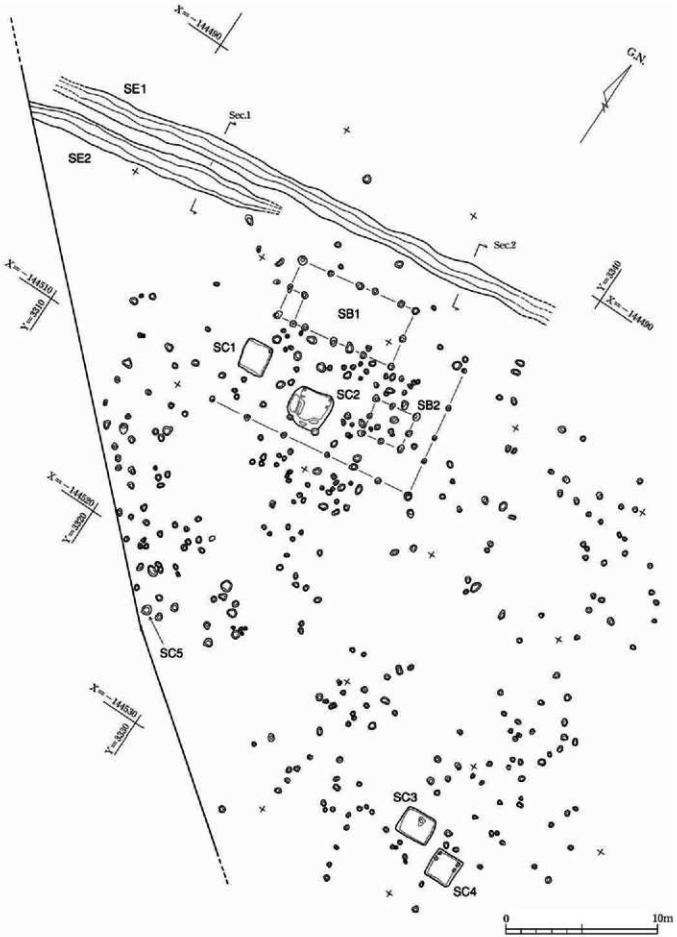
L12グリッドで検出された２間×２間のほぼ方形の平面プランを呈する小型の建物跡である。主軸方位W－10°－Sは１号掘立柱建物跡と同一であり、意図的配置が看取できることから同建物跡に附随する遺構と考えられる。屋敷神等の祭祀施設もしくは牛馬等の家畜飼育や倉庫としての小屋としての利用が想定できるが、前者とした場合やや規模が大きすぎるので、性格的には後者の遺構であろう。

第13表　掘立柱建物跡計測値一覧（近世）

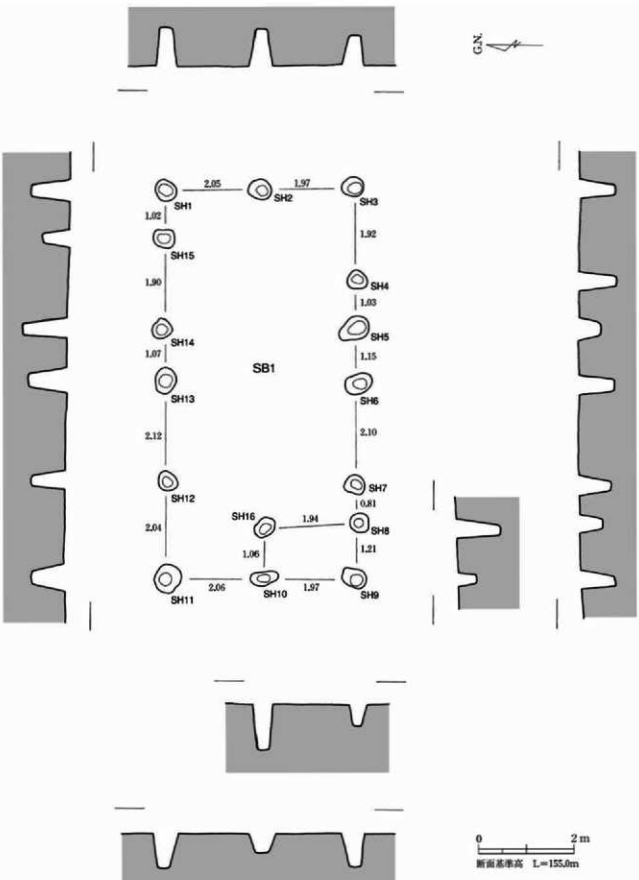
遺構番号	規　格	主軸方位	桁行（m）	梁行（m）	面積（㎡）	桁梁比率（桁行／梁行）	備　考
ＳＢ１	２間×３間	W－10°－S	8.17	4.02	32.9	2.03	Ｌ字状のピット列が附随。柵の跡か。
ＳＢ２	１間×１間	W－10°－S	2.78	2.41	6.5	1.15	ＳＢ１に附随する建物

ピット列（第75図）

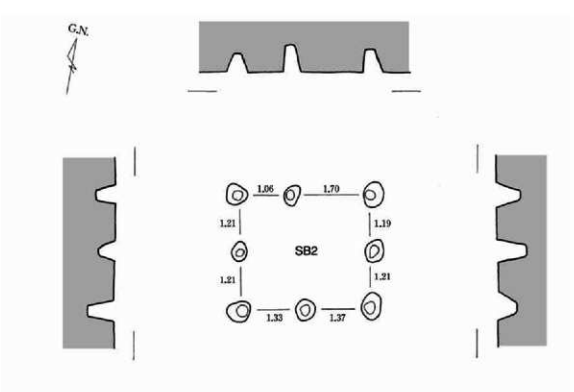
K12・L11・L12の３グリッドにまたがり検出された遺構である。第76図に示すとおり、Ｌ字状に折れ曲がり１号・２号掘立柱建物跡（SB1・SB2）と１号・２号土坑（SC1・SC2）を囲い込む形で設けられている。建物跡の北側と西側では遺構の延長が確認できなかったが、北側では２条の溝状遺構が検出されており、西側のみが唯一開放空間となる。ピットの平均間隔は約2.35mとやや広めである。



第75図　B区近世遺構分布図（S=1/250）



第76図　B区1号掘立柱建物跡実測図（近世、S=1/80）



第77図　B区２号掘立柱建物跡実測図（近世、S=1/80）

溝状遺構

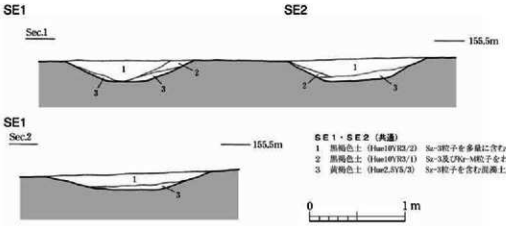
１号溝状遺構（SE1、第75・78図）

Ｋ９～12グリッドで検出された遺構で、走向軸をＮ－82°－Ｅにとる。遺構はその両端が自然消滅する形で検出されたが、規模は検出範囲の最大値で総延長約31.7ｍ、上端間約1.67ｍ、深さ約0.23ｍであり、断面形状は逆台形を呈す。この溝状遺構の北側では、図化には至らなかったが桜島文明軽石が混入するごく細い筋状の痕跡が確認された。この痕跡はおそらく近世の畠跡と考えられ、溝状遺構が居住空間と生産空間を区画するために設けられたと考えられる。

なお、畠跡と考えられるこの筋状の痕跡については、ごくわずかに確認された程度であり畠跡と認定しその広がりや単位等について言及することはできない。

２号溝状遺構（SE2、第75・78図）

Ｋ９・Ｋ10グリッドで検出された遺構で、走向軸を１号溝状遺構と同じＮ－82°－Ｅにとる。東端部は自然消滅するが西端部は調査区外へと全体像を確認するには至らなかった。遺構規模は検出範囲の最大値で総延長約16.9ｍ、上端間約1.64ｍ、深さ約0.21ｍであり、断面形状は１号溝状遺構と同様の逆台形を呈す。遺構埋土から判断して１号溝状遺構と並存したと考えられる。



第78図　B区１号・２号溝状遺構埋土状況実測図（近世、S=1/40）

土坑

検出した８基の土坑うち、１～４号の土坑はその規模が大きく竪穴状遺構として認識できるものである。遺構の性格としては地下に掘り込まれた貯蔵施設と考えられるが、これら４基については広義の意味での土坑と考え、残り４基の土坑と合わせてここで取り扱う。

なお、SC１～４についてはすべて座標北を基準とし、その振れ幅をもって主軸方位として示した。

１号土坑（SC1、第79図、出土遺物：第81図694）

L11グリッドで検出された遺構である。規模はいずれも完掘時の測定値で長軸約2.73m、短軸約2.54m、深さ約1.03mである。主軸方位をN－10°－Eにとり、形状比（長軸／短軸）は1.07である。遺構の西側壁に階段状のテラスが２段設けられておりここから昇降したものと考えられる。そのほかにも南壁と南東隅角にテラスが認められたが設置意図は不明である。棚状の施設か。また、北壁側に４個の石が平滑面を上にして据えられていたが、これらについては棚状の設置物や収納する対象物が湿気を帯びることを嫌って板等を横に敷き置きする際の土台に用いたと考えることができる。

遺構内からは第81図に示した694の薩摩焼の甕の底部片が床直上で出土している。検出された４個の石のほぼ中央付近から出土したが、失われた口縁部から胴部中位までの破片は確認されておらず、底部片のみが廃棄された可能性も指摘できる。

２号土坑（SC2、第79図、出土遺物：第81図693・695・696・697）

L11グリッドで１号土坑に隣接する形で検出された遺構である。形状比が約1.07と均整のとれた方形プランを呈し、規模はいずれも完掘時の測定値で長軸約2.05m、短軸約1.92m、深さ約0.88mである。遺構は主軸方位を１号土坑とほぼ同じN－7°－Eにとることからセット関係にあったと考えられる。床面の北東隅角でやや大きめの石が１個だけ確認されているが意図的なものであるかは言及できない。

遺構内からの出土遺物を第82図に示した。693は中世の白磁碗で、大宰府陶磁器分類白磁Ⅳ類に属する遺物である。古代の２号溝状遺構を切る形でこの２号土坑が設けられたために、溝状遺構の埋土中に包含されていた遺物がこの土坑の埋土に混入したと考えられる。695・696は口縁部がL字状に外反する薩摩焼の擂鉢であり、密な櫛目が施される。697は浅鉢もしくは半胴瓶である。口縁部には貝目が均等間隔に残り、一部を欠損した耳が認められる。３点の近世遺物のうち695が床直上で出土した。

3号土坑（SC3、第80図、出土遺物：第81図690・691・692・698・699・700）

N14グリッドで検出された遺構で、主軸方位をN－2°－Eにとる。遺構規模で、長軸約1.98m、短軸約1.91m、深さ約0.89mであり、形状比は約1.03と2号土坑と同様にほぼ方形プランである。北壁側の床面で1号土坑と同じように4個の石が確認された。石の平滑な面を上面に向けるための掘り込みも同時に検出されており、1号土坑と同じ意図で据えられたと考えられる。しかし、1号土坑で確認された階段状の昇降施設を削り出した痕跡は認められなかった。

第81図に遺構内からの出土遺物を示した。大半は埋土中に混入したものであり、床面近くで出土した遺物は691が1点のみである。690は銅緑釉を施した碗である。高めの高台と器肉の厚い底部を有するが、焼成不良のためかやや釉の発色が悪い。内野山北窯跡Ⅱ期に位置付けられる。691・692は鉄釉を施す火入れである。698は甕蓋である。699は口縁部がL字状に内側へ突出かつ外側へも張り出す甕であり、肩部に1条の刻目突帯を貼り付ける。4号土坑埋土中に破片の一部が混入していた。700は平底の底部を有する素焼きの焙烙である。器形的には把手が付く片手鍋状の個体と考えられる。

4号土坑（SC4、第80図、出土遺物：701）

N14グリッドで3号土坑に隣接して検出された遺構で主軸をほぼ座標北にとる。両遺構の配置は1号土坑と2号土坑の位置関係と同じであり、遺構としては2基を1セットとして考えることができる。規模はいずれも完掘時の測定値で長軸約2.31m、短軸約1.81m、深さ約0.92mである。形状比は約1.28であり4基の大型土坑と異なり長方形プランを呈す。床面直上では遺物の出土を見なかったが、695と同一個体と考えられる701の擂鉢の体部が埋土中で1点確認された。

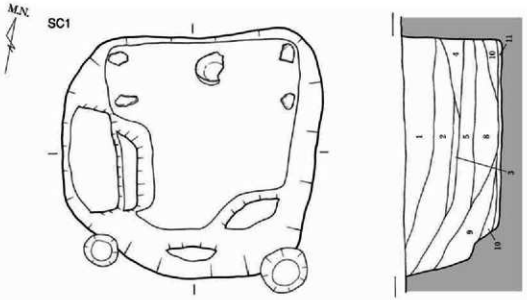
5号土坑（SC5、第82図、出土遺物：702）

N11グリッドの調査区際で、最終埋土に702の茶臼がはまった状態で検出された。遺構規模はいずれも完掘時の測定値で長軸約0.83m、短軸約0.69m、深さ約0.78mである。上端の形状は不整形な楕円状、下端はほぼ正円を呈する。茶臼についてはやや斜めになっていたが何らかの意図でそこに据えられた可能性も指摘できる。出土した茶臼は最大径約16.9cm、器高約11.6cm、重量約6.11kgであり、対称な位置関係で側面2箇所に方形飾りを有する把手用の孔が穿たれている。砂岩製でかなり風化が進んでおり主溝・副溝ともに確認できないが、八分画の目を有していたと考えられる。

6～8号土坑（SC6・SC7・SC8、第82図）

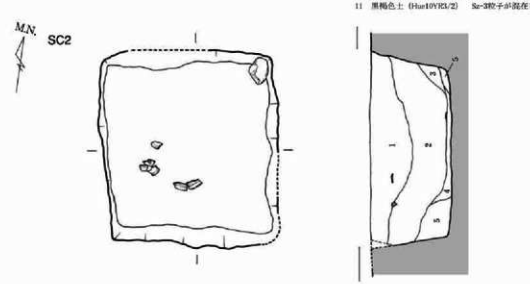
この3基の土坑ではいずれも埋土の中位辺りで平滑にならされた粘土質層が確認されている。灰色もしくは褐灰色系の粘質土を用いて人為的に設けられた層である。この層の形成要因としては、土坑を一定レベルまで意図的に埋め戻した後で粘質土をそこに置いたか、一定レベルまで遺構が埋没した段階で粘質土をそこに置いたかのいずれかが考えられる。SC6・SC7の埋土堆積状況を観察する限りでは意図的埋め戻しも考えられるが、SC8の埋土4・5の堆積状況からは自然埋没後に粘質土を置くために掘り窪めたとも考えられる。また、SC8の粘質土層は側壁に達しておらずSC6・SC7との性格的相異も考えられるが現段階では性格不明である。以下が個々の遺構の計測値である。

- **6号土坑（SC6）** 長軸約0.83m／短軸約0.81m／深さ約0.26m／形状比約1.02
- **7号土坑（SC7）** 長軸約1.27m／短軸約0.98m／深さ約0.62m／形状比約1.30
- **8号土坑（SC8）** 長軸約0.93m／短軸約0.87m／深さ約0.36m／形状比約1.07



SC1

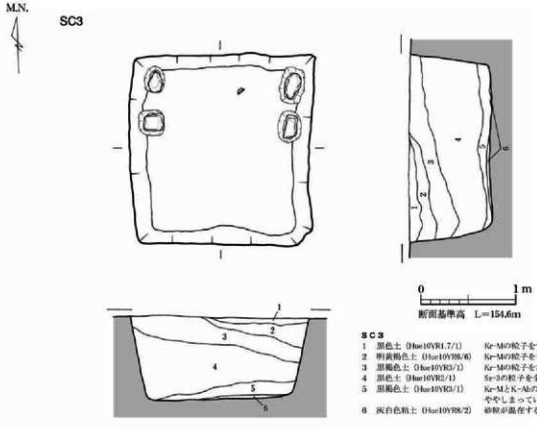
1 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) 福島文明軽石（Sz-3）の粒子を多量に含む。5mm前後の粒子が目立つ。
2 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) 1に近似。淡黄色粘土10%程度含む。
3 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) 淡黄色粘土が20mm前後のブロックを20%程度含む。
4 灰色砂礫 (Hue7.5Y5/1) 10mm前後のSz-3粒子を全体的に含む。
5 灰色砂礫 (Hue7.5Y5/1) 4に近似。黒色土の小ブロックを部分的に含む。
6 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) 長軸が80～120mmの淡黄色粘土を含む。
7 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 20mm前後のSz-3粒子を10%程度含む。
8 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 7に近似。20mm前後のSz-3粒子を30%程度含む。
9 暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2) Sz-3粒子を多く含む。しまっている。
10 暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2) 9に近似。ややしまりが弱い。
11 黒褐色土 (Hue10YR3/2) Sz-3粒子が混在し粗くしまっている。



SC2

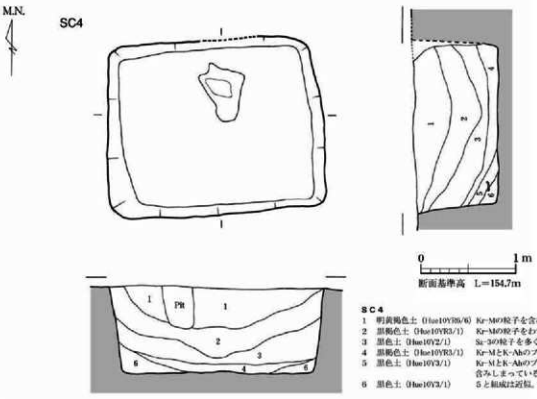
1 黒褐色土 (Hue10YR3/2) Sz-3の粒子を多く含む。軟質土。
2 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 1に近似するが、Sz-3粒子の含有率は1より高い。
3 黒褐色土 (Hue10YR2/2) Sz-3の粒子をわずかに含む。黒色軟質土のブロックが混在する。
4 黒色土 (Hue10YR1.7/1) 3と土色差がことなるが組成的には近似。
5 暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2) Sz-3の粒子を多く含む。黒色土ブロックが混在。

第79図　B区1号・2号土坑跡実測図（近世、S=1/80）



SC3

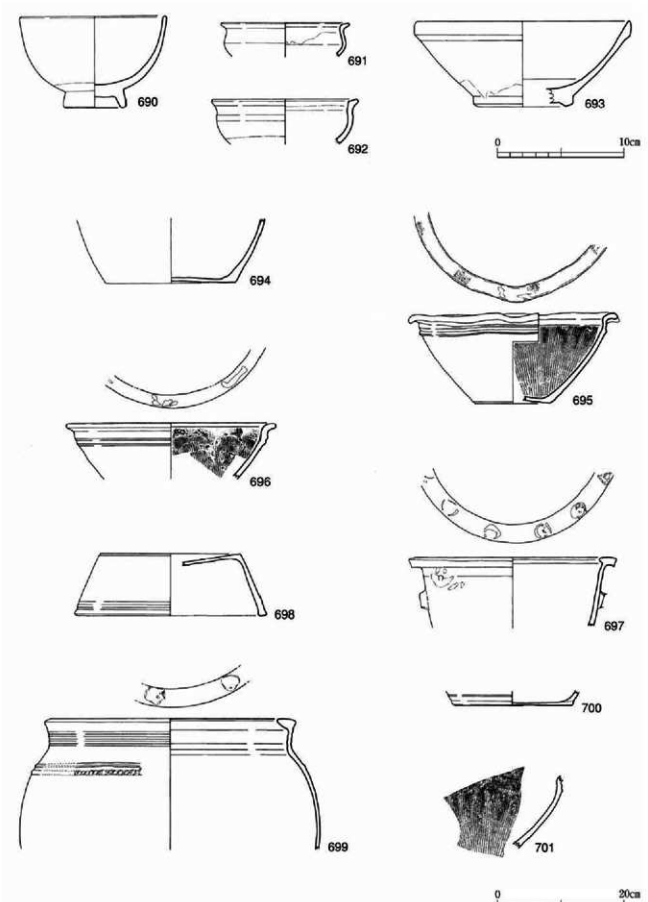
1	黒色土（Hue10YR1.7/1）	Kr-Mの粒子を含む。軟質土。
2	明黄褐色土（Hue10YR6/6）	Kr-Mの粒子を多く含みしまりがない。
3	黒褐色土（Hue10YR3/1）	Kr-Mの粒子をわずかに含む。
4	黒色土（Hue10YR2/1）	Sz-3の粒子を全体的に含む。
5	黒褐色土（Hue10YR3/1）	Kr-MとK-Ahのブロックを含む。 ややしまっている。
6	灰白色粘土（Hue10YR8/2）	砂粒が混在する粘土。貼り床に使用か。



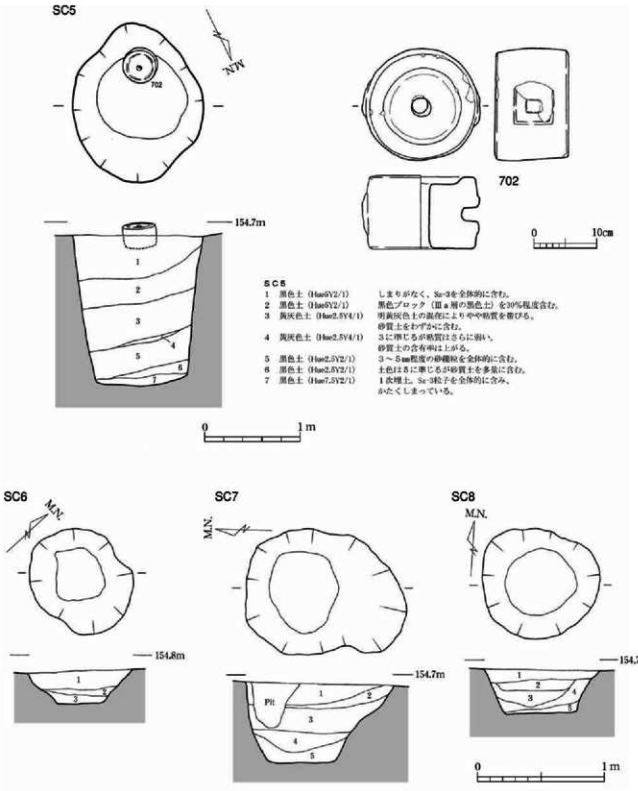
SC4

1	明黄褐色土（Hue10YR6/6）	Kr-Mの粒子を含む。
2	黒褐色土（Hue10YR3/1）	Kr-Mの粒子をわずかに含む。
3	黒色土（Hue10Y2/1）	Sz-3の粒子を多く含む。
4	黒褐色土（Hue10YR3/1）	Kr-MとK-Ahのブロックを含む。
5	黒色土（Hue10Y3/1）	Kr-MとK-Ahのブロックをわずかに 含みしまっている。
6	黒色土（Hue10Y3/1）	5と組成は近似。硬くしまっている。

第80図　B区３号・４号土坑実測図（近世、S=1/80）



第81図　B区土坑内出土遺物実測図（近世、690～693はS=1/3、694～701はS=1/6）



SC6

1 黒色土（Hue7.5YR1.7/1）
Kr-M0 5mm大の粒子を特徴的に含む。
2 暗灰色粘質土（Hue7.5YR5/1）
しまりが強く、炭化物を全体的に含む。
3 明褐灰色粘質土（Hue7.5YR7/1）
しまりが強く、炭化物をわずかに含む。

SC7

1 黒褐色土（Hue7.5YR2/2）
1mm以下のSc-3粒子を散漫に含む。
2 黒褐色土（Hue5YR3/1）
1に近似するが、Sc-3粒子を多く含む。
3 黒色土（Hue10YR2/1）
しまりがなく軟らかい。Sc-3粒子をわずかに含む。
4 明褐灰粘質土（Hue5YR7/2）
しまりが強く、炭化物をわずかに含む。
5 灰色土（Hue5YR5/1）
5mm大の砂礫を含む。保水力がなくパサパサしている。

SC8

1 黒褐色土（Hue7.5YR2/2）
Sc-3粒子を多く含む混礫土。
2 灰白色粘質土（Hue7.5YR5/1）
しまりが強く、炭化物を全体的に含む。
3 黒色土（Hue7.5YR2/1）
Kr-M0粒子を全体的に含む。2の基底層。
4 黒色土（Hue10YR3/1）
軟くしまっている。Kr-M0の粒子を散漫に含む。
5 黒褐色土（Hue10YR3/2）
Kr-M0粒子を全体的に含み緻くしまっている。

第82図　B区土坑実測図（近世、SC5はS=1/20、SC6～8はS=1/30、702はS=1/6）

2　遺物

近世の遺物は先述したとおり耕作土や近現代の攪乱等に混入した物が大半であるが、掘立柱建物跡が検出された一帯でその多くが確認された。遺物としては陶磁器のほかにも砥石や火打石がある。

陶器（第83・84図、703～719）

碗（第83図、703～709）

703は高台畳付のみを露胎とし高台内までほぼ全面に透明釉を施す碗である。器表面には貫入が生じ釉調は浅黄色を呈する。京焼風陶器であるが高台内に押印の銘款はない。704は薩摩焼黒系の碗である。高台内を重ね積みのために蛇の目釉剥ぎとし、体部下位から高台にかけては露胎とする。706と707は704と同じ薩摩焼黒系の碗の底部である。焼成不良で露胎部分は橙色を呈する。705は体部外面に稜が立ち、見込み部分にはゴマ目が認められる。釉調は灰オリーブ色であるが、掛け分けもしくは二度掛けの際に生じた濃淡が見られる。704から707は元立院窯・龍門司窯の系統の碗と考えられる。708は外方に向かいわずかに開く碗であり、鉄釉で笹葉を描く。709は灰白色の釉調を呈す碗の底部である。高台畳付のみを露胎とし高台内までほぼ全面に釉を施す。

皿（第83図、710・711・714）

710は内外面に銅緑釉を施し見込みを蛇の目釉剥ぎとした皿である。内野山北窯Ⅳ期に位置付けられる。711は京焼風陶器の大皿である。高台畳付まで施釉し、その後に高台内を輪状に掻き取る。高台畳付の端部は丸味を帯びる。微細な貫入が生じている。714は手捏の皿である。器壁が厚く堅く焼き締められている。内面に暗褐色の付着物が認められる。

鉢（第83図、712・713）

712は口縁端部を外側に一度折り返し、大きく肥厚させた玉縁状の口縁を有する京焼風陶器の鉢である。透明な釉を施し、釉調は浅黄色を呈す。713はL字状の水平に開く口縁部と緩やかなカーブを描く体部を器形的特徴とする。薩摩焼黒系の鉢と考えられる。体部中位から下を露胎とする。

土瓶（第83図、715）

715は薩摩焼の土瓶である。ため口の注口で、釉調は暗オリーブ色を呈す。

擂鉢（第83図、716）

716は備前焼の擂鉢である。体部内面には８条１単位の櫛目を粗に施す。器表は口縁部付近がにぶい赤褐色を体部以下が橙色を呈す。

甕（第83・84図、717・718・719）

717は肩部以下を失う薩摩焼の甕である。頸部直下に先丸の棒状工具で不規則な動きの弱い線描を施す。貝目が認められる。口縁部の形状は699に近いが外側への張り出しが強い。718は暗緑色の釉調を呈す甕の胴部片である。植物と考えられる簡略化された模様を施す。719は口縁部と底部を失う資料である。699と同様に肩部に１条の刻目突帯を貼り付けている。口縁部の形状はL字状になるタイプと考えられる。

磁器（第84・85図、720～737）

碗（第85・85図、720～729、736）

720から725は丸碗である。721は松竹梅文、722は折枝松を描く。ともに体部の器壁は薄手で呉須の発色も良好である。また、722の高台内面にやや崩れて形骸化した「大明年製」の銘款が見られる。

720は体部外面に草花文を描く。呉須の発色がやや悪く、器壁も721・722と比べると厚い。723はコンニャク印判により菊花文を施す。見込み部分を蛇の目釉剥ぎとする。724は葡萄の文様を描く体部のみの資料である。725は721・722と器形が近い底部のみの資料であるが、高台内面の銘款は３文字しか確認できないものの高台径と文字の配置から６文字あったと考えられ、「大明成化年製」のうちの「成」「年」「製」の部分が欠損したものである。726は広東碗である。体部外面には水を表現したと考えられる文様が描かれている。内面には口縁部に二重の界線、見込みに圏線を施す。727は筒形碗である。体部に雪持笹、見込みに虫文、高台脇に折松葉を描く。728も727と同様の筒形碗であるが体部片のみの資料である。729は小型の筒形碗である。727・728と比べると口径はその2/3程度である。松竹梅文を体部に巡らす。736は型紙摺碗の口縁部である。

猪口・小坏（第85図、730・731）

730は矢羽根文を描く猪口である。高台付近に二重界線を巡らす。731はやや器高が高めの小坏である。口縁部は端反りとなる。体部に文様の一部が認められる。

皿（第85図、732～735、737）

732は端部が丸く肥厚する口縁を有する皿である。内面には墨弾きによる唐草文様、外面には如意頭崩れの文様を施す。733は底部外面には針支えの痕が残る。内面の絵付けは細部まで丁寧に描かれているがモチーフは判然としない。734は見込みにコンニャク印判による五弁花が見られる。内面の文様は蔓草、外面は松葉である。735は734と器形的特徴が法量的に近い個体であり、内外面の界線や圏線の施し方は同じである。内面の文様は蔓草、外面は唐草である。

石製品（第85図、738～744）

砥石（第85図、738～740）

近世の砥石としては３点を認定した。738は自然石の形状をそのまま利用するが、739・740の２点は形状加工がしてあり流通品の可能性も指摘できる。

第14表　砥石計測値一覧（近世）

遺物番号	層位位置	計測値				石材	備考
		最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）		
738	SE2	5.6	6.3	7.2	33.5	砂岩	
739	I層	7.8	5.5	3.6	309.7	砂岩	
740	I層	14.1	3.9	1.1	126.8	リソイダイト	

石盤（第85図、741）

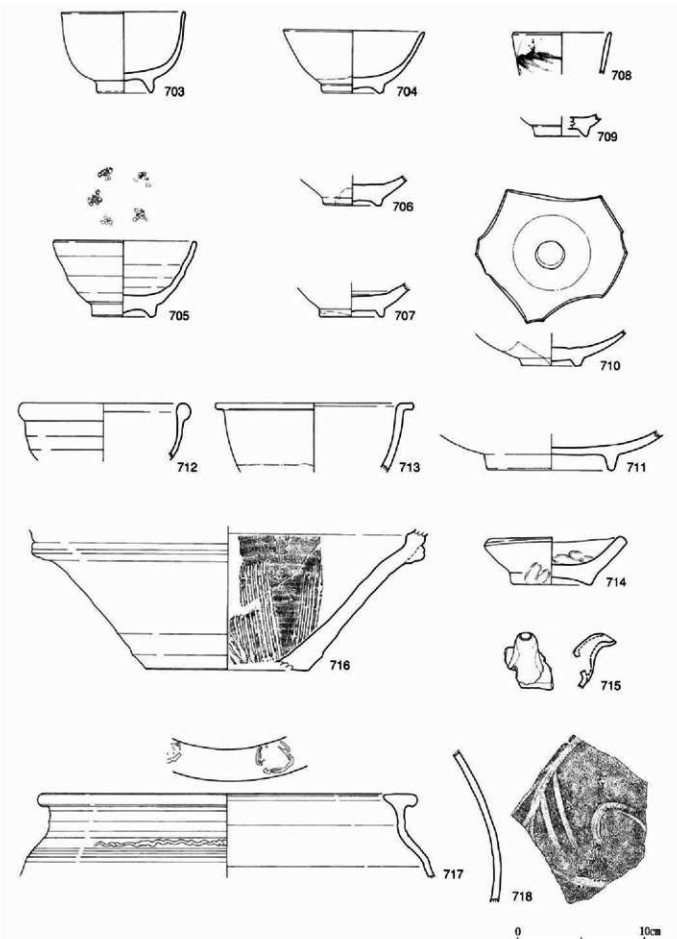
741は石盤である。粘板岩系の石材を用いる。一辺が２cm弱の方形枠を線刻してある。

火打石（第85図、742～744）

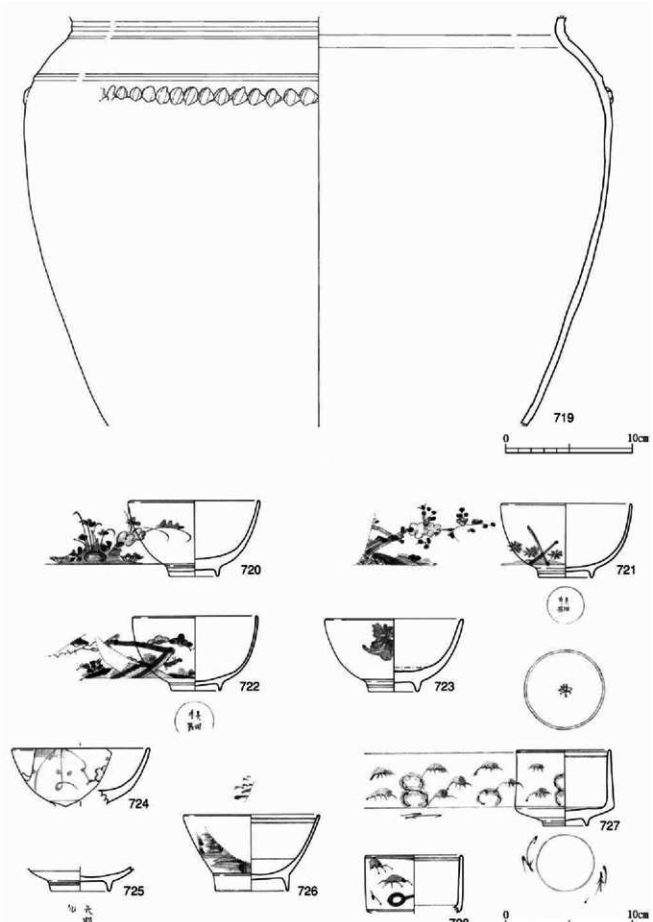
いずれも稜がよく潰れており使用痕が明瞭に残る。744には自然面が認められる。火打金は確認されていない。

第15表　火打石計測値一覧（近世）

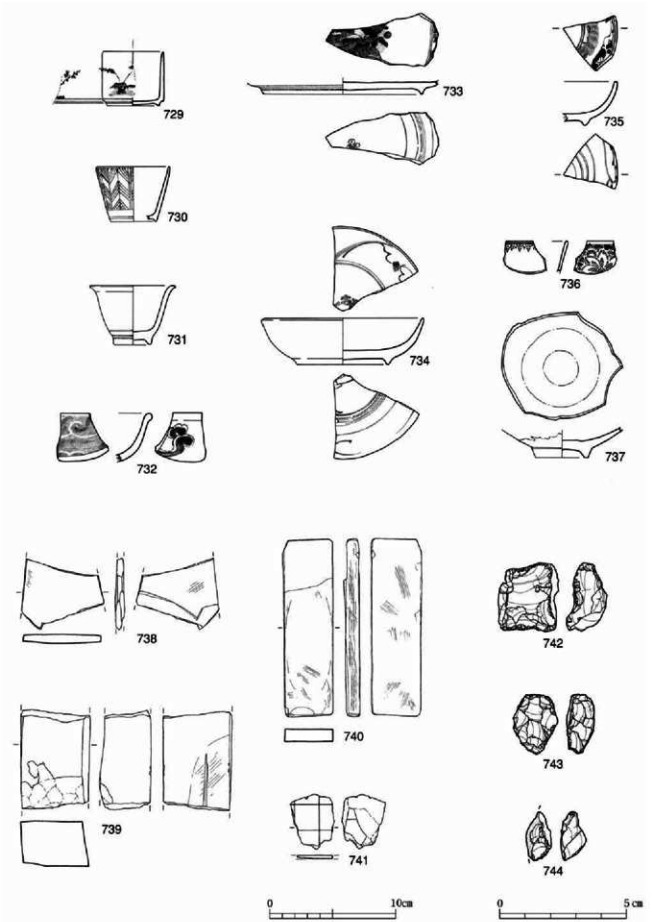
遺物番号	層位位置	計測値				石材	備考
		最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）		
742	I層	2.6	2.4	1.7	9.9	黒曜石（日東）	
743	I層	2.2	1.8	1.1	6.3	石英	
744	I層	1.9	0.9	1.1	3.1	石英	



第83図　B区包含層出土遺物実測図39（近世、S=1/3）



第84図　B区包含層出土遺物実測図40（近世、S=1/3）



第85図　B区包含層出土遺物実測図41（近世、S=1/3、742～744はS=2/3）

第16表　遺物観察表（弥生時代：弥生土器・石器）

遺物番号	種別	器種・部位	層位位置	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
131	弥生土器	壺 口縁部	SA1	(14.1)	−	−	ナデ ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の黒色・白色・黄褐色粒	
132	弥生土器	壺 口縁部	SA1	(13.5)	−	−	ナデ ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	褐	2㎜以下の黒色・褐色粒	口唇部に刻目
133	弥生土器	壺 胴部〜底部	SA1 SC1	−	−	−	ナデ 縦・斜め方向のハケ目	指押さえ ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐色	2〜4㎜以下の赤褐色・灰白色粒、1㎜以下の黒色粒	胴部に2条の突帯（貼付）
135	弥生土器	壺 口縁部〜胴部	SA3	(10.8)	−	−	ナデ	指押さえ ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1〜2㎜以下の灰褐色・灰白色粒 3〜4㎜以下の灰白色・褐色粒	頸部に3条の突帯(貼付) 胴部に2条の突帯(貼付)
136	弥生土器	甕 胴部〜底部	SA3	−	(6.4)	−	ナデ　ミガキ　指押さえ 斜め方向のハケ	指押さえ ナデ	にぶい黄橙	にぶい赤褐	2㎜以下の黒色・灰色・橙色粒	
137	弥生土器	壺 肩部	SA3	−	−	−	ナデ ミガキ	指押さえ ナデ	浅黄橙	褐灰	2㎜以下の灰白色・灰褐色・黒褐色・浅黄色・褐色粒	頸部に3条の突帯(貼付) 肩部に浮文(貼付)
138	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(23.4)	−	−	ナデ 斜め方向のハケ目	ナデ	橙 にぶい褐	褐灰 にぶい褐	1㎜以下の黒褐色・灰白色粒	口唇部に刻目、胴部に1条の刻目突帯(貼付)
139	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層 Ⅲb層	27.6	−	−	ナデ 斜め方向のハケ目	指押さえ ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の緑粒、3㎜以下の灰白・黒褐色・灰褐色・灰色粒	頸部に1条の突帯（貼付）
140	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(26.7)	−	−	ナデ 斜め方向のハケ目	ナデ	にぶい黄橙	橙	4㎜以下の淡黄・黒色粒・淡黄色・灰褐色・黒褐色粒	胴部に1条の突帯（貼付）
141	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(30.5)	−	−	ナデ ミガキ	指押さえ ミガキ	灰黄褐色	灰黄褐色	4㎜以下の黄褐色・淡黄色粒	口唇部に刻目、胴部に2条の刻目突帯(貼付)
142	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(33.5)	−	−	ナデ 斜め方向のハケ目	ナデ 斜め方向のハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の灰色・乳白色・灰褐色・黒色粒	胴部に4条の突帯（貼付）
143	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(26.4)	−	−	ナデ 縦・斜め方向のハケ目	指押さえ ナデ	にぶい褐	灰褐	3㎜以下の灰褐色・灰白色粒	口唇部に沈線、胴部に3条の突帯(貼付)
144	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(26)	−	−	ナデ 縦・斜め方向のハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の灰白色・淡黄色・乳白色・黒色・赤褐色粒	口唇部に刻目、胴部に3条の突帯(貼付)
145	弥生土器	甕 胴部	Ⅲa層	−	−	−	ミガキ	ミガキ	にぶい褐 黒褐色	灰黄褐 黒褐色	3㎜以下の黒色・乳白色・灰黄褐色・淡黄色粒	胴部に2条の突帯（貼付）
146	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲb層	(24.7)	−	−	ナデ	指押さえ ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の黒色・灰色・灰褐色粒	[illegible]
147	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(37.7)	−	−	ナデ 斜め方向のハケ目	指押さえ ナデ	にぶい褐	にぶい褐	3㎜以下の灰白・赤褐色・黒褐色・浅黄色粒	
148	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(35.3)	−	−	指押さえ ナデ	指押さえ ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	2㎜以下の赤褐色・黒褐色・灰褐色粒	胴部に1条の突帯（貼付）
149	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲb層	(24.7)	−	−	ナデ	指押さえ ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の黒色・灰色・灰褐色粒	[illegible]
150	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	31.3	−	−	ナデ 斜め方向のハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4㎜以下の灰色・灰白色・灰褐色粒	胴部に1条の突帯（貼付）
151	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(20.5)	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2㎜以下の淡黄色・茶色粒	
152	弥生土器	甕 口縁部	Ⅲa層	−	−	−	ナデ　指押さえ 斜め方向のハケ目	指押さえ ナデ	にぶい褐	にぶい褐	2㎜以下の淡黄色・乳白色・茶色粒	胴部に1条の突帯（貼付）
153	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲb層	(18.9)	−	−	ナデ 斜め方向のハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の淡黄色・灰褐色・黒褐色粒	
154	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(29.1)	−	−	ナデ 斜め方向のハケ目	ナデ	浅黄 灰黄褐	灰黄褐 褐灰	2㎜以下の淡黄色・褐色・褐灰色・茶色粒	
155	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(23.1)	−	−	ナデ 斜め方向のハケ目	指押さえ ナデ	橙 灰黄褐	にぶい黄橙	3㎜以下の灰褐色・灰白色・赤褐色・黒色粒	
156	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(21.0)	−	−	ナデ 縦・斜め方向のハケ目	ナデ 斜め方向のハケ目	暗褐 にぶい黄橙	暗褐 にぶい黄橙	1㎜以下の淡黄色・茶色・黒色粒	
157	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(19.8)	−	−	ナデ 斜め方向のハケ目	指押さえ ナデ	にぶい褐	にぶい褐	2㎜以下の灰白色・浅黄色粒	
158	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(23.7)	−	−	ナデ 縦方向のハケ目	ナデ	褐 明褐色	褐・明褐色 にぶい黄橙	2㎜以下の茶色粒・淡黄色・茶色粒	
159	弥生土器	甕 口縁部〜胴部	Ⅲa層	(20.2)	−	−	ナデ	指押さえ ナデ	赤褐色 褐灰色	にぶい黄褐色 黒褐色	2.5㎜以下の灰白色・浅黄橙色粒を多量に含む。	
160	弥生土器	壺 口縁部〜肩部	Ⅲa層	(13.1)	−	−	ナデ　ミガキ 横・斜め方向のミガキ	ナデ ミガキ	にぶい褐 黒褐色	にぶい褐 灰黄褐	2㎜以下の黒色粒・褐色・灰白色粒・淡黄色粒	頸部に2条の沈線
161	弥生土器	壺 口縁部〜肩部	Ⅲa層	(15.8)	−	−	ナデ	指押さえ ナデ	橙 明黄褐色	橙 明黄褐色	2㎜以下の淡黄色・褐色・褐灰色・黒色・乳白色粒	頸部に1条の突帯（貼付）
162	弥生土器	壺 口縁部〜頸部	Ⅲa層	(16.5)	−	−	ナデ　[illegible] 斜め方向のハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下細粒 3㎜以下の黒色・赤褐色・灰褐色粒	口縁部に1条の突帯(貼付)
163	弥生土器	壺 胴部	Ⅲa層	−	−	−	ナデ 横・斜め方向のハケ目	指押さえ ハケ目	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1㎜以下の灰褐色・灰白色・灰色・黒色粒	胴部の櫛描波状文
164	弥生土器	甕 胴部〜底部	Ⅲa層	−	(6.9)	−	ナデ　ミガキ 縦方向のハケ目	ナデ	橙	黒褐 灰黄褐	1㎜以下の淡黄色・褐色・乳白色粒、2㎜大の褐灰色・黒色粒	
165	弥生土器	甕 底部	Ⅲa層	−	(6.8)	−	指押さえ ナデ　ミガキ	ナデ	にぶい褐 にぶい黄褐	にぶい褐 にぶい黄褐	1㎜以下の淡黄色・褐色・乳白色粒、2㎜大の乳白色・黒色粒	
166	弥生土器	甕 胴部〜底部	Ⅲa層	−	(5.8)	−	ナデ	ナデ	橙	灰黄褐色	2㎜以下の乳白色粒	
167	弥生土器	甕 胴部〜底部	Ⅲa層	−	(9.1)	−	指押さえ　ナデ	指押さえ ナデ	にぶい褐	灰黄褐	3㎜以下の黒色・灰白色・白色粒	
168	弥生土器	甕 底部	Ⅲa層 Ⅲb層	−	(4.9)	−	風化が著しく不明	ナデ	明赤褐 褐灰	黒褐	2㎜以下の橙色・明赤褐色・乳白色・黒色粒	
169	弥生土器	甕 底部	Ⅲa層	−	(8.6)	−	横方向のミガキ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄	4㎜以下の乳白色・褐色・黒色粒	
170	弥生土器	壺 底部	Ⅲa層	−	5.3	−	斜め方向のハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の黒褐色・褐色・灰白色・灰色粒	
171	弥生土器	高坏 脚部	Ⅲa層	−	−	−	ナデ	指押さえ ナデ	にぶい橙	にぶい橙	3㎜以下の褐色・灰色・灰白色粒	

遺物番号	種別	器種・部位	層位・位置	石材	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考
134	石器	磨石	SA1	砂岩	11.55	19.6	3.3	1085.4	

第17表　遺物観察表（古代・中世 1/8）

遺物番号	種別	器種・部位	層位位置	法量(cm) ( )推定値 口径	底径	器高	調整・技法等 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
172	土師器	皿 口縁部～底部	SE2	8.7	6.5	1.1	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ ナデ　ヨコナデ	淡橙	淡橙 にぶい黄橙	1mm以下の褐灰色粒 微細光沢粒	
173	土師器	皿 口縁部～底部	SE2	9.4	7.0	1.9	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ　ナデ	橙	浅黄橙	2mm以下の浅黄橙色・褐灰色・橙色粒、微細な黒色・無色透明粒	
174	土師器	坏 底部	SE2	－	(5.6)	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ　ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の無色透明光沢粒	
175	土師器	高台付埦 体部中位～底部	SE2	－	(6.8)	－	回転ナデ　ナデ	回転ナデ	橙	橙	1mm以下の黒褐色粒 4mm大の浅黄橙色粒	
176	土師器	坏 口縁部～体部中位	SE2	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤褐色	橙	3mm大の明褐灰色粒 微細黒色粒	墨書土器「東」
177	土師器	坏 体部下位	SE2	－	－	－	回転ナデのあとナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙	1mm前後のにぶい赤褐色粒	墨書土器
178	土師器	布痕土器 口縁部	SE2	－	－	－	ナデ　指オサエ	布目痕	橙	橙	1mm以下の白色粒	
179	土師器	甕 口縁部～胴部上位	SE2	－	－	－	ヨコナデ　ナデ	ケズリ　ナデ	明赤褐 褐灰	にぶい赤褐	2mm以下の褐灰色・暗赤褐色・浅黄橙色粒	
180	土師器	甕 口縁部～胴部上位	SE2	－	－	－	ヨコナデ　ナデ	ケズリ　ナデ	にぶい赤橙	にぶい赤橙	2mm以下の浅黄橙色・にぶい橙色・灰褐色粒	
181	土師器	甕 口縁部	SE2	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ　ケズリ	にぶい黄褐	明褐 褐灰	微細無色透明粒、5mm以下のにぶい橙色・灰色・淡橙色・黒色粒	
182	土師器	甕 口縁部	SE2	－	－	－	ヨコナデ　ナデ	ケズリ　ナデ	明赤褐	橙	4mm以下の灰白色・にぶい黄橙色・褐灰色粒、1mm以下の無色透明粒・黒色透明粒	
183	須恵器	甕 口縁部～胴部	SE2	(17.9)	－	－	ナデ　格子目タタキ	ナデ 同心円当て具痕	灰	灰	精良 2mm以下の黒色粒	
184	須恵器	甕 口縁部～底部	SE2	(18.5)	－	38.8	ナデ　平行タタキ	ナデ　平行当て具痕 同心円当て具痕のあとナデ	灰黄	灰白	3mm以下の灰白色・黒褐色粒	
185	須恵器	甕 口縁部～底部	SE2	(15.7)	－	(44.0)	回転ナデ 平行タタキ	ナデ　指オサエ　平行当て具痕 同心円当て具痕	灰白	灰白	精良	
186	須恵器	甕 口縁部～底部	SE2	34.9	－	－	回転ナデ　ナデ 平行タタキ	回転ナデ　指おさえ 同心円当て具痕　ナデ	オリーブ黄 灰	褐灰	精良 2mm以下の黒褐色粒	
187	青磁	碗 口縁部～底部	SE2	14.6	(5.2)	4.8	回転ナデ　施釉 露胎　目跡	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
188	青磁	碗 口縁部	SE2	(15.2)			回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
189	青磁	碗 口縁部	SE2	(15.4)	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	越州窯系
190	青白磁	皿 底部	SE2	－	(6.6)	－	回転ナデ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
191	白磁	碗 口縁部	SE2	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
192	白磁	碗 体部～底部	SE2	－	(5.9)	－	回転ナデ　回転ヘラケズリ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
193	土師器	脚台付皿 脚部	SE4	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ　ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の無色透明銀光沢粒 2mm以下のにぶい赤褐色・明赤褐色粒	
194	土師器	坏 口縁部～体部	SE4	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細黒色粒	
195	土師器	坏 底部	SE4	－	5.0	－	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の明赤褐色・淡橙色・暗赤褐色粒	
196	土師器	坏 底部	SE4	－	(6.6)	－	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細無色透明銀光沢粒 4mm以下のにぶい赤褐色粒	
197	土師器	埦 口縁部～底部	SE4	(13.5)	(7.0)	5.4	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	橙	2mm以下の明赤褐色・白色半透明粒	
198	土師器	埦 底部	SE4	－	(7.1)	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の赤褐色・黒褐色・褐灰色・にぶい橙色粒	
199	土師器	高台付埦 底部	SE4	－	(7.1)	－	回転ナデ　ヨコナデ	回転ナデ	橙	橙	微細無色透明銀光沢粒 1mm以下の暗褐色・灰白色粒	
200	土師器	高台付埦 口縁部	SE4	－	－	－	ヨコナデ　回転ナデ	ミガキ	浅黄橙	黒	微細な黒色・無色透明光沢粒	黒色土器(内黒)
201	土師器	高台付埦 底部	SE4	－	(7.4)	－	回転ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒	1mm以下の橙色・灰白色・黒色粒、0.5mm以下の黒色・無色透明光沢粒	黒色土器(内黒)
202	土師器	高台付皿 口縁部～高台付近	SE4	12.6	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色粒	墨書土器「東」
203	土師器	坏 口縁部～体部下位	SE4	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色・赤褐色粒	墨書土器
204	土師器	坏 口縁部～体部下位	SE4	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細赤褐色粒	墨書土器「東」
205	土師器	脚台付坏 口縁部～底部	SE4	(15.9)	－	－	回転ナデ	回転ナデ　スス付着	橙	にぶい橙	含有物ほとんどなし	墨書土器
206	須恵器	横瓶 口縁部～胴部	SE4	(9.8)	－	－	ナデ　ヨコナデ 格子目タタキ	ナデ　指オサエ 平行当て具痕	黄灰	黄灰	精良	207と同一個体
207	須恵器	横瓶 胴部～底部	SE4	(9.9)	－	－	ナデ　格子目タタキ	ナデ　指オサエ 平行当て具痕	黄灰	黄灰	精良	206と同一個体
208	須恵器	壺 頸部～胴部	SE4	－	－	－	ヨコナデ　ナデ 平行タタキ	ナデ　指オサエ	灰 灰オリーブ	灰	1mm以下の灰白色粒 2mm以下の黒褐色粒	
209	須恵器	擂鉢 口縁部	SE4	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ　カキメ	灰	灰	精良 微細白色粒	肥後系 片口あり
210	陶器	壺 肩部	SE4	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	暗オリーブ	暗オリーブ	精良	褐釉陶器
211	白磁	碗 体部～底部	SE4	－	(7.0)	－	回転ナデ　回転ケズリ 施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
212	白磁	碗 口縁部	SE4	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
213	青花	碗 体部	SE4	－	－	－	回転ナデ　施釉	回転ナデ　施釉	明緑灰	明緑灰	精良	
214	土師器	甕 口縁部～胴部下位	SM1	(32.9)	－	－	ヨコナデ　ナデ	ケズリ　ナデ	橙　褐灰	にぶい褐	微細無色透明粒 7mm以下の灰褐色粒	
215	土師器	高台付埦 口縁部～底部	SM3	15.9	7.2	5.5	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	浅黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の褐灰・明褐色粒	
216	土師器	鉢 口縁部～底部	SM3	17.5	(10.5)	9.7	ヨコナデ　ナデ スス付着	ケズリ　ナデ スス付着	にぶい褐	黒褐	2mm以下の灰褐色・にぶい黄橙色・白色粒	
217	土師器	皿 口縁部～底部	SD1	(9.1)	(7.1)	1.7	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	橙	1mm以下の褐灰色・明赤褐色・黒色・無色透明粒	
218	土師器	皿 口縁部～底部	SD1	(8.6)	(7.4)	1.4	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細灰白色・橙色・光沢粒	
219	白磁	碗 口縁部～底部	SD1	16.7	6.7	6.4	回転ナデ　回転ケズリ 放射状ケズリ　施釉　露胎	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良	
222	土師器	坏 口縁部～底部	SC26	(15.3)	(11.4)	3.5	回転ナデ　糸切り底	回転ナデ	灰白	にぶい黄橙	1mm以下の浅黄橙色・にぶい黄橙色粒	
223	土師器	坏 口縁部～底部	SC26	(14.5)	(9.3)	3.0	回転ナデ　糸切り底	回転ナデ	にぶい黄橙	灰褐	1mm以下のにぶい橙色・褐灰色・橙色粒	
224	土師器	坏 口縁部～底部	SC26	(16.7)	(9.2)	3.7	回転ナデ　板目痕 ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	灰褐	にぶい褐	1mm以下のにぶい橙色・灰褐色・橙色粒	
225	土師器	坏 口縁部～底部	SC41	(14.8)	(8.0)	4.1	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい黄橙	灰白 褐灰	微細無色透明銀光沢粒 1mm以下の浅黄橙色粒	
226	土師器	坏 口縁部～底部	SC27	(14.1)	(8.6)	3.5	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ　スス付着	灰白	灰白	微細無色透明銀光沢粒	
227	土師器	甕 口縁部～胴部	SC27	(26.6)	－	－	ヨコナデ　ナデ	ケズリ　ナデ	にぶい赤褐	褐灰	5mm以下の暗赤褐色・明赤褐色・浅黄橙粒、微細無色透明粒	
228	白磁	碗 底部	SC29	－	7.6	－	ヘラケズリ 回転ケズリ	回転ナデ　施釉	灰白	灰白	精良 微細白色粒	円盤状に加工
229	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	8.5	6.3	1.8	回転ナデ　スス付着 ヘラ切り底	回転ナデ　スス付着	浅黄橙 黒褐	浅黄橙 黒褐	1mm以下の明赤褐色粒 微細無色透明銀光沢粒	
230	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(8.7)	(5.8)	1.35	回転ナデ　スス付着 ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の橙色・黒色色・灰白粒、微細な無色透明・黒色光沢粒	
231	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	9.15	6.3	1.75	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	灰黄褐	灰黄褐	2mm以下の赤褐色粒 微細な透明光沢・黒色粒	
232	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	8.65	6.3	1.7	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	微細な透明光沢・茶色粒	
233	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	9.1	7.1	1.55	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の灰色・茶褐色粒 微細透明光沢粒	

第18表　遺物観察表（古代・中世 2/8）

遺物番号	種別	器種・部位	層位位置	法量(cm) ※( )推定値 口径	底径	器高	調整・技法等 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
234	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(9.2)	(6.3)	1.2	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の黒色粒	
235	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	8.8	6.35	2.1	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙 にぶい褐	4mm以下の橙色粒	
236	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	9.15	7.1	1.7	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい褐	にぶい褐	微細な透明光沢・黒色粒 2mm以下の茶褐色粒	
237	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(9.2)	(7.1)	1.5	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ スス付着	にぶい橙	にぶい褐	1mm以下の赤褐色・橙色・黒色粒 微細な無色透明・黒色光沢粒	
238	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	11.0	7.3	2.7	回転ナデ ヘラ切りのあと粗いナデ	回転ナデ	橙	橙	1mm以下の黒色・褐灰・赤褐色・灰白色粒、微細黒色・無色透明粒	
239	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(9.1)	(6.9)	1.45	回転ナデ スス付着 ヘラ切り底	回転ナデ スス付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4.5mm以下の橙色・黒色粒 0.5mm以下の無色透明・黒色光沢粒	
240	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(8.6)	(6.5)	1.5	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色・茶色粒	
241	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	9.5	7.4	1.5	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細な透明光沢・白色・茶色・灰白色粒	
242	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(9.5)	(7.25)	2	回転ナデ スス付着 ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な透明光沢粒・茶色粒	
243	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(8.9)	(6.6)	1.55	回転ナデ 板目痕 ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細無色透明光沢粒	
244	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(8.8)	(6.7)	1.3	回転ナデ ヘラ切りのあと研磨	回転ナデ スス付着	にぶい褐	灰褐 褐灰	微細灰白色・黒色・無色透明光沢粒	
245	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(9.4)	(6.9)	1.5	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙	灰黄褐	2mm以下の灰褐色・明赤褐色・黒色・灰白色粒、微細な黒色・無色透明粒	
246	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(10.3)	(8.0)	1.35	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm大の茶褐色粒	
247	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	9.7	6.5	2.1	回転ナデ スス付着 ヘラ切り底	回転ナデ スス付着	にぶい橙 褐灰	明褐灰 褐灰	微細無色透明鋭光沢粒	
248	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(8.8)	(6.3)	(1.8)	回転ナデ スス付着 ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙	1mm以下の白色・黒色粒	
249	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(9.8)	(7.8)	1.6	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい褐	にぶい褐	微細な透明光沢・黒色粒 1mm以下の白色・茶色粒	
250	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	8.9	6.7	1.6	回転ナデ 糸切り底	回転ナデ	にぶい橙 黒褐	にぶい橙 黒褐	1mm大の茶色粒	
251	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	－	(7.0)	－	回転ナデ 糸切り底 スス付着	回転ナデ	にぶい橙	浅黄橙	1mm以下の灰色粒	
252	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(9.6)	(7.2)	1.9	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ ナデ	橙 褐灰	にぶい黄橙	2mm以下の灰色・橙色粒 微細な黒色・無色透明粒	
253	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(10.5)	(9.2)	1.5	回転ナデ 糸切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下のにぶい赤褐色・淡赤橙色粒	
254	土師器	高台付皿 口縁部～底部	Ⅲa層	(13.5)	(6.5)	4.1	回転ナデ	回転ナデ	褐灰	褐灰	微細黒色粒	
255	土師器	高台付 底部	Ⅲa層	－	(5.9)	－	回転ナデ	布目痕	灰褐	にぶい赤褐	2mm以下のにぶい橙色・暗赤褐色・にぶい褐色粒	
256	土師器	高台付坏 底部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	布目痕	にぶい橙	にぶい褐	1mm以下の黒褐色・褐灰色・にぶい橙色粒	
257	土師器	脚台付皿 脚部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	2mm以下の褐灰色・褐色・灰白色粒 微細無色透明鋭光沢粒	
258	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	11.3	4.6	4.9	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ ナデ	浅黄橙	浅黄橙	4mm以下の橙色・浅黄橙色・褐灰色粒	
259	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(11.7)	(4.7)	4.9	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ ナデ	橙 にぶい橙	にぶい褐	2mm以下のにぶい褐色・褐灰色粒 微細な灰白色・透明光沢粒	
260	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(12.4)	5.8	5.45	回転ナデ スス付着 ナデ	回転ナデ スス付着	にぶい橙 褐灰	橙 灰褐	2mm以下の褐灰色・灰褐色・にぶい赤褐色・灰白色粒、微細光沢粒	
261	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(12.8)	(5.6)	5.1	回転ナデ（風化気味） ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ（風化気味）	橙	橙	1mm以下の黄橙色・黒色粒	
262	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(11.6)	6.8	4.8	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	1mm以下のにぶい黄橙色・にぶい褐色粒	
263	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	(11.9)	(5.9)	5.0	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の橙色・褐灰色粒 微細無色透明光沢粒	
264	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(12.2)	(6.4)	4.65	回転ナデ スス付着 ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ スス付着	橙 灰褐	にぶい橙 褐灰	1.5mm以下の橙色・赤褐色・浅黄橙色・黒色粒、1mm以下の黒色・無色透明で光沢粒	
265	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(11.9)	(6.8)	5.1	回転ナデ ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の白色・茶褐色粒 2mmの黒色粒	
266	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(6.2)	(12.2)	5.35	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい橙 灰褐	にぶい橙 灰褐	1mmの茶褐色粒 1mm以下の白色・黒色粒	
267	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	12.2	5.2	5.3	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細無色透明鋭光沢粒 3mm以下の灰色・明赤褐色粒	
268	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	13.05	5.8	4.8	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ ナデ	橙	橙	2.5mm以下の赤褐色粒 微細無色透明鋭光沢粒	
269	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(13.3)	(5.7)	4.4	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下のにぶい橙色・褐灰色・浅黄橙色粒	
270	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	15.8	13.5	3.9	回転ナデ スス付着 ヘラ切り 板目痕	回転ナデ	浅黄橙	にぶい橙	4mm以下の暗赤褐色・橙色・灰白色粒	
271	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	14.6	8.2	3.5	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 明褐	1mm以下の暗赤褐色・褐灰色粒	
272	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(16.0)	(7.7)	4.45	回転ナデ ナデ スス付着	回転ナデ	灰褐	にぶい橙	2mm以下の褐灰色・灰色白・黒色粒、微細無色透明光沢粒	
273	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(14.5)	(5.9)	3.4	回転ナデのあとナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の明赤褐色・暗赤褐色・褐灰色・浅黄橙色粒、微細な黒色・無色透明鋭光沢粒	
274	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	12.6	9.3	3.65	回転ナデ 糸切り底	回転ナデ	にぶい黄橙 褐灰	浅黄橙	2mm以下の灰色粒 1mm以下の白色粒	
275	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	－	(9.55)	－	回転ナデ 糸切り底	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細透明光沢粒	
276	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(15.1)	(14.4)	3.55	回転ナデ スス付着 糸切り底	回転ナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	にぶい黄橙 にぶい橙	微細無色透明鋭光沢粒、4mm以下の暗赤褐色・明赤褐色・黒色粒	
277	土師器	高台付坏 口縁部～体部	Ⅲa層	(12.8)	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤褐	橙 にぶい褐	1mm以下の赤褐色・黒色鋭光沢粒	
278	土師器	坏 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	明褐	にぶい黄橙	2mm大の明赤褐色粒	
279	土師器	坏 口縁部～体部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	橙	1mm以下の黒色・茶褐色粒	
280	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	－	5.3	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙 灰黄褐	2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の透明光沢粒、微細な無色透明粒	
281	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	－	(4.8)	－	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の浅黄橙色・褐灰色粒	
282	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.2)	－	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	微細無色透明鋭光沢粒 2mm以下の明褐色・黒褐色粒	
283	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	－	(5.9)	－	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	浅黄橙 橙	浅黄橙 橙	1mm以下のにぶい赤褐色粒	
284	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	－	6.1	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ ナデ	にぶい橙	にぶい橙	5mm大の茶褐色粒 2mm以下の灰・茶褐色粒	
285	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	－	5.8	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	浅黄橙	にぶい橙	5mm大の橙色・赤褐色粒、2mm以下の褐灰色・橙色・褐灰色粒	
286	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	(5.8)	－	回転ナデ ヘラ切り底 板目痕	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の浅黄色・黄色・灰色・暗灰黄色粒	
287	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	－	6.2	－	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ 回転ナデのあと一部ナデ	にぶい橙 灰褐	にぶい橙	1mm以下の灰白色・赤褐色粒	
288	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	6.6	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ スス付着	にぶい黄橙 灰黄褐	灰褐 褐灰	0.5mm以下の橙色・灰白色粒 微細な黒色・無色透明光沢粒	
289	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	5.8	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデのあと一部ナデ	橙	橙	2mm以下の茶色粒 1mmの黒色光沢粒	
290	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	5.75	－	回転ナデ スス付着 ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ スス付着	橙	橙	5mm以下の褐灰色・橙色・赤褐色・灰白色・黒色粒、微細な黒色・無色透明光沢粒	
291	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.3)	－	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	橙 黒褐	橙 灰黄褐	3mm以下の黒色・茶褐色粒 微細無色透明光沢粒	
292	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	6.1	－	回転ナデ ヘラ切り底 板目痕	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の灰色・橙色・にぶい赤褐色粒	
293	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	(5.5)	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	1mm以下のにぶい黄橙・明褐灰色粒	

第19表　遺物観察表（古代・中世 3/8）

遺物番号	種別	器種・部位	層位位置	法量(cm) ( )推定値 口径	底径	器高	調整・技法等 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
294	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	7.0	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	橙	橙	2㎜以下のにぶい橙色・明赤褐色・灰白色粒、1㎜以下の黒色・無色透明光沢粒	
295	土師器	蓋 底部	Ⅲa層	－	(8.3)	－	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ　ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の褐灰色・橙色・黒色粒、微細無色透明光沢粒	
296	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	－	(8.2)	－	回転ナデ　板目痕 ヘラ切り底	回転ナデ	橙　褐灰	黄灰 浅黄	微細な白色・黒色・茶色粒	
297	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	－	6.2	－	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	4㎜以下の褐色粒	
298	土師器	高台付椀 体部～底部	Ⅲa層	－	(7.5)	－	回転ナデ	回転ナデ　ナデ	橙	橙	微細無色透明鉱光沢粒、2㎜以下のにぶい赤褐色・明赤褐色粒	坏として使用か?
299	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	5.05	－	回転ナデ　糸切り底 スス付着	回転ナデ　スス付着	にぶい黄橙	にぶい橙	2.5㎜以下の灰白色・橙色・赤褐色・褐灰色粒、微細無色透明光沢粒	
300	土師器	椀 口縁部～底部	Ⅲa層	(13.1)	(4.9)	5.2	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	浅黄橙	にぶい橙	1㎜以下の黒色・茶褐色粒	
301	土師器	椀 口縁部～底部	Ⅲa層	(13.5)	(5.5)	6.9	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5㎜以下の橙色・明褐灰色・にぶい褐色粒	
302	土師器	椀 口縁部～底部	Ⅲa層	(13.8)	(7.1)	5.8	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ　ナデ	にぶい橙	橙	5㎜以下のにぶい赤褐色・黒色・橙色粒、無色透明粒	
303	土師器	椀 口縁部～底部	Ⅲa層	(11.3)	(5.7)	5.1	回転ナデ（風化気味） ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ（風化気味）	明赤褐	明赤褐	1㎜以下の赤褐色・暗赤灰色粒 微細無色透明光沢粒	
304	土師器	椀 口縁部～底部	Ⅲa層	(13.8)	(6.3)	6.0	回転ナデ　スス付着 ヘラ切り底	回転ナデ　ナデ	橙	橙	2㎜以下の黒色・橙色・赤褐色・灰白色粒、微細黒色・無色透明粒	
305	土師器	椀 口縁部～体部	Ⅲa層	(13.9)	－	－	回転ナデ（風化気味）	回転ナデ（風化気味）	橙	橙	微細黒色光沢粒	
306	土師器	高台付椀 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	1㎜大の黒色粒	
307	土師器	高台付椀 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細無色透明鉱光沢粒 2㎜以下の浅黄橙色・明赤褐色粒	
308	土師器	椀 体部～底部	Ⅲa層	－	6.7	－	回転ナデ　ナデ	回転ナデ	橙	橙	1㎜以下の明褐色・浅黄橙色粒 1㎜以下の黒色・無色透明光沢粒	
309	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.8)	－	回転ナデ　板目痕 ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	橙	橙	2㎜以下の灰色・茶褐色粒	
310	土師器	坏 体部～底部	Ⅲa層		(5.8)		回転ナデ　スス付着 ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ　スス付着	浅黄橙	浅黄橙	2.5㎜以下の橙色・赤褐色・褐灰色粒、微細な黒色・無色透明光沢粒	
311	土師器	椀 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.7)	－	回転ナデ ナデ　板目痕	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の褐色・にぶい橙色粒	
312	土師器	椀 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.7)	－	回転ナデ　ナデ	回転ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下のにぶい黄橙色粒 2㎜以下の黄褐色・明黄褐色粒	
313	土師器	椀 体部～底部	Ⅲa層	－	(7.0)	－	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ　ナデ	にぶい黄橙 橙	浅黄橙 灰褐	微細無色透明鉱光沢粒 3㎜以下の明赤褐色・暗褐色粒	
314	土師器	椀 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.9)	－	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ　ナデ	浅黄橙	浅黄橙	4㎜以下の褐色粒	
315	土師器	椀 底部	Ⅲa層	－	6.8	－	回転ナデ　ナデ	回転ナデのあと一部ナデ	黄橙	橙	5㎜以下の暗赤褐色・黒褐色粒	
316	土師器	坏 底部	Ⅲa層	－	6.7	－	ナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙	2㎜以下の明褐色・暗褐色・にぶい赤褐色粒、無色透明鉱光沢粒	
317	土師器	高台付椀 口縁部～底部	Ⅲa層	(14.5)	－	－	回転ナデ	ミガキ　ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5㎜以下の赤褐色・黒褐色・明褐灰色粒	
318	土師器	高台付椀 口縁部～体部	Ⅲa層	(20.0)	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 浅黄橙	橙 にぶい橙	1㎜以下の黒褐色粒	
319	土師器	高台付椀 口縁部～体部	Ⅲa層	(13.8)	0	0	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐	灰黄褐 にぶい橙	微細無色透明鉱光沢粒 黄灰色・褐灰色・にぶい褐色粒	
320	土師器	坏 口縁部～体部	Ⅲa層	(11.9)	－	－	回転ナデ	回転ナデ	黒　黒灰	黒　黒褐	1㎜以下の透明光沢粒 2㎜以下の褐色粒	
321	土師器	高台付椀 口縁部～底部	Ⅲa層	(14.8)	(6.3)	5.8	ヘラミガキ 回転ナデ	ミガキ	にぶい橙 褐灰	にぶい橙 褐灰	微細無色透明鉱光沢粒	
322	土師器	椀 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	微細黒色粒	胴部内面に朱
323	土師器	高台付椀 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	2㎜以下の明褐色・褐灰色・にぶい橙灰色粒	
324	土師器	高台付椀 口縁部～体部	Ⅲa層	(13.9)	－	－	回転ナデ	ミガキ	にぶい橙	灰黄褐	微細透明光沢粒 1㎜以下のにぶい橙色・赤褐色粒	
325	土師器	高台付椀 口縁部～体部	Ⅲa層	(13.7)	－	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	灰白	浅黄橙	微細無色透明鉱光沢粒 1㎜以下の黒色粒	
326	土師器	高台付椀 口縁部～体部	Ⅲa層	(16.2)	－	－	回転ミガキ	回転ミガキ	にぶい橙 褐灰	にぶい橙 褐灰	1㎜以下のにぶい黄橙色・褐灰色粒	
327	土師器	高台付椀 口縁部～体部	Ⅲa層	(17.7)	－	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ スス付着	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の褐灰色・灰褐色粒	
328	土師器	高台付椀 口縁部～体部	Ⅲa層	(17.0)	－	－	回転ミガキ	回転ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	微細無色透明鉱光沢粒 1㎜以下の褐灰色粒	
329	土師器	高台付椀 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ　ミガキ	回転ナデ　ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜大の赤褐色粒	
330	土師器	高台付椀 口縁部～体部	Ⅲa層	(15.9)	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の明褐色・褐色粒	玉縁口縁
331	土師器	坏 口縁部～体部	Ⅲa層	(17.7)	－	－	ミガキ	回転ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	褐灰色・黒褐色粒 微細無色透明光沢粒	
332	土師器	椀 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な灰色・茶褐色粒	
333	土師器	椀 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ミガキ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細な透明光沢・黒色粒	
334	土師器	椀 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な黒灰色・茶褐色粒	
335	土師器	椀 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の黒色粒	
336	土師器	椀 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微細な黒色・赤褐色粒	玉縁口縁
337	土師器	高台付椀 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の灰褐色・にぶい橙色粒	玉縁口縁
338	土師器	坏 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の黒色・茶褐色粒	口縁端部肥厚
339	土師器	鉢 口縁部	Ⅲa層	－	－	－	ミガキ	ミガキ	赤褐	赤褐	微細黒色粒	
340	土師器	高台付小坏 口縁部～底部	Ⅲa層	(6.8)	(4.6)	2.8	回転ナデのあとナデ	ナデ　ミガキ	灰白	浅黄橙	2㎜以下の灰黄褐色粒	
341	土師器	高台付椀 底部	Ⅲa層	－	(6.3)	－	回転ナデ（風化気味）	回転ナデ	にぶい橙	にぶい褐	1～2㎜の黒色・茶褐色粒	
342	土師器	高台付椀 底部	Ⅲa層	－	(6.4)	－	回転ナデ	回転ナデ　ミガキ	灰白 灰黄褐	灰白 褐灰	1㎜以下の無色透明鉱光沢・黒褐色粒	黒色土器(内黒)
343	土師器	高台付椀 底部	Ⅲa層	－	(5.5)	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	微細茶色粒	
344	土師器	高台付椀 底部	Ⅲa層	－	(8.6)	－	回転ナデ	回転ナデ　布痕	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の灰褐色・黒色・橙色粒、微細無色透明光沢粒	
345	土師器	高台付椀 体部～底部	Ⅲa層	－	(7.3)	－	回転ナデ	回転ナデ 回転ナデのあと粗いナデ	橙	橙	1㎜以下の褐色粒	墨書土器
346	土師器	高台付椀 底部	Ⅲa層	－	6.55	－	回転ナデ	ミガキ	浅黄橙	褐灰	0.5㎜以下の橙色・赤褐色・黒色粒、微細無色透明光沢粒	
347	土師器	高台付椀 底部	Ⅲa層	－	(6.6)	－	回転ナデ　ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	1㎜以下の灰白色・黒褐色・明赤褐色粒、微細無色透明鉱光沢粒	
348	土師器	高台付椀 体部～底部	Ⅲa層	－	(7.65)	－	回転ナデ	回転ナデ	淡橙	浅黄橙	0.5～2㎜大の赤褐色粒 3㎜大の鉄滓片	墨書土器
349	土師器	高台付椀 底部	Ⅲa層	－	(6.6)	－	回転ナデ 放射状圧痕	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	2㎜以下の褐灰色・明赤褐色・にぶい赤褐色粒、微細無色透明粒	放射状圧痕
350	土師器	高台付椀 体部～底部	Ⅲa層	－	－	－	ナデ　回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙	1㎜以下の透明光沢・灰色粒	放射状の圧痕
351	土師器	高台付椀 体部～底部	Ⅲa層	－	(6.5)	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	2㎜以下の赤褐色・明赤褐色・灰白色粒	
352	土師器	高台付椀 体部～底部	Ⅲa層	－	7.2	－	回転ナデ　スス付着	回転ナデ　布痕 スス付着	橙	橙	1.5㎜以下の灰白色・橙色・にぶい赤褐色・黒色粒、微細な黒色・無色透明光沢粒	
353	土師器	高台付椀 底部	Ⅲa層	－	(7.5)	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細無色透明鉱光沢粒 1㎜以下の明赤褐色粒	